女子文壇

明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可　明治四十四年一月廿五日印刷納本　毎月一回廿五日印刷納本



第七年第二號

二月號

東京
女子文壇社發行

諸孃及び奥樣の參考

女子文壇第一增刊 婦人ノート

▲二月十日發行▼

全二百餘頁美裝
定價金貳拾錢
送料壹錢五厘

【裁縫】◎普通の着物も縫へないやうでは嫁にも行かれぬ（松並紫花）◎裁縫と機轉（吹雪野）◎何より好きな裁縫（田舍女）【[illegible]】◎生田流と山田流の區別（櫻井鈴子）【育兒】◎仲子の育て方（笹の露）◎子供本位の教育家の家庭（美智子）◎子供を白痴にした若き母の罪（島の女）【學校】◎新に寄宿舍に入らんとする友人に注意する書（[illegible]だみ）◎往復三里の學校通ひ（文香子）【衛生】◎處女の衛生と旅行の衛生（むらさき）◎看病の心得（N女）【園藝】◎櫻草の栽培（牧野理學士）◎無邪氣で珍しい家庭公園（新田文子）【運動】◎何時でも出來る室外運動（中川女子高等師範學校長）【圖畫】◎郊外寫生の話（岡野學習院女學部教授）【詩歌】◎萬葉集の佳作（澤村文學士）◎詩を作る呼吸（今田代志子）【作文】◎文章の今昔（河井醉茗）◎何うすれば文章が上手になるか（撫子）【出產】◎二つの生命（府志緒）◎始めてお產をする方へ（若き母）◎三度のお產にて得し私の經驗（みどり）【職業】◎女子就職の領分（海軍少將中村靜嘉）◎仕事の苦痛（白山伏）【化粧】◎顏の美しくなる食物（北原十三男）【料理】◎お芋の料理と御飯焚き（さつき）◎臺所の一週間（笹舟）【家政】◎家庭心得其をり〳〵（葛野葵女）◎日に一錢づゝの貯金（北利子）◎吾家の室内に揭げて置く各種の表（紅梅女）◎家庭の秀才となんたい（春野胡蝶）◎時間の屑を利用せよ（みきよ子）◎母のをしへ（佐分華影）◎家庭の心おぼへ（野の花）◎感心な奥樣（内梅千鳥子）

▲對話女髮結所の朝（うす雪）外數篇▲和歌數百首

● 發行所 東京市京橋大鋸町 女子文壇社（振替東京壹七貳九）賣捌 全國雜誌書店 ●

女子文壇目次

【卷頭口繪】

▲鶯籠（石版彩色密刷）……宮川安信筆
▲雪のあした（水彩畫密刷）……大下藤次郎筆
▲伏見若宮王妃經子殿下……寫眞版
▲公爵二條基弘氏夫人治子……寫眞版
▲令孃（前代議士神鞭知常氏令孃静子、後藤遞相令孃愛子、宮内省御用掛穚口琴子氏令孃糸子）……寫眞版
▲令孃（日本郵船會社吉澤氏令孃松枝子、元七十七銀行頭取遠藤敬止氏令孃桃代子）……寫眞版
▲名士の夫人（古屋德兵衛氏令嗣夫人政子、川崎浪速氏夫人）……寫眞版
▲學友（水野義郎氏令孃きん子、靜子、淸國女子留學生、前學習院女學部敎授木村貞子、前田利同伯令妹澄子と其學友）……寫眞版
▲誌友（佐藤曉花外六名）……寫眞版
▲雪景（丹波氷上郡立高等女學校の校舍と運動場）……寫眞版

【本欄】

◎卒業して結婚するまで……東京高等女學校敎頭 小川銀次郎
◎婦人は結婚すべきものなるか……法學博士 上杉愼吉
◎女の心は淺い……あづさ弓
◎生活の程度に應ずべき家政學……工學博士 眞野文二

二月號（第七年第貳號）

◉人間の先祖……理學博士 石川千代松
◉翫賞すべき日本の舞踊……理學博士 田中正平
◉女の乳房は粧飾品にあらず……ドクトル 辻高俊
◉十分間……兒玉花外
◉郊外から……服部嘉香
◉故一色醒川を懷ふ……友人
（中山三郎、河井醉茗、溝口白羊、中村吉藏、澤村胡夷、横瀨夜雨）
◉鳩の酒盃……横瀨夜雨

【創作】一四九―一三
△暗きやすらひ（散文）……はやぶさ
△舞扇（散文）……平塚白百合
△丘の上にて（散文）……深山木
△銀杏（散文）……三ヶ島水松
△苦しき女より（小說）……小笠原ゆり子
△犬（小說）……ひなげし
△宿屋女（小說）……梶原重子
△明暗（和歌）……原田琴子其他
△和歌……高尾以下
△末黑の草……夜雨
△詩の言葉二、（處女）……醉茗
△トンネル（詩）……港の女
△月下（詩）……花子
△俳句……糸子以下

△都の妹へ（初作）……關口ちよ子

【雜錄】一三一―一四一
◉都下の大工場に通ふ女の一人……べに江
◉明治座の印象……夕はし
◉常をとめ……美耶子
◉奧の都會……ふゝき野
◉初雪日記……玉あられ
◉地方女敎師の受くる誘惑……名もなき女

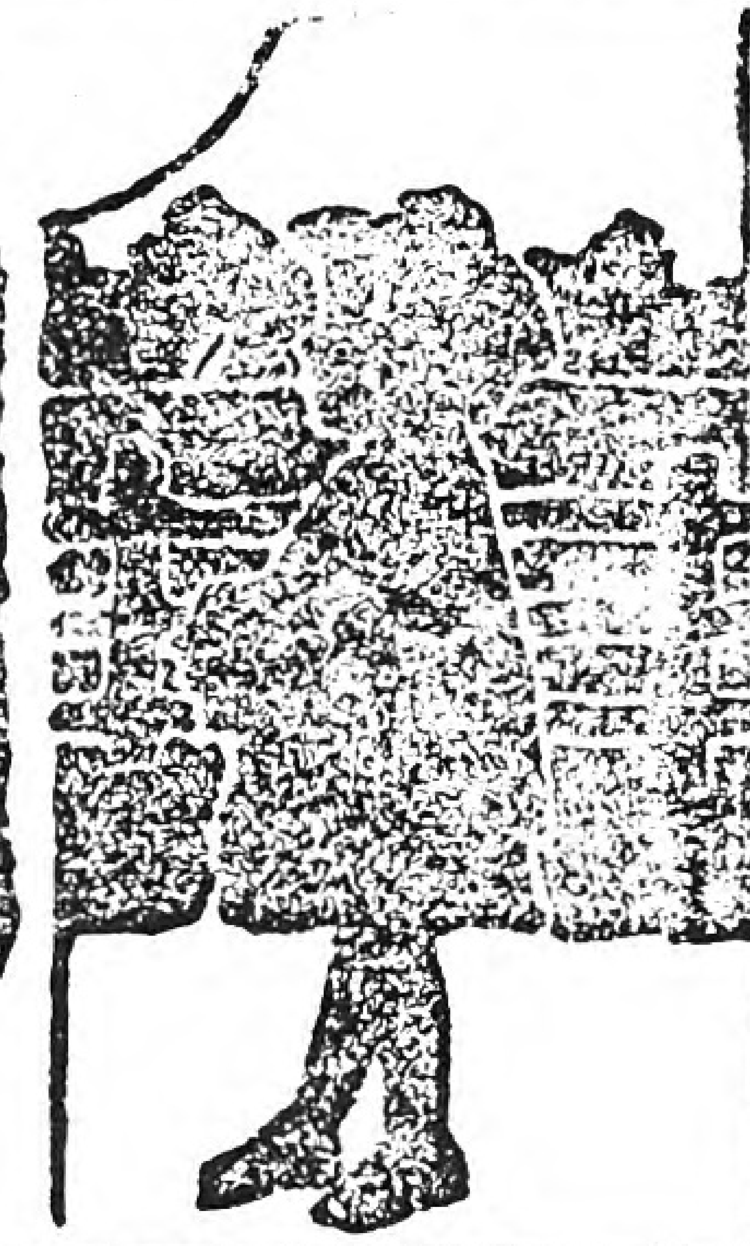
【誌友くらぶ】一四二―一四九
△年賀狀の御禮、其他……

【雜報】一五〇―一五三
△歌御會始△千里眼の眞僞、其他……

愛らしき少女達の讀物には一等評判よい　速に試讀あれ

一日發行　第三巻第二號　二月號

少女





（毎月一日發行）定價一册拾錢（送料壹錢）半年（郵税共）六拾三錢（口繪[illegible]湘山[illegible]）

少女小說
- ◎二人やんちゃん……佐々木邦
- ◎山の歌……吉井勇
- ◎黄金の盃……田島曲琴
- ◎大晦日の晩……溝口白羊
- ◎上　京……永代美知代

- ▲山階宮安子女王殿下の御孝徳……記者
- ▲新渡戸博士を感心せしめたる少女……好母

お伽噺
- ◎蚤と虱の競走……仙壽麻呂
- ◎蝶吉……竹久夢二
- ◎スノードロップ……水野葉舟

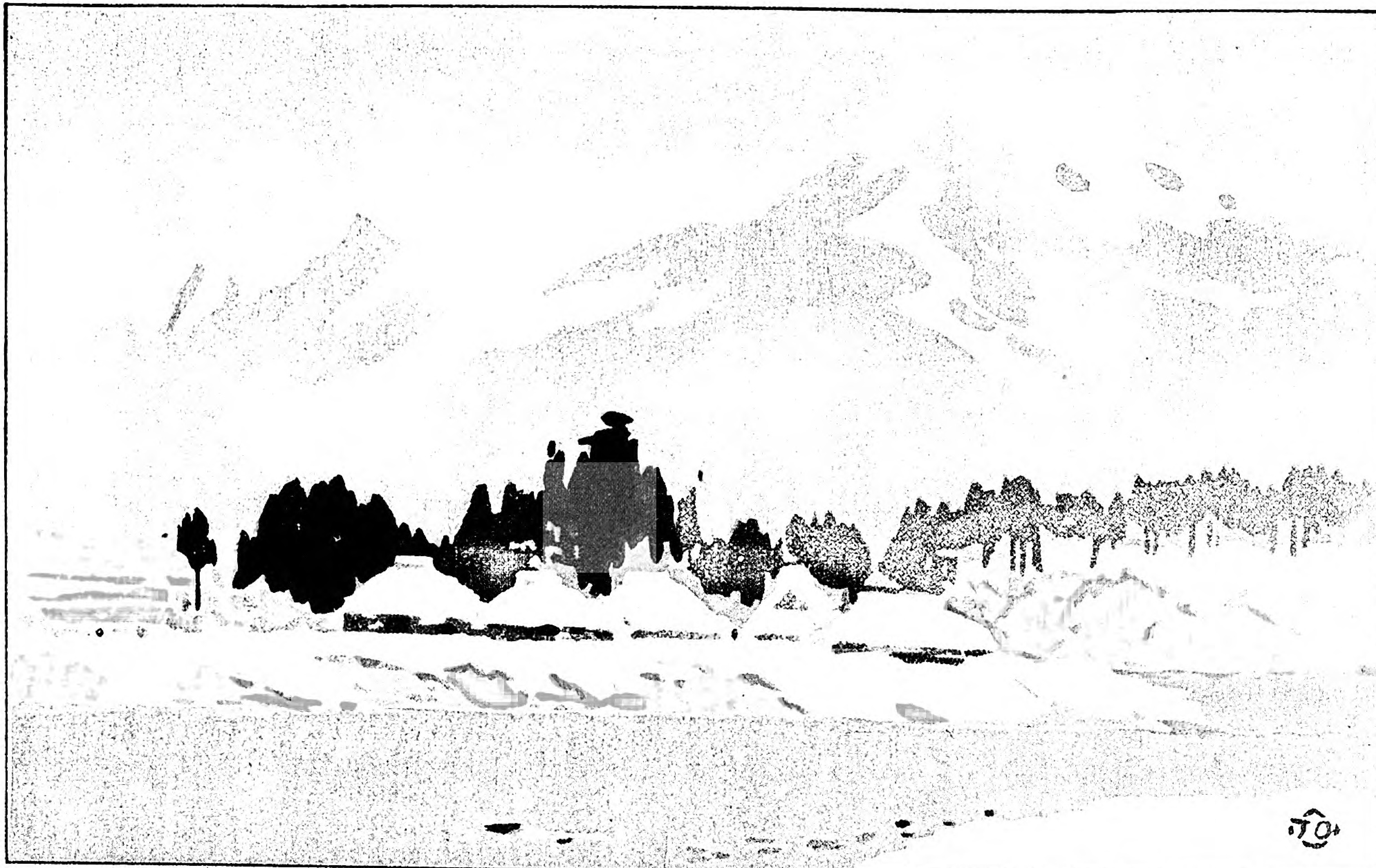
科學
- ◎動物園のお正月……佐々木好母
- ◎猫の家庭教育……上田春雄

懸賞
- ▲新案　猫の子電報
- ▲算術新題　花子のお人形代
- ◎讀者小說　三編

發行所　東京京橋區大鋸町　女子文壇社（振替貯金口座第壹七弐九番）

最寄書店に無くば直接御申込を乞ふ

雪のあした



大下藤次郎筆



婦人世界

二月一日發行 第六卷第二號 一冊拾五錢 郵税一錢五厘 半年分郵税共一圓九錢 一年分同二圓五錢

◎試驗に迫りて狼狽する女學生……下田歌子

◎支那人に嫁した日本婦人……吳乙女子

◎私の百道樂……江木夫人

◎秘史實話 松尾多勢子……渡邊默禪

◎新形束髪の結ひ方……伊賀虎子

◎食物上の大改良……弦齋夫人

◎辨財天は嫉妬深き神様……武田豐四郎

▼日本には何故に婦人解放問題が起らぬか……嶋山春子

◎人情論……村井弦齋

◎嫉妬を言ひ當てる千里眼婦人……竹内龜代子

▼手紙を書くにはこの心掛けが肝要なり……渡邊白水

◎小兒病の豫防……加藤博士

◎家庭衛生談……村井弦齋

◎紅涙記……伊藤鎭代

◎家事經濟の執り方……嘉悦孝子

◎新夫人の日常生活……岩崎德子

◎細川忠興の妻……井上博士

藤澤古雪　古城貞吉　後閑菊野　幸田露伴　栗塚龍子　その他

東京京橋南紺屋町十二番地 實業之日本社 （郵便振替貯金口座三三六番） 賣捌 全國書店



鶯籠



東京錦石堂石印

女學世界

第拾壹卷―第三號

◎我乙女の春……………………花村たみ
◎簞笥の鍵……………………矢野敏子
◎人の榮な淡まぬ心の餘裕……………………伊澤千代子
◎春の天然より得たる女一生の教訓……………………祁品小枝子
◎新徒然草……………………磯千島
◎結婚媒妁の苦心……………………法學博士寺尾亨
◎花嫁時代の感想……………………櫻田節彌子
◎雜記帳……………………與謝野晶子
◎劇の女主人公の性格……………………中村春雨
◎奇特な孝子マルコ……………………淡路搖
◎女生徒の氣力……………………星常子
◎婦人の氣轉……………………平出修
◎私の花嫁時代……………………寺田常子
◎千尋の底……………………志摩の浦人
◎就職難と約婚……………………こぼれ梅
◎京城の社會觀察……………………千鶴子
◎伯爵家の家庭教師……………………櫻子
◎無料宿泊所の印象……………………覆面記者
◎病ホーム物語……………………秋雨女
◎病院外科室の印象……………………淺倉茂子
◎熱海湯治記……………………綠宿梅
◎英國の婚禮菓子……………………洲濱
◎晩餐哲學……………………河岡潮風

洋裝菊判頁數
二百八頁石版
寫眞版豐富
正價廿錢
郵稅二錢

▽二月一日發行△

東京日本橋
本町三丁目
博文館
振替貯金
東京二四〇

伏見若宮王妃經子殿下



（外國にて御撮影）

公爵二條基弘氏夫人洽子



惡筆は一生の損

女子會員募集

面白いほど早く字のうまくなる習字通信教授

卒業者拾五萬有余

實用文字六ヶ月卒業
專賣特許第九五五九號
專賣特許第一七九一〇號
實用新案特許第四八七三號

書者
稻川雲谿先生
玉木愛石先生
(女子部)小野鵞堂先生
外講師數氏

見本詳細會則無代進呈

東京市本郷區大學前
電話下谷三〇一一番
電話下谷三二一〇番

帝國習字速成學會

口繪優美

版畫鮮明

青年雜誌 秀才文壇

第十一卷第二號(貳月號) 正價金十三錢 郵稅一錢五厘

毎號讀者文藝募集

▽大久保の家(小說)……太田水穗

▽新らしき脚本の作家と批評家に……村中春雨

あめりかよりの書簡二通……高村光太郎

ペラホの夜……佐藤綠葉

都會散文詩二篇……八橋有春

▽作詩の標準……三木露風

▽錯誤……水野葉舟

逃亡と死と……富田醉花

南國の鑛山國より……近藤嵐翠

旅役者の懺悔

▽初めてテーブルに對つた日……窪田空穗

▽露西亞の女……中澤臨川譯

秀才文壇 春期增刊號

二月拾五日發行 春風號

本號に限り一冊金廿錢送料一錢五厘

春期增刊『春風號』には豫て募集された青年文士諸君の玉稿佳什の外本誌選者の寄稿を掲載す即ち中村星湖氏の小說○水野葉舟氏の小品作法○吉江孤雁氏の棕梠の日記○其他柳田國男氏、佐々醒雪氏、相馬御風氏、窪田空穗氏河井醉茗氏、松原至文氏、白柳秀湖氏、三木露風氏、森川葵村氏、高田蝶衣氏、前田夕暮氏等の詩歌小品を掲載す

發行所 東京神田旅籠町一丁目 振替口座東京一九五五番 文光堂



前代議士神鞭智常氏令嬢靜子



後藤遞相令嬢愛子（學習院女子部在學）



宮内省御用掛橋口琴子氏令孃京子



日本郵船會社船長吉澤信吉氏令嬢松枝子



元七十七銀行頭取遠藤敬止氏令嬢桃代子

女學生

每號懸賞讀者文藝募集



二月一日第二號發行　價十五錢郵税壹錢半

貳月號

口繪石版密刷及原色版其他數葉　每號懸賞文藝滿載

○小説 戀しき人　田村露英
○脂粉の氣のおゝき女性　與謝野晶子
■柳橋女史を訪ふの記 ■新しき女のさけび
■教育ある女のワナ ■んてな奥さま
あんな令孃 ■米國女學生氣質 ■生花教授所の看板のうら表 ■青春期の女の衛生
■花嫁のマダム振り……
●春日局　山路愛山
■都下十五女學校評判記……
■小督の局 ■○○子さんの打明け話 ■冬季簡易なる美顔術 ■侵略者 ■フレタムケレ ■婦人と色彩の觀念 ■少女の煩悶 ■記者たらんとする諸孃よ
○動かぬ道理美しき感情……井上博士
○渡米船客の六割强は婦人…島貫兵太夫

發行所　東京神田旅籠町一　文光堂　振替口座東京一九五五五番



古屋徳兵衛令嗣夫人政子



川島浪速氏夫人

學友



水野義郎氏令孃きん子、靜子、清國女子留學生



前列（右ヨリ）前田利同伯令妹澄子、前學習院女學部教授木村貞子、前田利同伯令妹絹子、水谷藤子○後列（仝）藤倉米子、能勢梅子、森村りか子、高島宮子

腦神經衰弱症とヒステリー

婦人血の道及生殖器障害等の疾病は如何に治療すべきか

陸軍々醫　久保光藏　識

近頃此の種の病人が非常に多く成り、從つて其の治療法を研究する專門家も多く、又新聞雜誌其の他に顯る、●腦病、神經衰弱症及ヒステリー症（婦人血の道）並に生殖器障害等の特効藥なりと稱する賣藥も亦續出せり、玆に於て神經過敏なる本病者は心迷ひ迷ひて、醫者廻り、病院廻りを仕事となし、其の上他人や素人の好いと云ふ藥は申すに及ばず所有る療法を試み、長くの間何の効をも奏せざる治療を續行し、莫大の費用を投して尚全治せざるのみか却て自身の將來を苦慮し、愈々煩悶に煩悶を重ね倍々病勢は加はり頭痛●眩暈●耳鳴●不眠●視覺、嗅覺、味覺の障害●脊髓の鈍痛又は激痛●手足冷へ●動悸●息切れ●食慾減退●陰萎●遺精●早漏●便秘等の容態が烈しく成り●見聞して快感なく●小事を苦慮し●求めて心配苦勞を爲し●思考力と判斷力なく●自分の位置、職業、家庭、居宅等常に不滿●自分の不幸に陷る可き事のみ思想に浮び●讀書力なく●記憶力なく●驚き易く●悲み易く●感じ易く●倦み易く●不活潑にして不機嫌●常に悲觀と苦悶とにて終日病症を案じ自分の不幸不運を嘆き、甚だしきは不治の難症と早や合點をなし、哀むべき厭世家となり、遂に自殺を遂ぐる者も往々あり實に憎む可き厭ふ可き此の病魔！

●諸子にして現に若し此の苦境に陷つて我が身の不運を嘆ぎつゝある不幸あらば送料二錢切手を添へ●東京市東兩國小泉町救世堂藥院へ申込みあらば余の多年間直接患者に接し其の患ふ所を診斷し其の訴ふる所を採り實驗に實驗を重ねたる結果遂に成功したる余獨特の治療法を詳細に記述せる珍書即ち▲腦神經病新論▼一冊を同病者に限り無代施本す

婦人畫報

二月一日發行　二月の卷　一冊 廿五錢　郵税二錢　六冊税共壹圓五拾錢　十二冊税共貳圓八拾八錢

畫報

▼梅の宿(二頁大附錄)……中澤弘光筆
▼英國へ御差遣の東伏見宮兩殿下……
▼暗香……▼盆景……▼令孃鑑
▼山内侯爵夫人……▼京都の髮かたち……
▼德川鏘子孃と高橋春子孃▼山と海……
▼跡見花蹊女史新築の應接間と玄關前
▼久我尊尼公猊下の御染筆
▼宮中女官の年賀状いろいろ
▼花園女史邸に於る新年の歌の會……
▼クリスマスの遊びと合奏……
▼理的想の室内裝飾……
▼貴婦人新年互禮會……
▼貴婦人の仕事いろいろ……
▼組式……▼禮法のしほり……
▼女學校の授業はじめ……
▼名流婦人のかるた會……
▼愛國婦人會新年互禮會……
▼育成園に於ける園兒の世話……
▼衛生試驗所製作の食料品模型……
▼新婚の高橋是賢夫妻と奥田竹松氏夫妻
▼溝口伯嗣子と室町伯爵の新夫人……
▼高橋義雄氏新夫人と日向輝武氏夫人
▼戊申婦人倶樂部新年會……
▼奈良と京都の女學校……
▼女學生の假裝……▼玩具の色々……

讀物

◎良妻賢母の新意義……法學博士 新渡戸稻造
◎貴婦人と社會風俗……法學博士 小河滋次郎
◎社會事業と婦人……文學博士 三宅雄二郎
◎日本婦人の美德……文學博士 三上參次
◎婦人は男に非ず……法學博士 上杉愼吉
◎國家的思想……下田歌子
◎名婦かゞみ……いね子
◎婦人と法律……法學博士 川名兼四郎
◎和歌初學鶯の歌……佐々木信綱
◎薪と炭の話……農學士 今村猛雄
◎鐵筆の修業……江木榮子
◎美人の資格……梶田半古
◎皇后陛下の御歌……遠山稻子謹記
◎我子の敎育一……小金井きみ子
◎我子の敎育二……加藤つね子
◎油物と甘い物　農學士 西村宙三
◎寡婦となりて孤兒の世話……鎭代子
◎訪問の心得……中島義弍
◎二月の自然と人事……森志づか
◎會津女の風俗……みすゞ野
◎家具の手入れ……宮川すみ子
◎一家の主婦と料理……櫻井ちか子
◎與娘十五箇條……書記官長 林田龜太郎
◎花嫁と實際問題……文學士 下田次郎
◎花嫁になる前の準備　文學博士 元良勇次郎

增刊 現代名流婦人

定價 二十五錢　郵税 二錢

東京麹町區飯田町四丁目四番地
東京社
電話番町二三三九番　振替口座一一八一八

鮫島大浪氏著

ある女の日記

定價金四十五錢　郵稅四錢

事實は小說よりも奇なり

發行所　東京麻布區笄町百五十五　飯野書房

婦人相談

月やく滯又は不順

等を人知れず秘密に治療せんとするのが女の性癖である、夫故往々有觸れた無効の藥などに迷ふて後日の大病を引起す人が多い、此等の婦女に斯道大醫の方劑を仰ぐと同樣最も安心に快通流下する靈藥をお知らせするから、郵劵三錢を添へて申込みあれ密封にて詳報す

東京市京橋區金六町三番地　笹山梅野



誌友



（肥後）橋本いち子



（群馬縣）館林の愛讀者



（長岡）佐藤曉の花

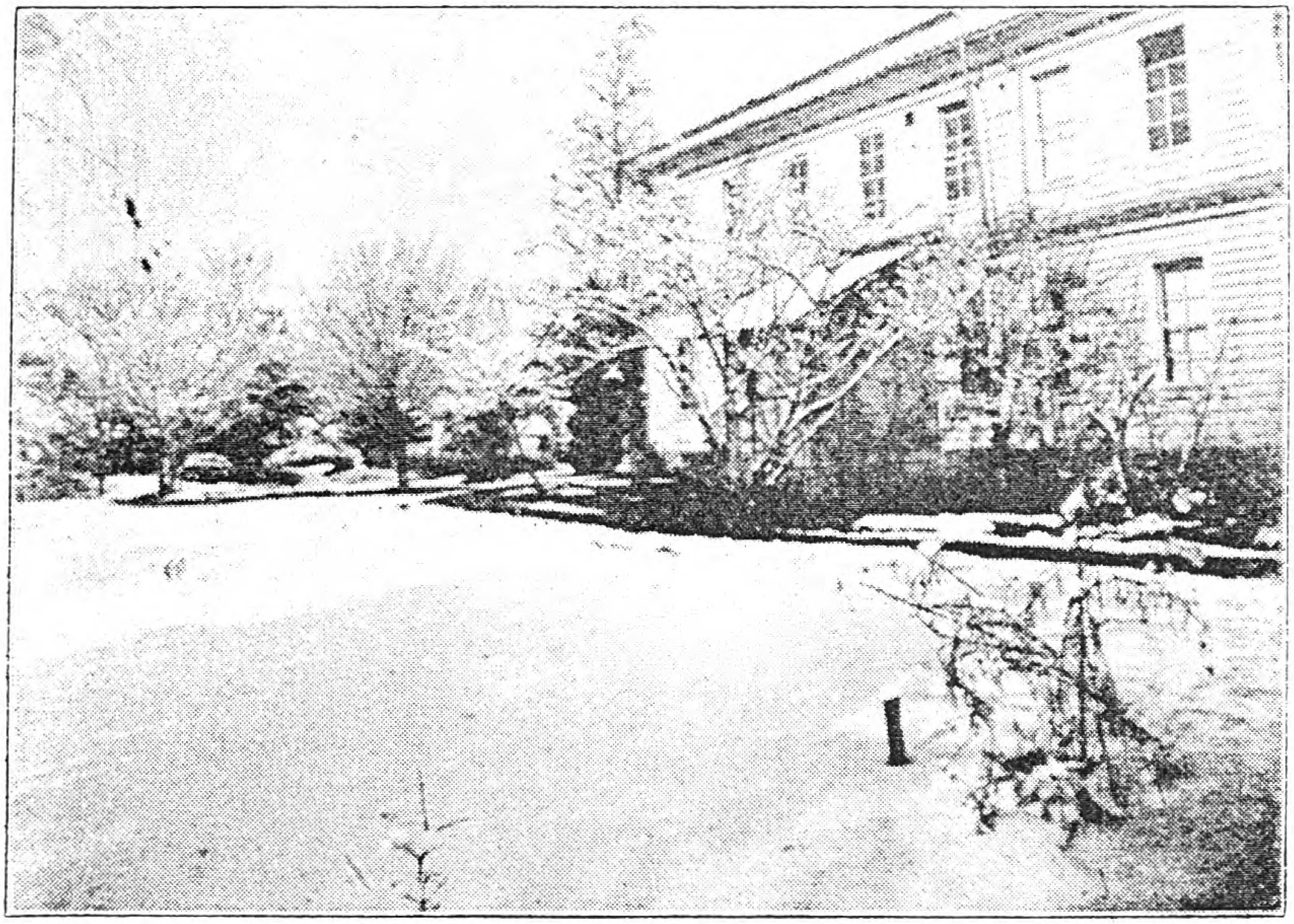


（福島縣）丹藤波流子、花醉子

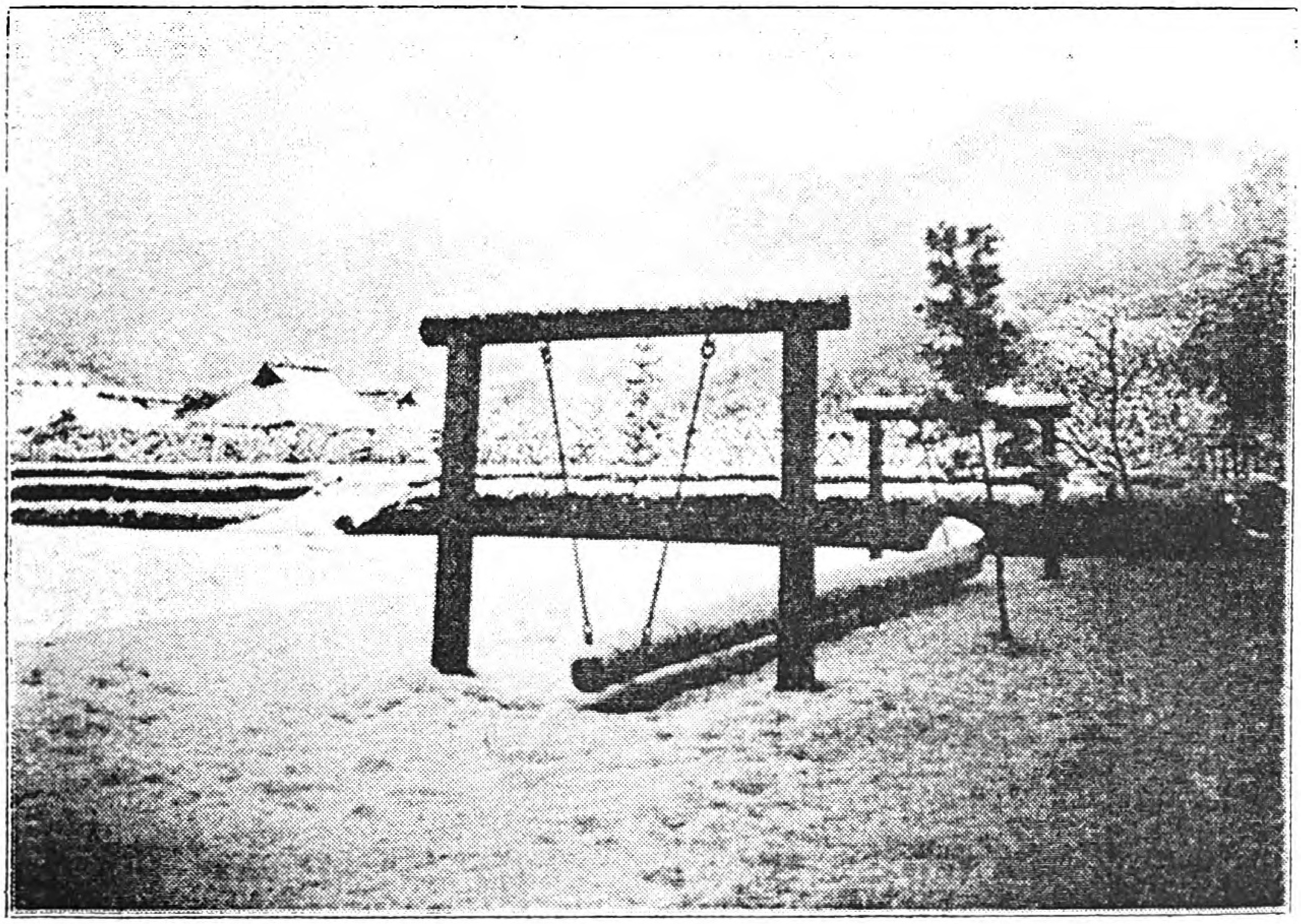


（神戸）梶常子

丹波氷上郡立高等女學校校舍一部の雪影



全運動場の一部



（菅幸子寄）

讀者の大利益　發行元の大奮發　新年號は見るに限る

一月元旦發行

新年號の內容

▲大附錄▼

極彩色石版繪「明眸」太田三郎筆本誌二倍大密刷

大下氏水彩畫「初日の出」石版密刷

寫眞は上流婦人及令嬢最新撮影の者十頁を收む光澤紙刷繪の如し花の如し

▲新年號に限り紙數增加本文二百餘頁
額繪附錄、水彩畫、寫眞口繪光澤紙刷にて、卷頭を飾る

▲一部定價貳拾錢　郵送料一錢五厘

賣切れになれば再刷せず、此際至急發行元又は最寄販賣店へ御申込あれば、買遲れの心配はありません、何卒倍舊の愛讀あらんことを祈ります

◎公爵家新年の儀式……記者　◎鏡山のお初と現代式の女……竹越與三郎

◎舞踊と田中理學博士　◎浮世繪に表はれたる婦人の容貌……澤村文學士

◎高き望み低き望み……羽仁元子　◎乘馬と樂燒……江木博士夫人榮子

◎笑のさまぐ……小金井きみ子　◎加納子爵家庭……佐々木好母　◎名流

奥樣ぶり　山の女　其他

◎脚本　一人舞臺……文學博士　森鷗外

◎小說　涙……正宗白鳥

◎小說　ひまな人……與謝野晶子

◎冬の海……眞山青果　◎嫁へ……水野葉舟　◎女性の趣味……中村春雨

◎おオの國……横瀨夜雨　◎鐵道線路……河井醉茗　◎文藝

其をり／＼（繪入）　◎繪はがき歌壇八景　◎詩の言葉（其二）

◎創作　▲霜枯……三ケ島葭子　▲秋空……曾我部菊子　▲薔薇の花……山田邦枝　▲其他散文、詩、和歌、小說、俳句、等數百篇

◎雜錄　▲女教師の生活　▲勸工場しらべ　▲私の見たる現今の婦人雜誌　▲眠る前（日記四篇）　▲造花の流行　▲囚はれたる商人の家庭　▲學校時代と家庭時代　▲師範出の女の苦む難關　▲其他

◎發行所　東京市京橋區大鋸町（振替口座一七二九）　女子文壇社◎

今の婦人

紙數二百餘頁

美麗口繪挿入

定價貳拾錢

送料壹錢五厘

本書の内容

- 美しい血　佐藤ます子
- 與へられたる生命　山田 邦子
- 木柵　長曾我部菊子
- 大川端　鈴木 春子

△美しき色彩

執筆婦人九名

- 見るも夢、覺むるも夢夢の女　若杉 濵子
- 面がはり
- 母に縋りて　前島ゆり子

△若奥樣の生活

白木綠子、枝の小鳥、きみ子

- ◎賣約濟　うすゆき
- ◎死なれぬ女　山崎千代子
- 現代婦人の進歩　河井 醉茗
- 良人の選擇に迷へる女に與ふ　雨 をとこ

△婦人登山記

- 玉かつら子
- 私の心を縛つて欲しい迷へる女
- 白き月の沈む頃彼女は眠れり　初野道子
- 獨寢の枕に響く霰の音　月夜花
- 正氣か狂氣か　秋居
- 敎會を脫したい　芳子
- 女學校の窓から覗いた世間　白雨女
- 涙を呑んで運命に從ふ　神保千代野
- 單調なる生活に倦む　野に降る雨
- 覆面を脫ぐ　築土の草
- 私の運命を左右した試驗の力　秋香
- 危うく戀の波に浚はれんとす　夕がほ
- 引いて歌ふや獅子の曲　さつき
- 夢の記　葛の葉
- 三人女　芳惠子
- 遊學を志の貫かうとする　初一念子　星

- ◎夜の自然を愛す　吉田 紫花
- ◎覺めたる日記　安永 濟子
- 懷姙日記　越路女
- 苦勞人の面影　船田 豐子
- 私の離緣された一事始終　小夜時雨
- 劇 早婚の爲に生じたる吾家の悲　新田 文子
- 嫂の冷たき心を悲む　島守女
- 姑の我を折らすも少しの呼吸　月見草
- 子供を持つても忘られぬ文學　はまゆふ
- 細君評判記　さくら貝
- 袖香爐　橫瀨 夜雨
- 朝しづく　三加島霞子
- 七世の後も　原田 琴子
- 栗の實　美耶子
- 小品文、詩、和歌、俳句

東京 京橋區大鋸町 女子文壇社出版

（振替口座第壹七貳九番）

賣捌各地書店

安全買物

▲最も便利なる買物の方法▼

女子文壇並に少女の愛讀諸孃の御便利を計り東京市內にて發賣する

書籍及雜誌（教科書並に醫書を除く）定價の一割引

文房具、化粧品、

小間物、玩具類、 定價の五分引

にて手數料を申受けず、誠實に御用達可申候間、多少に不拘、遠慮なく御申越被下度候、割引代金及び遞送費は一切前金にて、可成詳細に御通信願上候

女子文壇社
用達部

東京市京橋區大鋸町十一
振替口座東京第壹七貳九

▲確實で安い物を買入れる便法▼

稀有の飛躍をなせる二月號

婦女界

二大呼物
（毎號掲載）

▲夫婦論

戀愛は神聖なりや、結婚は幸福なりや　羽仁もと子

▲女（貌と才と德）　文學博士　三宅雄次郎

◎男子の品行問題

▲夫の不品行に對する妻の覺悟　某政治家夫人
▲醫學上より見たる男子の不品行　大澤醫學博士
▲夫の妻に對する德義……大内青巒
▲男子の罪か婦人の罪か　目賀田男爵夫人
▲不品行は多く酒より來る　片山醫學博士
▲高尙なる趣味を與へよ　棚橋絢子
▲家庭の責、學校の責、社會の責　向軍治
▲婦人は度量廣く……某陸軍少將夫人
▲最後の一點枉ぐべからず　井深花子
▲男子の自尊心に訴へたし…鎌田榮吉
▲敎育と宗敎の力を以て…江原素六
▲まことの愛まことの節操…近角常觀

▲男子の不品行は何に原因するか▲男子は何故に節操を守る能はざるか▲男子の不品行を豫防するの道ありや▲男子の不品行に對する婦人の態度如何▲これらの問題に對して或は切實なる經驗の上より、或は科學、宗敎、敎育の立場より、最も明快適切なる解釋を與ふ▲夫の放蕩に苦しみ、或はその素行を疑ひて煩悶せるもの、及びすべての結婚生活にある男女、將に結婚生活に入らんとする男女は、必ず一讀せよ

◎六年を費して法華經八卷を寫す　跡見花蹊
◎妖怪學上より見たる家庭……井上博士
◎妻、母、主婦としての我が苦心…宮田多賀子
◎家を上手に持つ工夫……羽仁もと子
◎今様ふだん着姿　▲不斷着の撰び方▲不斷着のいろ〳〵▲着物の仕立方▲着こなし方
▲歌もの語り（遠山稻子）▲女子大學火事演習の記▲柴田女史宅の稽古初め▲初午の話……▲二葉幼稚園を觀る……▲風邪とは何か……▲文藝その月々……▲新家庭の經驗……

▲口繪

▲平和の家庭（上村松園女史）▲霜の朝（岡野榮）▲御名代として御渡英の東伏見宮妃殿下▲世紀に冠絶したる美人シッドン夫人▲跡見花蹊女史と其手寫にかゝる法華經▲居間、書齋、庭園に於ける棚橋刀自▲片山醫學博士の家庭▲新婚の加納子爵世嗣夫妻（以下略す）

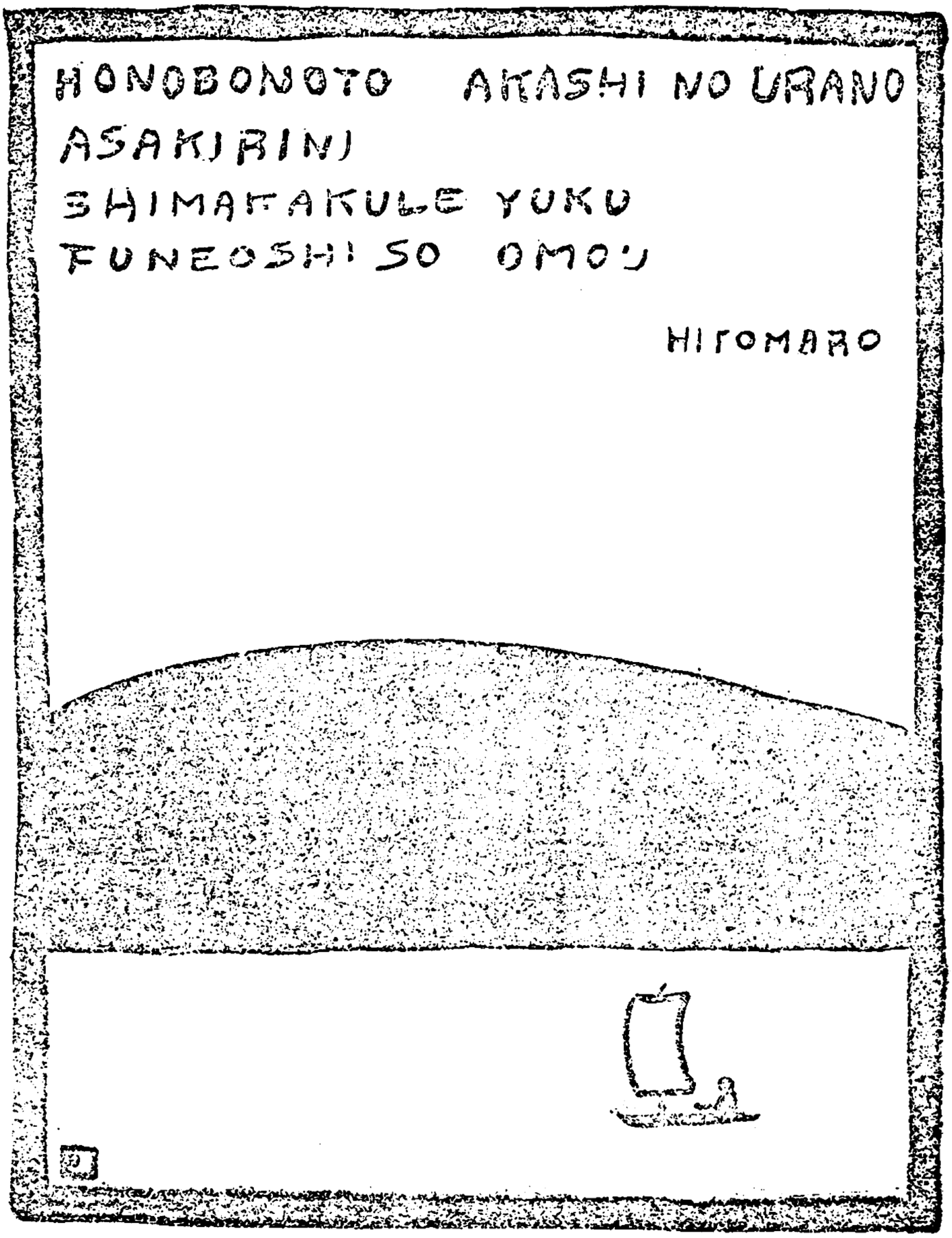
一冊金拾五錢（郵税一錢五厘）
六冊金九十錢　十二冊一圓七十五錢　郵税共前金

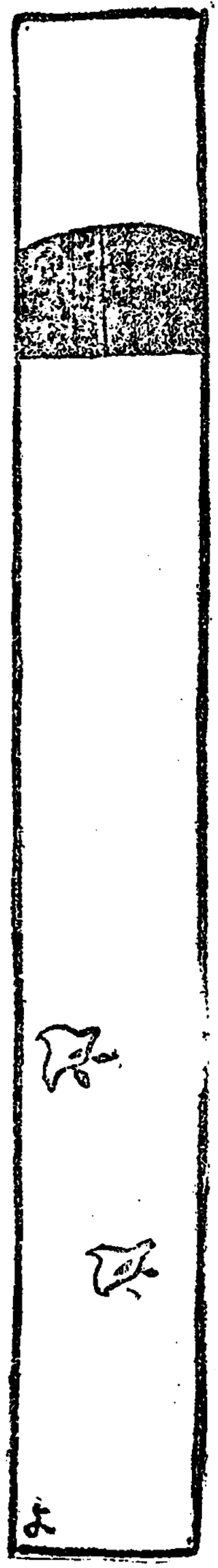
東京市神田區表神保町二
同文館

女子文壇

第七年第貳號

明治四十四年二月一日





卒業してから結婚するまで

東京高等女學校教頭　小川銀次郎

▲最も大切な時代

女の一生の中で、最も大切な、最も注意せねばならぬ時代は女學校を卒業して結婚するまでの時期であらうと思ふ。學校に居る間は一意專心勉強して居りさへすればそれでよいので、唯朝起きて學校へ行つて、一定の時間數を受け、自分の家か寄宿舍へ歸へれば學んだ學科を復習して、試驗に成蹟を競ふ外に心配も何もないのであるが、扨て學校を卒業して了ふと、學校へ通ふこともなくなれば、勉強する機會もなくなるので、俄に暇になつて、一日の中何をしてよいのかさつぱり見當が附かなくなる。今まで日々規則的に生活して居た者が、家庭の不規則な生活に從はねばならぬこと〻なり、自然心に不安と油斷が生じて來る。學校に居た間は嚴格なる學校の監督を受けて居るから危險な場合に臨むこともないが學校を出て了ふと單に家庭の監督を受けるだけで、交際や何や彼やの關係より勢ひ危險な地位に立つことがないとは限らぬ、此時代に注意が足りないと一生を過ることが起つて來る。であるから女の一生の中で最も大切な時代は、學校を卒業して結婚するまでの時期であらうと思ふ、其間の心得を少し述べてみやう。

▲他から疑惑を受けるな

女學校を卒業した人に特に望みたいのは精神の修養と言ふことである。學校に居る間は倫理の講義も聞けば修身の書物も讀んで居るのであるから、心も神聖であるし、又生活が單純なので危險の場合に立つことも少ないが、學校を卒業して了ふと、倫理の講義も聞かなければ、修身の書物も讀まなくなる。而かも生活が複雜になつて來るから、此時に於て餘程精神修養をせねば、折角の學校敎育も役に立たぬことになる。それでは如何すればよいかと言ふに、女のことでもあるから強て六ケ敷いことをするにも及ばぬ、聖賢の書物をなるべく多く讀む樣にし、時々先輩大家の修身談を聞き、自ら精神を修養し、我身で我身を自重すればよい。そして自分の行を自分で判斷し、夢にも梨下に冠を直し、瓜田に履を入れる樣なことのない樣にせねばならぬ、假令自分の身に疚しい事がないにしても、人から疑を受ける樣な事のあるのは、矢張り精神修養が足らぬからである。女は單に心に疚しい事をしないのみならず、人から疑はれる樣なことをしてはならぬ。

▲つまらないと思ふな

女學校を卒業した女は、自分の品行に注意し、精神修養を怠らないと同時に、女らしいと言ふ婦德を養はねばならぬ。學校生活して居る間は、書生の身分でもあるし、學問修行の外他念ないのであるから、氣兼苦勞と言ふものがない、自分の思ふ通りの生活をして居る、他人との交渉がないから其生活は氣儘である、氣儘な生活をして居ても人も許し自分も疑はない。學生時代はこれで通つて行くが、一度學校の門を出でゝ家庭の人となると、學生時代の樣な氣儘な生活は出來ない、殊に結婚して他人の家庭に入る樣になれば、學生時代の樣な暢氣な生活は決して出來るものでない。若し此場合に尙ほ學生時代の生活を夢みて居ると、家庭の波瀾は免かれぬ。學生々活と家庭生活と如何いふ點が違ふかと言ふと、學生々活は學問本位である、學問

の爲めには總ての事を犠牲にする。勉强が忙がしければ脱だ着物を丸めたまゝ押入へ投げ入れて置ても、强て咎めることはないが、家庭の人となつて斯う言ふ事をしやうものなら確に問題になる。斯う言ふ樣に學生時代は學問本位、自分本位であるから他人との交渉がない、然れども一朝家庭の人となると家庭本位、他人本位であるから、親や夫や舅姑の命令に從はなければならぬ。ところが學生時代には勉强ばかりして居るので、他人の用事をする樣なことがないから、俄に他人の用事をする樣になると其が何となく無意味の樣な詰らない樣な氣がして心よく出來ない。

▲返辭は快くせよ

此の他人の用事をするのが詰らないと思ふ爲めに、他からものを言ひ附けられた時に好い返辭が出ないで厭な返辭をする。ものを言ひ附けられて厭な返辭をすると言ふことが女學校卒業生に最も多い、これは甚だ好くないことである。女と言ふものは何事を言ひ附けられても、如何いふことを命せられても、心よく返辭をして、厭な顏をせずに其事を便せなければならぬ。萬一其事柄が非で、命令に從ふことが一家の不利益となる樣な場合には、其場は心よく返辭をして置いて、後で靜に自分の意見を述べるがよい、其場で抗辯する事は女として決してすべきことでない。それから何事かする事を命せられた場合に、何かの都合で其事をして置かなんだ時は、斯う言ふ譯でして置かなんだと一一爲さゞりし理由を述べるものでない、何故して置かなんだと問はれた時は唯濟みませんと謝罪つて置けばよい、一々理由を述べると其が抗辯に聞えて人の感情を害する。學校を卒業して直ぐ嫁に行つては斯う言ふことに氣が附かぬから、學校を卒業して嫁に行くまでの間に斯る點に注意する習慣をつけねばならぬ。

▲氣輕に立ち働け

女學校を卒業したばかりの人に最も缺けて居るのは忍耐力である。學校時代は只勉强するのと學友と交際

するだけで、別に忍耐する樣な機會がないから自然忍耐力に乏しい。一寸人から氣に喰はぬ事でも言はれると直ぐ腹を立てる、要するに我儘である。ところが家庭の人となり、殊に嫁に行つて舅姑に仕へるには忍耐力がなくてはならぬ。舅姑から氣に入らぬことを言はれたからと言ふて直ぐ腹を立てゝ居る樣では人の妻となる資格がない。それから學校を卒業した女は如何も尻が重い、働くことを厭がる。これは至極惡いことで、お尻を輕くせいと言ふと言葉に語弊があるが、お尻を重くしないで氣輕に立ち働く習慣をつけねばならぬ、ものを言ひ附けられて厭々立ちあがる樣なことは愼まぬといかぬ。要するに學校では女の心得べき普通の學科の一端を敎へるに止まるのであるから、學校を卒業して嫁に行くまでの間に、學校で習ふた事柄を實地に應用して實際的の智識を養ひ、兼ねて日常の行ひ例之前に言ふた返辭を善くする事や、尻を重くしない事や、忍耐力を養ふ事などを勉めねばならぬ。斯う言ふ方面の練習をして、何時他人の家庭に入つて舅姑に仕へても立派にやつて行かれるだけの修養して置く必要がある。此時代の修養如何に依つて女の幸不幸が別れるのである。故に學校を卒業してより結婚するまでの時期が女に取つて最も大切な時代と言ふのである

胸に一物

顏ほど正直なものはない、大抵の人の性情は顏に表はれる、殊に女はなほ能く表はれる、胸に一物あるやうな女は、顏にも一物あるやうに見える、だから他から尊敬を受け、また愛重せられやうと思つたなら、自ら尊敬し、自ら愛重せねばいけない、此頃の若い婦人達には、悧怜さうな顏が多くなつたと同時に、胸に一物あるやうな、反感的の顏をした女も多くなつた、兎に角反感を抱いてはいかぬ、成程不平もあらう、煩悶も多くなつたらうけれど、反感を抱くのは宜しくないことである、反感は自信でもなければ、力でもない、やはり欺かれたる一時の感情に過ぎない、反感を抱いた結果は多く後悔に終るものである。（記者）

婦人は結婚すべきものなるか

法學博士　上杉愼吉

●人倫の根本問題

『婦人問題』と云ふのは、つまり『婦人は結婚すべきものなるか』と云ふ問題である。『婦人は結婚すべきものなるか』と云ふのは實に突飛な問題で、恰も日の東より出るを疑ふが如くである。然し之れ哲學者が弄ぶ空想の問題ではなく、實世間の活問題である。活問題といふのは、現在の狀態を虛僞な一時的の方向の過つたものとして、如何にか別途の解決が定まるまでは不確定なものとして、婦人は結婚すべきか將たせざるべきか之を暫時躊躇せねばならぬと云ふのである。

かゝる問題は獨り婦人の地位を最も激しく不安ならしむるものであるのみならず、人間其者に對して最も痛刻なる批評である。人倫の基礎其の者に對して、疑を挾んで之れを振り搖がさんと試むるものである。夫婦なければ固より眞正の意義に於ける親子もない。又兄弟もない。かゝる問題が起らなければそれまで、一度問題として提起された以上は捨て置くべからざる人道の危機といはねばならぬ。

●千里眼並の面白半分に扱ふべきものではない

此の如き問題の起るのを見て世道の衰へ、人心の危き末世の有様が知れる。道德を明かにし綱常を確立する必要の今の如く切なる時はあるまいとおもふ。憂慮すべき有樣である。人心の定まらざるは此の頃流行す

る千里眼なども其の一例である。古の聖人は怪力亂神を語らずといつた。其の深遠なる意味を味はねばならぬ。學者だといふものは精密に硏究した結果正確なる知識を發表すべきもので、容易に不思議などいふことを口にすべきものでない、其の結果世間を毒する如何ばかりであらうか。人心の定まらざるに乘じて、如何なることが起つて來るかもしれぬ、決して輕々しく考ふべきことではない。婦人問題なども新奇を喜ぶ風潮につれて、千里眼並に面白半分に取扱はれてゐる傾がないでもない。之れは誠に嘆かはしいことであると思ふ。人心を確定する國民の健全なる思想を樹立すべき任務ある學者が浮薄輕佻な有樣では民生の前途誠に憂慮すべきことである。

◎起點も中心點も結婚

婦人問題の如き人倫の基礎に疑を挾む如き思想の起り來つたのは實に近世の一大事件といはねばならぬ。然も故なきに平地に波を起したものでない。それならばまだ仕末がよいが、起るべき原因を實際生活に持つてゐる。第十九世紀を風靡した自由の思想、個人主義、凡そ何等かの羈絆束縛を脫せんとする精神的傾向の產物の一と見るべきと共に、かの工業革命經濟組織の變動、之れに由る社會的變動の結果の一として、生じ來つた實際上の必要に本づく問題である。一言にして云へば、婦人は事實上結婚することが困難になつて來た。結婚が出來なければ、自ら働いて衣食しなければならぬ。そこで已を得ず獨立の職業を學ばんとする婦人が生じた。又婦人も自由なるべし獨立なるべしといふ理論は旨く此の實際の必要に當つて、初めから男子と對等なる就職者勞働者として、婦人職業問題、婦人勞働問題が自ら起る。又男子と對等なる公人として、婦人も又選擧被選擧の權を有すべしと主張せらるゝにいたる。玆にいたれば婦人の敎育は根本的に一變しなければならぬ。之れが近時の婦人の問題である。問題の起點又は中心點は結婚問題にある。結婚の出來ぬ事實上の困難と、結婚しなくても宜しいといふ理屈とが合し

て婦人問題となつたのである。而して曰く、『婦人は結婚すべきものなるか』

●結婚攻撃の聲

此の問題に對して『否』と答へぬ人は結婚しなくても宜しい、婚姻は無用又は不道なる人爲の束縛である。婦人は獨立の職業を營み、男子と對等なる人として市人として生活すべきものであるといふのが所謂『解放』である。之れが爲に婦人は從來の有樣に對して、『覺醒』を促がし、此の解放の爲めに之を實行せんがためにする努力が今歐米に盛んなる『婦人運動』である。

婦人解放論者は頻りに婚姻を攻撃する。一夫一婦が永久に確定に結合し夫は外に働き妻は内を理すると云ふが如き有樣を永き間の習慣によりて偶然に人爲的に熟成したる虚僞の狀態制度であると云つて、婦人は斯の如き舊束縛より離脱することを努めなければならぬと主張するのである。之れを人の自然に反するといふのである。されば男女の間に存する、精神上 身體 上の差異も之れを數千年の習慣風俗によつて人爲に淘汰せられた偶然の結果であつて、自然の狀態に於ては男女は決して今日の如く違つたものではなかつたと云ふのである。

●世間を騷がす思想

成程野蠻の間には男女はそれ程違つてはゐないかも知れぬ。一夫一婦と云ふことは行はれて居らぬであらう。然しそれだけの事實はそれが人の自然であるといふ説明にはならぬ。段々之れを自然と名づくることが出來るとしてもかゝる極端な自然に反へるの主義は、文明の進歩、文化の發展といふものに反對する思想である。時と共に聖哲の力により人智の靈能により、道徳が明かにせられ人倫が確立せらるゝに至つたものを攻撃して、之れを破壞せんとする思想である。かつてルソウか、自然に反へるの主義を唱へて、人心を動かした時に、ウオルテイルが『然らば何故ルソウは其の衣服を脱ぎすて裸體になつて四つに這はないのである

か」と云つた好謔を思ひ出すのである。

かゝる思想は本來論理的精確を期するものでなく、唯だ無暗に現に存在するものを攻擊せんとするものである。保守も反對なれば進步にも反對する漫然たる非論理な破壞主義である。凡そかゝる破壞の思想と云ふものは少しく考へれば誰れにでも非論理な暴論たることは分るものであるが、其れが常に人心を激動して、世間を騷がせる非常なる力を逞しうするものである。



如何なる心理的作用か知らぬが、歷史に遡つても亦目前の事實を見ても事實はさうである。婦人解放運動の今歐米に盛んなのもつまり此の人心の弱點に基づくものと思ふ。激昂的な理屈も何もない、破壞的な思想が流行をなすといふことは、識者の大に心を用ゐねば成らぬ所であらうと思ふ。さればこそこんな思潮が滔々として海を渡つて我が國に流れて來たならば、人心の定まらざる浮つ調子の、今の日本社會の有樣である、

立所に人心を風靡するかもしれぬ。今更其れは人倫の大本に反するの物の道理に合はぬのと説いて見た所で何の功能もない。浮華の人心相呼應して之れを新時代の新思想と稱し、強烈の惡酒の人を酩酊せしむるが如く、邪道に陷る婦人輩出して、人倫五常の大本動搖し家族制度の本義忠孝の國體の精華たる所以の危からんとする時が來るかも知れぬが、其れは逆睹することは出來ぬ、先憂の士はこれを憂ふるのである。

◎結婚は改めねばならぬ

婦人解放論者の極端なる者はかくの如くに婚姻そのものを攻擊するので、人倫の大本を亡ぼし、人類を禽獸と同一たらしめんとするもの、其の妄は固より云ふに足らず。力を極めて排斥しなければならぬのであるが、現時の婚姻の狀態は、果して無缺點な攻擊の餘地のないものであるかといふに、決して然らず。婚姻は腐敗し、男女の關係は頗る紊亂して居るのである。之を見れば、婦人解放論も一時の放言とのみ見るべきでなく、識者は深く之れによつて起る所以に思を致さねばならぬものがあると信ずる。腐敗紊亂に激昂した衷心の感情の響と見て、社會も亦省察する所がなければならぬ。物其弊を生じて甚だしきにいたる時には、人間は感情に制せられ易いもので、動もすれば其の弊を矯めんとするのみならず、事柄其の物を破壞せんとして攻擊する、之れに對して正面から此の激情の思想運動を抑へんとするは、識者の爲めではない、徐ろに人心の機微を察して、其の弊を改めんことを努めなければならぬと信ずる。專制主義は惡いと極つたことはないが、其の弊に陷りて、暴虐の王政を行ふに至つたから、專制主義其のものを攻擊する革命が起つた。資本主が暴橫を逞しうすれば社會主義が行はるゝ。道德歷史を看板にして不當の束縛をなすに至れば、自然主義や虛無主義の同情者も出る。極端な自由戀愛說と云ふ樣な倫理破壞の思想の見はるゝのを見て、識者は悚然として現時の婚姻の狀態の腐敗紊亂を顧り見なければならぬと信ずる。

◉婦人も亦人間なり

イブセンの戯曲中にあるノラは、家庭を捨て夫を捨て子を捨て婚姻を捨てゝ去らんとする時に『我も亦人なり』といつてゐる。之れは婦人の覺醒の叫び聲と見られて居るが、婚姻に於て婦人は人として待遇せられて居らぬ、婚姻を離脱して始めて完全なる人と爲ることが出來ると云ふ意味にして、婚姻そのものを呪咀し母とし妻としては婦人は完全な人たることは、性質上出來ぬといふならば固より間違つてゐるが、現時の有樣として婦人は婦人として、婚姻に於て母として妻として人たるの榮位に適する取扱を受けて居るかといふに、悲しい哉否といはねばならぬ。婦人は決して完全に待遇せられ居らぬ。此の有樣を見れば『我も亦人なり』と云ふは痛切な激昂な叫聲として深く同情すべきものがある。婦人も亦人である、母として妻として天より享けたる人たる所以の本分は、完全につくさしめられねばならぬ。

◉先づ男子の覺醒を促さん

婦人は決して男子の爲めに男子の目的の使用に供するが爲めに存在するものではない。人としては男子と同等である。婚姻そのものは人倫の大本、決して動かすべからざるものである。之れを破壞してはならぬ。然し此の人倫の大本を形成すべき天分地位は價値に於て男女差等はない。婦人の母の妻の人たる本分が尊重せられなければ、婚姻は決して完全に人倫の大本たることを得ぬ。吾人は婚姻を擁護すると共に、否之れを擁護するがために婦人の人として尊重せられ、人として待遇せられんことを絶對的の必要として希望せなければならぬ。然も目前世間の有樣を見れば如何であるか。『我れも亦人なり』と云ふ叫聲は深く同情せねばならぬ。余は婦人が皆此の意味に於て覺醒して自ら『我も亦人』なることを認むるに至らんことを望む。否獨り婦人のみならず男子も共に覺醒して、婦人も亦人なることを認むるに至らんことを必要なりとするので

ある。

◉人間扱ひに外れた婦人

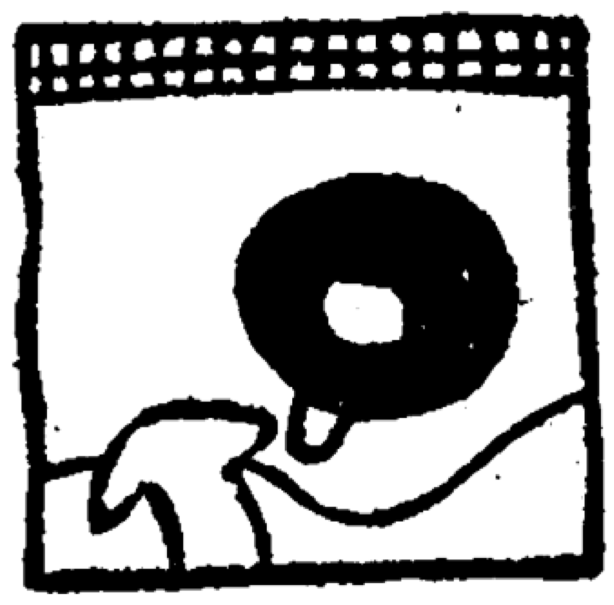
男子も亦覺醒しなければならぬ。今の如き婦人の悲むべき地位状態は婦人の暗愚にして自ら侮るの結果でもあるけれ共、男子の不心得が主なる原因である。婦人の自ら侮り男子の不心得の爲めに婦人が人間としての價値ある待遇を受けて居らぬ有様は、今予が一々事例を叙述するにも及ばぬ、予の如き世事に迂なる者よりも世間自ら能く知つて居るとおもふ。妻を娶る時、必ずしも妻をして身體の强健な精神の堅實なものを選擇はしない。或は容姿の美麗なるとか、音樂諸藝が出來るとか、或は財産持參金があると云ふが如き事を標準としてゐるのが、世間の風である樣である。之れは初めから妻を或る手段に供する意味を持つてゐるものである、大體結婚の方法が過つてゐる。野合の樣な結婚か、又機械的な結婚が行はれてゐる。何れにしても『人間らしき』仕方ではないかと思ふ。結婚に於て妻は決して『人間らしき』待遇は受けて居らぬ。家庭内部の有様は予の如き書生には能く分らぬが、ノラの『我れも亦人なり』と叫んで家を捨て子を捨てた心持に同情する婦人は少くないと思ふ、婦人の人間として取扱はれて居らぬ最も極端なものは娼婦である。耳目に馴れて人は左程に思はぬかも知れぬが、少し考へて見たら我々と同じ人間の形を享けたものの間に、娼婦と云ふものがある。之れを翫ぶ人間か居ると云ふことは予の如く神經過敏に非ずとも、誰れ人も、自ら人間たる品位の汚辱を感ずるであらう。こんな事柄を詳しく口にするといふことは好まぬから、云はぬが、一寸新聞を見ても何と云ふ藝者は何某に狎愛せられ居るとか云ふことを當然日常の事の樣に掲げてあり、何某と云ふ有名なる大官實業家の名前を立派に書いてある。之れを耻とせぬのみならず、寧ろ紳士として誇ると云ふ有様であるに至つては、何と評すべき語もない。公の席上で如何はしき話を耳にすることも普通である。蓄妾といふ樣なことも必ずしも稀なことでない樣である

新聞などで當然何某の妾がどうしたといふ様なことを見受ける。婦人は之れだけに侮蔑せられて居る有様である。職業問題、勞働問題など寧ろ云ふに足らぬ。今も予の家の近傍で建築の地搗をして居る、多勢の婦人の聲を合して歌ふのが聞える。あの内には幼兒の母もあらう、姙婦もあらう、妙齢の處女もあらう、女工の憐れむべき有様は人の頻りに訴ふる所である。婦人を戸外で使役するなども人道の感情を少からず刺撃することである。

●一人一人良くするのが根本

之れで我々は婦人解放論と云ふ様な、婚姻其のものを攻撃する人倫破壊の思想の浮華な人心を動搖せんとするに對しては、消極的に之れを禦止することを努めねばならぬ。共に積極的に現状を改良して、婦人を悲しむべき有様から救ひ出し、人たる所以の榮位を完全に享有せしめ、男女の關係の純粹を維持して人倫の綱常を扶植せねばならぬと思ふ。婦人問題に對する我々の解決、我々の態度は之れでなければならぬと信ずる。之れも皆予が、一人一人の人間を改良し、完全にするのが百事の本である。軍備も完成しなければならぬ、併し一人一人の人間が家族として國民として、人間として、男として、女として、健全に立派でなければその本は立たぬと考へる持論の一端にすぎぬのである。どうも日本人は人と云ふことを重んぜぬ、自ら重んぜず他を重んぜぬことを嘆かはしいことゝおもふ。

> 男女の關係は人倫の大道であり、之を嚴肅にするのが彝倫を維ぐの大綱である、然るに我が國の現在の有様に於ては男女の關係の紊亂して居ること最も甚だしい、少くも男女の關係の重んずべきことの信念の確かなものが缺けて居る、皮相なる西洋觀察者は西洋では男女の關係は極めて緩るいとか、親子の間に孝行と云ふやうなことはないなどと云ふことを放言する、が予は親子の情愛は西洋人と雖も異る所なく、孝道と云ふものは立派に行はれて居ると見、又男女の關係は槪して甚だ嚴肅であると信ずる、西洋のことは兎に角我が國現時の男女の關係の紊亂して居ることは各人皆認むる所であらうと信ずる、目に熟れて居る者は適切に之れを感ぜぬかも知れぬが、偶々以て其の道心の甚だ微なるを知るに足る、一一擧げて之を證明するまでもなく、證明するを厭ふのである、口にするに忍びぬ程に亂れて居ると思はるる。（上杉愼吉）



女の心は淺い

あづさ弓

▲女の心は分り易い

女の心持は何うしても分り難いと云ふ男子がある。併し之と反對に女子の側から云へば、男子の心持が分り難いと云ふだらうと思ふ。要するに個々人間の心持と云ふものが、段々分り難くなつて來たのであらう、單に女から見た男、男から見た女と云ふよりも、人間の心持が複雜になつたと云ふ方が、適切であらう。然うして、男の方が分り難いか、女の方が分り難いかと比較して見れば、男の方が誠に其心持が分りにくいやうに思ふ。

女の心持は分り難いのではなくて、動き易いから、一寸見た處、其表面の變化に驚かされて、眞の心持は何うあらうかと探るのに、困難を感ずるやうな點がある。爾く變化に富み、動搖し易いからと云つて、其底に何ものか存在してゐるやうに思ふのは、矢張買かぶりではあるまいか。變化して行き、動搖してゆくのが女の生命であつて、見えた通りが、矢張僞らぬ女の眞相であらう。してみると、甚だ分り易いではないか。其處に女性らしい外見があつても、技巧があつても、大抵は類型的で、そんなに個性の著しい女は、未だ見當らないやうである。

其處へ行くと、男子は比較的外見をしない、一見甚だ徹底してゐるかの如く見える。わざとらしい技巧を用ゐて人と接しない、腹の底をさらけ出して居るやうに思はれる。其癖いざ眞劍の場合となると、一歩も讓

らぬと云ふ確乎たる自信がある、決心がある。けれども其決心は、不斷必ずしも外に表はれて居らぬ、少しの壓迫や、少しの迫害に驚倒すると云ふやうなことは男子には稀である。だから女の眼から見ると、男子は意外の行動をするやうに見える。それだけ男子は女子よりも、深い心を持つてゐると云ふことは確かであらうと思ふ。

▲淺瀬の波

深い海の水よりも、淺い河の水の方が美しく透いて見える如く、女の心も淺いだけに美しく清らかに見えて、處女の純潔と云ふと、畢竟此の淺瀬に打つ美しい波である。

女心の淺はかなことは昔からも言つてある、今更初まつた譯でもなからうが、如何に純潔を保ちたいからと云つて、淺はかに甘んじてゐるのは女性其ものゝ發展に宜いとは言へない。純潔は尊重すべき處女の美德には相違なからうけれど、同じ純潔でも深くありたいと思ふ。世間が昔のやうに單純ならそれでも關はないが、女も人間として、社會からも相當の尊敬を受けて行かうと云ふには、單純では困る、少しは考へも持つてもらひたい、理性もあつて欲しい。其爲に女の自覺と云ふことが叫ばれ、其爲に高等女學校も多くなり、其爲に婦人問題が世間にやかましくなつたのであらうけれど、吾人一個の眼から見るとまだ〳〵女は淺薄なりと云ふ語を遽に棄去ることが出來ないやうに思はれる

▲結婚の夜の言渡し

或る有名な學者某氏が、結婚の夜に新婦に言渡して曰く『己の爲る仕事はお前に分らないから然う思つて置け』と。之れ甚だ婦人を侮辱した語である、苟くも新婚の夜に、劈頭第一斯う云はれて見ると、新夫人たるもの慊焉たらざるを得ないのである。

恐らく其博士は、日本の婦人と云ふものは、凡てこんなものだと斷定して了つて、劈頭から宣告を下したものであらう。極端は勿論極端に相違ない、覺醒した

女なら怒つて了ふであらう。併し一方から云へば仕事のことは分らないと云ふのは、又尤もな處もあらう。仕事のことばかりでなく、凡てがお前に分らないと云はれゝば、なほ一層の侮辱でもあり、女として、これほど心外のことはなからう。昔の女なら然う云はれても仕方がないほど、自覺をしてゐなかつた。今からの女は、それでは通用しない。

▲日常の心懸も大切

何故、女の心は淺薄であるか、何故女の心持は單純であるか、是を深からしむるには何うすれば好いか、其等は一つの大いなる問題である。女性の歴史的系統から、また體質の系統から、遺傳、境遇、教育など云ふことが、相關聯して女は爾く淺薄になり易いのであつて、一朝一夕に是を深くすることは困難なる事業であるかも知れぬ。

理性の發達の足りないのを、充分に發達せしめるには、教育の力に俟つ外はないが、日常の言行にも根柢を深くするやう、心掛ねばならぬ。例へば物を信ずる力なども、根柢がないと凡てを早く信じて了ふ。昨日信じたことが、今日はもう信じられなくなるやうなことでも、直ぐ信じて行くから、つまり動搖し易いのである。人を信ずることも早ければ、自個を信ずることも早い。批評する眼識や、判斷する力量に乏しいから自然他の言行に動かされ易い、又其反對に頑强と執拗とは、女の氣象の特色であつて、容易に他に移らない點もある。之れ又善きを信じ、正しきを信ずる念が足りない爲め、迷誤に陷るのである。無自覺的に動搖してゐる現代式の女と、無自覺的に墨守してゐる舊式の女とが、わが婦人界の大多數であつて、眞に根柢から自覺して居る女は、寥々として古木の梅の花よりも少いのである。

之れ一に心の淺薄なる爲め、單純なる爲めであつて婦人全體の爲に大いに此點を發展させ、進歩させねばならない。

其結果、個人として能力あるものは、大いに發達もしやうし、世に顯はれもす筈であらう。



生活の程度に應ずべき家政學

實業學務局長工學博士　眞野文二

◎英國で感じたこと

今回吾輩が歐洲を廻つて來たから、日本の女と、西洋の女との比較を話せと云ふのかね、それは無理だよ第一國情が違ふ、歷史、境遇、體質、服粧、何から何まで違ふのだから、比較してみたところが、餘り役に立つ話もなからう。それよりも、女子の教育に就いて感じたことを述べてみよう。

そこで今回我輩が歐米を見物して來たことに就て何か言へと言ふなれば先づ我輩が感じたことを話さう。一番感じたことは西洋、殊に英國の女子教育に於てドメスチック、サイエンス則ち家政學の進步して居ることである。此話をする前に斷つて置かねばならぬことは、視察と言ふことの困難なことである。我輩が英國へ行つた時、或人は英國を視察して日本へ歸り、土産話をするなれば一週間以上滯在すべからずと言ふた。此言葉は非常に意味のあることで、若し一週間以上英國に滯在して居ると、漸次英國の國情が分つて來る。英國の國情が分つて來ると、分つて來れば來る程英國の國情が分らなくなる、從つて日本へ歸つても土産話がなくなる譯である。英國の國情を實際に知つて、眞實の土産話を持つて歸るには如何しても一年以上は英國に居らねばならぬのである。であるから我輩は實際分つて居ることでないと話はせぬ、英國の家政學のことは實際を見て來たことで、これなれば御話してもよいと思ふから話をする。

◎味噌汁の加減や澤庵の漬方

英國の女學校で、家政學を生徒に敎へるには、實用と言ふ點に餘程注意をして居る。日本の女學校では、如何も實用と言ふ點に注意が足らぬ樣である。一例を擧げて言へば、生徒に料理を敎ふるにしても、日本料理より西洋料理に重きを置て居る樣である。味噌汁の作り方や澤庵の漬方は敎へないで、オムレツや、フライの製法を敎へて居るが、さて斯う言ふ敎育を受けた女學生が、家庭を作つて如何するかと言ふと、日々必要な澤庵の漬方も知らなければ、味噌汁の加減も碌碌出來ないくせに、やれビフテキが如何の、オムレツが斯うのと騷いで居る。然し學校で習ふた通りにするには、瓦斯も引かねばならず、洋食鍋も要れば、洋食皿も要ると言ふ樣に、却々輕便には出來ない。斯う言ふ贅澤なことが出來る身分になれば、何も自分で西洋料理を作る必要もなからう、自分で臺所を働いて三度の食事を自らせねばならぬ世帶では、西洋料理なぞで騷で居る譯に行かぬ。自ら澤庵も漬けねばならず、味噌汁も自分でこしらへねばならぬ、ところが斯う言ふことは學校で習ふて居ないと言ふことになると、學校へ通ふたことが何の役にも立たぬ。これでは敎育した學校も甲斐がなければ、勉強した生徒もつまらぬ、其責任は何人にあるかと言ふと、言ふまでもなく女子敎育者に在るのである。

◎直ぐ役に立つ家政學

英國の女學校では、決して日本の樣な實用に向かない敎育はして居ない。學校では先づ生徒を三級に區別して居る、上流社會の者を一級とし、中流社會の者を二級とし、中流以下の者を三級として居る。何を標準として區別して居るかと言ふと、納税を標準として區別して居る、納税幾等までの者は三級、幾等より幾等までの者は二級、幾等以上の者は一級と言ふ樣に納税額に依つて區別して居るのである。生徒に階級を作ることが、果して善いことか惡いことかと言ふことは別問題として、斯う言ふ風に階級を別けて敎育するから日本の樣にピヤノを買ふことの出來ない者が、ピヤノ

を習ふたり、自ら料理などする必要のない身分の者が料理を習ふ樣な不自然はない。上流社會の者には、上流社會の家庭に必要な家政上の知識を與へ、中流社會の者には、中流社會の家庭に相當した家政上の知識を與へ、又中流以下の者には中流以下の家庭に應じた家政上の知識を與へる樣にして居るから、學校で學むだことが、直ちに各自の家庭に應用して、直ぐ役に立つ樣になつて居る。元々家政學と言ふものは、空論を學ぶのでなく、實際に用ひて役に立つことを學ぶのが目的であるから、苟も家政學を敎へると言ふ以上は英國の女學校の如く、其まゝ家庭に應用して、直ぐ役に立つものを敎へるのが當然であらうと思ふ。

◎風味よりも成分

斯う言ふ樣に英國の女學校では、專ら實用的の敎育を施して居るから、學理の方は閑却されて居るかと言ふと、どうして閑却されて居るどころでない、最も深く研究されて居る。少しも空論に走らず、實際的に研究されて居るのである。例之料理を敎へるにしても、單に風味を研究するばかりでなく、身體の營養と言ふことに重きを置て居る。食物の用は身體の日々消耗して行くのを補充するだけでなく、身體の發達に要する物質を供給するのが目的であるから、唯甘いものを食ふだけでは何の役にもならない、身體の消耗して行くものを補ふに有効な食物を採らねばならぬ。それには一々食物に含むで居る成分を研究して、斯う言ふ體質で斯う言ふ職業に從事して居る者には、斯う言ふ成分を含むだ食物を與へねばならぬと言ふことを研究して居る。英國は固より米國でも斯の如き方法を以て敎育して居るから、或る米國人が我輩に斯う言ふことを言ふた。米國人の體格が改良されて、段々體格が好くなるのは、女學校で料理法を敎へる際に、注意して食物の成分を研究するからであると言ふて居る。食物の選擇に依つて、人間の體格の好くなるのは全く事實である。同じ一圓の金を以て料理をするにも、此方面の知識があれば、割合に滋養のある物を食ふことが出來る。

日本でも料理を敎へるなれば、單に風味の好い物を作ることを敎へるに止らず、人間の成分に必要なる食物の成分を敎へて、英米同樣人體改良の原因となる樣にせねばならぬ。

◎生徒が買物に行く

英國の女學校で家政學を敎へるには、以上陳べた通り、實用的で、そして生理的であるのみならず、又經濟的である。日本の女學校ではオムレツや、フライの製法を敎へても、其オムレツの原料は何所で買ふて幾等するものかと言ふことを敎へぬから、西洋料理が上手になつても、其製へた物が西洋料理屋より買ふのと孰れが安いか高いか分らぬ樣では、何の役にも立たぬ。家政學として料理法を學ぶのは、道樂や慰みにするのではない、料理屋から取るよりも、自分が製へた方が、安價に出來て經濟だと言ふので稽古をするのである。それに原料の直段を知らさない樣では、家政學の目的は達せられない。英國の女學校では、料理を敎へる時には、其原料を一々生徒に買ひにやる、生徒は成るべく品の好いものを、安く買ふて敎師に褒められやうと、一生懸命に好い物を安く買ふて來る。斯う言ふ風に敎育して行けば、料理を一つするにも、一々代價を知つて居るから、一家の主婦となつても、經濟的に家政を執ることが出來る。のみならず日用品を買ふに就ての經驗を得て、好い物を安く買ふことが上手になるから、自分で家庭を持つた時に、どれ位ゐ學校で習ふたことが役に立つか知れぬ。今一つ日本の女學校にないことは、卒業生の實習である。英國の女學校では學校の構內に幾軒も家があつて、家政科を卒業した者は、一週間が間此家に住むで實地に家政を執つて見るのである。毎日敎師が御客に行つて種々注意を與へることになつて居る、一週間此家で實地に家政を執つた上で、初めて卒業證書を貰ふのである。

先づ以上のやうなもので、西洋の家政學と、日本の家政學とは、だいぶ相違がある、彼我參酌して、吾國の家政學も進歩させねばならぬ。



人間の先祖

理學博士　石川千代松

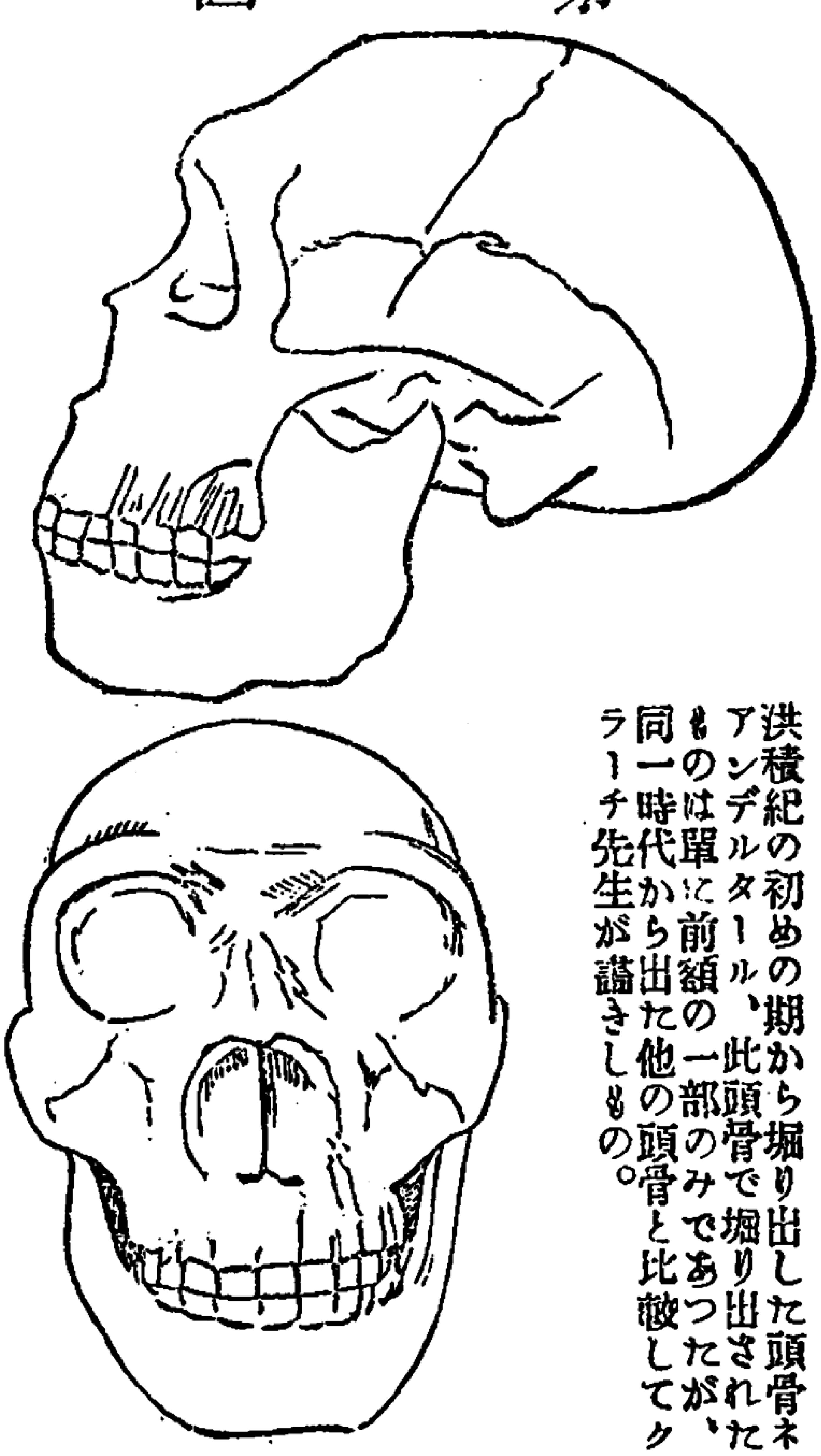
アダムとエーバとの話は誰れも能く知つて居る話ですが、彼れは本統の子供だましで別に證據も何にもないものであります。併し我々人間も一度は此の世上に出來たものであるには相違ない。處が我々は何時頃又何れの地に於て此の世界に現はれたものであるか、又其の最初に出て來た人間は如何なものであつたかは、我々今日の人間に取つては最も面白い問題であります疑問中の疑問、問題中の問題、人間として生れ來たものは其の種、其の職業を問はず誰れも知らなくてはならぬ所の問題は、卽ち此の最初の人間と云ふ問題であります。

地球上何れの地に於て人間が始めて現出したでありませうかと先づ問ふて見たら、誰れも皆熱帶地方であるだらうと答へるでせう。之は高等な猿猴類は今日皆熱帶地方に居るのであるからで、人間の先祖も定めし同樣な地方にあつたものであるだらうと思はれるのである。處が人間が始めて此の世に出て來た時分には地球の有樣が今とは餘程變つて居たのである。此の變つて居たと云ふのは今日のシベリア其の他歐洲の全土が大層暖かであつた時があつた。此の樣な時は固より今から何萬年前であつたか知れないが、今では雪や氷で全く蔽はれて居る、グリンランドかアフリカの如き時があつた。其の頃には今の英國、ドイツ、フランス等より遙か北方のスカンデナビア、フィンランド、シベリア全地に獅子、虎、犀、河馬の樣なものが棲んで居たのである。之れは地質學者が第三紀と名づけて居る時の終

りであつて、其の後第四紀即ち洪積紀になつて其の始めには彼の有名な氷河が北極の方から流れて來て、歐洲とアジアの大部分は之れに蔽はれたのである。其の時には禽獸は無論陸棲生物は殆んど皆南方に逐はれたのである。後又此の氷河は逐次に去つて遂に今日の有樣となつたのである。夫れであるから北半球は第三期の頃から今日と同じ樣な有樣であつたものではない。今日より遙かに暖かであつた事もあるし又大層寒かつた事もあるして此の寒かつた事も亦暖かであつた事も一度でなく數度であつた樣である。

吾人の先祖が之れ等氷河時代の前に既に此の地上にありしものである事は、今日既に疑を容れざる處の事實である。之れは洪積紀の古い處から出た幾つもの人骨で明かに證明されて居る。此の樣な人骨は千八百五十六年にドイツ國ライン河畔のネアンデルタールと稱する處にて發見せられ、後ジブラルター、ベルヂウム、フランス等に於て又之れと同じ樣なものを發見したが、之れ等は皆古い洪積紀に屬するものである。であるから洪積紀の始めに人類が既に生活して居た事は確な事實である夫れであるならば、此の時分の人は何んなであつたか。第一圖に出してあるのが此のネアンデルタールの頭骨で其の鼻以下の顏面部が猿の樣に前に突出して居る事、其の下顎が突出して居らぬ事、其の鼻腔が前方に向いて居る事、其の眼腔が大きくて眼の上にある骨が高く隆起して居る事等は、此の頭骨に於ては著しい點であるが、其の他下肢の

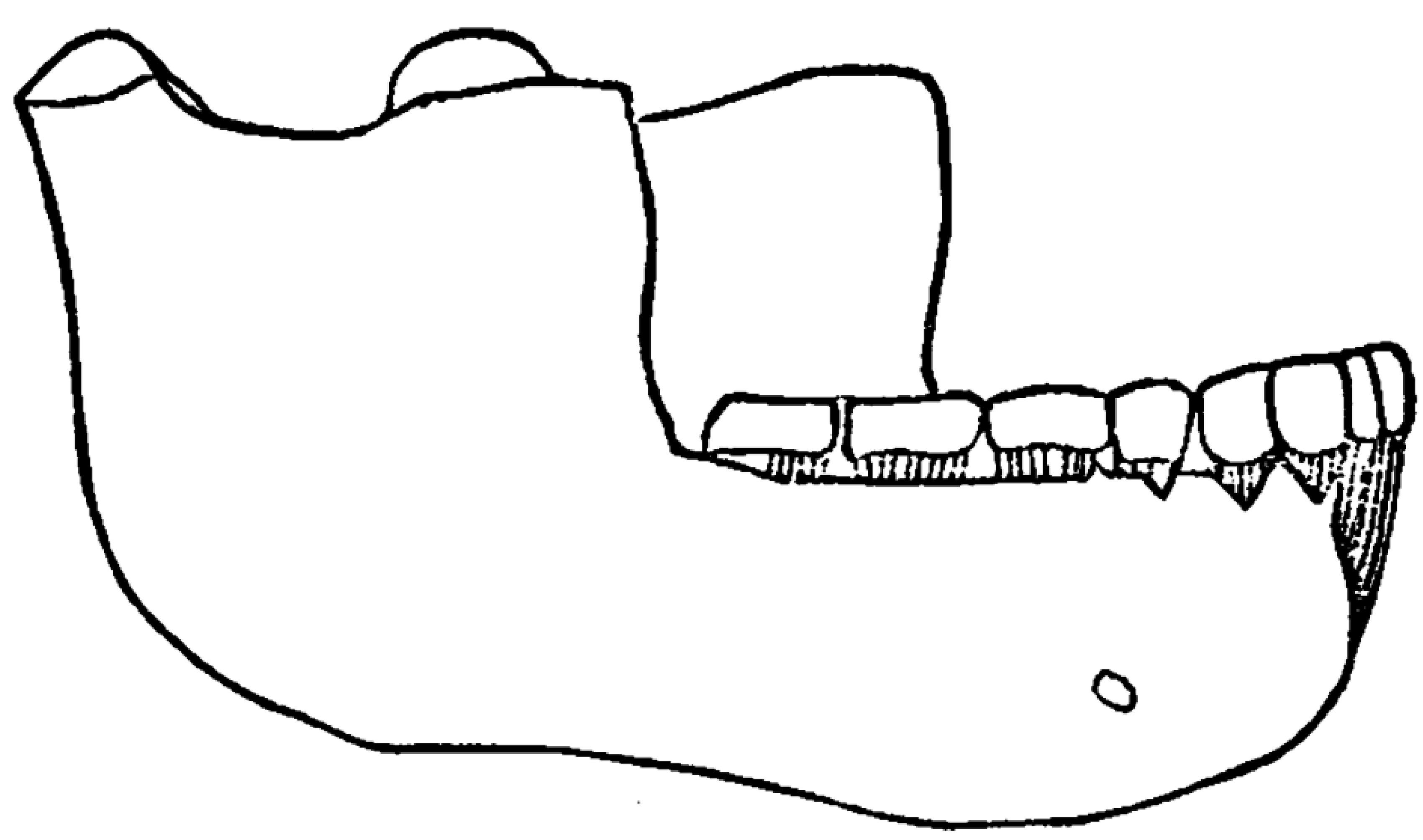
第一圖



洪積紀の初めの期から掘り出した頭骨ネアンデルタール、此頭骨で掘り出されたものは單に前額の一部のみであつたが、同一時代から出た他の頭骨と比較してクラーチ先生が畫きしもの。

骨の發見せられたものに依つて判斷する時は、此の太古の人は今日の人間に比ぶれば、高等の猿猴類に似たものであつた事が明かであるとは、動物學者、人類學者等が一般に主唱する所の說である。然し此のネアンデルタールの骨が最も古い人骨ではないのである。三年前に之れもドイツのハイデルベルヒ附近で發見された下顎骨(第二圖)は、之れより遙かに古いもので、唯一個の下顎骨ではあるが、全く人骨であるのは誰れも疑はない事である。して此の骨は或は第三紀の終りに屬するものであるかも知れないのは、其の之れと一緒に掘り出した馬や犀の骨は全く第三紀のものであるからである。然し若し之れが第三紀のものでなくとも、第三紀が洪積紀に遷り行く處の地層に發見せられたものである。であるから今日迄の處では此の骨が一番古い人骨であれば學者の注意をひいた事も固より甚だ多いのである。

第二圖

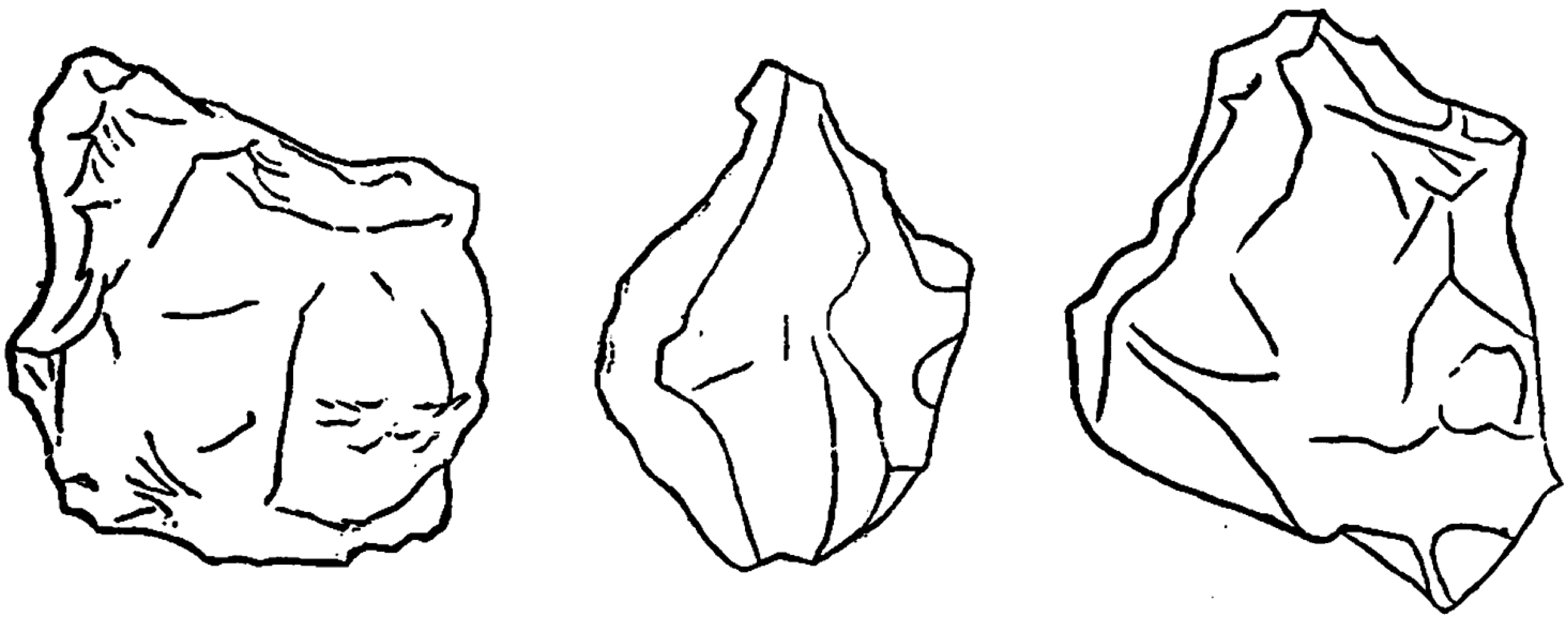


第三紀の終りの地層から出た下顎骨

小生が一昨年の暮ハイデルベルヒに、此の骨の發見者なるショーテンサック氏を訪ふた時にも、名刺を下婢に渡して待つて居たら、先生は直ぐに此の下顎骨を持つて來て、貴君は定めし此の骨の爲めに御出になつたのでしやうと申されて色々說明して呉れた。此の位の珍物であるから專門家でない小生の樣なものが見ても甚だ面白い。何處が面白いかと云ふと、第一に此の下顎骨は非常に强大であつて、其の顋の下の處はゴリラに能く似て居て、其の後方の上部はギボンに彷彿である。であるから「此の顎骨計りを見れば、專門家でも、之れが人間の骨であると云ふ事を少し躊躇するであらう」とショーテンサックも云ふて居る。夫れならば何を以て之れが人間の骨であるかと問ふと其の齒で之れを證する事が出來るのであると云へる。一體の人骨の齒は實に見事なもので、其の併列の具合

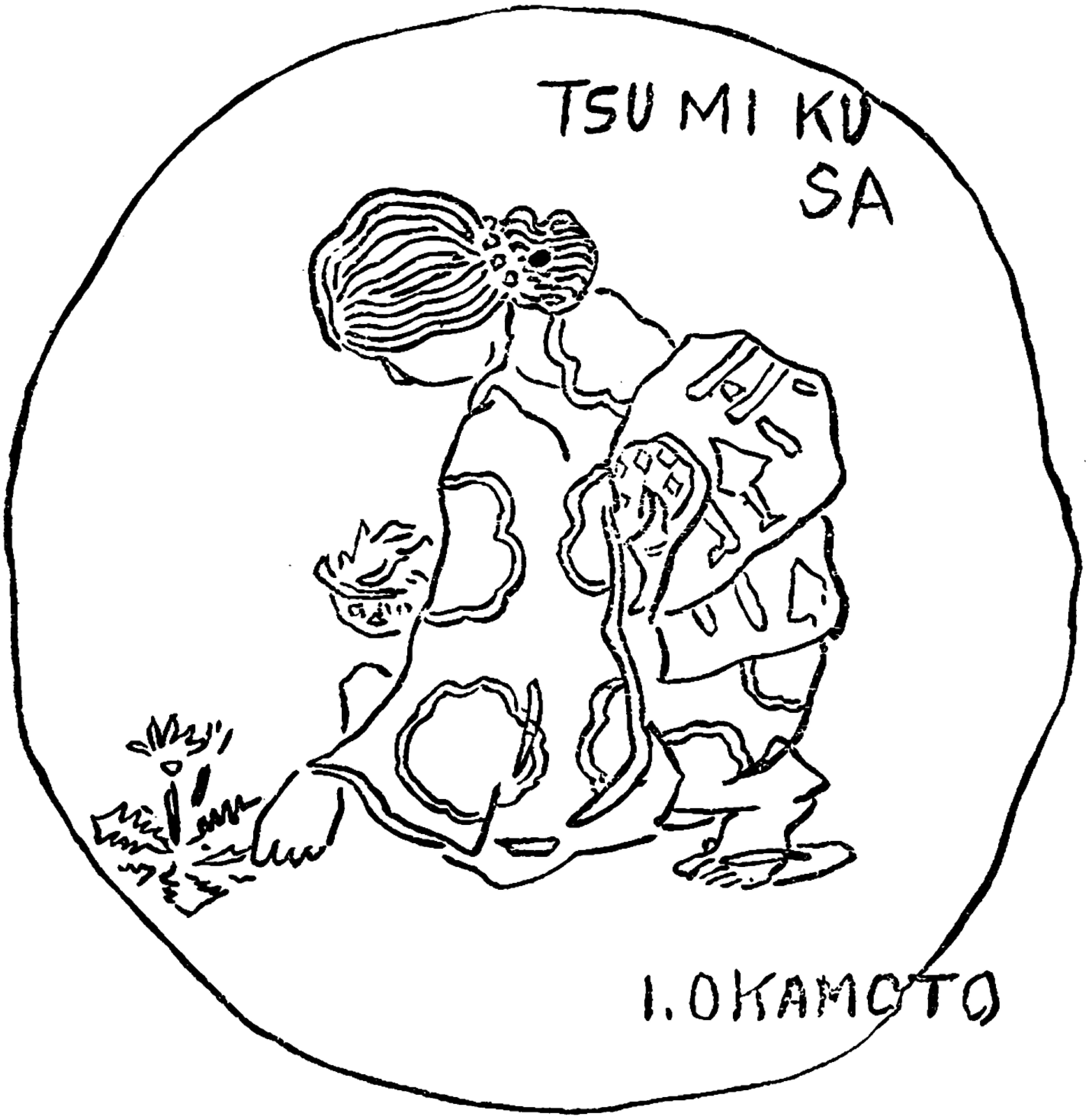
と云ひ、其の犬齒の小なると云ひ、少しも疑ひのない人間の齒であるから若し此の人の頭蓋骨や四肢の骨等が出て來たならば夫れこそは實に面白いものであるだらう。此の樣なものでなくても前に云ふたネアンデルタールでも實に面白いもので、其の後肢の骨が高等の猿猴類に能く似て居て殊に膝關節はサルの夫れと少しも違はないと云ふ然し今のハイデルベルヒの骨が始めて此の地上に出た人間の遺物ではないので、之れより又遙かに前の中世紀の中頃にも佛國から極粗製の石器（第三圖１）が出たので、其の頃既に人類が居た事が分るのである。然し之れ等が眞に人類が造つたものであるか否やと云ふ事は或は之れを疑ふ人もあると思ふが、此の石器を僅かに三四十年前迄タスマニア人が使用して居たもの（第三圖２３）と比べると、其の人工で出來たものであると云ふ事が分るのである。夫れならば之れ等の人間が居た時分は何年位前の事であつたか。之れは甚だ困難な問題であるが、專門家の說に依るとネアンデル人は今より二十五萬年も前で、ハイデルベルヒ人が之れに又二十五萬年も加へたものであるだらうとの事であるして見ると、之れより尙ほ一層前に石器計りを殘した人は、之れに又何十萬年を加へたものでありませう。何んにせよ人類が始めて此の地上に出て來た時は實に古い事であつて、又之れ等の人間は西洋の繪畫にある樣な立派なアダム、エーバではなくて、今日アフリカ、アジア等熱帶地方の森林中に棲住するチンパンジー、ゴリラ、オラングウータンに近いものであつたであらう。

第三圖



（１）　（２）　（３）

(1)フランスの第三紀中頃の地層から出た石器
(2)(3)タスマニア人が近頃まで使用して居た石器



つみくさ

枯野の下から春が來た
わか〳〵しい
うすみどりの草が
生へてきた
うひ〳〵しい
うすむらさきの
芽が
土のくづれから
空にあらはれて來た
見よ
鳥は啼いてゐる
日の光はやはらいだ
遠い山々の雪が
今朝は少くなつた
野よ、よみかへれ
若草よ
春の初草よ
つむほどに
またつむほどに
生へよ、萠えよ、春の空に

S N

翫賞すべき日本の舞踊

理學博士　田中正平

日本の踊とか舞とかは、舊くから發達して來たゞけに、世界に類を見ない好い處があります。

元來西洋の舞踊は、美術的のものと、遊戲的のものと二つあつて、美術的のものは、芝居の舞臺で踊るのだから、役者に近い、其服粧も、例へば肉襦袢を着るとか、半裸體になるとか、之は一寸普通の人には出來ない。遊戲的のものは誰でもやる、日本でも所謂舞踏と稱して一部には行はれてゐるが、此も日本の服粧、日本の風俗に適しないやうに思ふ。舞踏を不可いと云ふのではないが、それよりも日本在來の舞とか、踊とかを發達せしめた方が、遊戲としても結構なものになるだらうと信ずる。

芝居も、もつと廣く行はれて宜いと思ふが、芝居となると、然う簡便に行かない處もあるし、男の役は男がし、女の役は女がすると云ふことになると、例へば戀愛のことなどを演ずるにしても、少し都合が惡い。餘り吾々の日常生活に接近してゐるだけ、遊戲としては都合の惡いことがある。踊は必ずしも然うでない、婚禮其他の目出度い席は勿論、何かの宴會とか、集會とかの餘興にも至極適してゐる。或は又藝人を招聘んでやらせると云ふこともあるが、然う云ふ席へ藝人を招聘といふのも考へものであつて、集つた婦人の間に之が行はれたら、一層餘興の意味に適ふであらうと思ふ。集會があつても、今の日本の集會は甚だ寂しい、懇意な婦人同士とか、男子同士とかゞ、彼方に四五人此方に五六人と、一團になつて、こそ〳〵と話をする

位で、何となく物足らぬやうで寂しい。若し集つた人達の間で、舞踊でも出來たら至極其席を賑はすに足るであらう。

又、家庭の團欒と云ふことも、只團欒してゐるだけでは、冗話をする位なもので、それも毎時面白いと云ふ譯ではない、團欒と云ふものゝ其實まだ日本の家庭團欒は淋しいのである。玆で若し娯樂として、舞踊でもやることが出來たら、其單調を破りて、賑かな家庭とすることが出來やう。

日本の舞踊は歌が野卑だと云ふ説もあるが、歌は何うでも直せる、舞踊其ものゝ中に好いのがあるので、あの盆踊のやうなものでもなか〳〵面白く出來てゐる私の宅でも集つて行つて見たが、何うして盆踊でも大いに興があつて面白い。

西洋の舞踏を其まゝ今の日本に移しても、何うも變な工合になる。日本人の舞踊には、日本在來の舞踊の方が、ずつと藝術的である。舞踊の効用と云ふのも可笑いが、第一に日本の婦人の氣象を表はし、第二には日本の婦人の體格に相應するやうに姿勢を正しくする上に、第三には運動上に、此三つの點から見ても舞踊は大切にせねばならぬ。一にも二にもハイカラを欣ぶ人達には顧みられないかも知れぬが、此の如く好い舞踊が、餘り世間に行はれないと云ふのは、舊いものは習ふのにむつかしいと云ふ點もあらうが、他にまだ大いなる原因がある。

それは外でもない、踊なり舞なりを習ふ上に都合の不良い組織が出來て了つたので其組織を改めない以上は一般に行きわたり難からうと思ふ。先づ舞踊を習はうと思へば、師匠に就かねばならぬ、處が市中の踊の師匠と云へば、近所の蕎麥屋の娘も行けば、天麩羅屋の娘も行く、藝妓も行く、未だ其外に俳優も習ひに行くと云ふ工合で、斯う云ふ種類の人達と一緒に習ふと云ふことが、何うも一般の家庭では許されない。それのみならず、師匠とか、家元とかでは、折々舞踊のお浚ひをやる、それが又決して藝の爲ばかりでなく、自家を吹聽する爲とか、出入する者の爲とか、そんな事

で成立つので甚だ弊害がある。又お浚ひに出す爲に、娘の親は衣裳の競爭をする、之がまたなか〳〵烈しいので、一度のお浚ひに二千圓使つたとか、三千圓使つたとか、多額の費用を掛けることが一つの誇りとなつてゐる。

此等の組織を改善しなければ舞踊は社會的になるまい、舞踊其ものは好いものであつても、之を習ふ機關が不可のである。例へば女學生どうしの話でも、あなたは何をお習ひです、私はヴァイオリンを習つてゐますと云へば甚だ他聞が良い、いや私は舞踊のお稽古をしてゐますと云へば、まアあなた舞踊のお稽古ですつてと、一種冷嘲の氣味を以て見ると云ふ風が、今の所一般の狀態になつてゐるから、何うしても此の組織から改めてかゝらねばならぬ。

組織が善く出來て、偖て舞踊は何の舞踊の風を撰擇すべきかと云ふことになれば、それは又一つの問題である。舞踊には流派もあれば、相違もある、又人各自好む處に據つて、好き不好きもあらう。各自好む處を擧げて、一つの輿論として、新しい舞踊を興しても可からう。

私は東京の踊より、上方の舞の方が好いやうに思ふ東京の踊は少し芝居に近い、何うも踊臺でやるものらしいが、上方の舞はお座敷で踊るのに都合好く出來てゐる。能の舞――仕舞なども不可はないが、此も大人のすることを女の子がしてゐるやうで、情味が映らない、やはり舞踊に越したことはない。

要するに、見る藝は別として、見て貰ふ藝、自ら行つて樂む藝として、芝居は餘りに實生活に接近しすぎるから、舞踊を取るのが尤も好い。而して先づ上流社會から、之を行ふやうにして、一般に推奬して行き、習ふ上の組織も善く改まれば、世間に行はれるに相違ない。社會に行はれるべき方法が宜しくない爲め、餘り注意を惹かなかつたが、行はれるやうになりさへすれば、私は日本在來の舞なり踊なりの中に、宜いものがあると云ふことを毎でも斷言して憚からないのである。



女の乳房は装飾品にあらず

濱田病院婦人科主任ドクトル　辻　高　俊

☆乳房は邪魔物でない

女が最も心得違ひをして居るのは、乳房の取扱ひである。如何なる女でも乳房は、それほど大切にして居ない、殊に未婚の婦人に至つては、乳房を大切にしないのみならず、恰も不用物の如く、邪魔物の如くに持て餘して居る。と言ふのは女と言ふものは先天的に美を好むもので、美を好むと言ふことは、美しい物に接し、美しい物を見、美しい物を得ることを好むばかりでなく、自分も亦美しくして、他に美しく見せやうと言ふのである。美は女の生命であるから、天質美しい者は、愈々美しからんことを望み、醜く生れた者は何とかして美しく見せたいと言ふのが、情である。女が自分の容貌を美しく見せやうとする結果、勢ひ乳房は虐待されるのである。乳房は決して装飾の爲めに附て居るのでないから、乳房の大きいのは形の上から言つて決して見よいものでない。だから大抵女は乳房の大きくなるのを厭ふて、處女の時分から襟で押へたり細帶で締めたりする。成程美を好む女の性質から言へば強ち無理ではないが、然し女は一面美術的であると同時に一面實用的である、人生の花として世の中に生れたと同時に、人類繁殖の義務を帶びて生れたのである。

☆中流以上の婦人の乳房は發達不完全なり

人類繁殖の義務を持つた女は、何は扨て置いても其義務を果すに第一必要なる乳房を粗末にしてはならぬのである。自分の姿を好くする爲めとは言へ、此大切なる乳房を虐待するなぞと言ふのは以ての外の心得違ひである。殊に近頃中流以上の女の乳房を見ると、完全に發達したのが少ないのは、斯う言ふ誤解から乳房を虐待する人が多い爲ではなからうか。下等社會の女になると、姿なぞを構ふて居ないから、自然乳房も虐待しないと見えて、比較的完全に發達して居る。乳房を虐待して完全に發達させない女と、乳房を大切にして完全に發達させた女と、如何いふ點に利害の關係があるかと言ふと、乳房が完全に發達して居なければ、嬰兒を産むだ時に乳が充分に出ない、嬰兒を持つて乳が出なければ、我子を自分で養育することが出來ぬ。乳房が完全に發達して居れば、乳が充分に出るから嬰兒を養育するのに少しも心配が要らぬ。女の天職を果すと果さぬとは、一に乳房の發達如何に依るのであるから大切にせねばならぬ。

☆母乳の上越すものはない

斯う言ふと反對論を唱へる人があるかも知れぬ、乳が出なければ牛乳を飲す、又牛乳でもいかぬとなれば乳母を雇へばよいと言ふ人がある。斯う言ふことを言ふ人は殊に上流社會の人に多い。上流社會では、西洋の婦人を眞似て假令乳が充分に出ても、乳を嬰兒に飲ますと、自分の容色が衰へると言ふて、殊更牛乳や乳母で嬰兒を養ふて居る人があるが、これ等は女としての義務を盡さないのみならず、母としての責任も果して居ないのである。嬰兒の死亡率を調べて見ると、生母の乳で育つた者と、牛乳や乳母で育つた者との間に、非常な相違がある。則ち生母の乳で育つた嬰兒には死亡が少なく、牛乳若しくは乳母で育つは嬰兒に死亡が多いのである。此恐るべき統計に依つても、母の乳が嬰兒に如何に必要であるかと言ふことが分る。從つて女の乳房が女に取つて、如何に大切なものかと言ふことが分らねばならぬ。この大切なる乳房を虐待し

て、如何に姿を美しく見せたいからと言ふて、子孫の生命ともなるべき乳房を粗末にするのは、心得違いも甚だしいと言はねばならぬ。

☆西洋の女を眞似るに及ばぬ

西洋の女は乳房を大切にして居るかと言ふと、あれだけ敎育の進むだ所にも似合はず、矢張り粗末にする者が多い。殊に中流以上の女になると、自分の產むだ嬰兒にも、乳を與へると容色が衰へると言ふて、嬰兒には牛乳を與へたり、又乳母の乳を與へたりして居る。西洋の女は乳を嬰兒に與へると容色が衰へると言ふ理由の外に、今一つ嬰兒に乳を與へない理由がある。それは外でもない、遊ばなければならぬからである、體よく言へば交際の爲である。西洋の女は交際と言ふ口實の下に、遊び廻つて居るのであるから、嬰兒が出來ても、嬰兒に乳を與つて居る樣な殊勝な女は少ない、然し斯う言ふ善くないことは、決して眞似する必要はないのである。女は何所までも乳房を大切にして、其發育を妨げない樣にせねばならぬ。

☆乳房の活動期

乳房は乳の出るところで、嬰兒を養ふ大切なものであると言ふことは、今言ふた通りであるが、さて乳房は如何して乳が出る樣になるかと言ふと、姙娠すると乳房の中に在る乳管が膨脹する、乳管が膨脹すると、恰度葡萄の實の樣に、幾個もの乳管が丸くなつて居るその乳管から分泌する乳が乳首から出るのである。乳の分量の多少は、必ずしも乳房の大小に依るものではないが、然し乳房の大きいのは、如何しても發育が好いのであるから、乳房の小さい女よりは好く乳が出る。

上流社會の女は、どちらかと言ふと、乳房の小さい人の方が多い、これに反して下流社會の女には、乳房の大きい女が多い、これは如何いふ譯かと言ふと、天質もあらうけれど、體格の善惡に依るのである。下流社會の女は、運動が劇しいから、如何しても體格が好い、從うて乳房の發育も好いから、自然乳房も多きく

なるのである。上流社會の女は運動が少ないから身體の發育も、下流社會の女に比して好くない爲、乳房も大きくないのである。乳が出る出ないは、乳房の大小や體格の如何にも依るが、又姙娠中の心掛にも依るのである。下流社會の女は、姙娠して居るからと云ふて何も仕ないで居る譯に行かぬ、産褥に就くまで働かねばならぬのだから、反つて産も輕く、乳も好く出るが上流の女は姙娠すると、半病人の樣になつて何事もしない、それが爲、運動が出來ないから時には難産をしたり、假令産は輕くとも、乳が充分出なかつたりするのである。姙娠中は餘り過劇な運動は好くないけれど全然何もしないと言ふのは好くない、矢張適當の運動は是非ともせねばならぬ。

☆出ぬ乳の手當

産婦に乳が出ないと、味噌汁を飮ましたり、餅を食はしたりする習慣があるが、これは餘程考へものだ。壯健な身體なれば好いが、産褥に居る産婦は病人も同じことであるから、不消化な食物を與へるのは好くない、それが爲病氣を惹き起す樣なことがあるから注意せねばならぬ。斯う言ふ時には、物を食うたからとて俄に乳の出るものでないから、アルコールで乳首を拭て置くと、その刺戟で幾等か乳が好く出る樣になる。又乳を揉す人があるが、これは絶對に惡いと言ふ譯でないが、餘程乳揉を選擇せぬと、反つて揉むだが爲に乳房の痛む樣なことが起る。東京で信用の出來る乳揉は、僅に二人位よりない。要するに女の乳房は、女に取て最も大切なもので、決して裝飾品でないから、何所までも大切にせねばならぬのである。

人乳其他の成分（百分比例）

	蛋白質	脂肪	糖分	鹽類	水分
人乳	二・八一	三・五六	四・八二	〇・二一	八八・五〇
牛乳	三・九〇	三・五〇	四・六〇	〇・七五	八七・二五
山羊乳	五・〇〇	四・八〇	四・〇〇	〇・七〇	八五・五〇
羊乳	六・三〇	五・三〇	四・六〇	〇・六〇	八三・〇〇
驢乳	二・〇一	一・二六	一・五〇	―	九一・二〇
馬乳	一・九〇	〇・六〇	四・八〇	〇・四〇	九二・三〇

十分間

兒玉花外

原稿が書けないので、頭腦でもハッキリさせやうと、横町の床屋へ私は入つた。

人間の頭臚を取扱つてゐる所だけに、床屋の室内には、種々の色彩の繪額寫眞、理髪用の銀色の美しい器具やら、雨のやう絶えまない香水の匂は誰でも刺激を受ける。

初冬のおそろしく晴れた午後、透徹る如な巨鏡に對ひながら、靜念に居る心持は何に譬ふべくも無い。

世間の何物をも見ず眤と目を瞑つて、頬に强鋭な薄い剃刀を當てられるとき、私の鋭い神經は剃刀の光に刺戟を得る。プラチナのやうな綺麗な昂奮を覺える。

ぽーッと薄赤うなつた皮膚に、しづかに撫おろす剃刀の快よい官覺……會〻瞳の前にキラ〱する薄い刄の下で、絲のやうに纖う尖つた神經で空想に耽る味ひ椅子の上も夢幻的の極樂がある。

又の横町で、飴賣がチヤルメラの笛を吹いて居る。其の物哀しい、なつかしい甘味のある音が、街道をわたる冬の冷い風が持て來るのか、長く響が床屋の店へ這入つてきた。

私の瞼から涙がにじむで來た。ねむつた樣に爲てゐると、奥の奥の暗い方に——永く還らぬ故鄕の山や街が見え、自分が小童であつた姿影が繪のやうに動いてゐる。あの山越えて、山踰えて、今もなほ遙か境界も知れぬ詩の國へ漂泊ひ行く樣で、理髪師の手の剃刀の刄をば泪で濡らした。

笛の淋しい音が、明鏡の底へ消える。と、鏡面に、にぎやかに果物が並んである、向ふは青物舗だ。

黃色なのは、柿、蜜柑、赤い林檎、青い葡萄、バナナは絲で吊したまゝ映つてゐる。悉く現在實物と遠い

心地がする。
八百屋の娘の白い顔が現はれた。店に立つて何か物を言つて居る、眼の表情が極めて好い。銀杏返しの髪の耳朶へかゝつた毛迄も、鏡の女は眞のローマンチックだ。
秋に熟れた果物と、若盛りの女、兩方とも生命が有つて色も滿ち〳〵してゐる。冬の白日の白い葱にも刺戟性をおびる。
私はいつか、此娘が手に太根一本もつて、得意先へ往く振りを町の曲角で見た。口には唱歌らしい物を低く唄ひながら、私の顔と出會ふた。妙齡なのにきまりが惡い容子もせず、すました顔してハッキリした咋で行過ぎた。
友禪の袋にバヰオリンでなく、可笑しくも太根擁へて唱歌して行く女！東京の都會の眞中にも恁んな無邪氣な、變な風な御愛嬌の若い女がある、……文明が都會で產落した若い女、而し私は寧ろ可憐な自然兒と思つた。

私の空想は朦朧と、巨鏡の面一パイに擴がつて行く。
床屋の椅子の上は安樂だが、世間は忙はしいとみえて、女達は別にチョコ〳〵として歩くのが鏡に映る。
十一月、日暮前の女の姿は憎いほど美しい。短かい薄赤い太陽が沈まうと爲るでもなく、冷かな光線が、女の肌理の細かい白い横顔に滑べる時、綿入の餘り厚くないふつくらとした女房振り可愛いく、髪までが黑い油色に艶を帶んでくる。若し絶世クレオパトラの樣な美人であつたら、必と初冬の夕暮には爪の先から頭髪の端迄で、妖艶と凄い魔氣を潮したであらう。
西洋の市場で裳長の家妻達が買物を爲るやう、前の青物店へ細君自身の姿がしなやかに運ばれる。
剃刀の刄よりか鋭い、こまやかな私の神經の想像力は、益々活潑に劇しく廻轉する。
古から詩人の想像の力は、時とすると菜葉より青く弱く、甚だ安價な趣も有るけれど、其處にも不朽な黃金の如な生命が含まれる。ウオーズオースの詩の節、ミレーの畫には此の貴い眞理を敎へてゐる。

併し自分の空想は、舗に轉がる日ませ林檎程に、色も實もない、儚ない夢のやうなもので有らう。すると、鏡――稍や薄蔭が射してゐる面に、私の見知越しの後家さんの影が過ぎつた。

身體の痩ぎすな、華奢な三十をこした許しの若後家さんは、私の家の眞裏に住つて居る。婆様の獨身者と、二階は自炊する書生に貸して居る。

彼の女は、大へんな手足のまめな婦で、朝から暮れる迄、洗濯物から掃除から、廣くもない家の內や庭で、恰ど南京鼠の樣にくる〳〵仕事の爲詰でゐる。でなければ、例の表三疊を借る婆さんと饒舌つて居る。何でも自個計りを考へてゐる强情な女である。

二階の二間に居る學生は、時代後れの明笛なんか吹弄んで、折々夜半までも放言壯語に暮してゐる。

私達の家を高くから見卸してゐる杉の大木の頂で、鵙がキイキヽヽと大膽な高鳴きをする早朝、二階と下とで喧嘩が始まつた。書生の後家さんを莫迦に爲たやうな、生溫るい笑ひ聲が聞こえて來る。

後家さんは手狹の庭先で、梧桐の黃んだ落葉を堆く焚してゐる。白い煙が二階の手摺の方へ立昇る。

威勢のいゝ彼女は着物は派手好みで、聲の調子は非常に豐かな肉聲だ。今歲の夏の土用干の折りに、赤裏地の衣服がヅラリと書生の部屋の手摺に懸列ねられた丁度梅雨の濕り氣の天氣具合で惡どい赤い色が、嫌やに濃艷に二階の方に見られた。然しきつい勝氣な女だ。

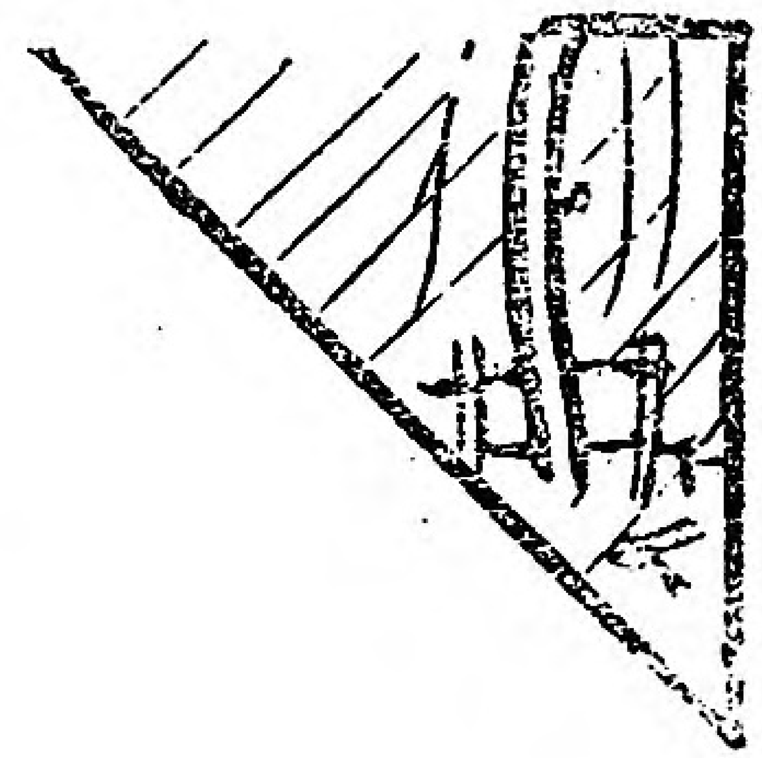
『人を馬鹿にした樣に嗤つて、いやな男らしくも無い笑ひかただ……學問なんか廢して結構、その笑ひ方で御飯が戴けるわ?!』

下で後家さんの吐いた眞赤な氣焰が、白い煙と一緒に上つて行つた。

書生は二三日して引越した、間代は拂はずに出たらしい。

今朝、後家んさはセツセと二階の障子を張替へて居た。

私の空想が何んだ?凡て石鹼の泡と消えて了つた。



なにはづに
咲くや此花ふゆごもり
いまを春べと咲くやこの花
王仁

梅が枝に
きゐるうぐひすや
春かけてはれ
はるかけて
啼けどもいまだ
雪はふりつゝ
あはれ
そこよしや
雪はふりつゝ
萬春樂



鶯のこゑに光や添ひぬらん月にうたひて谷を出づなり　喜多院入道

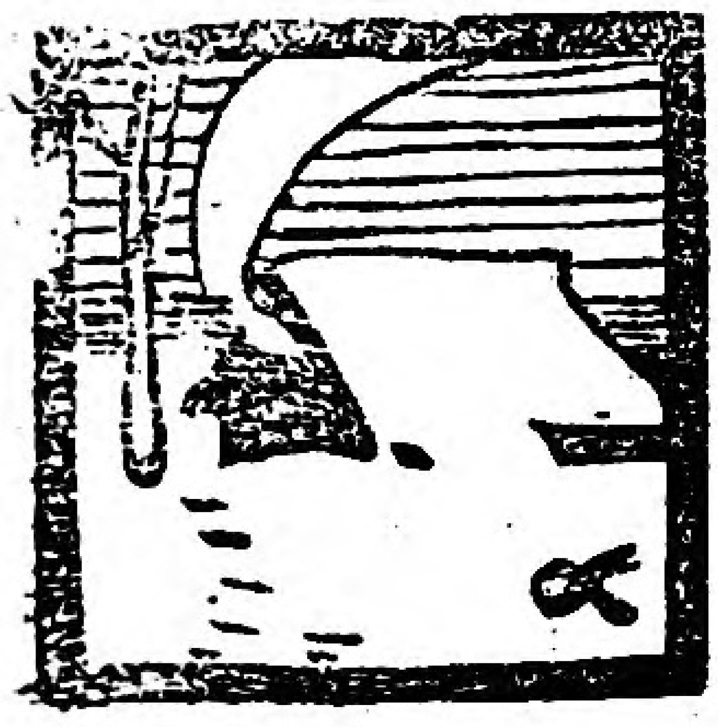
心ありて誰か聞くらん津の國のあしやの里の鶯の聲　兵衛内侍

勅なればいともかしこし鶯の宿はと問はゞいかゞ答へむ　貫之女

鶯はわれを巣守にたのみてや谷のほかへは出でゝゆくらむ　西行法師

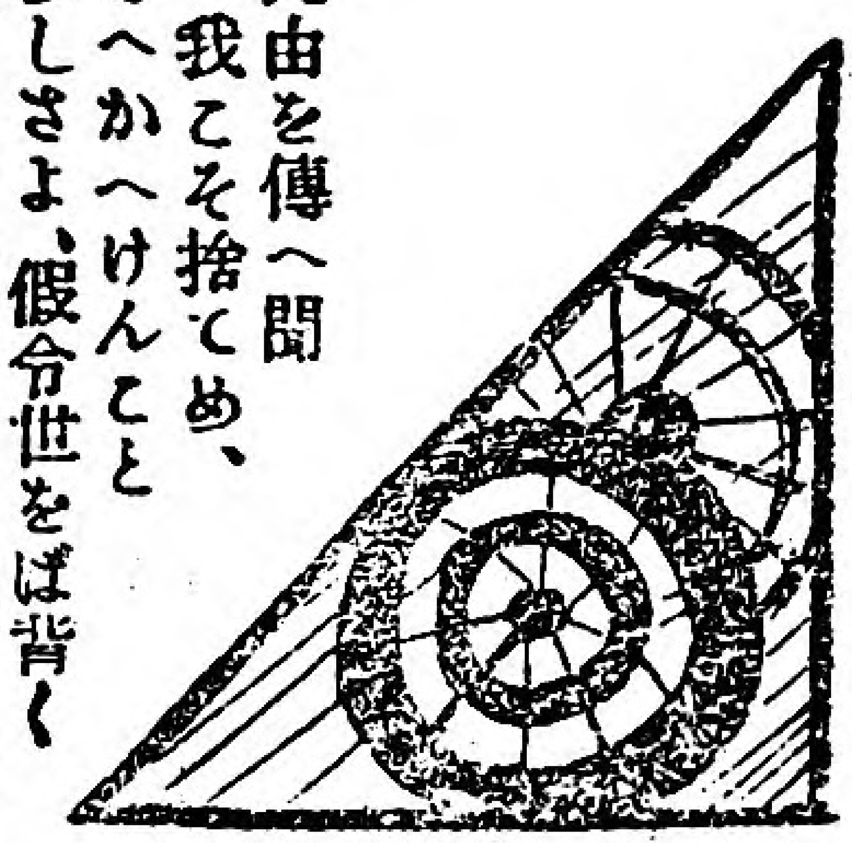
ふたゝびは越えじとぞ思ふ陸奥のいはでの關に鶯の鳴く　香川景樹

おりたちて朝菜洗へば加茂川の岸のやなぎに鶯のなく　蓮月尼



横笛此由を傳へ聞きて、我こそ捨てめ、様をさへかへけんことの恕めしさよ、假令世をば背くとも、などかはかくと知らせざらん。人こそ心強くとも、尋ねて恨みんと思ひつゝ、黄昏がたに都を出でゝ、嵯峨の方へぞあくがれける。此は二月十日餘のことなれば、梅津の里の春風に、よその匂もなつかしく、大井川の月影も、霞にこめて朧なり。一方ならぬあはれさも、誰故とこそ思ひけめ。わうしやう院とは聞きつれども、さだかにいづれの坊とも知らざれば、こゝにやすらひかしこに彳み、尋ねかぬるぞむざんなる。

平家物語



きさらぎ寒のゆふべや、
牧のうないも通はぬ、
眺めよ、寂しき末黒小野に、
さゝら河門水かれて、
濕ひ足らぬ荒びや、
艮風のかぜ吹い、羽むけ鴉に、
根白たか萓うら葉の、
いたづらさやぎにさゝと鳴りぬ。

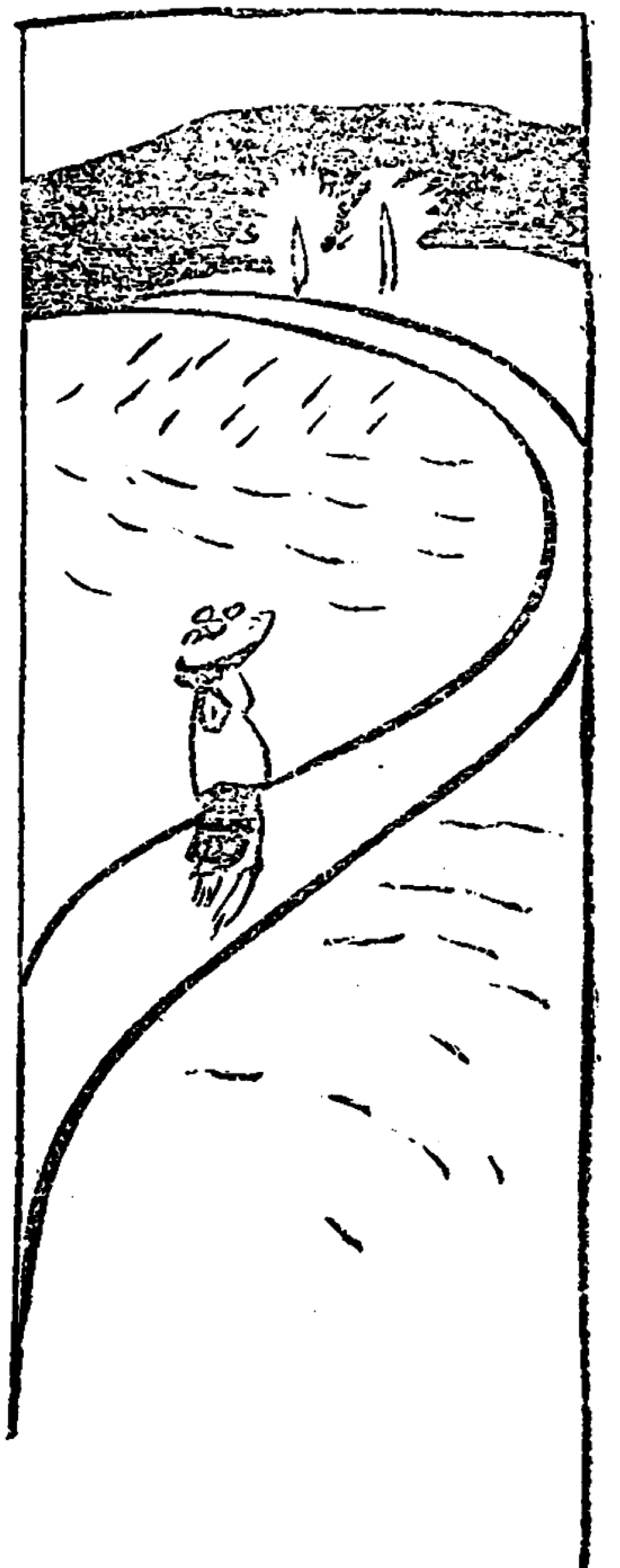
かなた天路のはづれに、
白衣の靡きゆらゝに、
今宵し六日のかたわれ月、
(さはあえかの病女の、
夕眺めするなよびや、)
さ青のまなじり伏目がちに、
吾世すがれの悲み、——
吐息もするやと惑はしむる。

泣菫



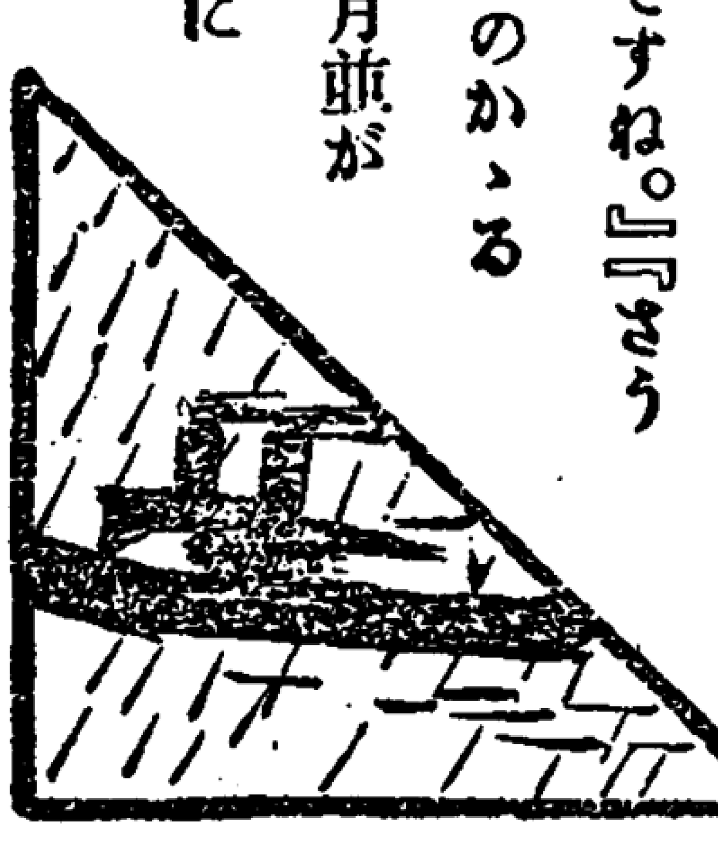
初雷に
田螺の腑も
肥えてけり
鳴雪

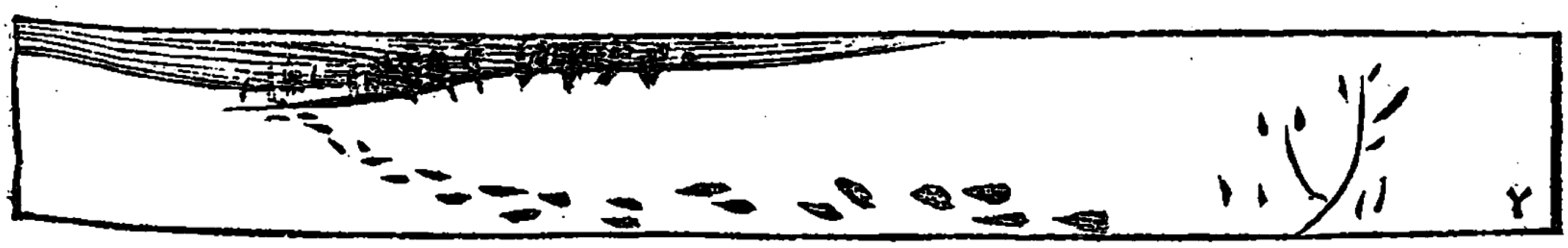
椿萏んで
手水鉢に
水なき落葉
虚子



『然し月並よりは好いですよ。』と無暗に加勢すると細君は不滿な樣子で、『一體月並々々と皆さんがよく被仰いますが、どんなのが月並なんです。』と開き直つて月並の定義を質問する。『月並ですか、月並といふと左樣ちと說明しにくいのですが……。』『そんな曖昧なものなら月並だつてよさゝうなものぢやありませんか。』と細君は女人一流の論理で詰め寄せる。『曖昧ぢやありませんよ、ちやんと分つてゐます、只說明しにくいだけの事でさあ。』『何でも自分の嫌ひな事を月並といふんでせう。』と妻君は我知らず穿つた事をいふ。迷亭も斯うなると『月並といふのはね、先づ、年は二八か二九からぬと言はず語らず物想の間に寢轉んで居て、此日や天氣晴朗とくると必ず一瓢を携へて墨堤に遊ぶ連中を言ふのです。』『そんな連中があるでせうか。』と細君は分らんものだから好加減な挨拶をする。『何だかごた〱して私には分りませんわ。』と遂に我を折る。『それぢやあ馬琴の胴中へメジョオ、ペンデニスの首をつけて一二年歐洲の空氣で包んで置くんですね。』『さうすると月並が出來るでせうか。』迷亭は返事をしないで笑つてゐる。『何、そんな手數のかゝる事をしないでも出來ます。中學校の生徒に白木屋の番頭を加へて二で割ると立派な月並が出來上ります。』『さうでせうか。』と細君は首を捻つた儘納得し兼ねたといふ風情に見える。

夏目漱石





郊外から

服部嘉香

晩秋の野の光

私は野の中に立つてゐる、
黄色と水色との光の中に、
枯れ果てた草を踏んで、
カトリック教の尼のやうに、
黒い布を被つた「影」が――私が、
野の中に立つてゐる。

黒い影に、
秋の小鳥はさゝやき、
秋の木の葉は降りかゝる。

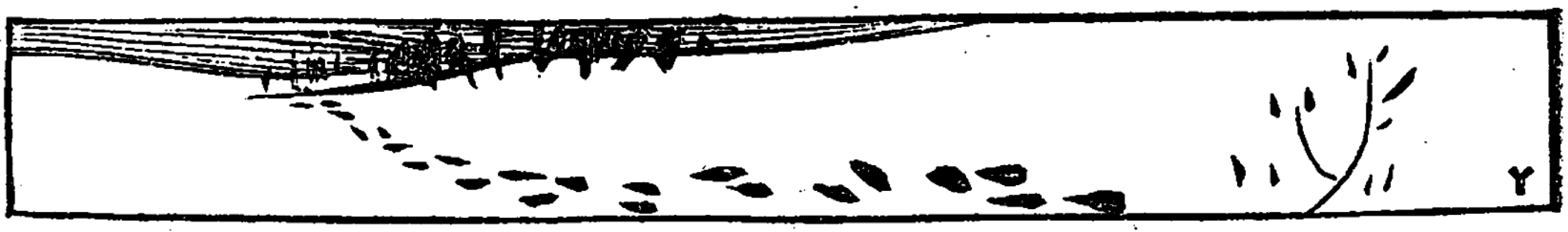
痛い〳〵針のやうに
木の葉は悔いの鞭を打つ、
苦い〳〵藥のやうに
小鳥は悲しい過去の記憶をさゝやく。

堪へがたい黒い影のをのゝきは
沈み行く夕日の光を浴びて、
痛ましく空氣をそゝのかす。
あゝ小鳥よ泣くな、
木の葉よ、枝を離れるな。

黒い布を冷たい風が吹く、
はら〳〵と落ちる涙、
――夕日に光る黄色の涙。
野の光、かすかに殘るが爲めに、
小鳥は我知らず啼く、
木の葉は
たゞ自然の力に壓されて落ちる、
ちらゝ、ちらゝと散る。
何もせぬ黒い人の影――

椅子

ものを書く人の後姿、
ペンの走る音、
さら〳〵と、街の隅に流れた木の葉のやうに、
紙を走るペンの音。



さうしてあなたは何を書く？
その椅子に
からだのすべてを倚せかけて、
その心のすべてを安らかに置いて、
さうしてあなたは何を書く？

眞夜中に、ものを書く女の後姿
赤い帶の模樣は
何物にか襲はれたやうに震へて、
襟筋に淋しい後れ毛はをのゝく。

さうしてあなたは何を書く？
あゝ、その椅子は——
昨日も私が掛けた椅子では無いか。

レールの雨

はるか遠方を走る汽車の
闇の中を、怪物のやうに走る汽車の、
車輪はてゝまで其の凄まじい響を傳へる、
カチリン、カチリンと——
鋭いレールの神經は泣く。

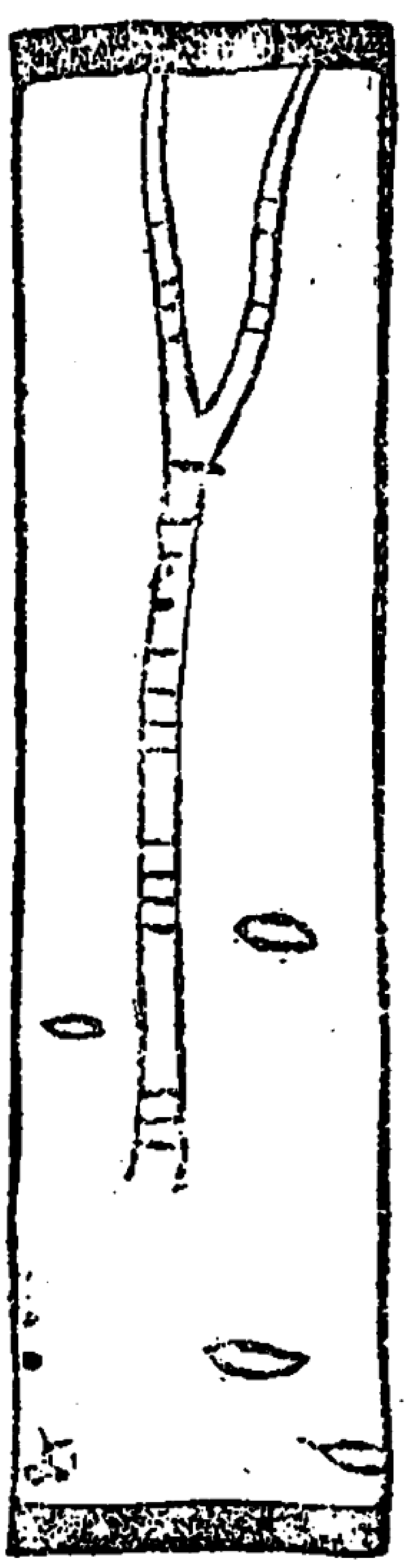
絶えず怖れを待つ我が心。

しと〳〵と雨は降る、
雨に濡れたレールは
近い踏切小屋から洩れる光に、
蝸牛のやうな光をして呼吸をつく。

絶えず喜びを待つ我が心。

カチリン、カチリンと、
響は風のやうに近づく。
雨は降る、レールは泣く、
やがて今——
黒い煙の唸り聲は、
西から東へ行かんとする。

絶えず苦しみを待つ我が心。



故一色醒川を懷ふ

友人

荒き魂と弱き肉

中山三郎

火葬場へ骨を拾ひに行つた時に、大事な喉佛は見出す事が出來なかつた。生れて幾もならず烈しい喘息に罹つて、呼吸を咳き〴〵乳を呑んで、遂にそれが宿痾となつて一生を咳き通した兄の喉佛は、骨で拾ふ事も出來ぬ程に痛められてゐたのであつた。兄の病氣は實に骨の髓にまで入つてゐたのである。その、病軀を提げて周圍のあらゆるものと惡戰を爲續けねばならなかつた兄の一生を思へば、慘として頭をあぐる事が出來ない。

兄の氣性は餘りに荒かつた、此荒い氣性は兄の祖父より今の母堂に、母堂より更に兄に傳つたものである。そして此荒い氣性を盛るにして餘りに羸弱な肉體を與へた母堂は、三十幾年の間一日として此病兒の爲に泣かぬ日はなかつた。『あの弱い軀を產んだのは妾の罪です』之は棺を蓋うた後の母堂の懺悔であつた。私は此詞を是以上に穿鑿しようとは思はないが、併し母堂の此言は何物にも優る靈前の手向草であつた。弱いにつけ尙更病人だと云はせたくないといふ母堂の强い我慢は遺憾なく兄に傳はり、之に基督教の信仰が加つて兄は無類の瘦我慢の人となつた。そして『我病まず我健也』といふ無自覺的の强い自覺を一種の標語として惡戰した兄は、遂に醫者の見限つた軀を十年以上も持堪へて、我等の前にミラクルを演じたものであつた。が併し又この瘦我慢が其軀を破つて了つた。兄は最近に於て『病は恩寵だ』といふ元の信仰から『病が罪だ』といふ痛切な自覺をして、木下尙江氏の與へられた機緣によつて靜座の工夫をし、更に生活を全然

一變しようとして其準備に掛られたが、果然其生活は地上より天上に一變し、過去破壞の紀念として兄が最後の日まで努力した『夕浪千鳥』は、空しく遺稿として私の手に殘さるゝに至つたのである。

兄は親族故舊の一人として枕頭に來り侍するも待たず、一人淋しく私の母に抱かれた儘で眠られた。而も其死は寔に安らかであつた。神を慈悲恩寵のそれとしてよりも、より以上に峻嚴酷烈のそれとして感得した兄の最後が、斯の如く平安にして莊嚴であつたのを見て、私は兄が三十餘年一生懸命に築き上げた信仰の土臺が、其最後の思想の動搖の時にすら、猶且つ小搖ぎもしなかつた事を思うて、今更に兄の努力の常に充實したものであつた事を思はざるを得ない。

荒き魂と弱き肉との戰は、まことに壯烈にして悲慘であつた。ヨブを今見ると云つたのでは何だか縁遠い氣がする。——私は藤村先生の『椰子の葉蔭』中の一齣を思ひ出す。



故一色醒川

東京が好きだ

河井醉茗

一色君が未だ京都に居た頃、君は、京都がつまらないから東京へ行きたいと云ふことを屢言つて來た。私も亦東京へ來たら宜からうと云ふやうなことを勸誘めた。勸誘めるについては幾度も躊躇した。

一色君のやうな身體の弱い人を、此の活動の激烈しい東京へ呼び寄せるのは、一種の罪惡ではなからうかと、私は少からず躊躇した。

實は其頃私は、人が欲しかつた、私の仕事を助けて

呉れる人が欲しかつた。智の人や、才の人や、手の人や、口の人は澤山にある、私は誰か彼かと選んで見た。選んで居る間にも、始終一色君、一色君と云ふ人が胸の裡を往來する。信頼するに足る人、人格の高い人、さしあたり一色君の外にない、あゝ一色君だと決定て了つた。併し君は病身だ、弱い肉體を持つて生れた人だ、物みな動いてゐる都會には通用の困難な人だと思つたが、そんな事よりも人間の價値が第一だと肉體の弱いことは、直ぐ打消されて、私は君に來て貰はうと長い手紙を書いた、行き違ひに君からも來た、それには君の決心も表はしてあつた。

　君は直ちに上京して來た。君とは暫く會はなかつたが、私は一見して今更の如く、其痛ましい身體を忘れてゐたことを悔いた、やはり東京などへ來ることを勸めなかつた方が宜かつたかも知れん。海の空氣に包まれた淡路の島、山を負ひ海に面した暖國の神戸の奥、君が身の安住の地は幾許もあるのに、風荒く、氣候の變化極りなき東京などへ何故來ることを勸誘めたか知らんと思つてみた。併しながら君自らは莞爾として、何うしても東京は好きだと云ふ。

　わが『女子文壇』の記者となつて後も、隠れたる君の功蹟は決して少くはない、君は能く人を導くことを知つてゐた。道徳を看板にし、倫理を楯にする世の道學者、宗教家とは異ひ、君の信仰は神に依るも、自己に依るも終始一にして、同じ道を歩いて來た。而かも君は生存の意義を自覺しやうとしたゞけ、君の生活には近代的色調を帶びてゐた。一面には藝術的、一面には哲學的の君の生活は、東京へ出なければ滿足を得られないと云つたのも尤もである。

　あゝ與へられたる肉體は蝶の羽の如く脆く、與へられたる靈魂は鷲の翼の如く強し。運命の下に極めて從順なりし君は、其脆き羽と、強き翼とを靜に收め、此處に一切と告別して、永久に惜まるゝ人となつた。

　因に言ふ、君の病氣は喘息であつた。生れて滿一年の時より發作を起し、三十三年間此が爲に苦しみ、終に舊臘六日の朝、中山氏の宅に瞑目したのである。

清高なる靈格

溝口白羊

私が一色君を識つたのは、我々と同じ文學會のメンバーであつた本尾秋遊といふ人の追悼會の席に於てゞあつた。尤も夫れまでに文庫派の詩人としての白浪君の名は早くから聞いて居たが、まだ會ふ機會がなかつた。そして會ふまでは、一色君といふ人は瀟洒な縞柄の洋服に赤いネクタイでも附けた極めてハイカラな紳戸的スタイルの人だらうと想つて居た。ところが『私が一色です』と云つて挨拶された君の風を見ると、私は思はず顔が赤くなつた。質素な服装、嚴肅な其態度、侵し難い威力のある其眼、餘り能辯ではないがシッカりとした落附のある聲、――當時心に或る悲みを抱いて神の御手に縋らうとして居た弱い求道者であつた私の眼には、これ等の總ての一色君の特色が、非常に嚴そかに映つた。

讃美歌をうたふ聲も顫へて居たらう。私は司會者たる一色君の強い聲に引張り附けられる樣に感じ乍ら、心から祈禱を捧げた。そして神の盡きざる榮光を讃めたゝへた。

不思議な事には、これが私をして基督敎に近かしめるチヤンスを作つた。

一色君とは其後六七年も經つて、原宿の河井君の家で會ふまでは、全然相離れた人であつたが、君の清高な靈格は、いつも自分の心に鏡の樣に照つて、我が過失を責め、正しき者の行くべき道を指示して居た。――怖らくそんな事を一色君は知らなかつたらう。

女子文壇社へ入つてからは度々顔を會はす事になつた。そして會ふとよく議論をした。議論はいつも心靈に關する問題に就て行はれた。私の樣な生物學を基礎に置いて觀て居る者には、折々まどろしくて聞いて居られない樣な事を言出すから、冷嘲半分に半疊を入れると、君は憤氣になつて、諄々と正面から謹嚴な態度で私の議論を攻擊した。實際君には串戯めいた事が云へない。何か串戯を云はうと思つても、君の眞面目な

態度を見ると、そんなくだらない事を云ふのが、耻しくなつてしまふ。

要するに君の一生は眞面目といふことを以て終始して居た。晩年になつてからは、君は最早教會の人ではなかつたが、それは人の建てた形而下の教會のことで君の信條の基礎には、何の動搖もなかつた。神の建て給ひし教會の信者として、一色醒川の名は永へに盡きざる記錄であらねばならぬ。よし地上の教會の信者が悉く墮落する日が來るとも、固きこと磐石の如き君の根本の信は、如何なるチヤームを以てするとも、一ミリメートルすら動かすことは出來ない。

會堂の隅に稠人の衢にラッパ吹かざるが故に、君の名は人の教會に重きをなさずとも、殊更に女兒の如き聲を作る僞善者共の腐えたる呼吸は、斷じて君の清高なる靈格を傷けることを許されない。

あゝ靈格の高き人一色君は逝いた。

私はこの君の紀念として自分の『少女』に絶筆『心の芽』を留め得た事を喜びとする。

或る物を握つてゐた

中村吉藏

一色醒川君と自分と交際し始めたのはもう十年の餘も昔の事である。一方には宗教上の信仰、他面には文藝上の同趣味といふ事が、二人を結び付けて、永い間の友誼を保たせて來たのであるが、その中にも、自分が西洋に往つて、思想上の一轉化を經、在來の信仰から離れるに至つた頃、恰も日本の思想界、文藝界にも自然主義的の、偶像破壞運動が起つて、青年の一人たる同君も、その餘波影響を受け、不尠、苦悶の人となつてゐた樣で、靈魂の悲痛、懊惱がそのまゝ文字となつて、のたうつてゐるやうな手紙を屢々同君の許から送つて來た事がある。併し歸朝後、會つて話して見ると、矢ッ張一種の、堅い、動かざる或ものを握つてゐて放さなかつた。何か常に憧憬してゐて、一刻も精神上の苦鬪を中絶しなかつた。卒然、故人となりし同君の悲しき追懷と共に、常に影の如く、又光の如く、この

一事が念頭に去來してゐる。

美人草の苗

澤村胡夷

何時だつたか、一色君が飄然と私の宅へやつて來たことがある。その時は私がまだ小石川の林町にゐた時分であるが、てうど虞美人草の苗だと云つて私が十株程草花の苗を花屋から買入れたので、そいつを植ゑてゐた時だつた。一色さんは不思議さうにそれを眺めながら何の苗だとたづねるから、虞美人草の苗だと僕が答へた。うむさうかと言ひながら熟々其苗を見てゐたが、暫くすると一色さんは、くすくす笑ひ初めた。

『それは虞美人草の苗じやアないやうだよ』

と言ふから僕は慥に花屋からさう聞いて買つたのだから間違は無論ない筈だと言つた。けれども虞美人草の苗はそんなものぢやアないと言つて一色さんはいろいろ説明して呉れた。僕は勿論虞美人草の苗を知らなかつたから半信半疑でゐた。ともかくも何な花が咲くか其儘植ゑて置くがよからうと言ふ事に決めて、その日はそれで別れた。

その苗はずんずん延びた。而して植木屋には奇麗な虞美人草が咲いて既に陳列せられてゐた。けれども僕の苗には花が少しも咲かぬのみか、延びて行くに從つて虞美人草のやうな葉すら見あたらなかつたので、其後一色さんが來る毎にそれが笑話の種となつてゐたのである。

一色君は草花には非常に興味を持つてゐた人であつた。植木屋へ僕が草花を買に出かける時には一所に出かけて、あれかこれかと撰擇して呉れた事も少くない。僕は一色君を趣味の人として忘れる事が出來ぬ。一色君は草花ばかりでなく音樂にも興味を持つてゐた。殊に淨瑠璃を聞く事が好きであつた。それから菓實に對して興味を持つてゐた。この事は自分で幾度も僕に語つた事がある。ともかく判斷の明晰な人、理路の整然たる事を好む人にしては珍しい程多くの趣味と優みとを持つてゐた人だつたと信ずる。僕は今永久にこの多

趣味なる友を失つて轉哀悼の情に堪へぬ。

漂泊の人

横瀬虎壽

河井君足下。

故醒川追悼の文に筆を染むるに先だちて、報せざるべからざる事あり。もとよりながらふる詮なき身には祝着の春もあらねど、愛弟順に好俅あり、年十七、眉美しうとゝのへるが二月十一日横瀬家に入るべく定められて日もかへず、老の君病んで、闔家今混雜のさ中にあり。從妹稻葉蘭子亦この十日を以て華燭の典を擧ぐ。冬より春にかけて常陸には花やかなる夜多きなり。

されど病めるものは慘なるかな。六郎參りぬ、お貞もまゐりぬと告ぐれど、ボルドーの値尊き酒をさゝやかなる猪口に注ぎて捧ぐれど、愛する子等の日に繼いで夜もすがら枕に添うてかしづけど、皆さとらざるなり。手を握るもの、誰なるかも知らず、足をさする人の幾人あるかも識らず、父の聲すらすでに他の聲とわかちなく、眠り行く神經と痲痺せる意識と、悲しいかなわが老の君は死とたいめしつるなり。いく年の霜にあひて白うなれる髪ぞ、櫛を借りてしづかゝげまつれば、癖つきし毛は針の如く枕に垂る。眉のあたりうすらに黝くかげりて、目も口もきと結べるに、うつゝにかへりては父を呼び、われ等を呼びて、まれに越路の高――お才が子を呼ぶこともあれど、いらへすればかへりてもの言はず。

おもふ、わが醒川の死よ、誰かこれを守りたる。

醒川、われより長ずること一歳、けなげなる三十四年の命は彼にとりて太しく長き惡戰苦鬪の連續なりき彼に宗教はありき、戀はわれ知らず。彼に詩歌はありき、涙はわれ知らず。白鷺城下に生れて痲耶山の麓に人となり、柑子みのる淡路より轉じて、塵多き都のまちに客死するに至るまで醒川のたゞしかりし人格をおもふを知るのみ。終焉迫りてなほ神を信じ、神をうたがはざりしや。われかのきはの苦楚に泣いて一百里の西に母の名を喚ばざりしや。姉の手に枕せんことを思

ひ、弟の膝に横たはらんことをねがはざりしや。風赤き朝、雨白き夕、蒲柳の質をかなしみて、わが酔茗を羨み、夜雨を偲ぶことなかりしや。

君は南に北に東に西に漂泊して旅人の生活を爲し、われは年々歳々筑波と不二とを仰いで新しき日に生けり。われは巖上の梅の如し、咲いて動かず。君は崖下の水に似たり、去つて留まらず。去つて留まらず、かなしいかな君は死にぬ。

われも亦死なんのみ。君が世は君につらかりき、わが世もわれに辛かりき。君は廢人の涙を知らねど、わが未知らざる死は先づ嘗みたり。敗殘の軀よ、なほ何にひかれて、侶無き世にのこるらむ。

君を旅にして死なしめし母ぎみのうらみをおもふと共に、弱き子をあとにのこさざりしそのよろこびをおもふ。ひとり行くに堪ふる子ならばこそ、千代の命をもあれとねがはめ、われは友の死をなげかじ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

故一色義朗(醒川)氏略歴

▲出生　明治十年七月七日播州姫路城下に生る。家は代々酒井雅樂頭に仕へて典醫たり。典醫は祖父の世を以て七代とす。父巽又諦より選ばれて大阪醫學校に學ぶ、修業の半途にして維新となれり。母は姫路藩士川端彌惣右衛門次資の長女愛維新後祖父未だ在世の御失敗相續ぎて家産全く失ふに至れり。

▲學事　明治十六年四月(六歳の頃)姫路町三城東小學校に入學、訓導荒井彦十郎氏の特に愛する所となり、專ら同氏に就きて薫陶を受く。明治十八年七月、一家を擧げて神戸に移住するに及び、市立相生小學校に轉入。廿三年四月高等科三學年修業の際、宿痾喘息ますく重く退學の止むなきに至る。後に橋本月關氏に漢學、脇種熊氏に英語を學び是より專ら獨修時代に入り、漢學國文を修め作文は特に好みて熱心なりりし。家庭の感化は主に武士的厳肅なる母よりうくる所多し。

▲文事　小學校退學の頃より雜誌「つぼみ」「少年園」「幼年雜誌」等に投書す、「文庫」の購讀を初めしは廿八年四月頃よりの如し、是よりは主として「文庫」に詩、散文を投ず。明治三十年神戸に關西文學社神戸支舎の設けらるゝと同時に雜誌「よしあし草」の發行せらるゝや、經營者の一人として之に關係す。三十九年の頃齋藤溪舟、山田忠宜諸氏と共に神戸に丙午文學舎を創設、雜誌「新潮」を發行す。

▲信仰　九歳の頃より基督敎の日曜學校に通ひ、明治三十二年神戸敎會にて原田助氏より洗禮をうく。宗敎には境遇又は性格上より殊に熱心にして、內村鑑三氏の著書による感化多く、後「キリスト敎世界」「新人」「新天地」等に宗敎的作物を發表せり。

▲性行　病身ながらも强情にして腕白此上なかりしかど、長上より鍾愛せられたり、負けぬ氣殊につよく、且つすべての事整然たらざれば安んぜざる性質なりりき。

鴆の酒盃

横瀬夜雨

冷笑す。何の涙か今の女にあるべき、才ある女は才のために生き、美しき女はほてらんが爲に生く、ひとごとなればこそ君もあざけれ。たゞ願はくは、われをしてわがうたを終へしめよ。

涙あらばわがながらふる日のかぎり月波のやまは見ずにいとほれ

人すでにみんなみせしを今もかも最上川は北へ流るゝべしや

十六羅漢巖もくづれぬ浪も干よ飽海のはまは沙漠ともなれ

女生まばあやとつけんなどちぎりてしるり子は嬉し身でもりてあり

われ死なむ死にての後に君嫁がばおそしと人のいふとやおもひし

人妻は犬のごと媚びて生くるのみと思ひてせめて慰むわれか

月にけぶる眉はわれ見ぬうるみもつ目にもきすしぬ忘れめや君を

人戀の涙をしへし君なればうべわが母のわれに泣くらむ

どくだみの液汁はさもあれ君が釀む鴆のさかづき我れに賜へな

夢みしは三丈のけやき炎して草生水やまに火のふりかかる

人づまはわが前に坐してひざの兒に乳さぐらせりあはれなるかな

ちやんら可笑女の戀の十七はをとこほしさのなぐさなりけり

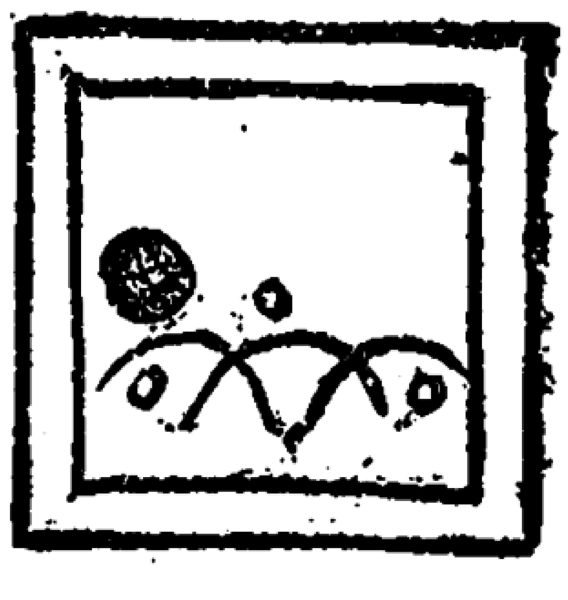
のゝしれどいかれど泣けどいきどほれどなぐさめられず一人しあれば

母を見ればこゝろぞなでむ老の目に死なじとわれをはげますからに

蕪菁虹は海のあらしの前兆てふ、わが死よきたれ天つみそら從



創作



散文

○暗きやすらひ（天）

はやぶさ

しづかなく信濃の山奥から、都はづれに住めるひとり子に、力づよい聲はつたはりました。

ふしぎな歡喜と、ある嚴肅なひゞきに、ひきしめられるやうでありながら、私は……空虚な心にもだ〳〵した哀しみが集くつてゐるので、今は申すのもお恥しいくらゐです。

日毎、熱い涙のないことはないのに、それでさへも、充實した心もちを持ちつゞけることができないのでございます。

「戀を破つた悲み」あなたも泣いて下さいますな、とおつしやるけれど、私は失戀の人に同情する資格さへないことを思はずにはゐられませんの。みじかい貧しい過去にふりかへつて、そこには或るかすかな微笑も浮ぶ。

しかし、おなじ人の足跡を踏まなければならぬ時は、いま自分の上にも近きつゝあるのではないでせうか。しづかな秋の心に、十七の年のだん〳〵ちゞまりゆくのをみまもりながら、ふとこんな思ひも湧きます。

少女といふたまゆら、平穩なる今の生活を、私はなぜいつくしまないのでせう。

「強く立つべくわれはゆく」とおうたひになつた時、何となくそれが「空想」であるやうなきがしました。お咎め下さいますな、長曾我部様のいはゆる「公園の木かげを傘傾けて俯いてゆく」それが私の態度なんでございます。晝も夜も夢にさへも、自分の冷たい鋭い批評

の眼からかくれかねてゐる、臆病な囚人の姿。
あゝ、天地にまもるべきひとりの自己は、それよりほかにどこにありませう。

「もう更けました、明日もせわしい、日の光は人をむちうちます」濁つた空氣に育てられて、いつも絶えまない擾亂になやむ胸に、此の一言は、紅い血と、不滅の地の叫びとを注射しました。

都會の隅に踏みにぢられて、危くもつなぎとめたる安全にすがる老いたる人と共に光なき日をおくりつつそこに何をか見出さうとする、弱者の子よ。

小さな女にこんなこと思はせる神さまも、ずゐぶんシニカルでいらつしやいますわね。

許して下さいますか。

詩を忘れたはやぶさはまた、賢なる女を冷笑するよりもまづ、自分を冷笑しなければなりませんでした。

脱ぐ衣の一重々々、ある不安と恥らひとを包むむねに、外氣は冷たく襲うて來る。

そつと、ぬぎすてたのをふりかへつて、まだ消えきらない肌の溫みに、幾たびたゆたひの手をおきましたらう。

あのすて難かつた霧のやうなうすゞのヴエール、燃える色のつやゝかなコート、また、地にひく鈍色の長いスカートも、みんな、今はもう私のみをまもらない……。

「どうして？まあ惜しいことなさるのね」「もうあなたの、何もないぢやありませんか」同情らしい言葉をよせる人々に、「いゝえ。どんなに貧しくてもいゝの、生れたまんまの身にかへります」と強さうに云ひきりたかつたのですけれど、おわらひ下さい。その時私は繭を出た蛾の樣にたゞふるへてをりましたんですもの。

胸をついてくるはりみちたものを抱いて紙に對ふ時わが筆の權威は王冠の輝きの如くありたいと思ふ。そしてその一瞬の後は、しよんぼりとうなだれて、いつもまたまへより深い沈默にかへつてしまふのでございます。人と話してゐる時、もつれあふ聲の中にふと自分の唇から洩れたのがまぎれもせずひとり消えてゆくのを見まもつてふるへる心。そこにもおなじ寂しさはくりかへされます。

繕ふに針なく掩ふに飾なき、わがいのちの空虚よ。

日の落つる時、ほんのり窓の障子の明らむほか、いつ

も蒼ざめて冷たい空氣の沈んでゐる室。すつかりしめきつて屏風たてまはしてその中に目をとぢて私の魂はわづかに暗い安息と孤獨の幸とを覺えます。俯伏してゐる時、敷布に熱した瞼をあてゝ。わきたち熔くる白蠟のながれて冷えてゆくやう、しづかになみだと眠りの底に溺れゆく眼、沈みゆく心もち。あをにねる時、きつと手は組んであります、澄んだ水のやうな胸の上に。洪漠たる宇宙の中、たゞひとり地の上に木乃伊のやうにおかれてある、小さい正しい寂しい自分の姿があり〱と目に浮んでくる……としらず〱全身の力は手から指にあつまり、血は燃えて、「あゝ神さま」よばうとして唇のふるふ時、あゝその時はもう兩手は力なく胸をすべり落ちてをりますの。

「槇子さんいかゞでいらつしやいますか」

貧しき門の鈴をならして訪ねて下すつた優しい聲をきいた時恐しいものにとりつかれたやうに私は悸きました。唐紙をあけて笑がほをおみせになつた母様に、そこはやく閉めて！と云はぬばかりにくびふつてねがへりすると、わきの壁によせかけた新聞紙がガサ〱と音を立てた。

「お目にかゝれませんけれど、まあちよつとおあがり遊せな、ほんとに折角いらして下さいましたのにねえ」

耳は玄關のこゑをきゝながらも

心ははるかヤスナヤボリヤナの廣き野の樹立の蔭に白壁をのぞかせてゐる家の窓にとび、悲哀とおどろきにみちた邸内の空氣をおぼろげに想像するのでした。

黑枠の中の半をおほふ白髯とおごそかな眉間の深い刻み、長きたゝかひのかたみの傷のまへに、ひねもす熱ある體をぢつと支へてゐた、暗き霜月のひと日の記憶はなほ昨日のやうにあざやかなれど、もう今年も逝く。新しきゆめはいつ翼をひろげて私のベッドをつゝむのでせう。（十二月二十四日）

慧星出づ。衣を整へてしづかに場に上り來る。わがはやぶさのわかき姿を見よ。十二月二十五日われ生れて初めてクリスマスのおくりものを人より獲て、心さすがによろこびしが、さらに此君の文稿百枚に餘るもの二巻を手にしたり、菁々たる哉、彼の中阿に在り、誰かこれを長ぜしむる、菁々たる哉、彼の大陵に在り、誰か之を大ならしむる。（夜雨）

此れだけの想ひと、此れだけの力を包んでゐる處女の胸は、何んなに深く、何んなに淸く、海のやうに測り知られぬ神秘が存してゐるでせう、實に若き女王の誇りよ、淺はかな女等は其前に額づかねばならぬ（醉茗）

○舞扇（地）

牛込　平塚白百合

ドングリが礫でも打つけるやうに茶の間の庇をたゝいて、落葉のカラ〱なる音がたまらない程淋しい。

手をすゝがうと戸をくると、洸々とした初冬の月光が天に地に一ぱい冴えて、つやゝかな山茶花の葉影に薄紅の花が美しいけれどいたましく凍つてゐる。

あざやかな空を見ると、霜の一片〳〵が銀色のこまかい花粉のやうにちつてくるやうな氣がした。

寒さは顔といはず利刀をあてられたやうにビリ〳〵する。

部室には入ると黄色いランプの光が何となくつめたかつた。

私は三越でこの春買つた桃色の電氣覆を出さうと簞笥をさぐつた。

たしかに母様は三番の簞笥の右に入れて下すつたと思ふけれど、暫くさぐつた私の手にフト見た事のない懐劔でもあるやうな紫ちりめんの布につゝまれた堅い物が手にふれた。薄絹のおほひも見つかつた。

フーワリと玉ボヤの上に掛けると部室中が春の夜の暖かさに匂つて、かるたでもとりたい樣な氣になる。

私は膝元に置いた紫ちりめんのある者を取上げた。さうして闇中物でもさぐるやうに、堅い心持末廣がりのあるものをいろ〳〵に想像しながらさぐつた。

けれど私の狹い想像力ではとてもむづかしかつた。ひわ色の打ひもの結びめといて、細くまいた紫ちりめんのふくさをほぐすと、

緋の太い絹絲で菱形に親骨と紙とがかゞりつけてある金地の大きな舞扇であつた。

サラッとひらくとたき込めた樣ないゝ香がして忘れた人をまた思ひ出したやうに、はぐれかけた私の心を引しめた。象牙骨には私の名がシックリきざみ込まれてゐる。

夏のある夜、杵屋の門で立ぎゝした「あやめ浴衣」の一くさりが自然と私の胸から束ねた絲をくり出すやうだつたのも、常盤木くらぶの大ざらひに地方の彈いた關の戸を心の中でくちずさんだのも、やつぱりこの舞扇にひめられた私の幼ない時の夢の片端であつた。

今舞扇もつてもさす手ひく手のやり場所もわからない。

幼ない折のまぼろしは寺院のあけがたの灯の樣に、あるかなしで、まるでとほい、遠い夢を追想するやうなものである。その一片でもにぎれば凡べてがムカゴのつるを引いたやうに、それについて引起されてくるであらうけれど。あまりに幼なかつた昔の絲口は何處ともなくまぎれ込んでわからない。

さうして私の全部をにぎつた母は花ちる日、北の國の土と化したのであるもの。

私の幼ない日は盲目である。

これからのち何日になつたらこの舞扇と幼ない日がなぞからとける時があらうぞ。

私は扇の骨を無意識にかぞへた。十三本の骨は琴の

と同じ數だつた。

お琴を習ひ初めたのは十歳のとき——踊はその前なのだ——。

パッチリと扇をとぢた。炭火にあたゝめられた空氣が障子紙にぶつかつてゐるやうだ。頰があつい。

——小さい時はほんとに身體がよわくつて、と亡き母樣がおつしやつたのが思ひ出された。一日繪本でもいぢつて母樣のお仕事の傍に元氣のないい目の大きい子を思つた。

あの嚴格な父樣と、きちんと物事に綿密だつた慈愛の深い母樣の子として、踊を習ふとはやつぱりなぞのやうなものである。けれど體育を重んじる父樣は體操替りにきつと習はしになつたものであらう。私は虞實弱かつたらしい。



樫の實は絶えず月光の隈ない庭にこぼれて、庇を叩く。昔楊子をさしてコマにまはしたそれは覺えてゐるけれど、舞扇かざした幼なき日は隔世の思ひがする。紫のふくさよ。金泥塗りの舞扇よ。

（天）　宇治にて　　芝　弘　子

面白いロマンチックな題材を捉へて居るのだし所々に旨い文句もあるのだが、どうもシンミリとした情趣がない。この頃貴女は大分固くなつてゐる樣だ、思ひ切つて華やかに大膽にかいてごらんなさい。其方が貴女の美しい文才に適合する（白羊）

これ位なら隨分華やかだ、力を入れた處もある、なるほど纒つた統一した思想は見出しがたいけれど、なべての女性と云ふものゝ

尤も誇張して代表するものは此作者など適任であらう、個性の有無は今暫く問ふを止めよ(酔茗)

○丘の上にて(入)

羽前　深山木

紅い、黄いろくも色づいてきた遠近の樹や、人の動いてゐる田の面の點々や、菜畑の青いのや、日は曇つても何となく明るい。秋の色彩のうちには、すこしの不安も怖れも感じないのである。

今朝の深い霧が上つて凝つたかと思はれる重々しい白雲が平かに幅ひろく、北から東へかけて數十里にわたる國境の連山を掩ひ隱して渺々とたなびき渡つてゐる。私はかつてこのやうな雲のわざを見たことがないので、——はじめは大河の流れのさまを思つたが次第にまだ知らぬ海のけしきの樣にも思はれてきた。——あゝ白い海！わづかにあらはれてゐる山の頂きをはるかな沖の島とも見てゐると、——遠いはてないといふ哀感が胸いつぱいに湧いてきた。白い雲の海は漣もたゞすに動かない。

目をうつすと自分の立つてる丘のすぐ下からひろびろとつゞいた田の末には町の家並が背を見せてゐる。その上をこえて南に聳ゆる吾妻連山につゞいた紫の山と山との重り目にはまだ晴れやらぬ霧が夢のやうに罩めてゐる。

ふと田圃道を通る黒い洋服の人の歩きぶりが目にはいつた。小さく見えるほど距れてゐるが、大股に濶歩する兩脚が何か調子でもとつてゐるやうに見える。私ははるかに田圃道をわたつてゆくその脚の働きをおもしろいやうに打笑まれて、目も放さず見てゐたが、そのうちに木かげに隱れてしまつた。

氣がつくと、田の面がから明みかゝつて來たやうで、ふり仰いでみると、太陽の輪廓のほとりに青い空があらはれてゐて自分の影もうつすりとかたはらの草に落ちてゐる。

ぽう——ぽう——と長く尾をひいて午を告げる工業學校の汽笛が鳴り渡る。

どこに女の影があるといはれると困るが來るのむく〳〵戀の告白ならぬは無き中にありて、ひとり昂々として自然の風光を描き來るところ、たのもしき信念といふべし、男だつたら論外だが、自己を沒し性を沒してこれだけの物を書ける女ならまた太白を擧ぐるに足る(夜雨)

○銀杏(入)

西多摩　水松

何とも云はれぬ悲しさうな小鳥が鳴くので私は堪へられなくなつて庭へ出た。いつも行く雜木林の方には麥蒔の男がおほせい居るから、前のお寺の庭を通りぬ

けて、川べりへ行つて見やうと思つて下りかけた坂で、淡い淡い白雲よりあはい月が輪廓だけまるく明らかにあらはれかけてゐるのを見た。血のやうな紅葉と、白羽の矢のやうな枯れ薄と入り交つてゐる山の上に。今にも消えてしまひさうな月だと思つて山をはなれきるまで見てゐた。静に下りてすがれた草を踏むと、白い露がつめたくさつきあつくつて足袋を脱いだまゝの素足にふれる。夏は魂を入れかへに來たこの山かげ！まるで雨ふる日の心地がしてきた。朝から晩まで露の乾くこともないあゝいやな日かげ、ぞく／＼慄へてきたから青みも何もない冷えきつた涙　やうな水の流れへは近づきもしないで引きかへして、お寺の庭へ來た。きれいに掃いたところへ新しく落葉した銀杏はいつも美しい。誰も見えないから、大きな木の下に立つて甘い蜜でも滴りさうな色の實と明るいやうな鬱金の葉とを仰いだ。あまり高い木のせいか傍へよつたら淋しくなつた。つかまつても淋しい。木だもの、くさい實がなつてゐる木だもの。ふと和尚さんに見つかつたから挨拶すると、「今は風がないから落ちませんやたくさんたまつたから見ておくんなさい」と呼ぶからそばへ行くと二斗笊の中に八分目も骨のやうな算盤珠のやうによく揃つた粒がは入つてゐた。和尚さんは「これの男と女を敎へませう」といつてざら／＼とかきまはして三角に尖つたのを二つ探し出して「これが女ですよ、これを蒔けば生へるのです」と熱心に敎へてくれた。とつくに知つてゐたのだけれど珍らしさうに聞いてゐると、「木や何かには女が少ないのですなあ」などゝいひながら笊を傾けて探したけれどとう／＼二つしか無かつた。

何となしに趣がある、いつもだけの面白味はないけれど……、乾いて居るなと思つて見て居る中に、私はいつも何處かに引附ける或ものが存在する樣に思ふ。才筆だ（白羊）

佳作

○たゞひとり

月夜花

夜は靜かだ。

灯火はジジと音を立てゝ油がつきさうだ、早く消えて黑闇になつたらよい思案も浮ぶにと思ふけれど。さつきいはれた父の言葉をくりかへして見た。

新しきたちば、一生のたちばは私も考へてゐる、一日も心から離れない問題だから思つてゐますけれど私自身には自らの周圍さへわからないものなんで一生のたちばがわかりませう？膝を見つめたまゝ涙がこぼれた。

心のみだれをおさへて父母の前を逃れた時いひ方なき苦しみと悲しみと涙の行方を探したけれど、止めどなくとめどなく頰に流れる。

くりかへし云ふ父も辛いであらう、言はるゝ身は堪

へられぬ苦痛を感ずる背いて生きる私と、意志の違ふ親と子がなんの爲めに一しよにゐる家であらう、おもへば涙も冷たい、私には父は冷たい、母は熱い涙で心をつないでくれる、つながれて生てゐる自分の影は人はなんと思ふか、世の總ての人を冷たい瞳で私は見るんではないけれど、私の涙は冷たいのだもの。

どうして生きたつて人の一生は一生でせう、泣いて暮すより面白く心のまゝの方がよいでせうと人はいつた。

けれど私は三十年四十年と生きても、ふりむいて見た時の、わが過去にあせた紅の色や醜き黑點を見出したくない、只自らが望んだ色のみでありたいのだもの短き命はすきだけれど私はどうならう、夢、夢にありたい。

現在の親の心さへ昨日も今日もうたがつて見た。眠入つて被在る母さまの慈愛の瞳は眠つても……私は懷かしい、はあさんとよんで下さらなくつてよう御座います、母さん、母さん安らかに溫き夢を御覽下さい。

「母さんどんなに辛くつても私は生きます、きつと生きます。」

あゝ夜はふけた。

子としては生きても妻としてどうして生きられよう？瞑目しても灯火の下に對坐する人の影ははつきり見える。

流れ行く時の力はやがてむかへる年を思へば——父は來年はお前も二十……と云ひかけてふとやめた。流石にわが子の積んだ年をかぞへて不安の思ひがしたのでせう。私も淡きおそれを胸にくりかへした。父はこの年には人の親であつたのだ。

私は悲しかつた。いくらすねても女は女、積つた年はわが衰へよ。

行かんか、心操ほろぶるを奈何せん、留まらん乎、老來寂寥多からん。少女この涙あり、未だ冷笑すべからず（夜雨）

○葬の衣

鳥取　春子

「母樣、もう十時半ですね、おやすみ遊ばせな。」

「こゝだけで、もう裾合せになるんだからしてしまひませう、お前こそ御やすみがいゝよ、明日は早いんだから。」母樣はクリームの八　に、褄形を縫ひながら、仰有つた。

裏の紅絹にはポト〳〵と涙が落ちて、絞つたやうな紋が出來た。

樂しかつた一月の旅行！それがとらはれる元であつたとは知らなんでした、あゝ露知りませんでしたの、私の胸には、京は七條の淋しい町のシト〳〵と小雨ふる夜を明るいらんぷの下に二十人の若き人が集つてかる

たとつた夜のさま、吉田山から大學構内を見下ろしながら、文學に美術に音樂に、氣焔を吐いた人のおもかげのみしか殘つてゐませんのに、停車場で、さよならと言つた限り、忘れてしまつてゐた從兄の事なぞ何故、思ひ出すやうになさいましたの、思ひ出したくない、二十年、三十年、その後も思ひ出したくないのに。

未來のアドミラル夫人をのぞみませんかとさゝやいた海の人、それは、まだお下髮にしてゐた十七の夏だつた、それ限り忘れてゐたけど、今日ふと思ひ出しました。その時、二本であつた腕のしるしは、今も三ッの星となつて肩にある。

母樣！　嬉しさうに仕度を急いで下さる母樣よ！　凡ての人を忘れ、凡ての誇をすてゝ、一人のかげにかくれやうと覺悟してるのですから、お別れにと、高尾に紅葉を探つた歸途、互々の顏もおぼろ〳〵な中にNさんとならんで步いた時、もう一度、處女のHさんがみたいとさう言ふ、「幾度でも逢はれますわ、年が變つたらNさんにもKさんにも」といつておいた、けど！自分は今日の自分でないのを如何しませう。逢ひたくない、誰にも!! NさんにもKさんにも——海の人にも——。

「もう御寢なさいよ。また明日もあるんだから」裾をつけて、おしまひになる間に、私は衽を片方だけ逢つたのでした。

「さきお休み下さいませ、私は、房さんに手紙を書いといてゐますから」

「だつて、もうおそいよ」お聲を、後にきいて椽に出ると、月なき夜は、星のみが美しうきら〳〵と輝いてゐた。

淡墨色の夜の萬象は涙のためにいよ〳〵淡くみえました。

さらば、さらば。とこしへにさらば。

小聲にくり返し、うたつた私は湧き來る涙にたちすくみました。

○

「姉さん、立木が來てるから、下りてみて頂戴な」階下から母樣の聲がきこえた、私、みないでもよう御座いますわ、母樣が定めといて下さいませ。わが葬の日の衣を選べとは、母樣にも似合はぬ、酷い事を仰有るわ、ほんとに母樣、私、何もいりませんの、襲が二ッや三ッぢや、恥しかろと可愛想だと仰有るけど、振袖なぞさう度々着るものぢやなし、今あるのが何方も淡い色だからとなら、母樣の、あの松竹梅の、黑いのを、その時だけ貸して下さればいゝのです、模樣の古風な位が何でせう、ほんとに、かまはないで頂戴な。

「お前は、ほんとに、地味すぎるよ、あちらのお母さんは何方かといへば、派手好な方だし、○さんだつて職業柄、派手だらうし」とよく、言ひきかせて下さるけど、私が地味なのも、田舍者である事も、萬承知の上だか

ら、まさかに地味で困るとは仰有るまい、傷なはれたる生を思へば、綾羅の衣、錦繡の帶、そこに何程のなぐさめがありませう？

「之では如何？」母様の持つて上つてらしつたのは、死ぬ身には似ふさはぬ、玉椿の派手な模様。

「いゝと思召したら、それになすつといて下さいませ」

「ぢやこれにして、おきませう」

「何卒！」とは言つたけど涙がおちた。

「お前が下りてみて呉れると、いゝんだけど――」とそれでも聲をふるはせて。

「勘忍して下さい」私はきと袂をかんだ。

相思の人を許されてすら夢の女の涙は痛ましく烈しくその聲は激越なりき、新婚の衣を葬りのきぬにたぐへて泣けるこの人よ、吁君も亦賣られるか(夜雨)

○道しるべ

越後　雅樂子

退屈さにつと引きよせてみた傍の本、末の弟の讀本だつた、ハラ／＼とページを繰つた時、ふと目に入つたもの――荷物を負つた旅人に、可愛らしい少年が、傍の道しるべを指さして、何をか云つて居る繪の其の道しるべであつた。道しるべ、道しるべ、私はこれを見る度、思ふ度、あるなつかしさと、小さいほこりとに胸をそゝられる。「幼なき日」に遠く離れて、一歩一歩、苦き辛き現實に追はれつゝ行く今の私、折にふれてつとふり返つてみる時、「幼なき日」の事々は、一つとしてなつかしい思出となつて居ないものは無い。で、此の道しるべも私の幼なき日の、かたみとして忘れ得ぬ一つである。私が六つの歳、耳を病んで、俥の上で祖母に抱かれては、毎日ある町の病院に通つた事があつた。初めて、町といふものをみた私、姿も心も小さい子は、どんなにか驚ろきと怪しみの目を睜つて、町の物々をみたらう。其中にある横町の突きあたりに立つて居る、大きな石の道しるべは、最も怪しく私の心に刻みつけられた。何だらう、何だらうと思ふ疑ひは日に日に深くなつて行つた。

然し何故か私はそれを祖母に聞かうとはしなかつた、解けざる疑ひの固まりを小さい胸に抱いたまゝ、年月は流れて、おかつぱはおたばこぼんとなり、稚兒輪と變つていつた。なぜ祖母にたづねなかつたかは今考へてみても分らない、今其時の少女らしくもないこましやくれた樣の自分の心を思ふと、只痛々しい樣な氣がする。

忘れもせぬ十一歳の春、初めて北越に汽車が通じたので、叔母に連れられて見に行つた事があつた。其時矢張りある町を通つて、其道しるべをみた時、何とはなしにこれは道しるべだらうと思つた。はじめふとさう

思つた事を考へ考へして歸る頃には、もう全くそれに相違ないと思ひこんで終つたが、只一言、「をばさん、あれは道しるべね？」ときくと、「あゝさうよ」と叔母は答へた。其時のうれしさ、よろこばしさ、あゝ何といはふか、自分でみて、自分で考へて、自分で判斷した事が間違つて居なかつたといふよろこび――ほこりはいかに純なるほこりであつたらう以後私は幾度そこを通つて幾度其のほこりを心の中でくり返して思つたらう。今も今、この讀本の繪によつて昔を思つて獨りほゝ笑んだのであつた。

斯う云ふ誇を持つことは誰しも能くあることです、之を自覺して且美はしい文字にしただけ此の君の才分は優れてゐる（醉茗）



（人）朝顔　北海道　岩本とよ子

○月五夜

京都　中野絹子

十二夜――夕方から叔父さんに招かれて高臺寺の萩を見る。篝火が小さな音を立てゝ燃えて居る、盛の萩の葉に露はキラ〳〵と赤く光る。赤い毛布の捨床几は絶えずふさがつて居ました。三味の音、醉人のだみ聲客の雜踏の中を赤い襷の茶店の女が往き來する。――眠つた樣な櫻の木の間を洩れて十二夜の月が冷かに輝いて居ました。

十三夜――それ迄居られるか、と思つて居た十五夜は明後日に迫つた。嵯峨野の月、名だけでも嬉しい。今宵も大堰の河畔に出て、昨日より少し丸く成つた月を寫して

見る、昨日は高臺寺、今日は嵯峨野の月を見るやうな心地がした。

小望月――雨　明日は日和かナーと危ぶむ。

滿月――お峰姉さんの老母が危篤と云ふので、午すぎから京へたつた。夜更けて死去夜伽ぎ。待ち望んだ嵯峨の野の滿月は見られず、深夜、用足しに出て、靜かな黑い京の街頭に寂しく懸る望の月を眺めた。

十六夜――葬儀も濟んだ、黃昏に家を出て、五條の橋の袂に立ちながら東山に昇る月を見た。綺麗な加茂の流れに映つて碎けて胸に浸み入る月の香りと、夜の韻と、東の河原に並ぶ高樓の灯影を夢の樣に見て小夜更くる迄、漫ろ歩いた。

五條と云ひ、嵯峨と云ひ、花洛の自然の舊きなつかしみと、月と云ふ歷史的の感想とが結び合つて、より以上に此文が綺麗に見えます、京都の人、京都の文、願はくは續々として若き才媛の現はれんことを（醉者）

〇朝寝　やなぎ

骨を折つてひとまひとま、市松に染め上げた障子を扨、大觀すると何にもない、白一色である。私の眼は此の無意味な勞役に疲れて了つた、渴いて了つた。見るものがボーッと然もかげろふの樣に微に搖れる。

さつきから胸が痛い！腹を押されて鳴くゴム人形のやうに呼吸をするたびに痛む。小さい時の胸の凹みのあたりだ。あの青白かつた胸の凹み！お湯でおさよさんに洗つて貰ふたびに「痩せてること」と、ニッと笑つて指をつく。私はそのたびに或る恐怖を感じた。その青白い穴を押されるのは肉體の鍵に手を觸れられるやうな氣がしたのだ。又凹んだかとそうつと撫でゝみた、くぼんでゐない、何うやら安心して兩方の乳を抑へた。フーフーと深い呼吸をしてるから尙更痛いわけだ。かうしてゐると神經が過敏になつて自分で自分の死ぬ時の光景や、死後の有樣など、つまらない想像が走る――。パッと朝日が障子にさすと室内が眼がさめる樣になつた。今まで客觀してゐた自分が、フッと現在に歸つた時、思ひついた胸の痛みは、何處へかくれたか。

障子の穴がお星樣の樣に二つ光つてゐる。疲れた眼で、凝乎と見てると、障子が危ふくこちらへかぶさつて來る――。

酸つぱい樣な、震へ上る樣なハーモニカの譜が朝の空氣を微動させて來る。二人ばかりの靴音が調子よく揃つてゆく、中學生らしい。小學生の小さい足音がゴチャ〳〵續く。山羊の樣な聲で中學生がしやべつてゆく、每朝每日、幾本の喉穴から出るかと思はれる樣なガア〳〵と調子外れたあのお喋舌の聲を聞かない事はない。男子のおしやべりは女子のおしやべりよりみつ

ともないとつく〴〵思つた。そら寢ももう倦きた。

斯ういふ大きな問題を、どうして斯う平凡に書上げたのか合點がいかぬ。只齋百い凹みといふ字が、非常に強く官能を刺戟するのを覺える（白羊）

○夕暗に葬むられつゝ

神保千代野

山を背にしてうねつた街は今落日の光をあびて力なく沈んで行く、街にそうて流れて居る川は帶の樣に長く横はつて矢張り儚ない夕日の影を浮べて居る、あゝ彼の夕彩の雲――丘に佇ずんだ私は凡べての悲哀を忘れてそれを見つめて居た。と見る間にあせて行く〳〵あゝ餘りに儚なき夕の光よ、私の胸は再び悲哀にとざされて終つた。日は何時か沈んで金色の美しい雲は刻刻にあせて淋しい醜い灰色となりとび〳〵の街燈にはぼんやりと灯がついて四邊はいつたいにもや〳〵と夕もやがたゞようて云ひつくせぬ悲哀の氣に滿ち〳〵て居る。街を遙かにへだてた此處へは何のどよめきも聞こえない只川瀨を走る水の音が何か神秘な囁きの樣にあたりの靜けさを破つた耳に響く、あゝ何と云ふ淋しさだらう、自分獨り此天地の中に立つて居る樣な氣がして心細さがひし〳〵と胸に迫つた。あら方散りつくしてわづか二三の病葉を止めた楢の木へ力なくからだを凭せて自分も此まゝ消えてゆけたなら――あゝ私は人から離れたい世間からはなれたい、ふとこんな事を思つて何處を見るでもなく茫然として居るうち暮れかかつた冬の日はまたゝくまに暗を重ねた淋しい夕の色にかうして葬むられてゆく事を好む私は何と云ふ淋しい女だらうと思つた。見おろす街は燈火の光を强めて居る、月なき空にまたゝく星の光を浴て足の向くまゝに落葉をふんでからだを運ばした。元より行くべきあてもないのだ、都を遠くはなれてこゝへ來た私は堪へがたき胸の苦痛を誰に語らふようもない今は情もいらぬ愛もいらぬ我から世の中を慘酷と恨んで死するまで空しく生くべき私である何をなげから悲しまう、今更に――。

冷え切つた頰をおさへてしづかに木の間を歩いて行つた。

結婚を唯一の誇りとせる女はあはれむべし、然れども戸に倚りてひそかに涙をしぼる新人はさらにあはれむべし、君が心はわが心を鉛のごとくにせり、夕やみ迫る廣瀨川の岸に立ちてふたゝびその手を取る者は誰ぞや。噫、豺虎不食　投畀有北　有北不受　投畀有昊（夜雨）

○飛驒の谷

信濃　やどり木

三月の日、青い色が空一ぱい漲つて、愉快さうに太陽が輝いてゐる。少女の心のやうな春の光りは、松本平に充ち溢れて來た。

未だに雪に覆はれてゐる飛驒の山々あたり、ちぎれ

ちぎれにミルクのやうな雲が漂つてゐる、新鮮らしい空氣だ。鳥は急しさうに鳴いて、遠近に聞える農夫の活活した笑ひ聲は、野に心地よく響き渡る。風もない、暖かな春の光りに地は蒸されて、野も煙り、岡も林も息づき、〃土の灰色に乾く臭ひも優しい懷しみを想はせる。鮮緑に萌えた麥畑、若草は、曠野に山に、奈何にか春を待つ心の烈しさを忍ばせたらう——冬！私の身に取つては實に暗い憂愁の時であつた。保福寺峠のあたり毎日のやうに灰色の雲が低徊つて、寒い風が吹き、霙がたばしり、總てが雪に埋沒て了ふ。あの冷たい思ひからは世を隔てたやうだ。天地の甦りには今更のやうに胸に流れる血潮の若々しさを感じる。

暗綠に濁つた奈良井川の楊柳道を海の方へ、放浪の旅人の幾群が行く。落魄の上に雪に閉ぢ込められた苦しい顔は、一樣に涙に濡れて微笑もない。放縱に戀慕の一曲に想ひを流し行く若い二人連れもあつた。私はそれを眺めた、私の心は暗い、今の身を考へては、自由に天地を放浪する旅人の群を美しいと思つた。何の煩ひもなく、自由に、人生の行路を歩るき、自然を想ふ事が出來たら奈何にか幸福だらう。

優しい春の色彩につゝまれても、儚ない人生に涙せねばならぬ悲しい少女——あの雲の漂ふ飛騨には、なつかしい友がゐる。氷河のあるといふその國の深い谷、永世日光の透らぬといふ憂鬱の谷から、立ち昇る灰色の霧、荒涼たる天地に、春なつかしい夢を偲んで獨り寂しみに泣いてゐるその面影、うるんだ瞳を想ふと、私の心は暗く沈んで行く…………。(信濃の日記)

文章は時流に投ずるやうに能く書けてある、一寸此位には書けないものだ、但し此文は女性の作らしくない、何うしても女性らしくないと思ふ(醉茗)

○南京蟲

本郷　葉子

夜中にフト眼が覺めた、信子は無意識に衿の廻りをなでると柔らかい物に手がふれた、つまんで見ると小豆つぶよりも小さな丸い物である。

寢ぎはに家内中してゆで栗をむいて喰べたから大方其の蟲だらうと思つて、叉指の先きで丸める拍子にわけも無くつぶれて仕舞つた。

栗の蟲なら麼樣な筈は無い、薄氣味が惡るくなつて來たので燈火を付けてたしかめ樣と思つてそうつと床を拔け出した。手さぐりで母の枕元を撫でたが中々見當らない、いつまでももづく〳〵して居るので母が遂うとう眼を覺ました、「何をして居るの」「今妙な物を捕まへましたからマッチをさがして居りますのよ」でたでたして居ると今度は父が眼を覺ました、「さう〳〵しい何だい信子、餘り早く寢たものだから寢あきたのだらう」「いゝえ父樣何かつかまへましたの」「何をねば

けて居るんか分るもんか、ぐづ〳〵して居ずとマッチなら新らしいのを下したが宜い」「エヽ」と信子は瀧じまのねまきの長いすそを引ずりながら臺所へいつた。

コトリと音がして便所の方に黒い影が動いて居る樣だ、戸じまりのしてある家の中に他所の人の居る筈は無いが家の者なら麽樣に騷いで居れば何とか云ひさうな物だと考へると、今迄默つて居たのが恐ろしく成つて來て急に脊中から水をあびせ掛けられたやうな寒さを感じた。便所からスーッと出て來るのを見ると妹だつた「氣味の惡い政あちやんね、何故だまつて居たの」と聲を掛けてもまるで狐にでも摘まれた樣な風をしてスーッと自分のふしどへ入つて仕舞つた。未だ宜く眼が覺めないと見える、現つなのだから屹度明朝起きてから聞いても今夜の事は知るまいと信子は思つた。

「母樣、棚に一ッも御座いませんよ」と信子が云ふと「おゝさう〳〵私が惡るかつた、昨日置場を變へましたつけ」と母が起きて來た「そんな事つては非常の場合に困るぞ」と父は寢ながら威張つて居る。

信子は母に取つて貰つたマッチをすぐにすらうと思つたが、いくら母の前でも餘りにだらしが無いと思つて、だらりとたれた淡紅色のシゴキを片手で卷き直した。

座敷へ來てマッチをすると蟲を摘まして居た親指と食指の先きに黑々と血がにじんで居る「まあ何蟲でしやう」

之れ丈の血を吸はれたのかと思ふと、眞赤に成つて襟くびに喰付て居た時を聯想して、暗闇だつたからこそ蚤位に思つて左程恐ろしくもなかつたのだと身慄ひした。つぶれた空は蚤の樣な色をして居た。

父が「南京蟲はすぐつぶれると云ふからさうぢやあないか」と云ふ、「だつて南京蟲なんか居る筈が有りませんもの」「其れもさうだがひよつとすると今日持つて來た槇屋さんの仕立物に着いて來たのかもしれませんよ、あそこの家には大變に居ると云ふ話だから」とは母の意見だ、何だか宜く分らないから兎に角なくさない樣に仕舞つて置いて明日明るい太陽で見樣と云ふので母は丁寧に半紙に包んで神棚へ上げた。

やがて家中に平和ないびきの聲が響き渡つて今度はねずみと猫の領分に成つて仕舞つた。

つまらない事がゴテ〳〵と書いてあるのだが、筆が達者だから可成に面白くよめる。併しつぶれた南京蟲を勿躰らしく紙に包んで戸棚にあげるといふ了見が僕には分らない（白羊）

○町の夜

高尾

不圖賑やかな三味の音がする、と其れにつれてゆる

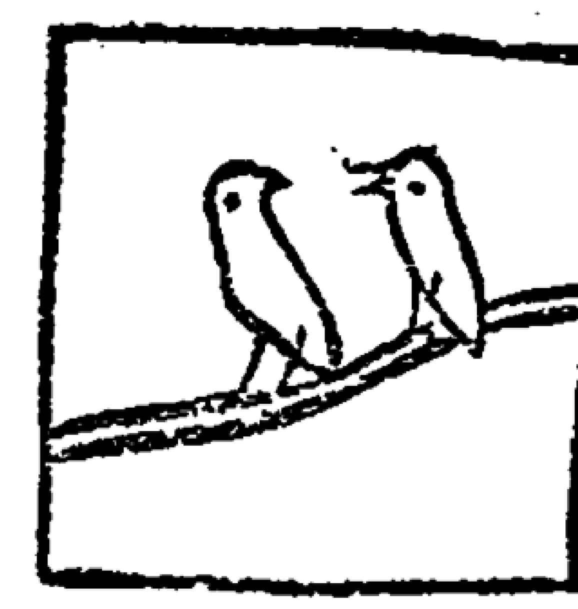
く低トコトン／＼と歌心をそゝる様な小太鼓の音が、天も地も凍り付いた様な霜月の夜の町へ生暖い水を流した様に傳つて來る、と高く強くトコトントントントン／＼、ヨウヨウ……と痲走つた聲がする、と吸ひ出された様に濁つたぼやけた聲でア……エ……、コラキタッ──と仇な聲が引たくる、障子にゆるゝ坊主頭と、つぶし島田と、太鼓撥握るおしやくの赤い袖口とを私は思つた。

傾國の惡魔の唇の匂ひと、官能を痲痺する毒酒の香と結ぼれ漲る空に、おゝとらはれた五尺の男子の魂よと私の心は又叫んだ。三味の手は益々烈しく知覺を亂混させようとする、歡樂の夢の絲を手繰る大皷の音律は、どこまでも低く長く咽ぶ様に尾を引いて凍つた夜の大氣の中に滲み込んで行く──。

○折にふれて

京都　なでして

烏が騷ぐ聲に椽へ出て見ると、腐れかゝつた柿の實が二つ三つ取り殘されたのを、烏が二羽爭ふて啄いて居る、と一つの柿がコロ／＼と落て、白う置いた屋根の瓦の霜をば消して地に落ちた。之れを見て居た妾は冬だ、あゝ冬が來たと云ふ感じがした。夕方裁縫を仕舞つて寂しい思にふける時、梅が女子文壇を持つて來た、早速取り上げて見ると、誌友の寫眞の中に知己の方が三人一所に撮られたのが出てゐる、本號により以上の寫り榮えで感心した、私等の送つた寫眞が探しても見え無い、何故だらう沒收になつたのかしらと思ふと、思はず悲しくなつて雜誌の上にハラハラと雫が落ちた。投書欄に目を移すと、和歌の地位に禰子様の歌が出て居る、早速お祝の手紙を出す事にする、日記の靜江様の秋二度三度繰り返して、一種の離愁と云ふ思が漲つて居る様に感じた、箏曲長恨歌あの楊貴妃の魂を方士が蓬莱宮迄尋ねにいつたと云ふ悲曲、それに斷絃の技巧を加へてほんとうに讀む者も悲うなつた。それに夜雨様の評を見て大なる疑問が起つた、果して此雜誌をお去りになるのだらうか？巻末には以前通り四人の選と有るし、あゝ解ぬ疑問、私は文が拙ないので日記の投書も一向せねど、毎號に見る選評一風變つた世を強ねて居るやうな、寸鐵人を刺すやうな文をば、興味を以て迎へてゐたに──何卒退社の事の夢で有れかしと願ふた。



小説

水野葉舟選

○苦しき女より（天）

小笠原　ゆり子

とし子様、御無音に打過ぎましたのね如何して此様に御無沙汰になつたのでせう、此前御手紙さし上げたのは……あれはもう去年の冬でしたわ、ほんとに申譯が有りません、御許し下さいまし。とし子様！私はもう實に實に苦しい日を過でして居りますのよ、全く頭の中がでつちやになるかと思はれますの、破壊！あゝ凡てを破壊して終つたならと此頃は此様な事許り想つて居ります。

あの○○女塾時代、貴女とは御同國の柳子様にそねまれる程仲がよかつた私……けれど正直あの時代には私は貴女の御心を充分くみ取る事が出來ませんかつたたゞ多くの人等と歩調を異にした貴女の性格が無意識の内に私を敬服せしめたのです全くあの時代には貴女の御心よりは却つてみづ〳〵しい情のあふれる様な柳子様の心持の方がよつぽど能く了解されて居りました眞劔なそして絶望的なあなたの人世觀を聞かされて居ながらやつぱり私はもつと〳〵明るいスヰートな戀を味つて見たいような氣もちがして居りました。それ其内に貴女は彼の學校の旨意が不滿で私がおとめするのもふり切つて御國に歸つてお終ひになつたんでせう。あゝ其後の私の行動は………あの當時の興奮した――今見ればほんとに馬鹿〳〵しい程な……手紙であらまし御承知でせう。

敏雄とあゝした事から今の家庭に入つた私は先生からは不貞操と云はれ御友達からは破廉耻とのゝしられ校友會を除名されて迄私は男と離れまいとあせつた。

あの時の私は自分の周圍も實に貴女迄も忘れて終つて居たのでした、然かし火藥に火がついた様な二人が造つた隱家はまあどうでしたらう、期待した家庭は……いえ〳〵申上げずとも貴女はとうに御承知でせう。とし子様のあの當時の寓意的な御言葉が私には解らなかつたのです、そのにがい結果を味はつて始めて氣がつきますの。戀をうばはれて終つたあとの男女ほど苦しいものは無いでせうね、實に私はたへられません。此

頃夜中にふと目がさめる時がありませう色々な事が胸に浮ぶとさア苦しくつて〳〵全く夜の明けぬ内に氣でも狂ひはせぬかと思はれる時がありますのよ。ね、とし樣、ほんとうにどうしたらいゝんでせう全くたへられないんですもの。いつそ一と思ひに此境遇をやぶつて出たらどんなに淸々して好いでせう。

此頃はくせの樣に眉をよせた男の顔を見るとたまらなく口惜しくなつて來て出すまいと思つてもボロ〳〵淚が出てきますの、どうでせうそんな時でさへ其をじつと見て居ながらまア一言だつてなぐさめて……いゝえなぐさめて呉れなくつても何んとか男らしくきつぱりと云つてくれたらどんなに此胸のかたまりがうすらぐでせう。意くぢなしと笑つて下さい、私はどうしてこんなに意くぢなしでせう。

然かしもう〳〵私は決心しました近い内に貴女の御家に此つかれた體を靜養さして頂きに參りますわ。とし樣、此頃の二人のどんな生活をつゞけて居るかをまア聞いて下さい。

昨日――好く晴た靜かな日でした、例の通り敏雄は朝おそく氣重さうに起きてきて「あゝ又此膳で飯をくはねばならないのか。」とかう云ふのです「何故です。」てきゝますと「あゝもうおれはあきたのだ。いくらりンゴが好きだからと云つてそれ許り食つて居ては否になつて終ふ。」となげ出す樣に云つて苦々しさうに庭を眺めて居りましたがつと立つて帽もかぶらず出て行つて終ひましたの。にくらしいぢやありませんかもう此頃は行先を云つてゆく樣な事は一度だつて有りやしないのですよ――とし樣が御出での時の敏雄とは丸つきり別人の樣です。あの時代の樣にカンパスと繪の具箱をもつたまゝ信州の山に一月も野宿をしたあの樣な賴もしい勇氣は無くなつて了つたのです、藝術に對しても又戀に對しても――私は男の出て行つたあと云ひ樣のない侮辱を感じて口惜しさがこみ上げて私は一人で泣きました。敏雄はお午になつても歸つてきません。

某先生の習作の裸體美人や京の舞姫風景色々の畫面がうるさい程壁にかけてある其下にスケッチ箱と大きなカンパスとが空しく片づけられてあるのを見るとさすがに過去の事がなつかしくなつてきて幾十となく壁に立てかけた畫稿を私は一枚々々一人で眺めて居りました。其内の一枚……たしかあれは去年の秋の展覽會に出しました「秋」と題した日光の山奥の一部を寫したもの、色彩の濃い落葉の上に光線が森の木の葉を

られて點々に光つて居る——忘れ得ない記念の畵ですの、私は淋しくなるといつも是を出しては眺めて居ります、此畵を見ると不思議な程たまらなくなつかしく悲くなつてきますのよ。昨日も眺めて居る内に彼の時の事が思ひ出され急に秋の野が戀しくなつて前後の考へもなく家を出ました。私はかうして敏雄の居ない時はいつも庭つゞきの丘山の原に行つては思ふ樣泣きますの。今の私には之が唯一のなぐさめです。栗木林の中の落葉の上に日光をあびて座つてると胸の中のかたまりがスーッと消えて終つた樣でたゞ此果てのない永遠な自然に感謝される樣な心になつてきて知らずに涙ぐまるゝのです。

わ。



默思　品川　内田よし

靜かなく野の中に南から北に通つた鐵路の上をゴーッと云ふ音をのこして通つてゆく汽車の音がジッと聞いて居りますと……あゝ何もかも打つちやつて旅に出たいと思ふ念が胸をついてわいて來ますの。いつ迄もくかうして座て居たいのですけれどあゝやつぱり家があれば歸らなければならないのですね。あのうす暗い二人の男女を縛りつけた家を思ふと實に苦痛を感じないぢや居られません。

夕方家に入つて見ると敏雄はまつくらな中に魂のぬけた人の樣に横になつて居るでは有りませんか。「まアこんな暗い中に、いつ御歸りになつて。」とき〻ますと「萬千さんこそどこに行つて居るんだ女のくせに。」から云はれると、私はもう苦しい束縛を感じて、默つて居りますと、「あ暗いぢやないかランプをおつけ。」と云ふけれど私はいつ迄も此暗い中に居たかつたのです、パッと明るい中に此二人の顏が浮き出るのがたへられませんもの。

ね、とし樣、私はだんぜん決心しました、ほんとうに近い内に御目にかゝりに參りますわきつと、どうぞまつて居て下さい。

○犬（地）

ひなげし女

K君は今年二十四だ、阿母樣と二人きりだ。さうして此間からチンを飼て居る。

朝起きると、K君は店の物を飾り初める。一番前の往來傍へ筆墨色鉛筆紙ノートボール等の學校用品。それから左側へ小說脚本講談實錄等、中央へ香水油石鹸洗粉櫛簪島田鋲紙根掛など、右側へタオルハンカチ手拭帯〆羽織の紐等が、調和よく並べられる。硝子戸棚には、赤や靑や紫が、とりどりに美しい彩色をして居る毛絲や、編物や、弄物や、ボール箱の樣な物が、澤山ある。K君は毎朝の事で手馴て居るので、五分許して阿母樣の朝飯のお手傳をするのだ。

それから玉（犬の名）の世話をする。紫地へ薄赤い牡丹の縮緬の元祿袖を着て、眞紅な繻珍の楓の織出の帯を締る。是がK君の日課だ。

玉は、失敬や、チン〳〵や、お廻を覺えた。

『K、お前△△の話は怎するエ』

『怎つて、………××樣のお話の樣では、妾は厭だワ』

『其麼我儘許り云たつて、考てご覧、お前も二十五ぢや無いかネ。………それに養子となるとネ怎したつて思ふ樣には成ら無いよ』

『ですけれど、此前の樣じや妾、こり〳〵よ』

『此の前て、あれはネ又別ですよ、あれ程の男では無いと思て貰たのが此方の誤よ………』

『ですから、よつく考たり……又聞て見なけりやだめよ……玉―玉やおいで〳〵サ、お廻をおし………お廻り、お菓子を上げるよ』

『それもさうですけれど、……全體なら二十四にも五

にも、お成りだと。孫の二人もある中だのに………死だ阿父様の、お目金ちがひでSの様な者を貰たのが、何を言ふても。………お上手々々も一度。今度は、失敬サ、姉様からお菓子をお貰へ』

『阿母様、玉はチン〳〵を忘れたのよ』

『さうかえ、……玉、どうチン〳〵オヤ、忘れたの……玉ちやんや、ネ、恁やるのだよ、前脚を上げて、オさう〳〵』

『も一度……上手だ事……姉様がお菓子を上げるよ』

玉は耳の垂れた、毛の長い、頭の天邊と、鼻の先と手掛處にニッと、脊中に北海道の様に、尾の先とそれだけが黒くつて、どちらかと云ば白い方だ。

店などへ人が來ると、直ぐK君に付いて出る。さうして注意深い目でお客の顔を見る。それからK君の手元を見る、鉛筆や石鹼を出すK君の手へからむ。

『厭ですよ、玉、姉様の邪魔許りして………』

けれども、肱のあたりへ嚙み付く眞似をする。

『マア此犬の可愛事、美しいチヤン〳〵を着て』

なんて云はれると、直ぐお客様に馴付く……はねる飛ぶ嚙み付く。チン〳〵お廻り失敬等を、來る客毎にして見せる。K君の外出の時は屹度お負して出る。例の元祿袖で愛嬌を振蒔て歩く。

『お宅あたりで飼れる犬は、一割德ですわネ………』

或るお客が恁麽事を云ふた。

K君と、阿母様との向合て居る炬燵の東側が、玉の居る處だ。唐菊の大形の更紗の、フックリした蒲團を二枚重ねて、其上へ寢て居るのだ。

屎はオシメで取るのだ。それをK君が毎日、井戸端で洗て居る。

『此頃はね、子持に成たら、オシメを洗ふにかまけてネ、何も出來無いんですよ』恁麽事を平氣で、近所のお主婦さん等と云て居た。

狂言を見にも一度連れて行た事があつた。大概の外出には連て出る。時には一時間位店番をさせておく事がある。K君が、阿母様が先へ歸て來ると、非常に嬉がつて、飛び付いたり、刎ね廻たり、足へ弄だりキヤン〳〵云て嬉がつて歩けない程だ。それからK君が、家の内を掃除する時は、尾を振て、戯れついて邪魔をする。

『馴れて來るとネ、自分の子供の様に可愛ものですよ………』などゝ阿母様が云た。

『玉ちやんや、姉様とキスしましようネ……』

斯麼事を云ふて、平氣でキスする樣に成た。
『お隣では、犬を大くしてK君のお聟樣にすると好い』
『さうネ、八犬傳の伏姫の樣ですワ……』
『顔が犬で、手足が人間なんて、隱分振てゐるわネ』
『今に産むかも知れませんよ……』
『まさか、オホヽヽヽ……』
井戸端で恁麼、會話のされた事もあつた。

或る朝……それは非常に寒い朝だつた。K君が朝起て見ると、玉の寢相が平常と異て居た。K君は驚て
『玉々、玉ちやんや……』例の注意深い目で無くて、ドンヨリとした、黝色の疲れた目を、眇の樣にして居た。光澤のある全身の毛が萎て、死色をして居る。息をするにも苦し相で、人間の樣に腹が出たり入たりして居た。K君が乳の所へ手を遣て見ると、それでも、鼓動だけは、懷中時計のセコンドの樣に烈しかつた。好きなお菓子をやつても、魚を遣ても、口だけ側までやるが一寸嚊で見て、悲し相な目をする。お腹を擦て遣ると、疲きつた目に感謝の影がゆらぐ。『玉ちやんや』と呼ぶと、ものうげ相に頭を少し上る、鈍い目を頼みなさ相に明ける、白い息が鼻から細く長く出る。足も手も首も尾も、棒の樣にした儘だ。
『何かに惡食たのでしよう』阿母樣が云つた。
『お醫者樣に見せ樣かネ、阿母樣……』
『獸醫で無りアだめですよ』
『獸醫と云へば町にも無いネ』
K君が怒たりなだめたりして、口の中へ仁丹を五粒許りやつと入れた。

○宿屋女（八）

重子

數へて見ると、私が春日館へ來て早二月、世は何となく寂びれてきました。彼時手紙を上げて以來二月の間、思へば長い御無沙汰でした。

お手紙頂いた時、泣いて讀んだことも覺えて居まするし、彼夜闇の中で朝迄あなたのお手紙を握りしめてたことなども、忘れやしませんの、けれど私は痛々しうに泣いて計りをりますもの、落ついて長い手紙など書いては居られません。伯母さんと云つたつて他人ですもの、けれど私がこんなに悲しがつたつて、伯母さんはちつとも、私に惡いことなどはしませんよ。今度來てからは道ちやんと呼ぶのは止めて、道さん〳〵といつも優しうにしてくれますの、眉をそる世話だつ

て伯母さんがしてくれますし、足袋一つだつて洗はせはしません。他の女どもは必つと淺墓な心から、私を幸福な者だと羨やんでも居ませうよ、でも私はすまんことですが、それが苦痛なのです。いつそ私を慘めに使つてゞも下されば、私が應うにか軀の處置のつけ樣もありませうが、久樣、私は伯母さんのお優しさが沁沁と愁うに怖しうに覺えますの。伯母さんは、見たつて毒々しい人ぢやありません、形なんか此頃では、大島の羽織へ銘仙の袷ぐらゐなものですわ、それでね、いつも絹物の前掛してますの、私にも綺麗な派出なのを買つてくれますの、私嫌ひでせう、困つて居ますの四十四五になりますが、一寸見は四十位にしか見えません、けれど私はあの眼が厭やです、昔あの眼で幾人の男の生命を縮めたらうと思ふと、ほんとに怖しう厭やになりますの、どんなだらうと偲ばせる程に、眉のあとは青いんですの、今でも淡いお化粧は止めないでせう、唇は少女の樣に紅いのです、其口から私の名は道さんとやさしう呼ばれます。

はじめてのお客樣方は皆私を春日館の娘がと思つて居る樣です。久樣私は、宿屋では禁制なお酒の相手にも出ますの、その度にもう赤い血はしぼり出される樣に思ひます、皆の酒席毎と云ふのぢやありません、上等のへは必つと私を出しますの。私も此頃は上手になつて、かへつて客に氣を揉せて機嫌をとらせます、男つて弱い者だと思ひました。何か云はうものなら、何かしようものなら、憤つて拗ねて席を飛び出さうとして、客に氣を揉して、それを面白がつて居ると云ふのぢやありません。久樣、寂しい私の心を察して下さい、社會の裏面は怖しいものです。

今日も私が椽に坐つて新聞を見て居ると、滯在の松田と云ふ三十男が、庭の方からのつそりとやつて來て「道さん今夜に芝居へ行かうぢやないか」と云ふのですから「さあね、伯母さんに訊いて見て」と云ひきらぬうちに「道さん連れてつてお貰ひ、私も行くから、是非、ぜひね」と伯母さんは飛び出て來て、私にすかす樣に云ひますの「えゝ」と云つたきり私は其まゝ默つて了ふと、松田と伯母さんとはいろ〳〵芝居の咄しを始めてました。私はそこを立つて庭の芝生の方へ歩きました。

其談が終に實現されて、今夜松田も伯母さんも、赤だ二人の女も盛裝で行きました。夕方が來ると伯母さんはお湯の何のと私を急き立てましたが、私は頭痛を

名にして、出足となつて遂々止めて了ひました。實際あんな人達と見になど行たつてつまらないことですし馬鹿らしいですもの。皆の姿が三間位行た時に、私は急いで墨をすつて此筆を握りました。ほんとに私はつまらないと泌々思ひますの、何しに生れて來たものか隙さへあれば考へてます、私の心を知つて居て下さる人は、今ではもう久樣計りです、世間の人はどんなにも評して居ませうよ。久樣、長尾先生でさへも、私が當家へ來てから二度目のお便りには斯うですもの「道さんのことを思ふと此頃の女が解らなくなつた、矢張り私も女の一人だけれど、本當にあなたの氣が知れない、赤い半襟に白粉顏の宿屋女の群に入つた道さん心に同情せずには居られません、あなたの心はそれ程迄には未だ腐つては居ないでせうに、何と思うてそんなまねを、うか〱といつ迄して居ますか、どうにでもしますからお歸りなさい。あなたの樣な人がそんな處に居ては、下卑た心になつて可愛想でもとりかへしがつかない、捨てともなくても世間が二人を隔てますよそれとも、もう今の境涯が面白くなつて居れば、多くは云ひますまい。あなたは顏が美しいだけ、尚人一倍心を縛つて居なければ」五尺にあまる師のお手紙はてんなことでした、決して無理だとは思ひませんが、私の心は師のお言葉よりも清くて強いつもりです。

あれを思ひこれを思うては、もうなすがまゝに任せ樣とも思ひましたけれど、私は未だ若い。久樣私の軀は未だ人間臭い匂ひがして居ますの、いくら伯母さんが喧しく云つたつて、私は此頃では眞からレートの香だつてイヤになりましたもの――。

昨日の事でしたよ、二人で首をひねつて讀んだ○○詩集ね、當家へ來てはじめて、久々振りで明けて見ましたの、もう持つと其まゝにふら〱と庭へ下りて、和かい秋日を背にしてシヤガンだまゝに見て居ますとそつと私の肩を摑へたので振向くと、これも滯在人の一人で、脚氣とかだつて夏から來て遊んで居る、淺野と云ふ二十四五の近眼鏡の男でした。「驚いたらう」と笑つて居るから、私は默つたまゝ立つて、椽へ腰を掛けたなり男の顏をイヤと云ふ程見てやりましたの。淺野も側へ來て腰をかけて「あなた宜いお心がけですね」と云ひますの「女としての心がけなら宜いですとも」とすましきつて云ひますと、「否あなたは文學に熱心な方と見受けたと云ふのです、中々詩的な人だと思つてたが――」と案外眞面目に出られたので「そんな

ことないんですが、あんまりくさくさするもんですから」とつい優しく云ひますと、「はじめから並の宿屋女らしくはないと思つて居たが、詩を愛する人とは知らなかつたね」と、私は詩を愛するもちつと大仰なと思ひましたの。こゝから西のある素封家の息子らしいそして何でも早稲田の文科生だとか伯母さんが云つてた様です。「秋は寂しいと感じませんか」つて云ひますから、「はぜの葉が紅いのを見ると綺麗だと思ふことや、お日の光が弱くなつてゆく位のことは知つてますわ」と云つてやりました、こんなことをはじめて近頃云つたものですから、急に氣が昂つて來て何とかあひての頭へしみぐ\沁み込む樣なことが、云つてやりたくてならなかつたのですが今の私はすべてを愼むべき時だと思つて、其まゝ默つてそこを去りました。今日は一日顔を逢せません、何か頻りに書いてるさうです。

何と思つても私はつまらない、今も茶の間では、長尾先生の有仰る赤い半襟に白粉の顔の女が四五人騒いて居りますの、客を相手にふざけて居るのでせう。

書けばいろ\/\あるのですが、つぎにしませうね。只酒席へ出されると云ふだけでも、どれ程の苦痛に泣いて居るか察して下さい。「ほんとに道さんは餘り堅くるしいから、つまり道さんの損だわ」と云はれます。



友の面影　芝中野こま

選評

選者

今回の投書には概していゝ作が無かつた。相變らずの作ばかりが集つて居るのを感じた。自分はも少し、諸君が生々と進歩して行かれるやう

に、努力される事を希望するのである。

さて今回、選評をするに際して、自分は流水女と言つた人の最後を思ひ出して、深く心に感じられるものがある。自分はこの人については、その手で書かれた原稿に依つて、その人の創作を見た外、何の知る處も無い。が、あの人の作で、自分が最後に讀んだ短篇の中には、不思議な陰影があつた。もし、あの人について特別に心を寄せて居られる人があつたらば、も一度去年の十月頃の本誌を出して、あの人の作を讀み返して御覧なさい。自分のこの言葉が僞でない事を了解されるでせう。

自分は、あの人の作の中から、實に不思議な不安が生きて、この胸にからみ付くやうなのを感ぜしめられた。薄暗い穴の中を覗いて見て居るやうな、計りがたい淋しさと、不安さとを感ぜしめられた。誠にあの人の藝術の背には不思議な影があつた。今、自分はその陰影と、あの人の横死の様とをつなぎ合せて考へて見ると、何とも言はれない心持がする

彼女は遂に死んだ!

讀者諸君は、彼女の爲に、せめて一瞬間でも再び其名を思ひ出し給へ。

これは少し岐路に入つた。では、今回の選評をする。

△**苦しき女より**(小笠原ゆり子)　この作者は、今が道の分れ目に立つて居る人である。手の觸るゝ力、感情の動搖はたしかにある。見得る力もある。しかし、それを靜かに考へる、沈んだ聰明な目が足りぬ。思考の力と制作の手法とが幼稚である。たゞ、この誌の全體のレヱルよりして、やはりこの人は新しく出た芽生の一人である事を感ずる。

△**從兄**(はる子)　言葉に巧みな處があるが、作としてはやはり平凡である。

△**犬**(ひなげし女)　何處か、ピントの合はぬやうな心持がされる。面白い心持を捕へてはあるけれど。

△**田舎の醫者**(ゆみ子)　こんな處からでもいゝからいゝ方へ、前へ歩み出して欲しいものだ。

△**光明**(馥子)　たゞそとから見て居るといふだけの心持だ。

△**花嫁葉嫁**(鈴木春子)　達者な處はある。しかし、何處にも心が生きてものを見て居るとは思はれない。如何な感情にも重さがない。火も無い。たゞ口達者と言ふに近い。もつとこの人などは自覺して欲しい。

△**傍觀**(紫陽花)　も少しと言ふ感じがする。斯う大ざつぱでは困る。しかし巧みではある。

△**邪推**(新田文子)　斯う言ふ小說は極く低級のものである。『己が罪』だとか『めをと波』などの面白味と、馬鹿々々しさとを兼ねて居る。

△**宿屋女**(重子)　「世間」に支配された考へが根底をなして居るものの言ひ振りだ。感情も滿ちて居るが、その感情の幼いので、たゞ人にそのものを言ふ人の幼さを思はせるばかりである。

△**下宿屋の娘**(久芳清子)　平凡。

△**幸者**(蔦紅)　やはり本誌でよく見るたちのものに過ぎぬ。

で、以下の順序でとる。

△苦しき女より　△犬　△宿屋女　△從兄

△傍觀　△花嫁葉嫁

○從兄

はる子

八時を打つと、横道の人通は全く絶えてしまつた、雪が降るのか、霜やけのむづかゆい夜である。

茶の間に話して居る、母と祖母とが、時折聲高になるのを、きくともなしにきゝながら、お光は火の少ない火鉢の前に靴下をあんで居た、湯あがりの上氣した顔は茫とあからんで、水々した桃われに白丈長がくつきりと、年よりは若く見せて居る。

お光は十八になつて、始めて化粧の仕方を知つた、美しく化粧した姿をながめても、よいとも思つた事のないお光が、ある夜、氣なしに明けた鏡臺の中から、去年のまゝの御園のねりが、かたまつて居るのを見てにはかに思ひ出した様に、恐る／＼化粧して見た。

知らないだらうと思つた母は、次の朝、美しくなつたといふてほめた、祖母にも「若い時許りぢや、御前許りなせ化粧せぬと思つて居た」といはれて、なんとなく嬉しかつた、御湯に入る度、美しく化粧して、一人鏡の前に座つて、こい眉の、我れながら美しいと思つたこともあつた。

「お光ちやんおいでかいー」からりと障子があいて、きちんとしめた角帯の男が障子のそばに立つた。

「おやいらつしやいー」ぱつちりした眼に、美しい表情を見せて、につこと笑つたお光に、吸はれる様に火鉢の向ふ側に座つた。

「茶の間にいつていらしつて！」

「いや入らうと思つたら何か話しがあつた様だから！」男は袂から敷島を出して吸ひ始めた、お光は相變らずいそがしさうに手を動かして居る。

男は孝一といつて、從兄で四つちがひの、振わけ髪時代からの友達である、兩親に早く別れた孝一は、叔父の家に養はれて、店の手傳をして居たが、なにかにつけて冷たい叔父のしうちに、母の愛を知らぬ孝一はたれより、光子が好きであつた、たゞ會へばそれでよい様な氣がする。

「お光ちやん、きまつたつてねー」

「なあに、――」

「とぼけるね、話したつてよいぢやないか、そんなにきらはんでも」お光はぎつくりとして孝一の顔を見たきりゝと結んだ口、鼻の高い、眼が馬鹿に光つて見えたので、すぐ眼を火鉢の灰に落した。

お光の養子問題も久しいものであつた、昔風の祖母と、割合に今の空氣を吸つた母とは、此問題についてとかく折合が惡るかつた、お光はよくそれを知つて居た孝一も知つて居た、總領と生れて、心を打あけて話しあふ人もなかつた、孝一にと思ふけれども若い同志

でそんな話しをするのは、恥かしいやうな、なんとはなしに氣がとがめて、ついぞ話したこともなかつた。女といふ運命にとらはれて、動き得ぬ意久地なさをよく知つて居た、けれどももう別に反抗しようとも思はなかつた、母が父を養子にむかへた、それと變りのない運命をくりかへせばよいやうに思ふが、只一つ孝一が、なんとはなしに擧動が變つた樣に思はれて、不安さの餘り、とかく逢ふのをさけて居た。

「いつ迄もやゝで居るものかねー」茶の間の祖母の聲は高かつた、お光ははつとした、孝一はだまつてお光の顔をながめて居る。

「光ちやん、きまればこんなにしても居られないね、…少さい頃、あの頃はちひさかつた、忘れられないよ……」ちつと口元に淋しい笑を見せた、お光は堪へられぬ程壓迫を感じた、後にも先にもこんなことをいひだしたのは始めてゞある、なんと返事をしてよいか、たゞもう恐ろしくなつた、幼ない時、よく御夫婦とからかはられてこともあつたが、雪のふる或る夜、親類の咲さんの祝儀で、母も父も祖母も出かけて、只二人留守居に殘されたとき、あの夜、あの夜、お光はぶるぶると身ぶるひした、さとられまいと動かすあみ針にも劇しい心臓の皷動が傳へられる、お光が八ッの時・・・

「お光ッ」

茶の間で母の聲がした、立ちかけた足に、くる〳〵と毛絲がまきついたのを、ぷつりと切つて障子を明けた、孝一は黒い毛絲の玉を、わけなくひろつてお光の後姿を見送つた。

○傍觀

紫陽花

座つて居ると足の先までじん〳〵と痛い程冷たい。光代は先刻から居間の六疊の机にもたれて見るともなしに婦人雜誌の頁を繰りつゝ外の木枯を聞いて居る。つい一間距てた臺所で、宿の婆さんとその娘とがひそひそ聲で語るのが耳について、ならない。——アハヽ、ヽヽと子供の哄笑。目を細くしてあやして居る婆樣の顔が見える樣だ。——「御免なさい。馬鹿に寒いなあ」ぐわらりと勝手の障子をあける音がした、光代の聲ですぐに婆樣の婿——娘の夫——だと知つた。何となく底意地の惡い樣な顔附をして居る男でちよい〳〵お婆樣の處へ來る、光代は嫌ひだつた。「信枝來て居るのか」と言つてドッカリ火鉢の傍へ座り込んだらしい。

火を取りに行かうと思つたが何故か行く氣になれなかつた。宣雄々々と言ふ聲が時々聞える。小兒の笑ひ聲――。奥に光代の居る事は忘れられてゐるらしい。自分には關係のない事だが、光代は何だか欺かれた樣な心持がしてならなかつた。

さう、婆樣が暇に飼ふと言つて拂つた春蠶の頭が白くなる時分だつた、大きなお腹を抱へて苦しさうに桑つみを手傳つて居た娘の姿を思ひ出した。イヤ時々まだ奉公中の娘の事を「淫奔」な奴とは言へ可愛相な身の上だで……御父は嚴格家だから……難儀な者で御座ります」とこぼして居た婆樣と今の婆樣との矛盾?を怪しんだ。

當時光代の隣室へ來て居た、養蠶の巡回教師が退屈まぎれに「己が罪」を讀むのを傍で聞て、環の身の上が信枝――娘――にそつくりだと言つて泣いた婆樣を光代は傍で氣の毒な樣な憐な樣な感で默つて見て居た。

或日の事である、光代が他所から歸つて來ると、見馴れぬ女、銀杏返しの根が歪んで、細かい木綿縞の着物を不恰好に着た女が勝手で働いて居る婆樣に促されて、おびえた樣にお辭儀をした、大きな腹で光代はすぐ彼女だなと悟つた。

福本さん――養蠶教師――はその日そつと光代を招いて「私生兒をこさへて、のこ／＼歸つて來る娘も娘なら、默つて庇ふ母親も母親だ、それを敢て怪しまないのは此處等の氣風だものねえ、嫌になつ了ふ、僕等の母なんかほんとに嚴格なんだからなあ、男の僕にさへなか／＼監督がきびしいですよ」と笑つて言つた。

此時分福本と光代の事に就て、兎や角評があつたのは二人もよく知つて居る。

「女の貞操なんかてんで頭に無いのでせうか、さう心配して呉れなくつたつて……」と二人で時折笑つた事も有た。福本が收繭を終つて故郷△△へ歸つてから間もなく婆樣の娘が出產した。光代は毛糸で涎掛なんかこしらへて遣つた。宣雄と云ふ名も光代が附けたのだ。

その頃娘の奉公先で同じく奉公して居た情夫から要領を得ない葉書が舞ひ込んで光代が讀んで遣つた事もあつた。「信枝の着物やら何やらすつかり取込みやがつて、何度言つても寄越しよらぬ」と口汚なく婆樣の罵るのも、聞いた事がある。その後色々と紛紜た末とうとう一緒になつたらしい。光代が夏休暇を終つて歸つ

て見ると、古い襁褓やねんころが臺所へ散らばつて、髮をぐる〳〵に束ねた娘がだらしなく子供を抱いて遊びに來て居た。

嫌な顔附の男が婆樣の處へ出入し初めたのもその頃からだ。娘も婆樣も前の事は忘れた樣な平氣な顔をして居た。

○花嫁葉嫁

鈴木春子

「あのね、お芳さん……そいから誠に濟みませんがネうらでしを一つ、そいから、座蒲團八枚に火鉢三つにお小皿を十六七枚許り、あの、お母さんは？……」

「畑へいつてますの……何か何ですか？小母さん！」

「え〻……今度嫁がネ、何でも御主人のお供で西洋とかへ二三年洋行してきたさうでネ、大分、年や取つてるけどネ」

「ま、御目出度う……もう御安心で御座いますネー…小母さんも……」

「え〻有難う……」

と、黒皺の深い三角形の猫顔を少し傾げて、自慢とある心の見え透いた一種の口調で、

今度ナネ、年やもう二十八だけど、何でも西洋（と力を入れて）へいく位ぢや、よつぽど氣が利いてなくちやと思つてネ、そいで向ふでも當世柄で「質素」にして置き度いといふし毎々の…もう何處へも知らさないで、唯内輪丈で、こつそりやつてからと思ふんでネ」

「さうですか、ぢやア少しどうか、ぼんやりだもんで、内に居て内の道具の在所しらないなんて、ぢや、少し御免なさい」

と、私は燒きかけのお魚を七輪から下しといて、トツ〳〵と戸外に馳け出す。鈍い陰影をもつた暗綠と、明るい紅葉や、狐色の葉の、雜然と群をなした、雜木林に、午後三時の光線がキラ〳〵と、銀色に反映して、其の奧の方に、白い手拭が透いてみえる。

「あ〻お芳さん……よござんすよ、夕方でも、……お忙しいでせうから……」

「いえ、よござんす、あ、さう、ぢや、歸つてきたら……」ハア〳〵と、呼吸をはづませ乍ら、凝と、私は或物を見詰めて居た。よた〳〵した粘液質の鼻低な男の子が、泥まみれの棒切で、バタ〳〵と、傍の山茶花の垣根をた〻いてゐる。ばら〳〵と紅の花瓣が緣くゞると、バラ〳〵と、黄な蕋が續いてこぼれた。

私は、何も、凝乎と、其れを見詰め乍ら、
「普ちやん！おとなですネー……ほんとにもうおばアさんもお世話がなくつて……」
私の聲は、ふるへて居た。
「いえ、もう惡戯者で〳〵、仕樣が無いんですよ、此間もネー」
と、べちや〳〵、例の紋切形の愚痴をこぼし〳〵、口角泡を立てゝ、喋舌らうとする氣色を見て取つた私
「御免なさい、ぢや、夕方取りにいらつしつて……」
と、切拔けて、トツ〳〵と、臺所に入る。普ちやんは、鈍い目で、ぼんやり私の方をながめてゐた。チリ〳〵と、あぶらの燃え立つ鐵きゆうの上を見つめ乍ら、私の心は、木戸を出てゆく、二人の後姿を囚へて居た。白い細縞の袷を着てゐた……瞼が赤く泣き腫れて……
……頰のやせた、紫の斑のある細長い顔へ、ばら〳〵と、油氣のない赤茶けた毛が亂れかゝつて……それは、普ちやんのお母さんなる人である。……
丁度、一昨年の初夏であつた。青一色の庭面に、漲ぎり溢れた、朝十時頃の清い光波は、きら〳〵と、痛ましきまでやつれたる彼の女の額を照らした。
勞働に馴れた、黒い、コチ〳〵した細長い手、背の

高い割に至て肩幅の狹い、額のせまい、眉の薄い、鼻の細い。……にぶい、俯向きがちの小さな瞳の底に潜める、暗い〳〵運命の影……。
彼女の姉は、矢張り、離別の悲哀に堪え兼ねて、レールの露と消えた弱い人であつた。
向き合つて、いろ〳〵と慰めて居らしつたのは、頰の赤い、瞳のすばやい、口許の締つた、ふつくらとした母樣のお顔であつた。
赤い鷄頭を振り立てゝ、餓ゑたやうに、三四羽の雛が、枯草の交つた龍の髯の內を、コツ〳〵と、つゝいてゐる。
「おや父樣！燒けましたから……」
と、私は、障子の傍の火鉢にかじりつくやうに固く坐つて、ガリ〳〵と、頭かき〳〵新聞よんでゐらつしやる父樣の前にお膳を据ゑた。見ると、汽船の內で買つていらしつたらしい、婦人世界、九星早見、無名通信、實業日本、金滿家一覽表等が、ゴチヤ〳〵と、投り出されて、大きなお菓子の袋が、其の上に載つてゐる。
「そうれ！……」
と、ぞろ〳〵懷から、十四五もある人形を出しかけて、幼ない私達を驚ろかした、亡き祖父樣を思ひ出

した。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

カンテラの燦けた灯に、ぼやつと、薄赤く洗出された闇の庭、層をなした洪水枯れの木の間を、バタ〳〵と、鉈を閃めかしてゐる二人の黒い影、犬猿さながらの男女達は、互に怒つた樣に默り合つて、執着の生の香の、青く斑に、漂うてゐる樣な空氣の内に、コッコッと働いてゐた。

「ネー、はつ…ハヽヽ嫁つ子でも見にかないかハヽヽハヽヽ」

くすぐつてやる積りで云ふと、くるつと、反齒が此方を向いて、ハヽヽヽヽと、笑ひ倒けた。老けた二十歲顏に、赤い半衿が踊り立つてるやうに目に立つ、と、一間程先の闇の内に、鉈の手を休めて、くす〳〵と、堪らない樣に笑ひころげてゐるものがある。

私は、さつき、父樣の口から洩れかゝつた、せんりつすべき、あることを思ひ乍ら、湯殿の方へ歩るいてゆく。

クラブ洗粉、練白粉チック一錢五厘の櫛と、思ひうかべて微笑し乍ら、私は二人を振返つた。

遺傳！……遺傳………恐るべき遺傳……

「ぢや、肺病ですの？」

「マアそんなもんサ」

父樣の笑ひ方は怪しかつた。

親も親なら……世間も、世間……

いつまで一人で──置くのや──ら……

此處からザッと、一里も奥の木下川村で二十四五を頭に、綺麗な五六人の姉妹達が赤い襷で田仕事し乍ら淋しい……………淋しい聲でかう繰返して、うたひながら、のろふやうな眼付をして、じいつと、往來の人達をみるさうな。

去年、裁縫のお稽古に通つてる時分、東京から引込んで來た、お葉さんといふ、きりよう好しの友達に聞いたはなしである。

お庭には、紫雲英の花が、赤々と日を吸うて、池に覗いた、濃緑の松が枝には、よく、羽色の鮮明な、小鳥が來て、鳴きもせずに枝から枝へ、飛びうつつてゐたつけ。

「まるでをどつてゐるやうネ」と、首ふつて裁縫してるのを華かに笑つた、白瓜のやうな顏の快活な、てつ子さんも、笑はれて共に笑つた、人のいゝ、すが目の

おきよさんも、もう他家の人、我が子のやうに、御親切にお教へ下すつた御新造樣、今はたゞお一人で、お弟子をとらずに、大眼鏡かけてチク〳〵やつていらつしやるが、さぞ思ひ出の多くいらつしやる事であらう。お子樣は帝大にいらつしやる御子息に、品のいゝ、お孃樣お二人、みなさまいい方で、孝行をつくしていらつしやる。方丈樣は、大の犬好きでいらつしつて、よく夕ぐれのおつとめの濟んだあとは、徐々と、庫裏の方へいらしつて、錆びたお聲で、

「ぢいや……ぢいや……」

と、お呼び立てなさる。

「ハイ、ハイ、」

と、ぼだい樹の下の莎莪の間にうづくまつて草とりしてたのが、速ぐに馳けだしてきて、手をつかへぬばかりにかしこまつて、頭を下げると、

「ぢいや……ワンに飯やつてくれ……」

と、じひの籠つた大樣な聲でおつしやるのが例のやうになつてゐた。

そのぢいや、まだ三十一、ぴん〳〵した勝氣のお母さんと、十も年下のだんまりのお嫁さんと三人、墓場の内の地藏堂でむつまじく、くらしてゐる



髪結ひ　岩代　さくら

芭蕉の句

芳野にてさく見せうぞひのき笠

花のかげ謡に似たる旅寝かな

昔摘て賢なる女はたによる

紅毛も花に來にけり馬にくら

誰やらが姿に似たり今朝の春

うぐひすの笠落したる椿かな

鶯や柳のうしろ藪の前

明暗

十年、眼を病める君あり、髪を斷つて家脫れし人あり、明るき心を持てるあり、暗き涙をつゝめるあり。しかも歌に若きいのちを托せて生くるは一なり。聞け聲は低けれど強し、誰かわれ等の口をふさぐを得む——

○　若杉濱子

はたちとは野に捨てられてふまれたる虞美人草の花のなきから

○　太田きし子

とつくてふことも忘れし身のほどにふさへるなげき歌よまんかな

秋とともに落葉のごとく君とありかなしからずやこのなれのはて

秋の夜更たかき梢の風を聞くあかるき心つめたきこころ

○　山村龍子

茶の花やこの一つ家の深き室に少女のありて日でと琴彈く

翼もつ心は君をふる里の山の外なる君をこそ思へ

美くしくひろき都は見えねども靜かに伊賀の山に抱かる

新らしきランプを點けていまだ見ぬ都の街の夜を想ひぬ

うす青く焚火の煙たちてあり十ほどならぶ霜屋根の中

逢ひがたく歎きし果に撮る姿狂へるさまに寫らんもよし

清らにも澄める鏡の前にして長き髪をばのどかにぞ梳く

○　原田琴子

海中にたゞよふ船か春の野に遊べる蝶かみ心のわれ

袖ふりて風流男行けば道の邊の花も少女となりて迎へん

美しと君がたゝへし髪なれば一人ありともいたづらにせじ

はるかにも君が打ちふるみ袖より風の起りてわが髪やふく

風流男の君と歩めばわが袖ゆ花もふるとや人の集へる

わが道のはてにかあらむもゝ色の雲井に入れば君のおはしき

旅なれば風流男なれば妻ならぬ美しき子も神はゆるさむ

○　三ヶ島葭子

捧げんと思ふ心の器なる身ははや君のみ手にありしか

淀にゐて早瀬の末にわが見るは今の今までならび來し船

君が吸ふ刻煙草の毛の色の君が撫でます犬とならまし

幽靈の如き影をば草に投げ心の玉は君に捧ぐる

戀ふと告げあはれむといひ捨つとさへかはるみ言葉いぶかりもせぬ

白雪に君が屋根なる黄金の甍に重くつもるのみかな

あはれなる雀の歌にはやされて冬は來りぬ後妻のごと

○　山田邦子

たゞ一人林檎をかめばおもひでの味のしづかに胸にしむかな

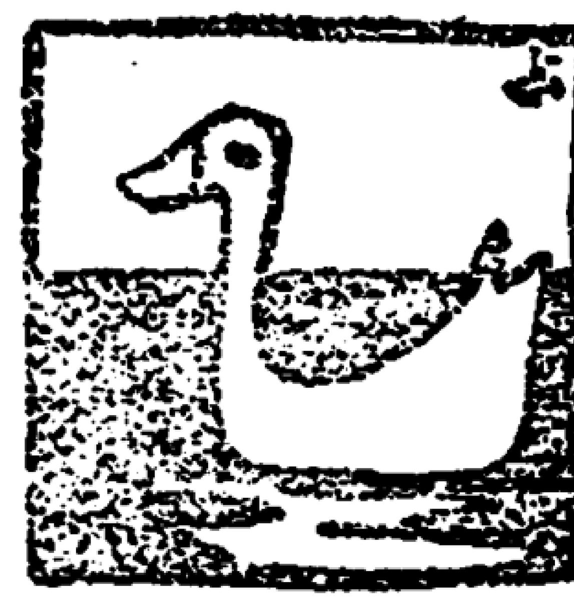
故郷よ我になつきし末の妹が我を忘れてたけのびにけむ

紅の襦袢の袖を縫ひし日も木枯聞きて信濃に生ひぬ

あなあはれ玉子にふれなあなあはれ女の如き玉子にふれな

あはたゞしう胸かきいだき咽び泣きつかれては物をいつか忘れつ

生れがら悲しき時もつらき時もかゝはりもなきせめ太鼓うつ



和歌

與謝野晶子選

○（天賞）　静岡　高尾

ある時はわが世なりけりある時は君が世なりき戀のこし方

○（地賞）　麹町　三田村あき

馴れぬれば戀しき心忘れゆくものとおもへる君はうらめし

○（人賞）　陸前　小岩やなぎ

北上の河のぼりゆく小蒸汽の水夫がすなる尺八の聲

佳作

○　福島　春子

などかくも思ひや悲し旅にわれ黄なる銀杏の散るをながめて

○　久留米　絲柳

目とづれば我が胸の野に紅の花むしりつゝある君こそ見ゆれ

○　群馬　昇かほる

此の頃は伯母の來りて泣く顔も見ずなりにけり近く死ぬらむ

○　伊賀　山村龍子

水鳥の水に浮く如われもまた世をおほどかに浮きて遊ばん

○　牛込　平塚白百合

春の風一夜きたりて山に青野に紫のおもかげをしく

○　豊後　菅原芳子

被衣してみ沓の跡を追ひけるはよべの夢なりしら梅のはな

○　本所　林白愁歌

目を閉ぢて神に祈れるこの人は老いし僧にもあらなくにあはれ

○　淡路　留子

雨の如落つる木の葉を背にあびて草は行きぬかはたれ時を

○　麹町　島白灯

わが胸をまが鳥のきてついばみしよしなしでととさては思へど

○　岡山　なぎさの子

春はくる君をうしなひ死にはぐれありてよしなき身のすくせにも

○　埼玉　中澤たか子

君が家おほつでもりのその日にもピアノひゞけり白きまどより

○　千葉　松崎きん子

水仙は黄にかなしめりわれはたゞ人故となくかなしみて居り

○　岩代　鈴木さくら

目に見なれかはらぬ庭の松さへもうら珍らしき初春にして

○　徳島縣　蔦　紅

まことわれ心の燃えて思へりと君の知りなば旅立つまじを

○　山口縣　白　菊　女

秋更けて靜けさまさる湖のなぎさの薄白く花さく

○　京　都　夢　子

古りにたる羽子板出だしつくぐとながむるしばし十五にかへる

○　金　澤　む　ら　さ　き

悲しげに夕の光り流れたる六路をあまた人のゆく時

○　常　陸　古　島　花　子

温かき心のこもる御文かたのみてわれは今日もくやまず

○　備　前　時　岡　秋　衣

あさ霜のきらめく庭にしら菊のやゝ紅みたるおとろへさびし

○　備　前　縣　谷　數　子

若人のうつり氣多き戀思ひはゝゑむ日なり紅椿散る

○　京　都　高　橋　節　子

夜ひと夜黑かみ亂しわれ泣きぬ戀しきことのやるせなければ

○　伊　豫　高　橋　政　子

雲重し木の葉はすべて散りはてて鳥もきなかず年くれんとす

○　會　津　桑　原　仙　子

君戀ふる切なるこゝろつたへんにいかに云ふべき數へよさうび

○　鳥取市　登　志　子

戀をして日頃を居れば天地は夢のやうなりわれの二十二

○　三　島　曉　村

大方の男が泣くもあきたらずなほ一人の君にかつまで

○　會　津　譽　女

吹く笛の消え行く空のうらさびし秋の月夜の湯の川の岸

○　岡山市　立　岡　房　之

若人の戀の心は大空に輝く星もとらむとぞ思ふ

○　遠　江　宮　司　み　き　子

弱かりとはじめて我を知りてよりことさら戀に近づかぬかな

○　長　崎　永　井　圭　子

はらからに人のましらて燈火の明るきもとに歌かるた取る

○　新嘉坡　本　田　の　ぶ　子

いとはしき人に魂與へむは蛇とあるよりうとましからむ

○　筑　後　柴　田　百　枝

堪へ難きくるしさ秘めて十重二十重笑につつまむわが世ならねど

○　上　總　森　川　秋　子

淡暗き壁に身をよせ我を見て苦るしく咲ぬぐひ給ふや

○　千葉縣　紅　谷　は　つ　子

學校しつ君を待つなり夕ぐれに風吹き白きこすもすの散る

○　信　濃　西　澤　都　美　代

よどみなく河に流るゝこの水も梢の雨の路と云ふべく

○　北　村　翠　子

歸りなむわがふるさとに歸りなむ悲しき母の御墓もあれば

○　神戸市　井　口　久　我　女

つれなくもはた云はぬゆゑかたはらに二日三日居て歌よみくらす

○　三　島　村　瀬　常　月

あさましきこころとなりぬけしの散る夕に君をさそはむとする

○　豐後　吉田花守子

血のかれておとろへせまる心とは知らじな君ははな言葉告ぐ

○　神保千代野

碎かれし戀のしら玉きれ〴〵をひろひあつめてほゝゑみもすれ

○　備後　後藤壽美枝

蘆の花ほゝけて白きふる里の十月の夜の船にうたひぬ

○　備前　板崎好枝

心いま死をば思へりふるへつゝ水仙白く咲く庭にゐて

○　丹波　大槻房枝

思ふ事心に祕めて悲しめる性となりけり二十のちは

○　上毛　小澤碩子

髮を愛で流る時切れてゆく一すぢをさへ惜みしものを

○　深川　佐久間貞子

湯の宿のおしろい刷毛の寒かりし朝をおもひぬ薄き霜おく

○　千葉縣　石井よし子

美くしき雛の姫の衣かりて蝶と遊びし春の夢かな

○　大分縣　紫潮子

あはれにも別れて三年經し人の文がら見出づ灯かげの箱に

○　諏訪　紫芋

紫の空を遙に眺めては君の遠しと泣くは誰が子ぞ

○　信濃　岩波むら子

十八の少女漸く戀知りぬさうびの白き花の如くに

○　近江　鈴蘭

わび人も黑髮洗ひ野に立てば春日の風はやはらかに吹く

○　信濃　下枝よし子

廊をつたふ足音きぬずれのよきことゝや聞けるうたはぬ鳥よ

○　千葉縣　やまぶき

大寺の櫻のもとはやごとなき極樂の風吹きて花ちる

○　千葉縣　中村まさ子

初春の海のほとりのそよ風に鶯の鳴く安房の國かな

○　筑前　笹つゆ

ある朝に故里遠き國に居て夢の如くに海の帆を見る

○　鳥取　櫻草

我は今十九の少女誰が爲に捧げん命持つとかなしき

○　和泉　田中喜代子

思ふ子を思はるゝ子ものちの日は道ゆく人とかはらぬものか

○　津山　富山賴野

ほのさせる光は朝の霧に似て青くきよらにのぼる夕月

○　飛驒　むら女

ましろくも積りし雪に手を赤め兎つくりし日の胸に湧く

○　福井　北利子

春の宵睦語りする夢さめて丁字の香などきくがかなしさ

○　神戸　川口登茂

み佛の前にうつ伏す少女子の青ざめし顔に涙なしりぬ

○　千葉　日向なよ子

家ばとの家をかこみて鳴く朝のいとやはらかきおもひに似たり

○　常陸　田村波津子

迫りくる夜の色よりもやゝふかきもの思ひして海に立つわれ

○　島根縣　あや子

千萬の蝶のわが手にむつれくるこころこそすれ若き日の戀

○　島根縣　糸子

うば玉の黑髮たれて野を歩む背ひにとほきほととぎすかな

○　出雲　長崎百合子

一目見てかりそめならぬ大事をば思ひ立ちにきされど逢はぬかな

○　千葉縣　荒木

初冬や伊豆の山々海風に吹かれながらに瘦せても見ゆる

○　京都市　松木絹子

箏ひかむあすを契ひに友のきぬましろき梅に夕日さす頃

○　大阪　あき

村しぐれ君とかたれる小き傘二つ行くをば人に語るな

○　岡山　森田きよ子

男みな悲しき時は酒のむと云ふに少女は花を見て泣く
○　伯耆　新田文子

暗き日に心くもらしはてもなき旅する人をおのれおもひぬ
○　東京　露緒

櫻ちる四條の宿の夕ぐれを皷うつ手に戀そめしかな
○　福島市　多都子

冬の日の松は笑みけりよもの木の凋落のさまながし眼にみて
○　大阪　高山米子

醜しとかたちをしりてわが心日にあはれにもなりまさるかな
○　たそがれ

なつかしき君はいづくにさすらへるこがらしすさみはださむき冬
○　佐渡　宗原美津子

亡き姉の來たりてわれの黒髮をなで給ふ時夢さめにける
○　土佐　重子

秋の雨降るひるごろを顔見せにあまた役者の過るもさびし
○　兵庫縣　大住こすみ

わが胸の皷動のそこに心いま觸れそ危ふきものぞとぞ云ふ
○　信濃　吉澤辰美

海も見ず都も知らず山にある淋しき人は二十になりぬ
○　武藏　なでしこ

とやかくと涙ぐましき夕まぐれ牡丹くづれぬましろに紅に
○　緋をどし

かにかくに少女は弱きものとしれねくたれ髮のもつるゝが如
○　群馬　もと子

あじきなくなりにし今日の戀よりも一重ざくらのちるがめでたさ
○　草雲雀

この人が雲のやうなる黒髮をみだして泣けば秋の風ふく
○　米澤市　相田富子

白き手が落ちくる雪を受けながら眺むるばかりかなしきはなし
○　京都　楢田信子

秋の日は森を走りて野を越えて貧しき家のうしろに入りぬ
○　大阪市　佐川かをる

枯れ殘る一本すゝき木枯の寒さに立てりわれに似たりな
○　京都　町田てる子

友は皆嘲り顔に行き過ぬわれは寂しきわが世をめでぬ
○　備後　板崎好枝

秋の日の御寺の庭の楷葉の香をなつかしむ心となりぬ
○　丹後　仲田志那

白蟻のわが住む家の柱をば食む音なるやしらねどせはし
○　丹後　仲田不審子

我戀は水に消えゆく春雨の如く音なくあれと云はなく
○　牛込　平塚白百合

やはらかに夢のやうなる春の夜に滿地にさける紫の花
○　前橋　みどし

歌をよむ旅の男のよき眼などおもひうかべぬ何となけれど
○　京都　三宅壽賀子

かへり見るわれの命のあやうかり惡に隣りて尚も君戀ふ
○　松江　白菊

あかあかと初日美くし白妙の雪の野山もめでたくぞ見ゆ
○　大分縣　一枝

あかつきの鐘もかすみて夜のあけぬよし野の山の大寺にして
○　兵庫　紅雀

朝戸出や小路しゆけばさく〱と霜柱ふむ音のよろしき
○　東京　島天伊子

我が胸の淋しき想ひ誰れ故に今日は花にも似るにいたりし
○　伊豆　土谷壽々子

幾本の針もて小さき吾が胸を刺すと目ざめぬ恨おへるや
○　宮城　馥子

宵よりも曉はよしまばらなる星眺めつゝ鐘の音聞く
○　陸前　浮草子

雨ぐもの晴るゝみ空に浮き出づる月のさやけき白花のごと

末黒の草

○

きさらぎの末黒の草に雪散るを出でゝ見たまへ馬めづる君。二月はわが病苦のやゝゆるむ時である。金の着物を着せられて石の床にねるような苦しみから蘇生つて、山の上や川の上やに行つて見たくなる時である。竹山へぶつちめを懸けて有頭を捕るつもりなのが鶏がかゝつてぬ茶く茶にてはされたり、學校へ行くとよく霜柱が立つ、不思議なのと珍らしいのとで——自分の屋敷廻などでは生涯見られぬ——手に取つて喰べられるかどうかと檢査したことともあるし、土手の芝燒き、獨樂廻し、竹馬も持出せば凧も張りかへるように、冬をいやなものに思つたことはゆめにも無かつた。あかぎれを切らした覺えはないがよく右の人差指が霜やけになるので弱つた、ほゝづきを採ておいて指だといふたび母がそれを黑燒にして坊主から熱い液の滲み出すのをつけてくれた。夏手袋をはめる今の孃さん達とは違ひ、學校の往復に雪がふつてさへ冠るべき帽子を持たなかつた「おゝ寒ム寒ム山から小僧が泣いて來た」と歌ひながら雀のはしやぐようにはしやいでみなと路を辿る。中に自分の家が山加といふ屋號なので、やまかの小僧が……と歌つて逃げ出すのもあつた。學校へ隔日位に槽を寄附しては全校の生徒にあたらした年もある、槽をつけて行く朝は自分は馬の上に乘せられて行つた。

凍傷は不圖すると今もやる、丁度筆を握つてしつかと押へべき指の横腹にあたる事でも腫つてゝ意てぢに冬になると腫れる氣がする、癒にきはつて足袋をはかぬ朝もあるせいか足の指まで痛痒い時がある。ガラス障子を南にして六曲屏中やぶれ几に悲る命よ、何の爲か今年も生きる。

○

「みだれ髮」の出た當時すら自分は、つい讀まなかつた「夢の華」も貰つたけれど讀みつくす辛棒力が無かつた。此間はしめて晶子さんの歌集を繙いた、「明星」發刊の當時毀譽相半して中村春雨君だつたか鬼才と評したのを、惡口ととつて鐵氏が眞赤になつておこつた珍談もあつたが、晶子さんはやはり、鬼才といふのが中つてゐる。千歳に生くべき人である。

長塚節君は伊藤左千夫三井甲之の諸氏と「馬醉木」を起して盛んに晶子さんをけなしたものだが、其努力は何の結果をものこさぬ。

スバルの歌は嫌ひで、私共日夜會の咏草の方が遙に歌らしい歌を多くもつてると太田喜志子はいふ、太田瑞穗君の故郷に於けるあつまりをさすのだ、落園門家の末流もスバルを盛に言つてる、二つ共なぜだかわからぬ。

五六年前髀若が七五調の全盛時代に調を成さぬ詩を「文庫」に公にしたのでやつきとなつて反對したのは自分であつた。口語詩の起つた時、一つ作つて見ろとすゝめられて應じなかつたのも自分である。けれど超凡脱俗も事によりけりで、文藝にはただ眞面目があるばかりだ、傑作でありさへすれば誰がどんなのを作つても推賞せねばなるまい、何ぞ黨を樹て異を伐つの要あらむやといひたくなる。

が「燒けあとの煉瓦の上に Shoben をすればしみぐ＼秋が思はる」の作者が女であつたら「ちよいとくなんだすべため」よりは落ちよう、「君だちの娛樂に足らば」の作とはくらべるあたひすらあるまい。

○

『あ、それから「面がはり」よみました。

私は何だかお柳さんにありさうなことだとおもひました。お柳さんは私の妹と同じクラスにゐた方でございますの。お柳さんは決して私どものような女ぢやございませんの。お柳さんはお髮をくるぐ＼巻にしていらしつたとなどありませんの、いつも人の目に立つような赤い帶、大模樣な着物、そして大きな桃割をいうて、大きなリボンをむすびつけて町を行く方でございましたの。あの方がどうして筑波山下の人に仕へて一年だつて過れるもんですか、しかしあれほどひどいとをなさらうとは思ひませんでした。

今度赤ちやんがおできなさるといふ、お柳さんの一生もどうやら。月波の人がもし仇として思つてゐるなら立派に勝つたのだ、私は涙をさしみませぬ。』

こんな手紙も來た。

『いよ〳〵明日は行きます、末の弟を背負て。
雪は二尺から積つてゐます。
さらば先生、これが最後のおたよりです。
あはれなる女の行末をおもうて下さいまし。
油が氷つたかしてあかりが暗う〳〵なつて行きます。明くる朝の旅路がいそがれます。
切角おいとひあそばせ。

師走十五日　　　雲　井　の　雁』

一門富めるが中に、たゞ庶子なるが故にひとり疎外されてあれから暗き道を歩いた薄命の人をおもふ。詩も終にその悲痛を慰むるに足らなかつた、山にかくれて薪を負ひ馬を逐れたやさしき努力も水泡に歸したのであらう、………宮本きみ子は月が明るくて死ねないといふ一句を遺し、おなじ十七なれど、足なへたるを悲しんで、霜にこほる十一月の末不忍の池に沈んだ女が『めでたきみ代に生れては悲しき身を如何せん、今夜父母に背き世に背きてをしからぬ命をすつ、あゝ文ちやん勉强なさい、いつかの算術忘れずに、また脇田先生や坂口先生にあへてうれしいわ。さようなら。世の中に悲しくてゐるのがいやなの』とかきおいたのを見ると、生の苦患を知りて死の厭はしきを忘れたとしか思はれぬ。雲井の雁よ。やすらかに行け。われ豈君をとゞめんや。

○

『私はあなたのお命の長くないことを知つてゐます、ですから短い一生人に嫌はれずに終つて頂きたい、あまり惡口を仰しやると人ににくまれます。女はうそをいふものと止メをさゝれて腹の立たぬ者がありませうかでもあなたが人がどう思ふか考へぬ筈もないし、わかつてゐて言ふとするとむざんにこはれたお心を悲むより外ござんせぬ。私が一人刄を受けませう、冷嘲熱罵心ゆく限り、私一人を泣かして下さい、そして皆さまにはやさしうあしらへなされて愛惜と敬慕との間に晩年を送つて下さい

『雪の國の少女』
今なほかゝる女あり
年盛く日も盛く

燒野　　夜雨

▲散文欄が擴張されてから、數に於ては非常に増加されたけれど、質實に於ては、餘り好い作がない、尤も似たり寄つたりの所が甚だ多く、採つてもよし、捨てゝもよしと云ふやうな地位の作ばかりで、秀逸以下のものは選擇に困るのである、又此頃になつて、新しい投書家が多くなつたやうにも思ふ。

▲特に私宛に年賀狀を下さつた諸孃は、約五十名の方でした、大抵存じて居る方々ですが中に當て御名も承らない方がありました、恐らくは本誌を愛讀なさる方でせう、以上の方には一々お返辭を差上る筈ですが、私の年賀狀が品切となりましたので、失禮ながら頂き棄てにいたしまして御狀だけを保存いたします。

▲年賀狀と云へば、今年は何うしたものか、四五名の知らない方から、私の年賀狀を請求されました、年賀狀は知己の間にこそ交換すべきものなれ、ゆかりもない方に差上るわけにもゆかず、また請求すべき性質のものでもありますまい。

▲『詩の言葉』と云ふところには、特に署名がしてありませんけれど、あれは緑蹊私が集めて解釋いたします、今年中はつゞけてやつてみようと思つてゐます、解釋は簡單にいたしますけれど、能く味つてみて下されば、何等かの參考にはなるでせう。

▲今年は私は對話を作つてみようと思つてゐます、脚本に似たものも書いてみたいと思つてゐます、追々本誌に發表いたします。

▲新年も、もう一ケ月は過ぎ去りました、私共の仕事は無限にあるが、時間は用捨なく進みます、皆さんも進歩なさいませ。

雪のあした　　　記者

散文

○新らしい心

伯耆　新田文子

白い山茶花の咲きこぼれて居る地上を、獃した儘妾はあちこちと、幾度も行つたりきたりして居るのです。向ふの蜜柑畑の蜜柑が、惡黃になつて好く熟してゐるのに、晩秋の弱い光りが、靜かに流れて居る。

突然——妾は過去の戀や藝術を捨てゝ新らしい心に生れやうと叫んだそれは單に口の先きで聲を發して言つたではない、心の底の底の一番の底から出た、妾の僞らぬ現在の心の聲でした。

妾は今、勝色地に赤牡丹鮮かに染め出された、メレンスの帶の二重まはつた其の間に、Kなる戀人と、Bなる友とのレターをあはせて居る。先づKなる戀人のを繰りかへして見た。

あゝ、あなたも若い心から日々に遠ざかつて、行くんぢやありませんか。あなたの歌い——燃ゆる樣な胸の熱は——一日々々冷えて、固くなつてゆくんぢやありませんか。かうした異性の身では——又異性の心狀はよくわからないけれど……凡ての、過去の藝術、戀を捨てゝ新らしき心で、新らしき生涯に入ることが、あなたの心で——あなたの情緒で——出來ますか？

陳腐ことを書いて居る。然し今の妾には、是れらの文句は絹針で指の先をついた程の感じもしない。

凡ての過去は、價値ないものです。過去に執着して居るなどは、戀人かさなくば、詩人のなすことです。新しい幸福な生涯が目の前に待つてゐるぢやありませんか。一日も早く新らしい心になつて、幸福をお受け遊ばせ………

Bは、優しい怜悧い女性だけに、斯う書いて妾に與れた。オヽ、此言葉こそ妾の現在期待してゐる所である。女つて云ふ名の許に生れ、女つていふ凡ての心理を先天的うけついでゐる妾は、又女つていふ運命を味ふべきものであると、二十歳の今日になつて、深く悟つた。過去の不純全て藝術や若い熱した儘の戀も皆覺めて、妾は又新らしい心に、生れいでたのです。

似而非覺醒にあらずんば幸なり。恥辱を恥辱とせず、故に娼婦は平然たるなり。戀を辱むる罪は許すべからず、かへりみよ。君豈百年の命あらんや。（夜雨）

○會津より

「夢の女」の友

十一時五十分のに、間に合ふ樣に出かける。急いで室に入つた胸は愁ひにとざされて一月ぶりに窓外の景色を見る氣もしない、唯一刻も早く新橋につくことを祈つた。品川からコートを着髮をとかして下車を待つ、ずぐについて華な都會の姿に、今更の樣心をおどしながらも、わが永住の地は遠く猪苗代湖畔にあり。火を噴く山の麓、水は悲しき心を柔げてくれると思ひしく、人を待つて向ケ岡を彷徨ふ中逢ふを得た、そのせつなの胸堅く手を握つた。今後、二人は逢へなくても、文通はしなくとも心の中で靜かに思うてゐやう、生涯忘れずに思うて居る、あなたの情はうれしい、たとへ卒業して社會に地位は得られても、終生家庭の人たるを得ないのだ、あなたは幸福に過してくれ眞心込めて君に云ふ、いゝえ、おつしやつて下さいますな、君に別れてどうして幸福におくることが出來ませう。いつまでも、いつまでも君を懷うて居ます、戀うて居ますといつたものを………。

新らしき家に入る日は、あまりに早く來ました。今宵より人の妻若き家妻となるのです。悲しうございます。若き命は若き日に於て、長からしめよとおもふに、………友より文を受けた。新らしき家は希望に充ちてゐます。若きより捉はれたる不平も悲しみも忘れて、たゞ定樣と美しい家庭をおつくりなさいませ。私は泣く。あなたは成功者たるものを——。

一は望かなひて「昨夢」を作り、一は傷心の涙を古山の雲に遣る、寂しく美しき詩の子等よ、成れる戀は善し、成らざる戀も善からずや、堅締せよ、あれ等は歎かず。（夜雨）

○夢の女をしのびて

美濃　葛の葉

……おどして叱らないで下さい、今しばらく。十七の若き家妻に多くを望んで下さいますな。母の許を離れるのは餘りに早かつたのですもの……もう後がよめなくなつて袖を机にしいて面を伏せてじつと考へて居たら、人が浮んだ、そして尊い涙が出た。

星が丘の集りに夢の女は泣いて居たと書いた人がある。なんて可愛いいぢらしい若い奥樣でせう。私はおいとしさに、足らぬながらも兩袖してお肩のあたりを、おほうても上げたい樣な氣がする。妹を思つて新らい涙が又してもわく。私の母樣は十七で子の母になつたといふ。お乳もふくませたと仰有る。けれど／＼。

娘十七、まだ母樣のお歸りをまつて、お土產の風呂敷を解くのを此上なく思ふ、肩上げつけた、嬌羞に滿ちた紅の唇、事毎におろ／＼して驚きの眼をみはる。

田舍育ちのとろちやんと仇名された私だから、仕方は無かつたが、私の十七は餘りに殺風景であつた。

忘れもしないこと八月の十七日、普光寺樣へ詣るとてお嫁に行らした姉樣やうちの姉樣と、いつの間にか出かして置いて下すつた上布、白地にあらい矢がすりの、薄いとき色の襦袢、帶もあたらしく、あまりの嬉しさに指の爪まであつい血がほとばしつた樣な氣がして、私は小をどりした。ひぱ色の絹紋りが七尺計りあつたので、これどなたの？、母樣の方向いてお前のだわ。どうするんですか、と伺つたら、しごきだがねこゝへしめる、とかるく腰のあたりをお敎へなさる、私は腰上げがしてある氣で、只矢がすりに思ひが走つた。

さあ、どれ、つてお嫁にいらした姉樣が。ふわつとかけて、そのしごきをとおつしやる、着物がずるつとおひきずりになつたのに氣がついて、あれ縫上げが……と忘れてゐるのだと思つていつたら、まあつて、うちの姉樣も笑つた。かうするんだがね、つて姉樣がたくし上げる、私は五色の蛇に追つかけられる夢のようなおどろきに、ふるへをのゝいてするりと逃げた。くやしいのか何か知らぬがほろ／＼泣けて來て、さうしてなら上布着たくない、もういりませぬと、いひのけた。母樣はお眼に露をやどしてお立ちなすつたが、うちの姉樣はお腹を抱へて笑ひく／＼、お嫁にいらした姉樣は宥りになだめたりすかしたりして下すつたけれど、腰上は一生一代とらぬ氣で遂に着なかつた。が、今ではく／＼肩をなぜても腰をみかへつても更に傑は無い。姉も人に嫁いだ。夢の女を遠く電車のひびきの中にしのんで、涙ぐむ事の多い此頃を。それで居て私は、まだ母の許を一生離別せないと心丈はしがみついてゐるのである。

背丈からして君だけにいつでも委れかへつてる夢の女を抱きとつてやりたいと思ふのはしばらしいが、しごきを蛇だと思つて泣いて逃げたといふのは少々受取れぬ。とろちやん學校で優等のくせに、うちではねんねだつたのはどうしたことだらう。（夜雨）

○日記帳より

初鹿野　道子

今朝は霜がひどい。庭となく、畠となく一面雪の樣に白い。霜柱を踏んで花壇をみる。取り殘された小菊の下葉が紅に染まつて、ぐつたりしほれてゐる。何か今頃咲く草花が欲しい。梨枝さんの處で初めて見た雪割草の白い花、紫の花、あれが欲しい。

朝御飯後、茶の間で新聞みてゐたら、丸善へ注文した本が三冊屆いた。最初の頁に千九百十年クリスマス、××樣と其れ／″＼名をかく。八咫屋から額がくれば後はカードだけで足りる。かうして支度すれば母樣のお顔は晴れやかだ。「額屋も飾りつけが濟んだ相だから、明晩でも行かうかね」慈愛にみちたお聲でじいと私の暗らい顔をお見つめ遊す。御免なさい母樣、昨年のクリスマス頃は母樣のお胸を永い棲家とかくれて居ました。一昨年の今頃は祝歌を習ふに夢中でした、けれど、あゝ私は母樣を思ふと泣ける。も少し、ねも少し　母樣此儘に置いて下さい。

部屋に籠つてボストンへ書かうとしたが、ペンをインクに浸しては吸墨紙に落して、遂に皆黑くして止む。夕方當もなく前の土手に上つた。櫻も紅葉も散り盡して此處から墓地がよう見える。幹に凭れて昨夜の夢

を思つた。私は一人森の中を歩るいてゐた。そしていつか沼の邊に出た。沼の周圍には覆ひかゝる樣に紅葉した樹が立つてゐる、私は落葉を踏んで其一つによつて立つた。何處かで微かに鳥が鳴く、邊を見廻しても其れらしい影はない、仰いで空を見た、空は眞青に澄んで居た。眼を落すと沼の水も眞青だつた。吸はれる樣に見つめた水面に、不圖ある影が霞の樣にひらめき消えた、急に風が波の樣に吹いて來て、又さーッと遠く遠く去つた、私は身慄して人の名を呼んだ。其次の瞬間にさめたのだ。眼を瞑ると今も、あの森、水、影—去り行く人を追ふはゆく水をせきとめるに等しい事は知つて居る。千萬、世の人皆が唇をそらす時、母樣のお手が猶しつかりと私の首を抱いて、白い悔の涙をぬぐふて下さるのも知つてゐる。居るけれど、お母樣よ！風が思ふ儘に髮を吹きなぶる、私は秋のノートを出して中頃を三四枚破つた、破つた紙を亦細く縱橫に裂いた。手を開くと白い切れ〴〵が風に吹かれて、雪の樣に、木の葉の樣に飛ぶ「嬉しい」と口に云つて、止度もなく、止度もなく涙がおちた。

杉田樣の二階にはもう華やかに電燈がついた。カーテンに隱れて見えて樂しげな影が動く。

「遠く思へばユダヤの野邊に………」

櫻子ちやんのすき通る樣な聲がする。

この凍る月光の下、草をしいて、じいとあの聲を聞いて、「永——眠——り度い」。云ひ切つて兩手に顏を掩ふた。

煩悶は煩悶だらうが、こんな煩悶は無邪氣でいゝ、いつまでもノートを引裂いたり、永眠したくなつたりして居ても困る。一度進化論をよんでごらんなさい。(記者)

○鉦の音

信濃　優梨子

また鉦の音がする。寂しい鉦の音よ……。濱さんの初七日である。暗く心が落着いて、何か強い響に打れて見たい樣に思ふ私は、つと南縁の障子を明けた。

暮れ方にチラ〳〵した淡雪に、大銀杏も垣根の上も白くなつて、八日計りの月が十二月の寒き夜を、冷たく照して居る。

カン〳〵カンと、音は絕えず聞える。前より判然と、そして靜かな私の心をさわがす樣に………。

あゝ濱さんは死んだ。淋しく微笑んだまゝ安らかに、何時までも〳〵眠つて居る。

「五人の子供が只これ一人になつたのですもの。私は私は、甚麼にもして生かしたう御座いました。迷信とは思ひながら、只これが生かしたい計りに、霜月末の此寒空に、丑三つ時の跣足詣りまでしたものを……。あゝ濱は何故死んだので御座いませう………」

逆さ屛風の枕元に、濱さんの母樣は力無く坐つて、留め度なく溢れ落ちる涙を拭ひもあへず、濡れた瞳に眤と〳〵濱さんの白い冷たい面を見詰めて被仰つても、濱さんは矢張り靜かに眼を閉ぢて、何時までも〳〵覺めはしなかつた。あゝ濱さんは死んだ。十八だのに、音はハタと止んだ。私は身動きもしないで凝と突に立つた。魂は今消えた鉦の音を何處までも追うて行かうとして居る。

白き位牌！寂しくゆら〴〵佛前の灯影—濱さんの母樣の濡れた瞳——。あゝ………。冷えた八日の月を見上げた私の頰には、冷たい涙が流れて居た。

醉茗はこの人を推重して措かず、夜雨は壓落伍せしめて顧みず、人各好む所に伕ずるか。されど君何ぞ萬人をして瞠目せしむる文を作らざる。(記者)

○冬の夜に

前橋　みどり

冴え渡る霜の夜……暗いみ空に瞬つたら、切れさうな三日月の影を仰いで、胸をさゝれる樣な想に、泣いて〳〵涙の顏を照らされる時、東の空を三十里、華かな、電燈かゞやく隣の窓に、貴女は何を想うて居るでせう。田舍の夜は、淋しうござゐます。

今年ももう、殘り少なになりましたね。二度とかへつて來ぬ私の二十年は、流れる水のそれよりも、もつと〳〵果敢なくすぎて終ひました。來年は廿一――廿一――淋しい聲ではありませんか、いつか、或る人が、女は十七をすぎてはおしまひだ、と云ひました。あゝ女の若い日が十七なら、私はもう三年の昔にいつて終つたのではないでせうか。十七――ほゝの豐かな肩揚のある人を見ると嬉しい程淡しくつて仕方がありません。

此頃はこんな事計り考へて悲しい文句がノートを埋めます。毎晩一つ〳〵、ランプの笠に書きつけてきた歌も、今晩はもうかく所もなくなつて、……。

二十の年を葬る時そこに戀の墓もあらう、忘られぬ涙もない筈はない、それを書かぬから駄目なのだ。（記者）

○窓より

京都　三宅壽賀子

私の窓からプーと野が見える。都會の眞中を過じて三里西の村へ通ふ一筋の道はほの白く長々と横たはつて居る。

鉛のやうに重く垂れ下がつた夕雲の隙間から青空がかすかに覗いて居るのが佗びしい、劇しく西風が吹くたび白くからびた道からたへきれないやうに土埃が渦卷いて走る。



幼き友情　新潟　水澤蝶子

裸木にしがみ付いて居た枯葉が驚いたやうにばた〳〵と散る町へ歸る勞働者の一群餓と寒さに堪へ切れないやうに、みな前かゞみになつて黑く動いて行くまるで落葉が風にふきまくられて地を走るやうだ。

やゝ疲れた眼を落すと今日まで氣の付かなかつた花畑のこの荒れよう！、枯れつくした草はひとしく折れ伏して黑い土にしがみ付いて居る。針の樣な霜にさゝれて枯れつくした草花の痛ましい最後――あの淡紅色のコスモスや血紅色の天竺牡丹やクリーム色や金砂や白やさま〴〵の花が晴れやかな秋の日にあかるくそよいで居つたのはつひきのふのやうに思ふて居るのに――あの時のうつくしいのは夢で今このいたましい

聞がほんとなんだらうか――。

あの白い道ばかりに吹いて居るやうに思つた風はこの花畑にも吹きこんで來て痛ましく伏した枯葉がかなしげに細い音を立てゝ居る――。

「あの時のが夢で今のが本當なんだらうか」勿論。(記者)

○五本の松

金澤山梔

日清戰爭の頃、兄樣は後の山から小さな松の苗を五本掘つていらしつた、どんな心で掘つて來たのか、誰も知らなかつたが、何にしても五本共少しづゝ高さが異つて居て、しかも雄松はたつた一本しかなかつた。お父樣はこんな物植ゑたつてと、笑つていらしつたが、兄樣はそれでも何か自信があつたと見えて、いそ〳〵と書生を相手に大きな鍬を持つてせつせと五本の松を一つづゝ、同じ距離に植ゑてしまつたのであつた。

それから幾星霜、松はあれど氣を留めて眺める者もなく、春秋の手入れも忘れ勝ちに放つてあつたが、兄樣だけは、いつも氣をつけて深呼吸の時も、夕食後の散歩の折も、彼の側に寄つて樂しさうに眺めていらしたのであつた、梅や櫻の木に雜草が生えても、彼の五本の松の根には生えて居なかつた。誰取つたと名乘る者もないが、刈り取つたあとがありありと見えて、年毎の緑も愈々深くなるのであつた。お父樣はまだお氣がつかないが、其時兄樣はとつくに眞理を發見していらしつたのであらう、誰にも語りなさらないけれども嬉しさうな笑が面に溢れて居た。中學校もやがて卒へて東京へいらつしやる送別の時、四人の妹を呼んで「この五本の松を僕は兄妹だと思つて可愛がつてやつたが、明日から僕は居ないから、お前たちでよく可愛がつてやつてくれ」と言つて立つて行かれたのでした。それから松の緑もいく度か萠えて、殊に雄松は目に見えて肥り、他の四本の雌松と、それ相應に成長したが、なぜか四番目だけは成長が遲れ勝ちで、日露戰爭の頃は殆ど雄松の半分になつてしまつた。私は幼いながらも、何だか松が私に暗示して居るやうに思はれてならなかつたが、さてどんな風に暗示して居るか――まだそこまで、智識はなかつたので、只妹と二人で「私は少さいから伸びないのネ」と言つて、仲よく五ツの松に油かすをやつて可愛がつて居たのであつた。

けれども松の與へた暗示はいたづらではなかつた。

忘れもせぬ一昨々年の秋、隣家の離れ座敷の建つた時に、四番目の松はいたく危害を受けて、無慘にも片枝は折れてしまつた。嗚呼其時の私の心――「私は折れた〳〵」とちやうど自分のからだが折れたやうに涙が出て日曜日の半日は松の下で限りなく泣いたのであつたが、それからふとした事で、私は臥床の身となり、松と共に涙多き月日を送つたのであつた。其後足を病んで見に出る折もないが、いつも痛みの激しい時には、泣きながら彼の松の枝の折れた時はこんなに痛かつたゞらうとそれを、一の慰めに苦痛を忍んで得かない生をつないで居るのです。

あゝ可憐の松よ、今どうして居るだらうと思はぬ日はないけれども足立たず、妹にきけば繁つて居るとは言ふけれども何故か顔をそむけて多くを語らない。嗚呼彼れは枯れたのか?

多くを語り過ぎたのが一缺點。(記者)

○白衣の妹に

大分しぐれ

朝晩はよつぽど寒くなりましたね。雪樣が内に居た時分に植ゑつけた水仙は今年も勢よく成長してもう早いのはつぼみをつけて居ますよ。雪樣が一等好きな水仙の花、咲いたらあの記念の一輪ざしに挿て二人で寫した寫眞の前にね、お雪さんうれしいでせう。けれども水仙のさくのを待つのはやがて雪さんのくるしみを待つと同じだわね。近頃の樣ではもう朝晩は隨分つらいでせう御察ししてよ、今年の夏面會に行つた時素足で働いて居た雪さんの可憐な樣子を見て思はず泣いた私は其時から冬のつらさが思はれてね!!!雪さんの上を思へばたかが一里の通勤ぐらゐなんでもない、今年は決して肩掛を用ひまいと心に誓ひましたのよ。

昨日の日曜をお店の計算にお手傳してふと目についた御父樣の御頭!!

まつたく腕がふさがつたは。白い方が多いんですもの。屹度御父様はお老けなすつた五十の坂を越してまで尚あくせくと家のため働いて居ら　る御父様を思へば……私等は若い身空おたがひにしつかり勉强して早う御両親様に御安心おさせ申さなくつては、雪さんが大好きなあの水仙霜にたわまぬあの水仙、やがて私等の手本ですわね。何よりも御身を御大切にしね。

淡々しいうちに情の深さが籠つてゐる。(記者)

○左様なら!

金澤むらさき

左様なら十九よ。もうお前とは別れる時になつた。

悲しい、なつかしいお前とは別れたくない。お前はそのあでやかな、若々しい後姿を私に見せ乍ら、離れてゆくのだらう。誰に遠慮もなくもえ立つやうな緋の色に親しんで、少女の誇としてゐたお前は、それらも一所に私から引はなしてゆくのだらう。厭だーと云つてもお前は大きな時の力で、私は泣きながら引ずられてゆくのだ。

あれ御覧!あの弱々しい暮れの光りを、冷たい地にしみついて這つてゐるじやないか。誰があの私の若さをみつめて呉れた時の羞らひの様な頰ほてりのする、春の光りのあとに、こんな呪ひの光りを思ひ設けただらうか。誰があの漲ぎりたつた激しい夏の日光のあとにこんな冷たい光りのある事を思つただらうか。

別れは悲しいものだ、淋しいものだ。お前とも此悲しさを味はねばならぬ。私は白狀する、初めてお前と一所になつた時、今私が來るべき二十をいむやうにお前を厭がつてゐた、併し時の力は怖ろしい暫くするとぢきお前が大すきになつた。かうして暗い穴倉に進んでゆくのじやないからうか……。

あゝお前とは別れたくない!あの秋の末頃、小さくなつてゆく柴の龍膽の花のやうな私がほんとに悲しい。十九よ。その水々しいうるんだ瞳でじつと私を見つめたまゝ、無言で別れるのか。じや左様なら、これからあと時々お前を思ひ出して。せめてもの心なぐさめにするのは、よもや拒みはしないだらうね。十九よ!!!

理窟めいて居るが、何處か理窟をはなれて面白い處がある。(記者)

○迷へる従兄に

多都

先達ての御手紙うれしく拜見致しました、年下な私がかやうな事申し上げて、御氣を損ずるか知りませんが、御手紙中に物學びせらるゝ御身にも似付かぬ、穩やかでないお言葉見受けましたので、血も涙もないとの御怒を氣遣ひながら、御答へ申します。いゝえ私とて女ですもの、貴下のあの御言葉に胸がをどりました、血がみなぎりましたの。けれど、今朝報知の憐れ流浪ひの葡萄陛下といふ記事を手にして、つくぐ決心致しました、マヌエル陛下が佛國の一歌妓デスリイ孃のために戀のとりことならせられて革命黨のために一國の民を失なはれ英國に流渡せらるゝ樣におなりになつたといふことは、あなたもとうに御承知の事と思ひます。畏れ多い事ですけれど、私はどれ程、陛下のために同情の涙を捧げたでせう、そしてどんなによい敎訓になつたでせう。從兄として敬愛してたあなたをもあなたのお身のためには捨てねばならないのです。こんな尊い御方さへ戀のためには一身をお失ひになるのですもの況して吾等風情あなたの優しい御言葉に從つたならあの老いた父母をどうしませう

大望あつて上京なされたあなたを、戀故にしくぢらしては、皆様に對してすみません、私は……私は只從兄としてあなたを敬しませう、愛しませう、えゝ從妹として永久に可愛がつて下さい、お氣にさはつて交際を絕ちなさるなら、私はあなたのために甘んじてうけませう。くれぐれも短慮なこと遊ばさず、專心御勉學の精神かけて念じ上げます。

ポルトガル皇帝を引いて、戀を拒んだ處は流石に新しい婦人だと思ひました、甘い文章ばかり書くのが能でもない、此種の文字も續々と表はれて來て好い。(記者)

○霜の朝

夕べの雲

昨夜亡母樣の夢を見て今朝は枕紙がぬれて居た。

佛壇の花を替へやうとしたが庭には花らしい影もない、眞白に降りた霜の上には銀杏の葉許りが一面に散らばつて居る、梢をはなれて猶ほ此色此の光澤を思ふと、妬ましいやうな感じがした。

玉椿を折つて供へた、チーンと鐙を叩くと何日もより澄んで聞える、靈い故だらう、此の音は冥土迄響くのださうな、懷かしいので何度も叩いて見る。

お亡母樣、衣のならすのがお分りになりますか。

獨りごちながらヂーッとお位牌を見つめて居ると頰をかすめて香の煙りが纔々と立ち昇る。ともすれば、ホームシックの起りさうな、學窓の夕べ「一體何のにほひがいゝでせう」と誰樣だつたかの發言に次いですみれのかをり、カーネーション、果てはカステーラ燒くにほひなどゝ。とりぐに笑ひ興じた時、「線香のにほひも懸くはないのね」といふた、自分の言葉はどんなに友の胸を蕩かしたでせう。

あゝ其の線香が……佛壇の中は薄紫の煙りで充ちた、不圖、[illegible]さんの咳ばらひする、白味勝ちな、冷やかな眼を想ひ浮べてゾッとした。「なんて靈いんですか」と然り氣なくいふて、中の間の襖を閉ける。

お針が御飯よりも好きだといふ叔母と、泣く程臆ひな私とは、今宵も亦、裁板を中にして相對した。

さ程深くはないが、シンミリした空氣の色がよく書けて居る、その音が冥土まで聞えるといふのは、くだらない迷信だが、この場合非常に面白くよめる。（記者）

○逝く歳を惜む

大阪　植村艶子

遠くかすかに樂隊の音が聞えて來た。する內に段々近くなつて來て然其樂譜迄はつきりなつた時「歲暮賣出し」と大書した赤青紫と色々の旗を立てゝ賑々しく、廣告屋が通る。歲暮年の瀨私は今更ながらハッとした。と同時に大なる壓迫とそして云ひ知らぬ寂しさと悲しさを覺えた吁歲が暮れるのだ、明治四十三年も僅に廿日を餘すのみだ私の十八も廿日を以て終るのか、嫌だ嫌だ私は十八と呼ぶ年が心からなつかしくつてならないのに。「女の十八」何と云ふ華かな年だらう。他人に「お幾歲ですの」と問はれる度にいつも胸は嬉しく波打つて「え妾十八ですの」とはつきり答へて云ひ知らぬ誇りを感じたのに、吁其人に誇つた十八もこれと云ふ深い印象も止めずに逝くのかと思ふと譯もなく悲しい。そして此頃何故か自分より年下の可愛い少女を見ると淺ましくも妬ましい心がむらむらと起るのです。

「今年も僅かになつたしお前も明けたら十九ぢやないか、それに毎日ぶらぶらして居てちつとは自分と云ふ物を考へて見るがいゝ」と昨日も伯母樣に云はれたのだ。吁私も何か思ひ切つた事がしたいけれど私には其思ひ切つた事が出來ないのです、そして唯無意味に暮した今年が惜しくてなりません殘念でなりません。

自轉車が走る人力車が駈ける皆忙がしさうに活動して居るに、私は私は何故此樣にぐづぐづした女だらう、自烈體、自烈體、譯も無く自烈體、吁年が暮れる。私の十八も逝く嫌だ。懷しい十八の終りが自分の命の終りの樣に心細い、否年と共に此身も終りたい。

いつの間にか自分は机の上にうつ伏して泣いて居た。ふと顏を上げて硝子越しに庭を眺めた。楓も昨日の風に大方落ちて淋しくなつたそして靜かな冬の日影がわづかににぶい光を飛石に投げて居る。ふらふらと立ち上つてすつと障子を引きあけた時寒い風がぬれた頰に冷たかつた。

十七八の時には誰だつても、こんな感がする、しまひには一日、一時間ですらも惜い別の樣な氣がして、無性に悲しくなる。文は幼いがさういつた風の心持がよくかけて居る、元來大阪は投稿家少し、大に努力せよ。（記者）

○今の心を

静岡縣　壽賀

何事も思ふまいと、淸く思ひ捨てやるせない淋しみをおぼえました。ああ私思ふと今までの思ひが夢の樣でつまらない事を思つて居たとしみじみ淋しくなります、でもねこのまま淋しいく〳〵現實の世に美しい空想の天地から追はれてさめてしまふのではなからうとまたをしくもなります。もう一度炎のうづに卷きこまれる樣なはげしい思ひに胸をもやして見たいとも思ひます。私はね今いひやうなく淋しいのですよ、もうこれきり永久に……つめたい淚が流れます。あゝとみ樣。（九月十五日）

重かつた心が輕くなつた樣におぼえますけれど一寸も快よくありません、只淋しいのですもの。もえて居た私の胸その炎はきえたのでせうか、いゝえ消えますまい、私の一生消える樣な事はありません。只だ時の間胸がひえたのでせうよ。つめたくなつた心、ともすればまたもえて居る炎のうづにはせ歸らうとして居ます。（九月三十日）

これだけでは仕ようがない。（記者）

○小夜の雨

東京　露緒

K樣！今日はようぞ御たづね下さいました、忘れ給はねばこそ嬉しう存ずまする。一とせぶりの御目もじ私は夢のようでございます。K樣貴女おやつれ遊ばしてねえ、私御顏をながめたをり胸が一ぱいになりましてあつい淚がとめどなく頰をつたはりました。貴女が「どうしたの」とおたづね下さいました時たゞうなだれた露の心お察し下さいまし。

あゝ逝く春の夕二人は詩の人でございましたわね。紫の花ゆらぐ南の園生にとはにかはらじのむつみをちかひましたも櫻ちる下に藤村詩集を誦しましたも思へば淡い春の夢でございました。K樣露は寂しうございます寮の夕落葉の窓に身をよせてなく薄倖の人よ。御心配がおありならなぜ御うちあけ下さいませんの、どうぞ城南の里に君を思ひて日毎淚する少女を御わすれ下さいますな。

淸く美しく女同士の間に流るゝ淚を見る。（記者）

○平凡日記

殘花

久振りでの御天氣、私のクラスは今日日光行き、昨夜の大雨に引きかへて今日の好天氣、定めしクラスメートの方々のハートは嬉びに滿ちて居られるであらう。普通の私なら、平生の自分なら、先頭第一、上野へと行くのだが、來年○○へ行く事を許可してもらふために身分作りの條件がある、曰く「本年は學校以外遠足等には一切行かず」と、從つてこの一日をむざ〳〵書齋の中にアクビして過すべく餘儀なくされて居る、否餘義なく自らがして居るのである。うれしいのかつまらぬのかわからない。氣むづかしやの中兄樣いとゞ御氣嫌がなゝめだ、從つて口もきかない、ほんとに中兄樣は變屈人！姿やじゃないが捌けそくなりだ。かういふ時大兄樣が來られると風向が一變するのだけれども、昨日大兄樣は「明日は松茸が京都から參りますから御出遊せな中兄樣も居りますよ」と申上げたら、「何松茸が來るじや僕が大八車で新橋へ取りに行かうか唯御馳走になるばかりじや失敬だからな」なんておつしやつたのに、まだ御出が無い、何故かく同じ兄弟で氣が異うのかしら、ほんとに中兄樣はきらひ！（但し大秘密）夜になつても大兄樣は御越がない「ねえ母樣、大兄樣は、何故今日見え無いのでせうね」「さうねこの間お前が來年○○へ旅行すると云つたらじや又御用金仰せつかるなつて云つて居たから、お前が家に居ては如何だか……」隨分けちな兄樣！母樣も何も今から來年のこと兄樣におつしやらなくとも好いのに、大に不服でたまらない、嫌な日曜た。

來年來年つていふうちに、もう二月になりました、お差支なら二割位でお貸し申しませうか。（記者）

○十夜の鐘

緋をとし

折りくべた桑の小枝の少くなつた時、四邊の空氣を響かして鐘が遠く

遠くなつた「お十夜の鐘がなるやうねえ」と思はず言ふ、「さうね」無意味さうに仰有つた信樣のお言葉は、雲の樣なものに憬憧れてる私の心にあきたらなかつた。

つと立つた、月が淸い。初冬にばかり見られる特種な白い其光りは、亂れた菊をてらしてゐる、强い香が身に秘みて、思はずよろと垣に凭つた。そして、白堂山のおろしにつれられてくる、神秘な鐘の音に指ををつた。

見上ぐるお山の本堂のあたりは、木の間がくれにちら〳〵火が見える其光りの本に數十の坊さんの衣は紫に緋に、あゝどんなに美しい色彩だらう。どつと高く響く讀經の聲がかすかになる時、鐘はボーンと一つなる。其長い餘韻が悶へる樣に顫動して、白い月光の中に消滅された時、木魚の音と坊さんのこゑが高く聞える。私は其の音の中に靑白かつた眞傳の顏を見た、

去年迄鐘樓に一晩立つて古色なつりがねをついた眞傳はもうゐない。「いくら親無子だつて、頭を靑くしてゐなきやならないていきまりはないでせう、口惜しいですよ、私は」と、わざ〳〵それを言ひに山から下りて來た眞傳は其翌日から見えなかつた。

靑い、眉の濃い少年、私はあの子の行方をしりたくない、けれども悲劇の主人公らしいあのフエースを思ひ出すと限りない不安を覺えるのだ

寺中光に包まれてるのに、松の中に一きは高いかねつき堂は、淋しげに黒く聳えてる、今宵は誰がかねをつく。あゝ兎に角淸い月淋しい音である。

充分といふではない、兎に角心持はかけてゐる、眞傳といふ人間の輪廓も可成に出て居る、只如何にも事象が淺薄なのが面白くない。（記者）

○雪の日

四谷　櫻子

十二月十日。今日はね坊して遲刻、用事がありましてもきまり文句だし御腹が痛みましてもふるくさいから、思ひきつてね坊致しました」と正直に白狀したら、水谷先生は「高等女學校の五年にもなつてしかも級長さんがどうも困るね」とだけでわりに御きげんがよかつた。

だつて級長だつて早起ぎるときまつた者であるまいし。二時間目の生理の時そつと横目で窓から外を見たら白い物がちら〳〵ふつてゐる、まあいつふりだしたのだらう、幸ひ雨傘に足駄はいてきたからよいけれど。御ひる皆で運動場へ出て雪ぶつけする、三年も四年もだめだ一人も出てこない、私の級ばつかり。五年のベビー連なんて先生方はおつしやるけれど、私たち氣どつてゐるのは大きらひ。凍えて覺えがなくなりさうな指を息かけては暖め〳〵、打ちつ打たれつ雪だらけになつて遊むだ。午後は歷史に英語、二つとも大好だから一心にきく。かへりに門を出ると雪は大分つもつた、袴の裾短かに身支度かひ〴〵しく六丁目で石川さんに御別れして一人まつしぐらに家路に進む。手袋を忘れたので包をもつてゐる手がきれる樣に冷い、風は吹く雪はます〳〵ふる、足駄の齒は忽ち雪に埋もれて、幾度も幾度も轉びさうになる。はらつても〳〵五六歩歩く中には一ぱいになるからやりきれない。やうやく三光稻荷をぬけて四谷見附にかゝると、まあ風のひどい事ともすれば傘がとばされさう、冷たさと苦しさにほんとに泣きたくなつた、かの雪は鵞毛にて飛むで散亂すとか、六花咲くなどゝ子細らしく雪をほめ立てるのは全く御姫樣か樂隱居の云ふ事だ、彼らにどうしてこの雪を冒して通學する私たちの苦しみをしるものか、とつく〴〵思ひつゞけながら足駄の雪をはらひはらひ、右折左折やうやく家についてホッと一息した。

五年のベビー連だなどゝ、大層無邪氣がつてるかと思ふと、生理の時間に横目で雪を見たりなんかして、傘と下駄のしんぱいをするなんて、ベビーだかお婆さんだか分らない。（記者）

○夜　永

京都　松本つる子

讀書に倦きたので、一週間程前から編みさして置いた藤絹の手袋を持ち出してきて、せつせと編みたしたら、兄樣出來上るのは大抵夏頃だね

うつて、随分よ。いゝわ、一生懸命に早くこさへて吃驚さして上るから。

さう憤慨したもんぢやありません、宅のひさ子が方一寸にも足らぬ沓下の穴を七日間せゝくつて出來上らず、それで弱ねがぬひたいなんて呆れかへる奴だなあつて四郎におこられてゐた、好敵手あり君以て瞑するに足る。(夜雨)

○十二月

京都　要司村福子

十二月一日朝。火鉢にもたれて新聞を讀んでゐると自然に頭が上氣してくる。横窓から冷い風が息を吸ふ度に音もなくぴつたりあたつて、心地が可い。にぎやかな樂隊が靜かな朝の街を縫つて歩く、何だが神聖をけがした樣に思ひ乍ら無意識に門口まで出て見ると電氣館の廣告であつた。入口で今日は今日はといふ聲がする、誰も居ないのかしらと思ひ乍ら入ると借家に住む妻君だつた、御用を聞くと家賃を持つて來たのだといふ、是なら出來ない事も無いので通ひ帳をもらつて印を捺す。御苦勞樣でしたと云ふ下から、會社へ勤めてゐる、自稱取締りのおかみが來ました、ニコ〳〵笑ひ乍らびつこ引いて、中々愛嬌が可い、昨日持つて上るのでしたが宿と買物に參りまして……。いゝえと云ひ乍ら、六圓の家賃の處に住んでやどと買物とはちと悲觀する、大きい脊の高いおかみと小さい細い頁人君とのコントラスト、中々奇拔だと笑ひ乍ら、御苦勞樣でしたと通帳を渡すと何だが言ひたげにして歸つていつた。此度買物の景氣だらう。二軒の姓名を懷の手帳に控へておく、後から誰かに渡さねばならぬので。「小さい小供に中風のおやぢお助なしてサヽラ一本買つておくんなさい」八つ位の女の子がいぢらしい聲出して前の樣に言ひ乍ら入つてくる、機械的にサヽラ五六本をならべる。お父ちやんはどこにゐるのといふとあこにといつたきり無邪氣な者だ。門口をのぞくと、あつちもどうかといふ顔してのぞき込んでゐる、杖にたよつて、口も滿足に言へないのかおじき計りしてゐる、それいらないから是でお菓子なとお買ひとさつきの家賃から白銅を三つぬいてやると大きにといそ〳〵歸りゆく父親は頭を閾にすりつけて此御恩死んでも忘れませんと幾度も〳〵言ひ乍ら杖にすがつてぼつら〳〵と行つた。あゝ彼も一度は人間らしい暮しもしたらうにあの子の母は兄姉はと妙に氣にかゝる中風の父親をもつた子が因果だらうか、幼ない子を中風病んでもつ父親が因果だらうか。あゝ。

さゝら賣の乞食に十五錢をくれるとは西陣の豪家だけあつて氣前のいゝ嬢さんだ、一本一圓の筆ぐらお使ひさうなものなのに書いたのといへばどれも〳〵さゝらの刺が突つ立つたかと思ふような字ばかりである。(夜雨)

文章は追々熟れて來ました。(記者)



冬枯の夕　新潟　村田けん子

○夕まぐれ

白雨女

　逝く秋を痛む夕暮の風が袂を飜す頃、編上靴に袴の裾蹴返して街の一隅を曲らうとするとふと新らしい木の香りがする、ちらと目をその方に向けると半ば建てられた家の、ぞまつな假塀を通して大工の働くのがよく見える。薔薇色の木のくづが渦巻くやうに散らばつて、日に燒けた勞働者の顔――そのたくましい腕――

　私の記憶の絲はたぐられてあの幼な時代に歸つた。ふるさとの家に、まだ世間のどんなものかも知らずに、安らかな生を送つて居た頃の事。

　私の祖父は普請きちがひと云はれた程で少し金のまはりがよいと、すぐ地所を買ふ、家を建てる。それと圍碁との外には何の樂しみもない程だつたから、自然大工の出入りも繁くつてよく下女などは薬調らへの面倒をかこつたのもおぼえて居る。けれど幼なかつた私は只人の來るのがうれしくて普請小屋などへもよく遊びに行つたものだ、そして有ふれた世間話や俗謡をうたふのを何より面白いと思つて居た。けれどその人たちの話す事の多くは戀物語でそれこそ聞くに堪へないものだつたが、でもまたその中にしんみりした、美くしい情も交つて居るやうで私は小屋を忘れられなかつた。

　あの柿が眞赤に熟れる頃、つきぬけたやうな空を仰いで私は材木の間に横はつて居た、手には假名を辿つて漸くよめる雜誌の切ぬき――それは多く新體詩だつた――を持つて、強い秋の力にみせられたやうにぼんやりして居る時に「どうしたんです、環ちやん、きいきが惡いんぢやないか?」と赤黒い手で額をおさへてくれるのは聲の美くしい若者だつた。

　な時には私は急に活き返つたやうにはね起きて手に持つた切そんぬきをふりまはして「いゝえ何でもない!のね、また唄つて頂戴よ!」とせがんだものだつた。

　野にはその時うす紫の夷菊がある、しほらしい花、都知らぬ薄命な乙女のやうな、之れを摘んでは私は大きな束をこしらへた。

　あゝあの夕空樂ある両總の秋、たゞ生れた自然のままで生を送つた、あの時分がなつかしい、こひしいのは少女のかげ。

灯ともる街を悲しくすぎて私はいつか濠ばたへ出た。思ひは新たに變つてくる。

　思ひは新に變つてくる、一句大いにふるはんとしてふるはず、上笑あたりの大工が環ちやんきいきが惡いんぢやないかと言つたにははせられる、「戀物語」も不調和きはまらずや。(記者)

　不調ではない、此文全體に情趣がある。(別の記者)

○朝

土佐桂花

　庭下駄をヒツかけて裏の村道へ出た、霜がまつ白く降りて、いやに寒い朝だ。川の上から、櫓の響がして、家形船がくる。日はまだ出てをない、只廣い廣い野原のはてにならんだ、一だん高い山の頂が、微な太陽の光線を受て、ほんのりと、赤く見えてゐる。

　只それだけの事ぢやつまらない。(記者)

○わが叫び

小樽組子

　祖父が來た、千代お茶を一杯持つて來ておくれ、ハイと立ち行く姪をランプの陰に見て熱い涙がほろほろとこぼれた。顧みてもくれない別ち與へた血の繋が此所にもある事を忘れられて終つたのだ。

　どうせ厄介者だ、ぷいと立て雪降る外へ出た、涙の痕を風は冷たく掠めた。教會の赤と青の灯影が懷かしく映る、神によらうか、ぢつと見詰めたが……自分は自己に頼るのだ自己に生きるのだ、二歳の昔から物心付くまで祖母の手に育つて母からは情ない子と退けられた、祖母の愛に生きた身は母も戀さなかつた。

　十八の水無月を迎へて若き心は躍つた、すべてを捨てゝ人の胸に走つたのだ。捧げた血を心に愛でゝくれたのも菊月を待たなかつた、手紙を燒いて下さいと哀願したのを口實に人は跡も見ず都に去つた。

　すべての情緒は移ろひ行く、誠なるものと離たが服從なる少女であつ

た。自己の全部とは望まぬ其一部すら人の胸には影を映して下さらぬのだ。骨肉の間でさへも。………

自己に生きたい、すべての係累を斷つて自己に生きたい、臥どにはいつても夢は結ばれなかつた。果てしない灰色の空にあてないものを望んで魂はふらふらさまよひ行くのだ。

獨りで立つて自己を信じて行きたい、母も逝つた今は只一人の祖父さへも、鈍い私にも意識せずには居られない。いゝいゝ、離れて行くものにはすがりはしないのだ。女、何故自分は女に生れたのだらう、あゝ自分は女であつた、悶へても叫んでも囚はれねばならぬ。○のないさだめをしみ〴〵泣かれた。

萬人みな苦しみ萬人みな顰む、はかなきは女かな。(夜雨)

○十月のある日

淡路　濱田留子

秋晴の暖い日。人形の頭を拵へて頂戴、なア姉ちやん、ようようつて雪ちやんと菊ちやんがせがむ、とう〳〵負けてしまつた。

半枚の半紙を杉箸にくる〳〵つと卷いて兩端からギユッと絞る、箸を拔いて紙を通して、髮とたぼを拵へる、赤い手柄の髷も顔も揃つてちやんと出來上ると二人は喜んで〳〵披露に持つて走る。本統に子供は無邪氣で可愛い。

午後二人を連れて畑へ綿取に行く。雪の樣なのが黄色い花と入り交つて澤山ふいてゐる。歸りには稻子とり、稻子入——瓢箪の古いの——は菊ちやんが持役。兩方から稻がお辭儀を仕合つてる樣になつてる畔道へはいつて行く、と居るは〳〵稻子がピョン〳〵と彼方へも此方へも飛ぶ。二人はキャッ〳〵云つて捉へてる。稻葉にぢいつと眠つてるのを見つけてソッと手を出すと、グルッと葉の裏へ身を換す。チャッと葉ごとつかんでスーとしごく。菊ちやんを呼んで、頭から瓢箪に入れる、中でピン〳〵はねてる。「はたと(稻子)も可哀さうなア」つて菊さんが、暗い中でもがいてる音をヂーッと聞いてゐる。

イヤー——と云ふ聲にフと見るとまあ菊さんが溝に片足落ち込んで大騒してる、瓢箪のつめがとんで稻子が飛び出してゐる。やつとの事で元に納めた。

歸つて、トー〳〵と呼ぶと鷄が嬉しさうにかけて來る、瓢箪の口から我先にと飛び出す稻子を競うて食べる。夕日が斜に鷄の背に照つて靜な秋は暮れ初めた。

田園の活畫とでも言つておかうか、どうしていなごを燒いて喰べなかつたらう、切角捕つたのに。(記者)

○逝く年の或夜に

兵庫縣　潮雨

枕元の襖を開けるとパッと花やかな光線が目をいつた。坊子枕を縱にして臂ついた自分の姿がはつきりと灰色の壁に映つてゐる、什うしても凝ぐるしい。

自分は靜かに立つた、そして座敷の中を無意識に歩む。元祿袖にへこ帶を後に結んだ自分の影が三間の壁の面に同じ樣にうろ〳〵してゐる。私はふと、毎夜毎夜八時を待つ樣にしてな也眠られもしない床には入るのだらうと考へた。けれど什うしても解らない。

解らなくともいゝ、只私は床の中で目を閉て物想ひするのが好きなんだから、いつも床の下へは火爐を入れて寢る、そして今夜の樣な頭の亂れた時は出して見るのが癖。今宵も又——束縛の子は夜の一時丈自由なのですもの。そうと蒲團の間に手を入れる。

微温のさゝやきな温たかい本を膝の上に置いて痛い程額を押し付けたまゝ默想する。毎號散文は云はずもがなとは自分の樣な愚物が生意氣らしいが……多くは云はず、此月の日記は皆佳作ばかり、自ら欺むける女の多い世、女は皆うそを云ふものときめて仕舞はれても何とも云ひません。只淋しく草の中に隱れずに悲しくとも欺むける人々の中にいつ迄もいつ迄も居らるゝ事を切望します、天は高く地は廣いです容れられないと云ふ事はないです。否いよ〳〵容られないとせば其物はすでに一刻

も天地に存する事が出來ないのですもの。

誰がはいつていけないと云ひませう、容れられなければ自分自身ではいつて入つしやい、同性が辯解するのぢや決してないけれど必ず眞の女は何處かに潜んでゐると云ふ事を私は斷言します、皆……。

自分は想ひのまゝに自個を飾はらず發表する事の出來る人が最もこのむ。あゝ強者の勝ち誇つた叫びに弱者の吐息が常につきまとふ、おゝすべからく強者たれよ、而して弱者を救へ。タイムは刻々として若き日の生命を携へ去る、去る年は追はじ來る年を迎へよ。

あゝ想ひ出多き今年も早逝かなんとす。

さらば諸姉よ健在におはしませ。

（日記の一頁）

初の方は非常に面白いと思つてよんだが、しまひまでよんで失望して了つた、あんまり理窟を言はなかつた方がよかつたかも知れない。（記者）

○死

鳥取　櫻草

私は成るならば處女であるうちに死にたい。世の人の愛惜する聲に送られて、華やかに死にたい。脊い命を歌つた多くの歌反古を殘して…………。

葬むるに火葬が清麗で好いと母は曰ふ。けれど私はそは餘り殘酷だと思ふ。

無限大の宇宙の大陽系の中の、一粟である地球の、其の又中の微分子たる人類ではあるが、ゴッドは世界の數十億の人を、一人として同じものの無い樣に、其の不可思議な手腕・指先で以て造つたのだ。其の骨折りや詛大抵では無い。それをむざ〳〵一片の白煙と化して終ふのは、餘りに惜しい、又ゴッドに對しても濟まない事では無いか。私は小さな壺に入れられた白骨を見る毎に、一種の「殘ましい」と云ふ感に打たれるのである。

だから私は土葬を望む。と云つて頭を丸めて、珠數を持つて、草鞋を穿いて、あの窮屈な箱の中に、藁やら南無阿彌陀佛の書いた茶袋やらでゴツ〳〵押し込められるのは厭だ。先年姉樣のお亡くなりなすつたとき「なぜ頭を剃るのですか。髮を結つて上げたら」と云つたら、お祖母樣は云つた。

「髮を剃らないと妄念が殘る。」

し、又痛々しく病に窶れたおからだを、藁や茶袋を押し詰めるのを見て「お可哀相に、そんな事しないで花で詰めて上げて下さいな。」といへば、父は、

「馬鹿なッ」

と一言のもとに退けた。そして姉樣は遂に、頭を丸めて、珠數を持つて、草鞋を穿いて旅立たれた。

今でもお痛はしいと思つて居る

私は耶蘇教が好きだ。……クリスチャンでは無いけれど……そして髮は剃らないで長く垂らし、頭から肩の廻りの香の高いクリーや、ローズやパンジーで埋めて、其の高い香りに醉つて居る間に、そつと天國に連れて行つて貰ひたい。

吁、我が唯一の安心立命は只「死」である。

願はくは我に餘りに遲く來たらざらん事を？

この人もまた死といふことを冗談に考へてゐる一人だ。（記者）

○玻璃窓のもと

周防　なみよ

ついさつきまで鳴いて居たにもう飛び去つたのか椋鳥の聲は聞えぬ。また淡灰色の雲が流れたのか冷たい空氣が皮膚にふれる。

ふるへる瞳に窓のすり硝子青白く映ると、ふと、いぢけ弱つた體を感覺にはなれた六本の足に支へて居る一疋の蠅が眼についた。……老後の思出に、嘆くやうに生殘つた身を痛むやうに、思ひ惱んでは、よろ〳〵這ふ蠅。

私の哀情は無性に彼の草に走つた。

夏の盛に狂ひはねて奔放な戀を叫んだ樂しく叫んであつた時代はとめどもなく偲ばれよう。

吐く息に微かに曇る玻璃の面に、何んなに心細い思を為て居るのだらう。あゝ哀れな蝿よ。

でも何う為ようと思つてよろ〳〵這ふのだらう。運命を待つのではなくして、矢張り何うかして運命を避けようと為るのだらうか。

翅の厚い襞は縮み疊まれた。枯木の梢からは悲しいすゝり泣きが消えていつた。窓は恁うして暮れて行く。

一通り感じは現れて居る、個性に新らしがらうとする努力は充分に見えて居るが、内容の甚だ空虚であるのが目につく。（記者）

○返事

備中　吉備の子

義さんお手紙有りがたう、あんなに親切に勧めて頂くと、本當に嬉しくて全く此頃の岡山たら大騒動ね、毎日新聞見ると堪へられ無い程、行き度て今日婦人會員は奉送迎及觀兵式陪觀演習拜觀出來るなんて公告見ては、田舎の會員はこんな時てそと思つて、姉さんの胸は躍る様なの、御鳳輦を明日は御着と云ふのに、僻學校と校旗を翳し、制服制帽の男學生白襟紋付微章入の袴着けて正列して鳳輦をお迎えするのかと思ふとね、學生時代に立歸り度心がして、三月に卒業したのが恨めしいなんて出鱈目云つて、母校をなづかしがつて居る姉さんを思ふと可哀相で、私は私だけど、今度計りは親類の端迄見せてやり度て、義さんはい、事ね、私もあんなに云つて行くと定めてたのですが、よく考へて見ると、今度の大演習なんか、全く前代未曾有の大事で、相當に年寄つてお出の御両親の一生には又と無いでせうし、よし有つても近所では無いと思ふの、で行先長い姉さんに、又と云ふ事もあるけど、老先短いお両親を殘して、私はどうして見られませう、義さん私はちやんと決心しましたから、どうぞ、それで色々お勧めして、とうとう御両親は明日一番列車でお出發の事に定まりました、お支度最中で忙がしいの、いづれ面會にもお出になるでせうから、雑踏するので氣を付けて上て下さい、最前兒様からせひ來いとのお手紙が來てよ、決心してる私だけど、お心を思ふとお斷するのが悲しくて、今の場合、御両親へもお目に懸ないで置いてあるの、幸便があつたので待たして書いたの、心がせかせかして書く事もあとやさき、判じて下さい、おとなしい義さんだけど、演習中は殊更氣を付けて不敬の行爲など必ずない様に、知つての事だけれど、心配なので一寸今日五師團十一廿二聯隊が大門で劇戰の最中砲聲が頻りと、流す様な雨が降つてる午前十一時ですのよ、もう判じます讀みもしないで。

句切り悪がい、急ぐ時の用事はもつと句切をハキ〳〵と分るやうにせねばならぬ。（記者）

○友の結婚を報らす

福井　さよしぐれ

三十日でした、氣持ちのよい稻秋晴れの日でしたから、刈り上げを終へようと思つて、刈りたり入れたり持つたり掛けたり、村中の者が懸命になつて働いて居りまず中を、藤色のわんぼをかけた挿箱を下げ荷にして、重さうに棒をしはらかして荷なつて行く者がありましたので、何許のだらう、結納ではないし、嫁入や五ヶ日でもないらしい、まだ道具が通らないのだから、いや五六日前に朝早う饅頭箱に連れ立つて二人さうらしい人が通つた、なんて口々に云つて話して居りますと、あれ、あそこへ嫁さんが、と誰かゞ申しましたので姿も掛け稻をして居りましたのですが、其方をながめますのと俥が二臺走つてきます、先のは嫁さんで後のが母さんた、洋傘は齊のふちとりの紺張りで紋付はかべで頭はまるまげだが、二人共吃驚して、お辭儀を交しましたが、何とか申し上げればよかつた、と思つた時は母さんの黒の紋付しか見へませんでした、家へ歸りましたら、手紙が參てありましたが、思つた通り宮崎へいらつしやいましたのです、ほんの今度は何も持つていらつしやらないしきたぎばかりですつて。そして三十一日にはすぐ志津の方へいらつしやらたのですが、おらくですは、お二人きりで氣兼なさる人はなし、宿屋飯ですからなさる事はなし、毎日お好な文學書を耽讀して居らつしや

るでせう。
うらやましいと顏に書いてある。（記者）

○五圓紙幣

雪子

新しき五圓札が出來た、私が覺える樣になつて三度變つた、最初のは十分に記憶して居ないが、何だか大きな判であつて其印刷も美的でなかつた樣に思ふ、だから五圓の札よりは金高に於ては五分の一であるが一圓紙幣の大黑樣の方が子供心に好きであつた、姉や兄が二枚持つて居てどちらをあげようかとからかつた事を覺えて居る。次に出來たのは武內宿禰の御肖像入のである。其左右の宇倍神社は因幡の一の宮である、我家とは里餘の此宮、兄の出世を祈るが爲めに母が日參なすつた此宮、其兄は今早や亡き人の數に入つて居るが幾千年經しかと思ふ樹々の立ち並ぶ此宮、此札を手にとる度に、ア、深山の奧滲々滴々の涯て迄も此札持たぬものはないであらうと何となう肩身が廣い樣であつた。新紙幣は形が小さくなつて天滿宮と透し大黑天である、道眞公崇拜家で福の神も歡迎申す私は厭とも思はぬが、前の札に比しては見劣りする樣に思ふ。母が今度のは小さくて薄くて價値がない樣だねと仰しやつたら、側から弟がそれではお母さん、角力取りはお父さんより價値がありますかねとまぜつかやした。

思ひつきほどに內容は榮えません、一圓紙幣くらゐの價値でせう。
（記者）

○公園めぐり

千代田の松

其一　日比谷

秋の心地よく晴れた朝である。
御約束の九時が報つたので家を出た。パツと洋傘を擴げて電車通りへ曲ると、うら枯れの櫻の梢に朝日がさして、電車の家根には小さな旭日旗と荒勝旗が閃らゝかにひるがへつて居る。坂の下を見渡すと御懷しい輝子さんの影が見える。兩方からかけ寄つて「まあしばらく………御變りも無くつて？」嬉しさに手を取り合つて其れより他に言葉が無かつた。

卒業してから相見ぬ半年！家に居たのに美はしい人は益々美はしい。ブラ／＼行くのも一きようと、輝子樣先きに成つて御歩るきに成る。大柄な矢絣の御召に洗朱の御み帶品よく、乙女の誇り黑々と六尺の御髮を無雜作な束髮に上げクリーム色のリボンを蝶とかざして、なよやかな御肩の邊りに床しいホワイトローズが匂ふ――。

「乘りませうか？」華しやな輝子さんはもう降參した、兎角誰れしも樂な方にはさんせい、一議にも及ばず遂う／＼御茶の水から電車の御厄介

今日は隅田川にボートレースが有ると聞く、其れにも關はらず日比谷のグランドは運動シャツ着けた人に滿ち／＼て活氣天をつく計りの勢で先日遙る／＼遠征でシカゴ軍に早慶兩大共見事に破られてから益々浮かされたボール熱に、若き人々は夢中に成つて步せ廻つて居る。

木立を拔けて花園に出ると今を盛りのダイヤとコスモス、黃菊は蕾が堅かつた。日比谷には四ツ葉のクローバが多く有ると聞いたので築山の芝生を一心にあさつたが、一ツだに見當らなかつた、幸福は遂ひに吾れ／＼の物では無いのか？。

金網の中にさぎが淋しさうに一本足で立つて居た。心字の池の畔りに來ればゆかりの色も淡紫のあやめの花の返り咲きが一本、むかしの夢を忘れかねてか季節に外れて開いた花は憐れに見えた。

噴水の霧に虹が立つ。畫の樣に水面に浮んで、投げ麩に群る緋鯉眞鯉子供が面倒に成つて麩の一つかみを一しよに投げたら、驚いて水底深く姿をかくした。

一時近い。今日こそ御汁粉屋へ入つて見せると、意氣込んで來たものゝ、矢張り入り兼ねて、音樂が始まると云ふ揭示の三時にはまだ間が有るから、近所へ行つて何屋か探しませう、と外へ出た。

公園めぐりは面白い、一つや二つで降參してはいけません。（記者）

○野佳

常陸　初澤さく子

十一月三日、永い間の夢まきに疲れ切つた躰も忘れて飛び起きた、今日だけは心の儘に讀書が出來るのだもの、戀を失ひて世を儚んだ乙女子の涙のやうな秋雨が誇り高く咲いた紅菊にそゝいで居る。嫂様と兄とはお里の祭禮だとかで朝から出掛けて、家の中は極めて靜かだ、奇麗に掃除した机の前に座つて頰杖ついたまゝボンヤリと考へて居たら、ゆるやかなオルガンの音が母校から聞えて來る、只わけもなく淋しかつた。

スーウと障子があいた、涙を拭ふ間もなく、銘仙の袷にお對の羽織を召した人、見上ぐる程お脊が高い「まあ藤枝さま」淋しく微笑んでかたく〳〵御手を握り締めたら、「なぜ泣いたの」と優しい目にヂツと見守つて「寂しいのね」いとしみ〴〵仰有る、だつて〳〵藤枝さまは今暫しの間ぢやないか來年の春は學士夫人、尤も學資の大半はみついでおらしやるのだと聞えては居たが、凡べてのもの優るとも劣りはしない我身にしてあゝ一生、一生………

又しても新らしい涙が、あゝねたましい、我乍ら淺間しき心とは知りつゝも、許して下さいよ、藤枝さま神様のやうなあなたを恨むなんて、罰が當ります。

夕暮雨晴れたので手を執つて澁へ出た、野の紅葉は夕榮を浴びて一層鮮やかな色を示してゐた、むらさきの銃波の上に漂うた雲の孤影は見てゐる中にうすく〳〵消え去る、淺菊匂ふ野道を歩くと限りなく悲しかつた、淋しかつた。あゝ秋も逝く、秋も逝く。

凡てに優るとも劣らぬ……は書き違ひでせう。（記者）

○おばあ様

眞野圓葉

おばあ様と呼ぶけれど實は伯母様である、伯母様ではあるけれど年が大分とつてるし、私達と同年輩位の孫が多勢あるからおばあ様と呼ぶのである、おばあ様は非常に嫁を大切になさる、他家に嫁いでおられる姉様達が、阿母様はまあじれつたい程嫁を大切になさるわと云つてるのも、世間の人が義姉様が家付で義兄様が聟だらうと噂してゐるのも、私はよく知つてゐる、おばあ様は朝早く起きて働く、お飯が出來てから義姉様を起して、小兒に着物をきせてやつたり顔を洗つてやつたりする、おばあ様は水蟲とやらで手足の皮が魚の鱗のやうになつてるし、爪が眞黑にでこぼこしてゐる、其可哀想な手でおばあ様はお洗濯もすれば張物もするそんな時は手の皮が浮き上つてブク〳〵してゐる、おばあ様が好きなさるから私はいつも古新聞を足の下に敷いて皮をとつて上げる、するとおばあ様は如何にも平和な低い聲で、あゝいゝ氣持だねえとおつしやる私は耳かすもとつてあげる、おばあ様は左の耳から始終やにが流れて穴の所に固まつてゐるのである、髪もとかして上げる、ねづみの尾つぽ程よりない白髪だけれど、こんな時はおばあ様は目を絲のやうに細くしておられる、手の皮をとつて上げる時、指の關節が山のやうに高くなつて指が伸びなかつたから、おばあ様何故指が伸びないの？一寸こうやつて御覽なさいなと云つて、私はおばあ様の掌を自分の片手で撫で乍ら片手を開いて指を揃へて反らして見せたらおばあ様は、だめですよシウマチスの爲なんだから、もう伸つこありません、あゝ私も若い時はお前のやうにきれいな手でしたよ、とおつしやつた、おばあ様は最初からおばあ様のやうな氣がするけれど、やつぱり昔は私達見たいのであつたかしら

山から出て來た嫗と云たやうな九十九の嫗の面影が見える。（記者）

○夢三題

竹子

若牛が車を引いて居る。

「牛さん重いだらうね？」と物好きに問ふた「重いつたらありませんよけれど人間様もうあきらめました、始めは此事さへとはれたら私の役は濟むと云ふものと、日が暮れると今日も大分損したらうと思つては日を

惑つて居りました、彼此する中に車がつぶれましたので？其時の嬉しさ、お察し下さいませ其夜はそれはそれは長くなつて寢ましたね、ところがどうです明る日馬子が何の時刻に引出しに來るぢやありませんか、これは不思議と思つて出て見ますと、今の此車が當然に居りました、いや恩ひ出してもぞつとします、どうせ世の中は昔の絕間の無いものですよ？」「實際ね……」と感に入つて目がさめた。

ぬかるみを行く大變ひどいぬかるみを、然も忙がしげに急ぎ足に行く向ふから小僧が自轉車に乘つて來る。

私は一向よけよともせぬ、サイクルの主はしきりにハイハイと云ふ、それでもよけぬ車は終に足をかすめた。

私はしかと小僧の胸元を持て、「謝りなさいゆるしません」と云つた、すると「ハイハイ云ふてるのによけてとうくはなれんによつて？」と云ふ、私はいきなり小僧をたをして自轉車を高く投げた、すると二三軒向ふの屋根の上で止まつた、サイクルの主は泣き出す私は後をも見ずに二た足程前へ出た、と、同時に小僧も車も家も消えて邊りは眞の暗となつたぬかるみは寢床と變りて、時計が三つ鳴つた。

大變足がだるいので灸をおろしに行く「先生お灸を一つ足がぬけそうで困りますから、？」「はアー宜しい」と云つてサンりに墨をつけ「歸つてこゝへおすゑなさい毎日其上へ七火づつ十五日程續けたらよろしい」との事、歸るとすぐにすゑた、次に少し上へ亦上へ七火すゑると二寸程上になつた、翌日は四寸上になり六寸になり八寸になり、十五日目に肩迄上つた、足は依然としてだるいそこで先生に話すと、「其形の上と云ふ事ですぞれぢやサンりぢやない十里もあるぢやないかアハヽヽヽヽ」先生は手をうつて笑ふ、私もふき出した、何笑つてると母樣のこゑ……あゝ……夢だつた。

◎炭燒く里より

山城　文子

香里へ菊人形見にまゐりましたと、お手紙下さいましたのはいつでしたかね、私も里歸りして見度ございますから、今一度お附合ひして下まいとお返し致しましたのも何日でしたかね、あゝほんとに好事魔多しとはじれつたうムいますことね。

今頃は、電車の響を聞いてなさるでせうに、私の丸窓には、木枯がとニツ〳〵とね、それは爺ですわ、ひるは炭燒く煙、ほんとうに里こひしいのよ、寄生木には、安宿戀しやホヽホラホウ、智證こひしやホヽホラホウと、こひしく思つた人も、あつたと書いてありましたね、私は里こひしいのよ、それと同じ樣に、けど笑ひ給ふな、ちと話もあることよそれには………。

それはそうと、私は來月の第四日曜日位には歸ります、けどお家は歲の市でご多忙ね、夜分になるとお話し致しませう、それ迄此處で炭燒く煙に燻られませう、どうぞお便り下さいませ、それ迄に。さよなら。

◎村落の小學校

ふまと子

今日は分教場勤務の日である、私にはこの日が一ばん樂な日である、何故となら、一里餘の道「堤の上」を種々な事を想ひながら歩むのが好きであるからだ。堤の左手には山の上、中途、と云ふ妙なところに家があつて、物置のやうな家造りきたない、妙な臭のする家ばかりである、職業の藁細工、皮細工、農業などの道具が、ちらばつて居る、學齡に達してゐぬ子供がどぶ田の深い中へはいつて、稻穗を拾つて居る、ひよいと私を見ると「ギア裁縫先生が來たにや……」と妙な口調でどなる、と、一齊にこちらを向いて、かたくるしく最敬禮をする、そしてにこ〳〵とうれしさうに笑ふのである。五十分あまりで學校につく、全生徒四十人尋一から尋四まである復式學級である、校長兼訓導兼小使の先生、一人中々つらいのである、生徒は皆、その物置の家から來るのである、かた入れのはいつた、きたない特別の風をして居る、これを金次郎先生式の風と云ふては笑ふのである、個性を見るにいく分ひねくれて居るのが多く、言語も妙なそれは〳〵可笑しい口調である、矯正につとめて居るが家庭ではされて仕まふのである。

二時その裁縫教授もすむと、兒童にとりまかれて歸途につくのである例の口調で話を仕かける、可笑しいやうな又あはれにも感じて冥想ひにしづむのである。

○旅は道づれ

宮城馥子

後姿を見た許りの時は、何となく氣味の惡い男だと思ふたが、追付いて見たら人の好さ相な田舍爺さんであつた。ほんとうに好い連を得た。何程きかない事を云ふても未だうら若い女が一人、日の暮れる頃右は川左は山の崖道を通るとは危險な話だ。

新聞雜誌に讀み込まれて遲くなつた事や、恐ろしく思ふて居た事等を云ふと「其でも昔よりはよくなりましたよ、昔はこの山が皆杉林雜木林で惡者や乞食が巢をつくて居り、通る人々を苦しめるので、白晝でも女の一人旅は出來ない有樣でした」と語つて聞かせた。

まだ道が遠い、暮色ます〳〵せまる。私は大舟に乘つた心地で老人の後について進んだ。

二人女

川岸に二人の女が居た。

一人は四十許り　菜を洗つて居る。

一人は二十四五の美しい女、洗濯だ。

「うちの君は居ませんよ」と突然四十女が云ふと、

「えッ何時」

「三日前」

「迎ひをやつたの」

「いゝえ出樣と思ふて出たのだから構はないで置いたの、みんな私が惡いからだらうよ、フヽヽ」と冷笑つた。

話に實を入れた爲、手からはなしたのであらう菜一株流れて行く。私は石に立つた儘彼等の話に耳を傾けた。「ねえお玉さん、大きい眦をたれた位の事を云はれて逃げるはろくな者でないね」—するど若い女が「さう〳〵私等共陰事を鋭に掛けた時ア白道も逃げたつた」と云ふ。

洗ひ終へたか、バケツをさげて行こうとすると四十女が「私許り置いて行くの」

「又今くるのよ」とサッサと行く。手拭のかぶり臉横もよく見えた。

○故鄕の野

長野美よ子

運命の神に見捨てられた私は、赤子が母の懷を慕ふやうに、只なつかしい故鄕に歸つてからもう半年、夏を送り秋をむかへました。戸隱街道のウネ〳〵した山道の中腹を、雨雲が帶の樣に、北から南の方へ走つて居て峰の一本松のあたりが、まるで繪のやうに浮き出して居る。去年までは都の町はづれ、其のほとりで、秋を送つた。こゝのやうに時雨もよく降つた、あの大きな木に風がゴー〳〵と鳴ると、おそろしくてねむれぬ夜もあつた。それでも一雨ごとに、あの五重の塔のあたりが紅葉するのが嬉しかつた。

今年はこの杏の花さく里近くに秋を過ごさうとして居る、日一日と秋近くなつて、木々の梢が色づきし朝徑にそれの濃くなるのを見ると、私の胸はあやしく波立ちます。

シットリした野の夕暮、泣いて居る樣な色彩を浮べた夕ぐれ、つゆしげき田圃路を行くと、何んとも云へずもの悲しい情が胸にせまつて、冷めたい涙は頰のあたりを流ます。

名もない小さな川の岸に、色あせた野菊が二三輪淋しげに咲いて居るそれをつんでは一片づゝ、水のすんだ川へ流して、ぢつと其の行えを見おくつてると、自分もこうあの花と一所に、どこともあてのない漂浪の旅に去りたいと思ふと、たまらなく切なくなつて、もうじつとしては居られない、思ふさま泣いて〳〵、もがきたいやうにたまらなく、兩のたもとをかほにおしあてたが、すねた心の私は矢張いつものやうにずゝりないて、家に入りました。おそらく此時の淋しかつた印象は、生涯を通じて忘れる事はないでせう。



詩の言葉（二）

處女

いかなる憂を藏めれば
花の少女のたゞ獨り
ほつれし髮もかきあげで
濡れし裳裾もさながらに
荒れたる野を越ゆるらむ
片足羽川の大橋に
藍もて摺れる衣着て
赤裳裾曳き渡りけむ
昔少女が面影を
今眼のあたり見つるかな（夜雨）

河内の片足羽川の大橋を渡つた少女と云ふのは『萬葉集』に出てゐる、たゞ處女であつたらう、此詩も亦只の處女に過ぎない、たゞの處女が、心愁はしげに、たゞの野を歩いて行くと云ふ其れだけの事を、傷心の詩人の眼には決して只それだけのものとして映らない、夜雨の『影』は其時に出來た、今より遡れば早十數年の昔の作となつたが、之れ即ち其一節である、夜雨は今も猶ほ萬葉詩人に親炙する一人、詩も女も新奇ならざれば許されぬ世に、なほ且一人、昔少女の面影を戀ふるや否や。

芙蓉を前の身とすれば
涙は秋の花の露
小琴を前の身とすれば
愁は細き糸の音
いま前の世は鷲の身の
處女にあまる羽翼かな（藤村）

處女『おきぬ』姿は花にして眼は盲たれ、心は天翔る鷲の身の、想ひの翼は戀となり、歌となり、聲となれど、運命遂に草に埋れるあはれさは、夜啼く蟲のはかなきに似たり、あゝ、處女には其翼は餘りに強く荒し、世には重すぎる翼を持つた少女も多からう、世には餘る想ひに惱みたる處女も多からう、共に來りて詩人の情を味はずや。

明けぬ暮れぬと父の前
父より外に交らはぬ
隱家ながら互み互み
耀く眸見交して
處女となりし姉妹（醉茗）

此は處女なれど、神女に近い、山深く人跡稀なる家に育ちて、決して人間には會はなかつた、只朝に暮に父の許に在りて、漸く年長けゆくに、姉は妹を、妹は姉を、互に相語らふばかりで、外に女とては近づくものがなかつたが、此二人は自然に美しい處女となつたと云ふのである。『仙媛』の一節。

樹蔭の泉に誰を見てか
可憐や、少女子水も掬まず
顔うち赤らめ疾く去るとて
水甕碎くな、道は狹きに（泣菫）

伊太利の少女か、フランスの少女か、乃至熱帶椰林に肌あらはなる南洋の少女か、水甕碎くなとは能くも處女の情を穿つたもので、其人と、其場と、共に生きてゐる。

時になほ街はずれなる老舗の戸
少し明りて火は路へひとすぢ射しぬ
行燈のかげには清き女の童物縫ふけはひ
そがなかにたわやの一人髮あげて
戸外すかしぬ——
事もなき夜のしづけさに（白秋）

古伊勢の桑名の街はづれの夜更けて若き詩人の旅行く時、事もなき夜の靜かさに表をすかしみた若き女は誰れであつたらうか、旅のおもしろさよ、女に生れたる人の幸ひよ。

髪こそ見えね、顔みえね
雲の少女の戀しさよ
かひなき人の手を伸べて
嗚呼幾たびか、雲のすそ
捉へんとして仰ぎけむ（花外）

理想を歌つたもので、實在の處女としも思はれぬが、雲は空の自由なるもの、處女は人の自由なるもの、雲のきよきと、處女のきよきと、詩に溺れて自由を愛するものは双つながら之を酷愛す。

吾は娘の肉を持てり（泡鳴）

肉を賣らん、娘の肉を買へやとは、人肉を賣らんとする狂人の叫びであつた。

ことし十五の初夏と
うちそやさるゝ娘まゆ
かひな肩つき、たをやかに
をどりのふりの裾さばき（有明）

夏祭に躍つて出そうな町娘、たゞ花やかに、たゞしなやかに。

垂乳まろなるふくらみに（泣菫）

乳の圓くふくらみたるを云ふ。

處女子の胸肉は
力ある足りの弓（清白）

處女の胸の彈力ありて若々しく、且つや〱しく力あるを云ふ。

人の肌に手を觸るは
新なるべき君が手よ（夜雨）

人に觸れるのも新しく、人に觸れられるのも新しき處女の身の純潔を云ふ。

蛇のぬけがら帶の如
かゝるを森に見てだにも
弱き子眉をひそむるに（夜雨）

處女の情。

手を觸るゝだに恥しき
乳こそ衣に覆ひたれ（夜雨）

處女の態。

人なつかしき前髪の
處女とこそはなりにけれ（藤村）

おつた。

をとこのかたることのはを
まことゝおもふことなかれ（藤村）

おきく。

おゝ口紅をその口に
君にうつさでやむべきや（藤村）

おくめ。

笛をとる手は火に燃えて
うちふるひけり十の指（藤村）

おとよ。

白菫咲く若草に
夢多かりし吾身かな（藤村）

おえふ。

未通女の胸に咲きいでゝ
花あたらしき芙蓉かな（酔茗）

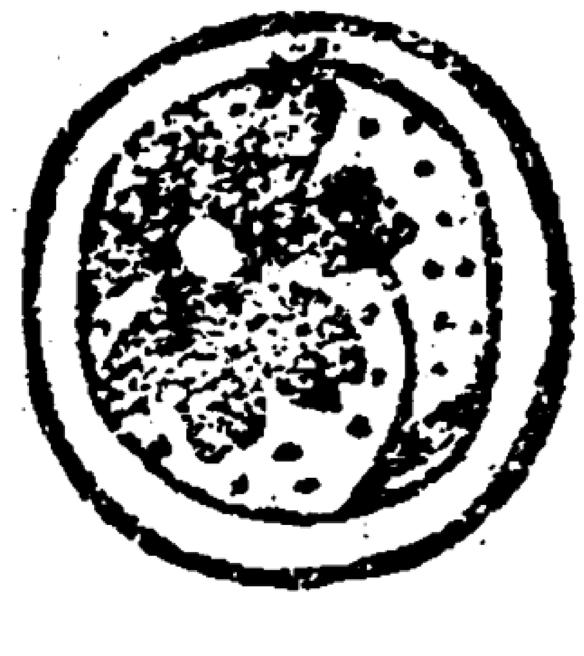
紅芙蓉なり。

みそらはるけき月の宮
常處女なる姫御子の
さすがさびしき袂より
散りしや又は野路の露（空穂）

常處女の寂しさを云つた。

この世はあまりか廣くて
をとめ心はありわびぬ（泣菫）

「ありわびぬ」は住み難いと云ふ意味に似てゐる、その語を今少し高めて云つたので、わびぬはわびしい、ありは有りで、世の中にあると云ふこと、か廣くの「か」はありてもなくても只廣いと云ふ意義、かひろきは古語。



詩

河井醉茗選

○トンネル（地）

港の女

平坦な石ころ一つ轉んで居ない
夢見て居る樣な街道がつきた
美しい光の中に横はつて居るはなやかな街道がつきた
たゞ一人女の群れからはなれて若い心の
歌ふがまゝに歌つて歩いた街道がつきた――
トンネルはあれだ先の女は這入つて行く
私も同じ穴へ這入らなければならないのだ
あの白い雲の片の樣に飛んで行きたい
頭の上を飛ぶ柔かさうな白雲を
無心にながめた
いよ〱穴の口だ――口にたつた
――今
一人の一番後の女が這入つて行かうとする
恐しいとも、いやだとも思はずに居る樣だ
通るべきものだと思つて考なしに入つて居るのだらう
私の心はふるへて、這入るのを厭つた
口に背を向けやうとしたけれど――
何物かに
手を引かれた樣に、暗に引き入れられた
恐しい出たいともがいた――だめだ
賑やかなお祭りに行くのだ通らなければ
ならないと思ふと、いやな女と手をとつたり
肩をすれ合はせた――平氣になつて
ポタリ〱と壁から雫がおちる音
濕つた土は足に吸ひつく
盲の女の樣に何があるとも知らずに行く
話し合ふ女と一所に話した
闇にひゞくかすかな太皷の音に
よろこぶ女と共によろこんだ
明るい光がスーといくすぢかさすと
その光の中へ入らうと女はあせつた
――私も
トンネルをぬけてしまふと饒けない樣な思がする
共に交て居た女の群からまたはなれたくなつたけれど
はなやかな祭の村と、通りぬけたトンネルとを見て、又一人離れて行くのを心もとないと思つた

少し言ひ過ぎた爲に詩らしい感興の大部分は殺がれた、トンネルと女の比喩も一寸思ひつきだが、それほど内容は充實してゐない（評）

○月（入）

麻布　花子

落葉樹の木立のかげ
病葉を袖にうけ
あはれたつわが影は
たゞ細々と地に這ひぬ
冷たき土よ、月光よ

さまよひて落葉を踏めば
さわ／＼と
囁くや――胸に沁み入る
落葉落葉にてととへば
はぐれし魂を歎くてふ
慕ひよる歎き聞けど
あゝ冷靜なる天地よ

冷かなる月光の鋭き光の胸を貫ぬき
わが面をさしのぞく冷たきゑまひ
胸の傷手に身顫へば――
痛ましやはら／＼と病葉のわれにふ
んそゝぎ
悲しき譜してとむらひぬ

袖にうけたる落葉の
その痛ましさに、そと口づけし
涙さへ、月にそむきて袖に拭ひぬ

あゝわが見んとするあるものは
たゞ透きわたる木立より
木立のかげをわけめぐる
月と冷たき落葉と
おきどころなきわが身のみ

淋しい冷たい涙の流れるやうな詩です、以前から見て進歩はしてゐないが、出來不出來はあつても詩の作れるのは幸福です（評）

○誇りの玉

夢の浮橋

三尺の羅綾の袂もじゆるさと
君が腕に
火ともゆるカンナの花の接吻をては
みし心
君知るか――

紫の沙香くゆる夢の細殿
流れ入る小鳥は樂に耳はかせども
ほゝ笑まぬ心を人は強しといひぬ

見上ぐれば大空の
偉大なる朝の御光り
黄金のはたオレンヂの
輝ける歡樂の色を胸に秘めて
ともすれば打ふるふソプラの絃の紅
き調べを
袖にかくせば
人は知らじな吾眞心を

見よ、衰殘の秋の色
見よ、凋落の木々の肌

たゞ殘る樅の執着
青葉の恨み
呪はれし吾は淋しさに涙流せど
傷けざりし誇りの玉の唯一つ
暖き掌に吾を守れり

誇りの玉は如何にも苦しい言ひかただ、願意と詩とがはなれ〴〵になつてゐる(評)

○冷たき日

濱松　平岩　白萠

落葉木の、骨あらはにいたはしき姿
眞晝の太陽に、半面の僅なるよろこ
びと
冷たき憂愁に默す半面のうすきかげ
の
希望ども及ばざる高き空を
——うらみぬ——
急ぎ行く鳥の情なきを
夏の日盛り、重き翼を息ひ
のがれんとする小さき蟲の
汝が飢を充たせしもこのかげなるに

何を恐れ何を求めんと急ぎゆく
果しなき空を南しく
青白き肌のあらはに、歎きする冷た
き日に

詩は初めてとの事ですが、それにしてはいやみなく出來ました(評)

○欠伸

神戸市　井口久我女

灰色の丘かた道を
たゞ一人
たゆたにさすらひぬ、心ならでぞ
やはらかき夕日は
そびらより我を照せど
何者かあと追ふ心地
得ぞたへぬ、こゝろのなやみ
まろき丘に
草刈る處女
乳のあたり、ふくよかに息吐くけは
ひ——
赤き落日は
鎌の刃にきらめく〳〵よ
いづこともなく
ゆらゝ迷ひ來し
乾し草のあまき匂ひ
——酸性の——
二人をつゝむ
少女のうなじ我がまけば
ものうげや
小さき欠伸に、淡味なる涙のうかぶ

欠伸が分らぬ(評)

○女

播磨　みどり

向ふの障子に女がうつゝて居る
髪をおどろ〳〵に亂して
何をして居るのだらう——
私はぢつと其影を見つめた
ゆら〳〵と灯火が動く
女は何をして居るのだらう

ちつとも動かない、俯いて居る
私は一足二足運んだ、不意にその障
子ががらりと開いて女が顔を出した
よくは分らないが、非常に疲れてゐ
るらしい
しきりと私の方を見て居る
私は一種云ふ事の出來ない不安を感
じた
彼の女のために引きつけられるやう
な氣がして——
もう居ないと思つて顔を上げたあゝ
私の目と彼の女の黒いとろんだ瞳と
はたと逢つた、私は堪へられなくな
つてひた走りに走つた
後をも見ないで——

此れだけでは意義をなさない（評）

○病眼

京都　要司村稲子

あゝ若き身は歎きに老いぬ
弱き子は愁ひ滿ちたる胸を抱いて、
終日思ひわづらふ
冷たき家の隅に
病みたるまなこを、愁ひ滿ちたる胸
を靜息なく
哀傷ぞ激ぎつ、我春は老いしかな
海の日の沈むが如く
若き少女てふ誇らすれゆく……
あゝ淡き愁ひ、俤
夕やみの浮雲の間より
かすかに光れる星かげ
ふみなれし野を一人歩みて人知れず
靜に幻を追ふ
胸の血に泣きし其日より
此心、いつの日にか告げん
背むきし深草の里
あゝ思はつきて天を仰げば灰色の雲
俤の心地こそすれ
未だ月出ず日は早沈みぬ
おぼろなる浮雲見ては、あゝ我魂わ
なゝきふるふ。戰の世より故郷思へ
ば、涙し流る

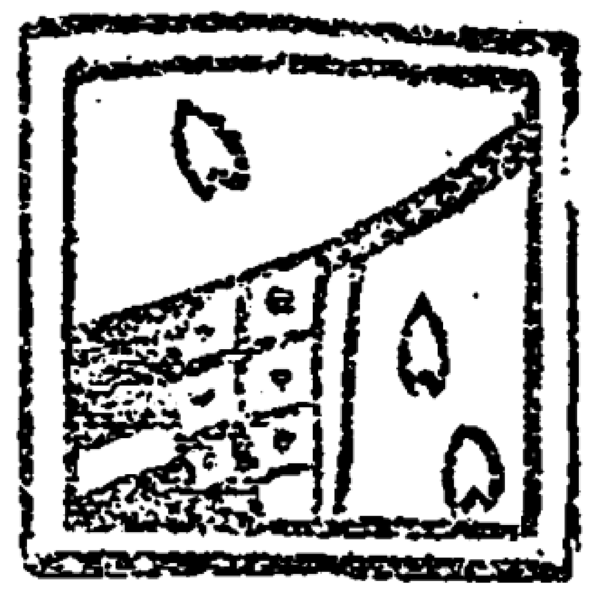
まだ詩が少し分りかけたと云ふ處（評）

○わかき羞らひ

深川　貞子

ふさひぬと宣る母が笑み
幼なくも頰の染められて
影を落せる姿見の
鏡そとみるおもぶせや
馴れねばとみに肩幅の
廣くなりたる心地すれ
羞らひつゝもともすれば
わが手は肩にのみ行くよ
あゝ父母がいつくしみ
さちみに享けて憂しらず
事なく生ひぬ十八を
恥かしわれが肩揚取れぬ

七五調も舊い、思想も舊い（評）



俳句

内藤鳴雪選

○（天）

思はれず思はずなりて冬の月　島根　糸子

○（地）

名月や一軍槍を提げて　麹町　牧野嵐水

○（人）

大原女に蝶々親しむ小六月　神戸　森本豐子

秀逸

耳洗ふ許由が川の濕みけり　神戸　愛子

秋ゆきて夢の樣なる蟷螂哉　伏見　阪芳子

提灯に花見る庭の夕かな　麹町　牧野はん子

蠅を捕る子猫に窓の小春哉　埼玉　林畝子

若水のそれも嬉しや山清水　横須賀　三輪とし子

ユラユラと梅に懸かれり宵の月　埼玉　中澤たか子

御降りや霞みて見ゆる御本丸　牛込　室谷よし子

煤煙の漂ふ岡や冬木立　横濱　橋口てる子

川に沿ふ家の干菜や小六月　神戸　山口初子

山寺に聴法の夜の冴ゆる哉　兵庫　峯の花

夢さめて笛に飯を聞く夜かな　兵庫　紅峇

寒月や森の御塔の彼方より　直江津　岩井常子

踏みしだく霜の畔道七まがり　大阪市　植村豔子

よき人の學のしらべや菊がもと　伊豆　土谷すゝこ

古墳ある冬田や奈良の里近く　横濱　風間苔峰

塾生の鬼狩る日や雪晴れて　横濱市　三橋美峰

まんまるう鬼寢てゐる小春哉　大阪　辻井延子

師走人其おとがひの髯長し　埼玉ノ野　巻若葉

名も知らぬ小鳥飛びけりあきの暮　豐橋市　中川なでしこ

北風に追はれ〳〵て落葉かな　京都　要司村福子

一人居の夕淋しや秋の聲　下總　浮舟

夕月に駒乘り試す堤かな　麹町　牧野峽川

駒下駄の響きて寒き月夜かな　京都　露つき

鶯や茶店に包みわすれけり　京都　楠田信子

小春日や鎭守の宮の留守見舞　大阪　竹子

溫泉出づれば襟に冷や〳〵梅の風　京都　町田てる子

梅の木に尻を向けたる山家かな　大阪市　佐川薫

月の下に何笑む人ぞ水仙花　筑後　柴田百枝

君通ふ潮田の橋のかすみけり　備前　佐久間綠子

立てかへし佛の花の又も菊　丹後　仲田品子

初午に浪花なまりの人もあり　京都　藤本福子

京に行く人なつかしや梅の花　茨城縣　喜惠子

枯菊もわが文がらも時雨かな　京都　三宅壽賀子

吾妻の顏もかゞやけ初日の出　松江　白菊

明り窓の高きに遊ぶ蜻蛉哉　兵庫縣　柏木小春

別れ去る人の笠見ゆ冬木立　淡路　留子

傘さして梅の枝折る小姓哉　武藏　なでしこ

二本松一本枯れて春寒し　美濃　蔦の葉

村雨やゆめの下なる春曙抄　藤田すみれ

月三更世は寂として梅の花　山口縣　椰良美奈子

雪二寸既に埋れて福壽草　兵庫縣　殘香

紫の傘よな〳〵と上り坂　米澤市　相田いと子

紅梅や隣の娘何に病む　牛込區　木村ずゞ子
茶の花に素謡楽しき日かな　越後　藤原泣黒子
山寺の黄昏寒し枇杷の花　千葉縣　秋葉ます子
小春日や池の緋鯉を猫が見る　信濃　よし子
社の灯淋しくもるや神無月　筑前　徂つゆ
野分して雀の墓を訪ひにけり　鳥取　櫻草
綿帽切れを盗む鼠や夜半の春　新潟　吉田トシ子
元日の化粧ゆたかに姫小松　福井　北利子
琴の師のいほりや枇杷の花がくれ　常陸　波津子
四つ辻を吹き分ける風の寒さかな　出雲　長崎百合子
貝殻の水吸ふ鳥や桃の花　大阪　辻井信子
落椿かね無き寺の夕哉　千葉　荒木秀子
木枯やかすかにそれと夜泣きそば　木谷初枝
破れ垣に蟲のかばねや今朝の霜　福島　明子
床の間に君の影あり梅の花　京都　松木絹子
紙燭して人を送りぬ春の雪　豊後　菅原芳子
師と共に我手もかざす火鉢かな　岡山　森田きよ子
飯事や炬燵の上の豆人形　徳島　早百合
山門に夕づゝ淡し天狗風　大阪　高山米子
山沿ひの一村暮れて寒き風　本所　林白愁歌
はつゆきにこたつ戀しき古郷かな　北村翠子
かれぐ＼て舟よぶ聲も霜の朝　岡山　今東零子
神棚に月のさし込む機家かな　千葉　よね子
ほろ醉ひの女二人や小松曳　神保千代野
大霽の戸に旭は高う昇りけり　下谷　谷口桂子
里見えて此道遠し蕎麥の花　小見山春子
丸う出て何物すごし冬の月　新舞鶴　管幸子
殘りなく木犀散るや霜の朝　信濃　岩波むら子
さまよひし淋しき海や冬の月　京都　久芳清子
落葉ふむ獵師の足も徐かな　三島　舟子
小波に碎けて寒し三日の月　山口　白菊女

谿峰の底に炭焼く煙哉　下谷區　石井東天子
戀知らぬ昔戀しや櫻がり　千葉縣　石井よく子
旭さす凱旋門や鷗の鳴く　高知縣　矢野川和江
初紅葉中に楓の一木哉　同　矢野川克己
菊の園酒の小瓶のころがりぬ　同　沖中水
梅が香や野守か妻の小商ひ　同　沖文惠
模様めく濵のまつかな朝霞　藤田よし枝
下駄はいて女の旅や春の雨　新潟　水澤蝶子
大雪やどこに鶯はとゝぎす　島根縣　あや子
髪結ひて待つ間もあらず初日の出　横須賀　三輪とし子
引鶴や花菜の末に塔見えて　越後　藤原泣杖
焚吹く隱者の家や琵琶かなづ　三島　村瀨常子
梅が香に筆とる才子佳人かな　麴町　銀杏庵
秋の海遠き白帆の三つ二つ　大阪　失名
藪入の鏡のわれをなつかしむ　神戸　加穗子
寒月に照るや馬上の金覆輪　神戸　山本愛子
鄙郷に蝗の戀もありぬべし　越後　八田敏子
新月や梅花に匂ふ乳母が里　筑前　徂つゆ
茶をたてゝ僧都と語る夜長かな　麴町　みのる
淋き身かな秋を佛の灯の下に　長野縣　一之瀨まじめ
いたづらに鬼灯赤し伊勢が家　千葉縣　齋藤淑子
初霞伊豆七島の夜は明けて　伊豆　鈴木けい子
元旦や神苑ひろう鳩の遊ぶ　神田　靜子
麗人の傘に雨ふる落葉かな　丹後　竹田雪子
言葉なき人と人とや暮の秋　大分縣　尾花芳子
此寺に思ひぞ深き秋七日　麴町　石田貞子
朝月や村の女の物思ひ　京都市　うた子
花嫁の髻かたむけて雪の風　搓の女
豆菊の豆のかをりや星月夜　茨城　田村波津子
棕櫚の葉の折れて淋しやゝの暮　石川縣　宮本登美子
ひや／＼と身に泌む風や楢落葉　加賀　勝崎喜久子

小夜ふけて蟲の音もきく出湯哉　呉市　碓井呉竹
蟲の音や單衣の上に羽織着て　大和　靜子
庫裡の灯に婆糸紡ぐ夜寒哉　失名
人氣なき山かげに來て菊の花　靜岡縣　壽賀
たんざくは是も非もなくて菊盛り　兵庫縣　若水
夕空の茜も消えて稻の波　群馬縣　秋風子
鴨川に臨む湯殿や啼く千鳥　大阪市　夢園萩子
叢や蟲亂れ泣く秋の雨　淡路　富士元春峰
紅葉散る日なり淋しや君見えず　上毛　下合子
朝曇き寺の銀杏や百舌の聲　牛込　中川きい
戀塚に並ぶ小家や砧打つ　小石川　酒巻たつ子
秋はたゞ物の悲しき庵かな　府下　谿湖
萩咲くや遠き小村の夕灯　能登　岡崎春子
乙女子の手に提げて來る紅葉哉　千葉縣　橋本昌子
一雨に秋定まりし野山哉　東京　瀧島喜代枝
裏表見せてひらく桐落葉　金澤市　宮本登美子
萩咲くや猫抱く人の籬ごし　名古屋　後藤照代子
日ざかりや埃りも曇き物の數　長野縣　津島壽枝子
石竹や寺閑にして日は午なり　信州　山本操
月出でてねぐらに起きぬむらすゞめ　伊勢　しら菊
棹乘繋く舟の晝寢かな　石狩　王子きよし子
やるせなき里女の唄や秋の暮　群馬縣　雪枝
文机の上に散りけり桐一葉　靜岡縣　みどり子
吾妹子が髮のみだれや風寒し　野口菊子
金殿の人は眠りぬ小夜砧　山口縣　挪良美那子
土堤下につりする人や宵嵐　京都　森本俊子
友呼べば聲のみがして霧の原　丹後　品子
出水して崩れし壁や秋の行く　京都　町田てる子
名月や森のはざまに叫ぶ水　草花
舟の君忘られぬかな風の月　松江　白菊
名月や振袖ゆらぐ庭の風　紅霞

秋の夜や月見がてらに學指南　信濃　よし子
秋の雨妹ほしと思ひけり　京都　平林波津子
八歳の小僧經よむ夜寒かな　岡山市　立岡房之
行く水のやうな心や今朝の秋　牛込　槇久子
ゆく秋を惜みて僧の山に入る　信濃　岩波むら子
門松に色いやましぬ千代の雪　長岡市　秋月すゞ
小春日や落葉の音もなつかしく　上毛　千代乃
裸木に宿す蜻蛉や秋日向　直江津　岩井常子
冬の雲眺めて行くや旅一人　大阪　田野靜子
姉妹らしき白菊黄菊かな　近江　須川まさ子
寒月は鴛鴦の金網照らしけり　麻布　吉田葉子
風呂敷に包みし梅の小枝哉　大阪市　辻井延子
やせ魚の岸による夜や冬の雨　淺草　夕月子
焼けあとの大寺ひろし天の川　淡路　留子
唐紙の引手冷たし今朝の冬　赤坂　小杉みつ子
連山を縫ふや紅葉の一明り　麻布　無茶庵九茶
凩や笛賣る店の笛の穴　赤坂　橋本ひさ子
燦爛と太平洋の初日哉　上毛　小澤碩子
凩や新開町の煉瓦塀　新潟市　春芳子
春の堂に老僧の珠數つまぐりて　神戸　井口久我子
一人寢の夢よりさめて小夜時雨　新舞鶴　管幸子
初旅や梅まばらなる野に出て　茨城縣　幸枝
春の風馬の腹帯のたるみけり　豐後　伏見英美子
白梅の散るや五山の鐘寒し　千葉縣　石井白百合
冬の梅家三代の儒官かな　羽後　花の雲
初空の霞み心や不二遠し　近江　野の人
劍に名の響く翁の頭巾かな　新舞鶴　山本なつ子
鹿鳴くや神の灯ゆらゆら雨の中　下關市　山本芳子
春風や群れて雛の膳あらし　備前　藤花子
能因の返歌もなくて秋の行く　越後　竹子
欄干に倚り見る田の面行灯かな　越後　梅子

初作

○都の妹へ（秀賞）

群馬 關口ちよ子

菊江さん、御手紙有難う御座います。まあよく心強くなりました事、父母や兄姉が感心しましたよ、もう炊事の方から衣服方まで御ひとりで、御苦勞様と御察申ます。この綿入と帶とは母の丹精でやうく昨日仕立ましたから、この手紙と一所に送ります。羽織と袴は私が縫て居りますから、この次の音信の節御送り申ます。何もかも草深い田舍より送る事で御氣に入らないでせう。何分御免下さい。上京のはじめはさぞ御驚きなすつたでせう、こんな片田舍よりあの文明的の都會の有樣が御目には珍らしかつたでせうけれど、種々の見物がしたいでせうが、まあ後にして第一に衛生を重じ勉强を怠りなく、よき朋友と交際し、母と私との願ですから、どうぞ隣のハイカラ娘の樣にはならないで下さいよ、あの雪子さんはね、餘り生意氣で村中の人に惡口云はれます。くれぐも申ますが、田舍生はどこまでも溫順に勉强なさい、私は毎日都の空を見ては早く菊江さんの歸省を待ちます。寒氣追々加はり、衣服も御入用でせうから、ずんく御云ひなさいよ。田舍は今は秋の收穫で實に多忙の節ですあなたも家庭に居る氣になつて熱心に學課を勉强して下さい。外にいろいろ申たき事澤山ありますが、この次の音信に御話申ます、御返事を待つて居りますよ。

（評）姉妹の情がありくと浮ぶ好い手紙です。

○習字の先生へ行く（入賞）

失名

ふつと目をさますと五時をうつ、すぐおきて室内をはく、ひみが氣持よくでるのでうれしい。前の畑へ出て大根を取つて、臺所へ行くと、穫やがよろこぶので共にうれしい。今日はよくできたので、花がお嬢樣おきれいにできました事、まあいやな花、一寸もできやしないのに、おせじはいやだよ、あらはんとうですとも、おたけさんにきいて御覽なさいまし、父樣と二人で食事をすませて、あんまり御寒いので綿入りの綿入れをきたので、なんだかきもちがわるいやうだ事、それでは父樣母樣いつてまゐりますと、出かけると保田さんに御目にかゝる、どちらへ、學へまゐります、ちよとお遊びにお出下さいまし、ありがとう御座います、左樣ならといつて御別れする。保田さんは女學校で一等美人で、學問も一等、皆樣のおきうけがよい、そしてどなたにもおやさしい事、先生方にもほめられる、私もあやかりたい事。近藤さんあらまあ長井さんなの、お早う御座います、今朝はおそいのよ、早くまゐりませう、えゝ、せつせとあるくともなく先生のお家へついたので、先生御早う御座います、皆樣御早う御座いますといつて、自分の席へつくとほつとする、しばらくは墨の音ばかりする、自分は三月も習字のおけいこをするが、ちよとも手があがらない、いつになつたら上手になるだらう。皆樣がお上手なのになんて、下手ではづかしくなる、せめて先生の半分ぐらゐかけるやうになりたい事、もう皆さんはお淸書をおかきになる、私もかきませう。

（評）如何にも僞りのない初めての投書らしいが、原稿に姓名も住所も雅號もない、如何に初めてもそれだけは氣を附けて下さい。

○里の弟に

小樽 賤の女

秀ちやん。早速お手紙あり難う。姉さんね。おまへのことを思ふと可憐さうでならないの。昨夜も燈下でひとり染々と泣いたの。おまへも辛いでしようね。責めて姉さんでも家に居たら、それ程迄憂目には逢せないんだけれどもね。何しろ今は數十里の遠い他家に居る身でね。あゝ。もう一二年も家に居て、秀ちやんと二人でも、草葉の陰に永眠遊ばすお母樣の成佛なさるやうお慰め申したい。とつくぐ思つたの。

秀ちゃん。辛くもあらうね。しかし遠い他郷で、おまへの身の上を偲ぶ姉さんも、片時だつて涙に袖の乾くことはありませんよ。あゝ今夜は寒い晩ね。秀ちゃん。何をして居るの……お復習！いくら悲しくたつて病氣なぞに罹つてはいけませんよ。ほゝゝ秀ちゃんは男ですものね、姉さんの樣な弱蟲女とは異ひますさね。

おまへももう十七ね、姉さんも早や二十ですよ。早いわね月日の過ぎるのは。來年は卒業だね、好成績で終へて頂戴、待つて居るよ。呉々もの樣ですがね、決してお父樣や、お母樣を恨んではなりませんよ。先日申しやつた事を忘れないでね、お父樣やお母樣や政坊を大切にして上げておくれ、賴みますよ。

またそんなに悲觀しないで、時々は姉さんの事でも思ひ出して頂戴よ。姉さんは神かけておまへの幸福を祈つて居ますからね。

末筆ながらお父樣お母樣に宜しく。

何か面白い本と思つたけれども仲々見當らないの。思ひ出の記ならどうかと思つて送つたからね、暇の時にご覽。サヨナラ。

（評）こしらへた手紙かも知れないが、それにしてもうまいものです。

○凋落の花

横瀬　美枝子

霰が一頻り、サアーと音たてゝ地上に降りしいたかと思ふと、窓の隙からカラコロと舞ひ込んで來る氣早なのもある、自分はいきなり其一粒を拾つてつぶして見た。荒涼たる晩秋の使命！さうだ、いましは其冷かさをほこり顔に、あのやさしい花に凋落の運命を與へるのだらう。コスモスは秋の花だ、何と好きな名前であらうよ、清い花びら。絲のやうな葉、青色の細つそりとした莖。そはすべて、コスモスなる語に潜める靜やかさとなつかしさとを表現しておて、いとどしく哀愁の快感を與へるのである。もしこの花を人に例へやうなら女であつて、而も無限にやさしい野の花の染子である。悲しい思ひを秘めて病へた末、遂肺をやんで亡くなつた可憐の少女染ちゃんは、何となくこの花の風情に似て居るよと自分はいつも考へるのである。『然らば花と少女、いづれかやさし？』もしこの樣に問はれたなら、自分はすぐに染子がやさしいと答へるだらう……其の答だ、染子は卽ち鮮語の花だもの——血と涙に富める若き身だもの——況して清浄の乙女のまゝで逝つたのだもの。よし美はしからずとて、われも亦をみな、どうして同性の悲哀を見て涙せずに居られやうぞ——、自分は泣いてあつた、清く、清く——

ア、亦一頻り、いよく凋落か、なさけない！！肺をやみし美しい人の最後の樣に、なれも亦、白と紅との色あせて……さらば逝け、慰安の友よ我は改めていましに謝す。

（評）少し氣どりすぎたのが缺點です。

○枯野に立ちて

武藏の靜子

聰いやだ、私が一步下ると、一步進んで來るんだもの、あなたはどうぞ動かずに居て下さい。財ですつて？そんなもの此の頃の私のに前は、何等の權威をも持ちません。人はパンのみにして生くるものではありますまい。粘液質の友と語つて共に快をよぶことの出來ない性をもつ私、知れない樣にじりじりと後引去りしようか、否いつそのこと脊を向けて走らう。

高くすぐる波鳥の群に、瞑想を破られた私は、熱き腦を抱いて冷たい野に立つ子であつた。

私は常に生溫い友の心に、尠なからず不滿を感じてゐた。私は冷酷な人は嫌ひだ、けれども絶對に冷たい人ならば好む、而し冷酷な人より熱烈な人を欲してる、又底の底まで冷酷な人があるならば其の人を好む。

私は薄ら明い世界よりも、光のない暗黑を欲してゐる。私は社會から離れ友人から離れて、孤獨の寂しい旅にゐてみたい。孤獨を樂しむ心得しらぬ哀愁は美しい甘いものだ、そしてこれには强い誘惑を持つてゐると知つた私は、痛切に孤獨の寂しさを感じてみたくなつた。

ジヤンモレアスの詩に

「餘す所なく歎びを味ひ、餘す所なく痛苦をなめよ、而して語れ、それにて足りぬ。夢の影よ」

あゝ私は強烈な痛苦もなめてみたい、晴しい悲哀にも泣いて見たい、けれど人生の缺陷を自覺した程の苦痛悲哀は他に多く求められないと思ふ

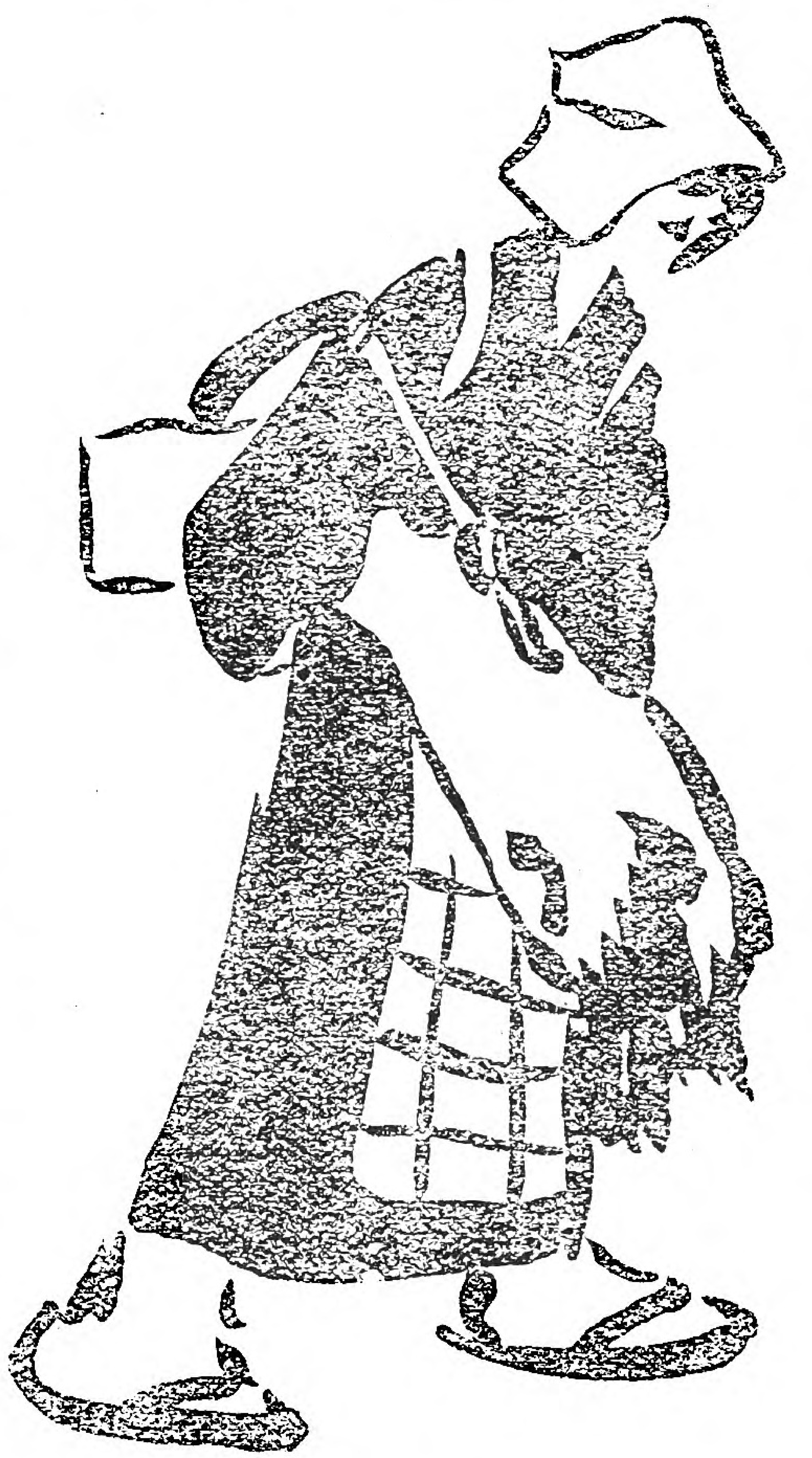
極めて力ある或る缺陷は、常に私の心を痛めてゐる。

現實生活の壓迫の下に蹂躙される自我の苦痛と眞摯に自分の「生」を思ふ忠實なる自我と、社會を標準として古夢を追ふてゐる人との爭鬪に破れようとしてゐるその痛感それの集る處がプアーの私の心である。私は自己の眞を念ひ、眞を欲して此のすべての智識を捨てゝ默する勇者となるの力はない私は常に信じて居る。運命に默從することの出きる人は絕大の英雄なることを。

うはべに人生を考へてゐる、浮薄な思案のない享樂的な、ライフを送ることは、現在の私には堪へられない。いくら峻嚴なる自覺の審判に委し、ても反省の庭に酷しい鐵鎖を加へても何の反動もなく、愕然として強い根底のあるのに、自らその前に蹲くのである。荒廢せる心は益々自我に憧憬して來た。

私の一生は短くもいゝから。眞の意義ある生の一日を送つて見たいと願つた。

（評）今の女も斯んなことは考へてゐるでせう、併しこんなに烈しい男性的の言葉で書き綴るでせうか、甚だ疑はしく思ひます。



稻刈　信濃　よし子

○晩秋の一日

靜岡　濱紅

好んで待つた柿の實が、もろく落ちつくした程に、今年は雨が多かつたが此頃は、よく、晴れつゞく。念入りに、拭いたえんに立つて、外を見る、庭のコスモスも散つた、尾花も枯れた、菊の花獨秋終焉の香を送る殊更に不眞面目にほゝかむりした誰かの鍬の働き様を塀越しに眺めて、澄み切つた空の色に目を移した時、此月のはじめに、華かな都に嫁いだ姉の丸髷姿を想像した。村端れの柳の下迄、お見送りしたあの日の空も、こんなにきれいだつた。目出たかるべき御門出にと強いて笑顔にお別れした、それだけ、何だか物足りぬ樣な氣がする。母はせつせと障子の切り張りをしてゐるのに、とあはたゞしく六疊で妹の羽織を縫ひ出す。窓下の桐の落葉はしきりなく散る。お晝のあと方づけしてお留さんの足袋を洗ふ、一白の人は（ヅンキ）だと云はれぬ樣丁寧に

こずる出水に荒れた道普請だらう、遠くからひゞくカケヤの音と隣りで拍くカラウスの音と妙な調和をつゞけながら午後の靜けさをやぶつた「行つて來ました」と、手をついた妹の今朝ゆつたやつた桃割に野菊が一輪、なぜかたまらず可愛ゆく側に有つたメリンスの切をやる。

夜、袖が少し長過ぎるよと母に云はれて晴衣を七寸につめる、一寸ふへた縫代別に惜しいとも思はぬ、只、詩は好んで作り得る、趣味はもつても音樂は何一つ習はぬ強い刺戟も、深い情緒も、すぐ平凡化する自分はつまらぬ女だと思つたが、父なく母の手一つに育てられた身はあこがれも望もすべては沈默に終らねばならぬと、繰り返してはさすがに逝く秋の夜寒をしみ〴〵感じた。

（評）　女らしい筆。

○都見物の祖母

岩代　鈴木さくら

おばあさん、餘程噓つきで被居るわ、歸へる〳〵つて十五日にお歸へりあそばすわけだつたのに、それやたまにおいでになるんだから、すゑ子叔母さんにたあんとお乳を上げたくいらしたでせうけれど、私おばあさんのお顔を一日も早く見たいんですのに、さぞ、お土產が多くて汽車から下りて持つのに重くてお困りあそばすだらうと思ひまして、十五日の終列車に夕食もしないで。輝ちやんと、としちやんを連れてお迎ひに行つたんですの。けれど、いくら私の大きな目を見はつても、影だに見えないんですもの、でも若しやと思つて、列車の中をよく見ましたが、お寢つてゐらつしやる方もございませんでした。二等室に居る西洋人が私の顔を穴のあくほど、不思議さうに見てるんですもの、きまりが惡くて、皆なの手を引張つてどんどんかけ出しましたわ、輝ちやんも、としちやんもがつかりして、今にも泣きさうな風なので、慰めたけれど、其實私も泣きたい位ゐでしたわ。今日御手紙に十九日には間ちがひなく歸へるとの事ですが、此度は噓ではないでせうね、おばさん、噓をつきになつた代り、おみやは澤山下さいましよ、私とお約束の品を、皆おわすれなくお求めで御座いませうね。としちやんは、お人形わずれてゐらしたらどうしよう、なんてびくびく心配して居ります。皆なのをおわすれなくどうぞ。今ね、母さんと上州屋の禁さんで、おばあさんのことだから、今頃は東京の燒芋でも、大口開いて食べて居らしたらう、なんて笑つて居られます。此度は、二度目の上京だから失敗談も、少しはおへりでせうね。御待ちまうけをどつさりおいしくこしらへて置きますから、十九日にはきつとでございますよ、今四日目ね、待ちどほいは、三日も一度に立てば可いのに、御迎ひにまありますよ、末子叔母さんによろしく、ではこれで左樣なら。

（評）　能くお口の廻ること

○彷徨

美作　水江新子

御園やパールを入れた袋を提げながら、明るい町を逃げる樣に出た私は淋しい裏町を通つてゐる。泣き出しさうであつた空からは、細い雨を落しそめた。薄暗い町を迷ひ〳〵柳川筋に出た。細雨はます〳〵烈しく傘持たぬ我袖に肩に浸み込むのである。悲しい思に沈みつゝ、暗い方〳〵と歩む私の姿を人はなんとみるであらう。

失敬…ドッと突當るハッと氣付いた頃はもう行過ぎてる、若い男だ。高鳴る胸を押へつゝふるふ足で急いだ。涙も雨に混じる心地。

ああ―尋る人の宿はどこであらう。

○十一月三日の記

伊豫　渡邊文子

朝つぱらから大風が吹く。芋の葉にたまつてゐる露があちらこちらとさまようて危い運命――たまに落る雫は丁度水晶の玉をころがすやうな風情で朝日がさしてからは一際美しく見える。自分が學校へ行つた頃はもうここかしこに日の丸がひら〳〵となびいてゐた。行くと校長のおさしづで菊の花のやたらざしを始めた。すると或る人に何流ですなどとあびせられたから、すぐに自己流とはこんなものですと說明して大笑をした。來賓もそろつて九時の合図に式を始め十一時と云ふに無事で終つた。正午からは祝宴會が開かれ餘興として五分間話。十人十色で樣々なお話

が出た。自分は女だからよもやと思つてゐたのにとうと廻りが來たので一時は指名なされた校長樣をお羨みもしたが仕方がないので、裁縫科に就て父兄に對する希望を少々述べた。が併しこんな事は在學中を措いて始めてであつた。後であれまでによく言つたものだと思ふた。田舍ではこの部落も賑はしい天長節の内に數へられるであらう。午後三時閉會、お酒にほてつた顔に風をうけ心地よく歸つて來た。

○妙子樣へ

京都　松本都留子

妙子樣、明けましておめでたう。又ひとつおばあさんになつたわねーオホヽヽヽ。妙子樣、今頃何して被居る事。えゝ、あてゝ見ませうか。奥のお茶の間で、歌留多をして被居るのでせう。そして始終勝つて許り被居して「あら、操さん今になつて、そんなに逃げなくつたつていゝわ、負けたんですものつけられるの當り前よ」つて跡追かけていつて無理やりに、白粉を、操さんのお美しいお顔にこてと付けて被居るのでせう。如何。私ね、日當りのいゝお緣側で、玉ちやんと口なたボツコをし乍ら毬つきをしてゐますのよ、でもね一毬をつく度に玉ちやんが面白がつてぢやれついてね、お終にはお庭へおつことしてしまうのよ、それで今ねお小言いつてるところなの!。それはさうと、今晩歌留多とりますから、いらつしやいな。白粉も澤山用意してありますから。

○故鄕の母に

滋賀縣　蔭の花

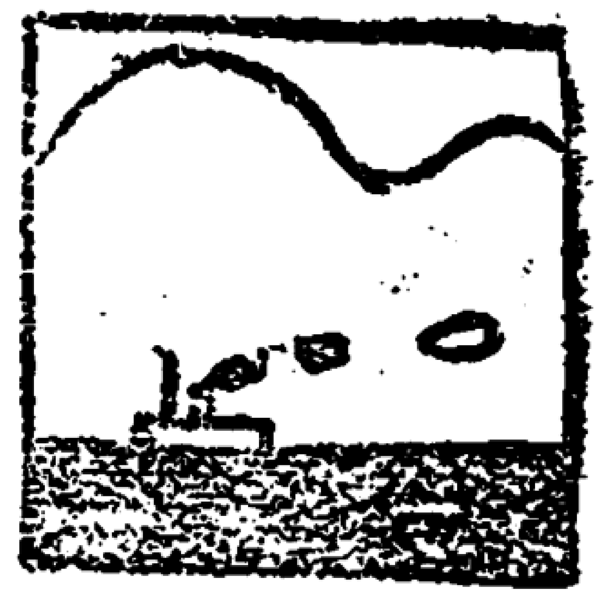
母樣、此程は何となう多忙で暫らくお伺ひも致しませんでしたが如何して被居ますか、私淋しくなるといつも鄕の方を眺めて今頃母樣は姉樣はといろんな想像してなつかしがつて居りますわ、昨日の日曜は朝から叔母樣を訪れましたら大そう喜こんで下すつて私の大好なお汁粉を御馳走して下すつたの、たまく\ですもの其のおいしさつたら、とてもくたわ、もうお腹も滿足したからいゝ事を思ひ立つたの、何だと思召す、活動寫眞でも芝居でもないの、云ひましようか、あのね、近江八景の粟津や瀨田の方へ散步に出かけたの「木曾殿と背中合せの寒さかな」と云ふ句の刻んである義仲寺からしばらく行くと名高い粟津の晴嵐、膳所から瀨田に至る松林で青松は一帶の道を挾みさゝ波輕う岸うつほんとにいゝ所なのよ、女丈夫巴御前の奮戰したのも此處、夏は松風涼しう肌を拭ふと云ふのだけれども此頃は嵐はげしうて鼻もちぎれるほどですよ、私の周章が何かするといつても母樣「いそがば廻れ瀨田の橋」とお敎へ下さつた瀨田の長橋は眞中に小島を挾みて百二十間計の長さ、その景色つたらもう私には云へないわ、下手な形容して長橋に叱られちや困るからよ母樣は度々京都へ被行るからよく御存じでしようけれどもなかく\汽車の窓より見る樣な所ぢやないですよ、母樣一度被入な、姉樣と三人で一緒に行くと一層いゝにきまつてるわね、きつとよく\、待ち遠しいわ。

○ある日

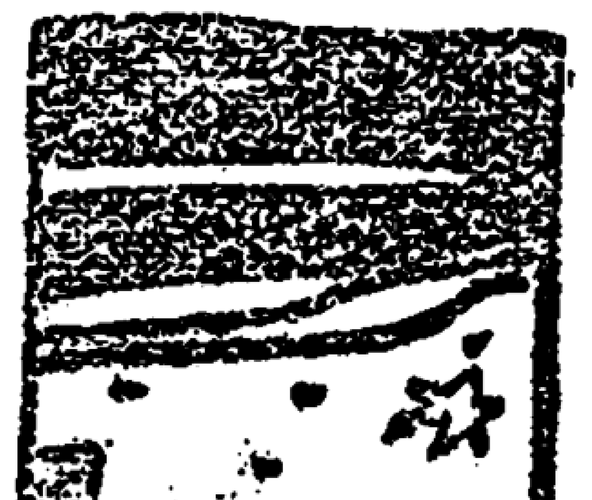
栃木　すゝき

あつたかい椽の柱によつて今晩のおかずは何にしようかしらと思ひ乍ら、柿の落葉のカサく\とゆすれるのに眺め入つた。ザクく\と後ろに砂利をふむ音のして、何してますと云ふ、魚屋のをばさんだ、どことなく品のあるそして親切な、母親はなれて父のもとに何もわからず主婦はりの私をいつも種々と敎へて下さる人。

「あんたの父樣にも困るねーホラあのこれね」と小指を示し「桝屋へ來てるんだとよ、けんどかまはんがいゝよ、男と云ふものはかまふとなほするでね」と云つて止るのもきかず「忙しいから」と歸つてしまつた。こうあらうと此頃每夜の如く父の外出に、心あたりがないでもなかつたけれど。あゝ我家はなぜもかうみだれるのか、これもみんな父樣がなすことだ、私等がなんと云はふと聞いては下さらず、心配する母樣をうさへ奴と別家してしまふて。今頃母樣なにして被入るだらう。今年は洪水でお米もあまりとれないでせうに、どんなに泣いて被入るだらう。私のやうな者でも亦そばに居られゝば、どんなによいか知れないけれど。昨夕も商人の方が遊びに被入しつた時「行先々が女だからよつぽど要心して居ないと」つておつしやると「女つてそんなに恐ろしいものかね」なんてあざけり半分に仰つたつけ、こはいでせうなお父樣なんぞ今財產を取られかゝつてゐるのにつて云つてやればよかつたけれど、ほんとうに今日知つたのだもの、あれほど人が仲に立つて國へ歸したものを呼びよせたのか出てきたのか、妾なんてづうく\しいものだ家へなんぞきたつけりあ——さうだ私もうこれから御飯も一ぜんきり食べない、父樣お歸りになつたつて用の外は口をきくまいと私は齒をくひしばつて思つた。



雜録



都下の大工場に通ふ女の一人

べに江

△一萬の職工、汽笛鳴る

霜の白くおいた橋を、カタコトと小足に急ぎ渡つて、大きな門を潜つた。青い木や赤煉瓦の大きな建築物等が、廣い廣い構内に散らばつて居るのを、例のやうに心地よく眺め、別に苦しいともたのしいとも思はずに玄關へと向つた。今日は珍らしい御天氣、空には小さな雲さへ見えない。流石は朝の氣分か元氣よく此の門に吸ひ込まるゝ幾多の職工の顔は、何處となく晴やかである。

自分が室へ入らうとした時、箒を肩にして小使が出て來た。室内にはストーブが盛に燃えて居る。五六人の若いものが、其の周圍に立つて、雜談にふけつて居る。高い窓からさし込んで來る日光は如何にも美しく輝いて居るが、無數の埃のたゞようて居るのを見ると思はず袖を顔にあてる。自分はいつも窓から外を眺めるのである――三階の窓から、――職工職員皆小さくなつて眼にうつる。それ等の小さなものが、高い煉瓦の建物の間をテクテク歩いて居るのが不思議のやうに思はれてならない。

大きな煙突が眞黒な煙を吐きながら立つて居る。汽笛が鳴つた。數多の機械は、海鳴のやうな響を立てゝ動き始めたらう。一萬の職工は、もはや吸ひかけの煙草を吸み盡すことも、可愛いゝ子供や懷かしい戀人を思ふことも、決して許されないであらう。

自分はおもむろに席に着いて仕事を始めた。川本さんも星さんも、まだストーブの傍に立つて、他の若い事務員等と話し合ひ、笑ひあつて居る。中には新聞を讀んで居るものもある。川本さんは「バット」を幾つ

にも分つて、煙管につめて飲んで居る。

昨日掛長が『それは成るべく明日中に出來るやうにしなさい』と、××の計算について注意を與へられた時、『何、出來ますまい』と川本さんはいつた。『出來まい』といはれた。どうかして出來して見せたい、出來してやりたいと、自分は頻りに考へた。きつと出來して見せると、昨日から一生懸命でしてゐた仕事、自分はそれを尙續けてゐた。

川本さんも星さんも、椅子についた。やがて掛長が見えた。他の掛長も、方々の職員も皆印を捺しに來た。入職した其の日から似た人だと思つて居た渡邊さんが卓上電話で頻りと何か話してゐる。ふとその顏を見たら少しの間ではあつたが、夫の事が胸に浮んだ。

室内は漸く色めいて來た。整頓して居たテーブルの上は、何時の間にやら、帳簿や書類で取り亂された。談話の聲、算盤の響、靴の音、草履の音、電鈴の音、ペンの音、インキ壺の音、紙のガサつく音、何の音、かの音殆んど限ない程の騷々しさが、雜然耳を襲うて來る。

自分は其の中の一つを聞き分けやうとした事がない。唯自分のテーブルの上に、すべての注意を傾けて居る。昨日もさうだつた。明日明後日もさうしてゐたい。

△此處で一生終るんだな

汽笛が鳴つた――。皆、茶を飲みながら話しあうて居る。××掛の掛長はどうして彼麼に呑氣なのだらう。何時も事が急がしくないと見えて、彼方へ行つて油賣り、此方へ來て彌次る。それで居て、明日はうちの子供が運動會の日だの、赤んぼが、此の頃から笑ふやうになつたのと、得意氣に話しておいでなさる。酒燒の赤ら顏も惡相には見えない。

『今日から××掛に、米山が入るんだぜ、君』と川本さんが星さんにいふた。

『えッ米山？米山敬二が』と星さんが、せき込んできいた。

『ア丶米山……敬二がサ』

『ウーム、彼奴はねえ、此所を出てから、一時保險會社の勸誘員になつて、どうも抱へ車で飛ばして歩いたんだが、ヤレヤレ又來たのかなア、彼奴は遂々こ丶で一生終るんだな。此麼處に長く止つてるやうな奴ア駄目だよ』『全くだ、僕等も他に好い口があつたら、サッ

さと足を洗つて出る心算さ』と、三十の坂を二つ越えた川本さんが投げ出すやうにいつた。

汽笛が鳴つた。けれども事務所の人々は、急いで事務につかうとはしない。尚ほも語り合ひ笑ひ合ひ、或るものは新聞を音讀んで居る。

『オイ君、大分眼さうに見えるね。一つこれをやつて呉れ給へ』と、監督日誌と原文とを、自分の前へ投つてよこした。自分は實に便る人があるなら、袖に縋つて泣きたいと思つた。已に時日の迫つた事務が、山のやうに積んでゐるのが、川本さんには見えないのか知ら。一日にする三分の一は、川本さんの仕事、川本さんだつて急がしいだらうが、あゝしてぽかく煙草を吹かして居る時間が、少なくない。掛長が見えないと、自分に仕事をさせる。掛長がゐると、急がしい急がしいと呻いてばかり居る。そしてまた何してるんだらう。掛長の姿が室外に消えるとぢきにあれだ。ホホー、掛長が戸棚に鑰を差して行つたつて怫々いつてゐるんだわ。活動寫眞で見た盜賊のやうな腰つきで戸棚の戸をガタくやるあの後姿、星さんと密々、何をさがすんだらう。自分は見て見ぬ風をした。そして監督日誌を清書してゐた。

掛長が見えた時、二人は眼と眼とで語つた。頭腦の鈍い掛長は、川本、川本と何か相談を持ちかけて居る。川本さんは、朝、掛長の前で、掛長の椅子とテーブルを殊更に拭ふ時のやうな態度で、眞劍らしい物いひをして居る。

アレく、又チエッつて舌を鳴らしてる。何だらう。○○だつて、少しの間違ひがあつてもすぐ人を掛長の前で素破ぬく。あゝあの顔、眼と口とを鼻が中央で引きよせたやうな顔を、クシヤくにして怒つてるあの顔つたらないわ。混がらかつた蟀合の筋がビクくして居る。

『オイ君、これ直して呉れないか。人の利害に關することだから、充分注意してくれなくちや困る、此處だ否この邊だ、早速直して呉れ給へ』と川本さんは自分を責めるやうにいうた。何を違へたらう。自分が帳簿を受けとつて見れば、何だ決して自分が掛長の前で、素破ぬかれるやうな性質のものではない。自分の前の事務員の誤謬を責めらるゝ筈がない。自分は痛々しい仕返しの言葉を胸にしたが、女だ！女だと非常な忍堪を持つて下唇を嚙んでゐた。後で川本さんが、何處かへ行つた時、

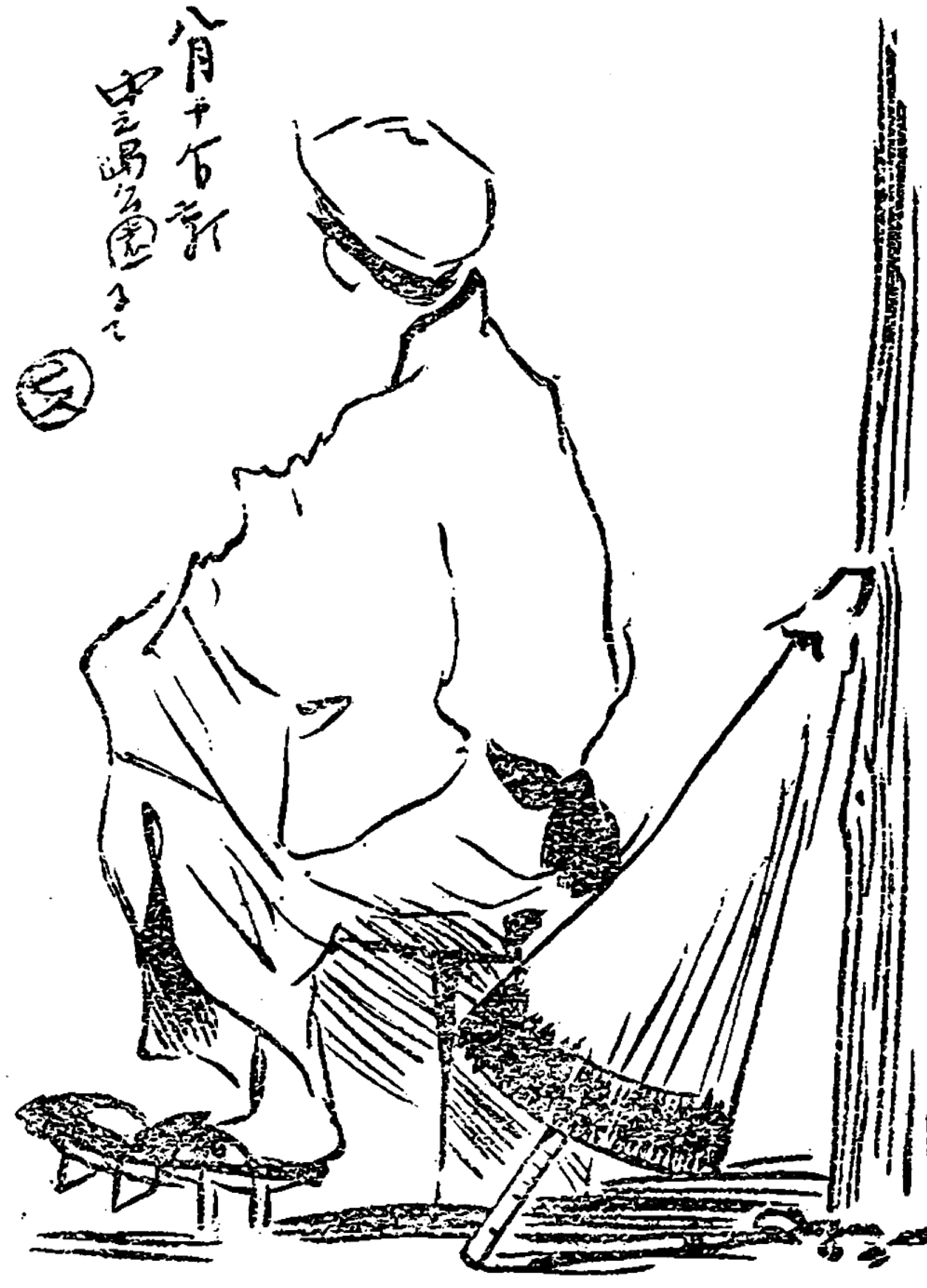
『私、仕事を間違へて許り居るので、川本さんに氣の毒ですわ』と星さんにいつたのは、實は川本さんが無理だといはうとして、星さんにだつて油斷は出來ぬと思つた刹那の苦しいいひまはしであつた。

▲受附の若い女

晝の休憩時間に、受附の女が遊びに來た。矢飛白の華美なのを着て、白いものを濃く塗つた二人連だ。ツカツカ入つて來て、自分等の掛のものを相手どつた。

『どうだ、此の頃は、女傑達』と星さんが

『どうもしやしないわ、何故?』と、年上の女が答へた。



公園の朝　無名女

『二人さうやつて繋がつて歩いたら樂みだらうなア、金魚のウンコのやうに』一同は吹き出した。二人の女は、星さんの後へ來て、其の椅子を搖りながら、

『いゝわ、いゝわ、人のこと金魚のウンコだつて』

『そこらの叔父さん今日はどうしたの』と若い方が手に丸めてゐた紙屑を、コロ〳〵と川本さんの前へころがしてやつた。

『何しやがるんだい』と突慳貪にいうたと思ふと、ニタ〳〵と、其の面相が壊れて、煙草の染みた黒ずんだ齒があらはれた。そしてかきかけの手紙か何かの下がきを、クシヤ〳〵に

丸めた。川本さんは口を切つた。

『あゝさうさう、濱田君は昨日電車で男に見染められたつてねえ』と。

『ほんとか君』と星さんがふり返つた。

『まあ厭だつたわ、電車の中で、人をツッついたり、引張つたりするのよ』と笑つてゐる。

『さうして君はどうした』

『氣味がわるかつたから、立つたわ、そしたらその人も立つて又始めるんでせう。私怖かつたから車坂で下りて了つたわ、そしてあれから歩いてよ。隨分馬鹿見たわねえ』と別に變つた表情も見せない。

『どんな男だつたね』と川本さんは眞面目だ。

『オーバーを着て、中折を被つた立派な風の人だつたわ、だけどあんなのは一寸見だけで當になりやしないんだわね。』女は物ありげな得意な色をほのめかした。

『君は何も逃げなくつても、那麽立派な風をした男にだもの、惚れさせればいゝぢやないか、ハッハッ……』

『さうだ、男が袖を引つぱつたら、小町を氣取つて、誘ふ水あらばいなんとぞ思ふとやればいゝんだ』と星さんが、いひ足した。

『あら厭だ、誰れがねえ、まさか』と思ひ出したやうに、年上の女に助を乞うた。

『濱田君、君は那麽立派な男に見染められて內心嬉しかつたらう』と星さんは皮肉をいうた。濱田さんのお顏は赤らんだ。嬉しかつたらうといはれて、悔いたのかしら、唯耻かしいとのみ思つたのかしら。濱田さんは十八の女だ。

『自分は此等の人々が何をいうても、唯微笑んで居たその間一語を交へもしない。靜かに席を離れて、窓によつてゐたが、ふとふり返つた時、彼等は實に壞れるやうに笑つてゐた。

△餡パンのあみだ鬮

今日は午後の二時から、〇〇長の新任披露會とやらで、各掛長は勿論職員一同は、その時間になると、皆室を出て行つた。

掛長が出て行つたあと、川本さんは動かしてゐたペンをぱたりとおいて星さんを見た。二人は申あはしたやうに立つてストーブの傍へ行つた。室內は妙に靜かになつた。自分は一心にペンを走らしてゐた。ヒソ〳〵と物語る言葉の端が耳に入る。殘つた若い人々

は何事をか協議したらしい。アハヽヽアハヽヽと高笑ふ聲が怪しく自分の胸をそゝかしめた。

『オイ君！、來給へ。いゝ話がある……』と星さんが自分を手招ぎした。自分は何ともいはずに笑つてゐた。決して可笑しくはなかつたが、日々自分をとり捲いてゐる煩雜な空氣は、僅か一月か二月の間に、自分をして斯くまで不自然な笑ひを苦もなく爲し得るに至らしめた。星さんは自分の傍へ來て、

『餡パンのあみだ籤を引かないか』つて籤を出した。自分は自分はなほも笑ひながら、默つて籤を引いた。自分の五錢を出させられた、そして二錢計のパンが、自分の机上に上げられた。

小使はまめやかに茶の世話をしてゐた。彼の懷中もふくれて居る。

ふいと受附の年とつた方の女が入つて來た。またしてもキヤツ／＼いつてみんなの相手になつてはいかゞはしい樣子、飽くまで獨身を裝うてゐる。あれあの女の有樣、あの女の夫は何も知らないのだらうに……

何だかうす暗いと思つたら、もう二十分で時間が來るのだもの。まあ、どうかと思つた仕事が無事に出來たうれしさと、家へ歸るよろこばしさとで、ホッと蘇生つたやうに、頭腦が晴々した。

アレアレ汽笛が鳴る、終業時限の汽笛がなる。何ともいへぬうれしさが一しほ胸に湧いて來る。足は早や小躍をしてゐる。

川本さんも星さんも、今日は、七時迄居殘り。

『御先に、御免下さい』と言つたら、星さんは、

『アーバヨ』と笑つてゐられる。川本さんは、澁い顏をして自分の方へは耳をかさぬといつた風、自分は故意と大きく

『川本さんさよなら』

今度は仕方なしにチラと自分を見て、微に頸を縱にふつた。

汽笛がなる、汽笛がなる、午後五時の汽笛が鳴る。

しら／＼と霞はなるゝ山城かな　沾蓬

大佛の柱くゞるや春の風　二柳

家遠き大竹原や殘る雪　太祗

殘る雪車に消ゆる都かな　保吉

寧の緒に足つながれつうかれ猫　几董

宇治川を鳴く鶯や芦づたひ　酒堂

雉子鳴いてあとは木を伐る響きかな　蕪守

舟綱にゆらるゝ沖の燕かな　巴山

鶯の巣の欅の枯枝に日は入りぬ　凡兆

景政が片目を拾ふ田螺かな　其角

明治座の印象

夕ほし

紅匂ふ夕の雲に心動きて窓に立ち上り、洋々海の如き前途をおもふ時、誇にかゞやくあなたの胸を透覺してみたい……とはO樣。少と恐れ入つた仰せでございますね、およし遊ばせよ、まさか千里眼ぢやあるまいし。尤も放射線はM光線とかでなくつてO光線でせうね、損來博士に觀念寫眞でも撮られたらどう遊ばす？、えゝ？あつ損來ぢやなかつた、福來博士、さうさうでしたのね。つい損と福と間違へちやつて！晦日の萬民の家には金で退治られる鬼が來るつて、御存じ？夕ほし、實は芝居で知れましたのよ、明治座へ參りました。

生れてゝに十八年、芝居を覗く嚆矢といふのでしてね、内心恐しいやうな、何だか多年持續して來た主義を屈折するやうな、行くと約束して後、無念の焰が燃え出して……堪りませんでした。負けたやうな氣がいたしましてね、でも好奇心には勝たれず、何あに經驗の爲めとコジ付けて、出掛けました。成程おもしろい、忠臣藏に黑船、紅葉狩に歌舞伎十八番の矢ノ根五郎、大切の喜劇がその大晦日といふのでした。舞臺が廻る時に吃驚して眼をキョロつかせたのも思ひ返へせばお耻しい次第でございます。見渡せば何の間とかいふ小高き棧敷には、黑縮緬しほらしき貴婦人達が、片手のオペラグラスを舞臺へ向ける、ダイヤのリングがきらきらする、その動作のいかに熱心なる！所謂藝術の尊いのは此所にあるのだらうとまあ始めて悟つたやうなわけで。

歐米の劇場視察に行つて來たといふ俳優の妙技も拜見いたしましたし高麗藏とかの眼もまづ千兩はあると値踏みしてやりました。千兩では批難があるつて、では物價諸式の暴騰に準じて、萬兩とせり上げませう、萬龍とは違ふのですよ。藝妓と藝術は字からしてちがひますものね。もし違へでもすると、小山内さんが泣いて了ひますわ。

糸店のお晉代ちやんが三度の御飯よりお好きだと仰有つたのも無理はないといつぞや笑つたのが濟まなくなりました。

あゝお曾代ちやん（とこゝは愁歎の場）あの時私は十七でお曾代ちやんは十九の芳しいお紀でした。櫻花も間近き桃の節句の時分、師匠はお華客樣のお邸へ御機嫌伺ひに行らしつた御留守に、內田さんとお曾代ちやんと夕ほしの三人で、明るい午後の六疊はどんなに懷しいまどゐだつたでせう。お染久松道行の臺詞を、低聲に口吟んだお曾代ちやんは、やがて昨夜、お兩親樣と〇〇亭で聞いたといふ、朝太夫の、政岡の飯焚の場、鶴千代君の言ふ

「三羽の雀が止まつて〳〵、一羽の雀がいふてことには〳〵…………」。

可憐な細り行く餘韻を慕うて、思はず內田さんと針もつ手を投げ出したあの土手！あの花。冷たい三角的な敎科書にのみ囚はれてゐる今の身には、樂しかつた過去の心おきなき節々がほんとうに思ひ出されますの。えゝもう、憂しとみし世ぞ今はこひしき、でございますよ。又他の境遇に遷ればきつと今の境遇がなつかしいと弱い音を吹くでせうね、ほんとうに考へればつまらなくつて…………。

愁歎の場もこの位にいたしませう。流水女史の二の舞は奇拔でもありませんからね。

お曾代ちやんもね、近い內には若いおかみ樣と云はれるやうになりますのよ。先日、吉野お召の對のお重ね、綾浪織の堅矢の字に、お頭髮は飽くまで氣取つた高島田のお寫眞を贈つて下さいました、でも矢張り大きな珊瑚の根掛けに太輪の銀杏返しの方が好いやうな氣がしますの、まさか、妬けて交せつ返すのぢやございませんわ。だつてお曾代ちやんはもう今年二十一、ひとり娘ですもの、年老つたお父樣、お母樣も世間に對する親心で、どんなにか御斟酌遊ばしてお出でゝせうに…………。

お曾代ちやんがおかみさんと云はれるやうになつた丈、夕ほしも此節は眞面目になりました。かつては個性發揮の熱烈な告白文に、寢ぬるも忘れて心醉した身も、此頃は「誠實は道德の本源にして……」などゝいふ倫理のお講義を、赤いリボンかけた皆樣と耳傾けて聽いて居ります。

ふとしては矛盾した念も起りますけれど、エゝだけど道學者といふ商賣！て辛いものだらうと、ホッと溜息吐く時がございます。

迷ひの闇からあかるみへ出て漸く足下が見えて來たばかり、前途はまだ〳〵暗うございます。

憎き子と思召されるのも甘んじてうける。おん年多

きお二人を、などて夕ほしは恨みませう！我が命と秘めて放さなかつた、若きうた人のNさま、富士の裾野のK樣の誠心籠めた文餘のおん文、慰藉にみちた皆樣の四百にあまる手紙は、みんな、みんな燒いて了ひました。

あゝ鳴る！汽笛の音は甲武線か。
士官學校の臥床の喇叭が、遠く響きます。

史劇と社會劇

史劇は舊い、社會劇は新しい、史劇の好きな人と、社會劇の好きな人とあつて、年を取つた人の方が史劇を愛し、若い人の方が社會劇を愛すると云ふのも、自然の現象であらう。史劇乃ち時代ものは、芝居らしい芝居である、社會劇乃ち新派劇は、眞實らしい芝居である。史劇を愛するものは多くコンベンショナルで愛する、見なれてゐる處に感興を持つのであく、社會劇を愛するものは、新奇なるが故に、もの珍しいから愛するものが多い。今後の劇界には追々史劇が少なくなるであらう、殊に現今謂ふ所の時代劇、舊劇は次第に滅びるであらう。併しそのうちに或るものは、馬鹿々々しいうちにも、藝術的の香が高い、少くも吾等見物の心持を現代から引きはなして、舊い時代の空氣に醉はしめるだけでも、時代ものは藝術らしい點が存在してゐる、吾等は日本の時代ものを何うしやう斯うしやうと云ふのではないが、只其中の好いものは保存して置く價値、言換ゆれば見るだけの價値はあると思ふ（一記者）

☆常をとめ（日記）☆

美耶子

神よ、誠の惠あらば、此の燃る如き眼を閉ぢしむる前に、父母の涙を葬れよ。

十七の身、今逝うと泣くまじ、惜むまじ、悲むまじ。たゞ今後生べき父母の命を、涙の内に封ぜしむべき不孝の罪をまぬかれしめよ。一人の子を失うに至らば、其の親の歎きは、悲みは。あゝ神よ誠の惠あらば、此燃る如き眼を閉ぢしむる前に、父母の情を葬れよ。切に〳〵親を愛する一人子のねがひ、父母よりも先に逝くべき運命、此暗示せらるゝ如き運命の、誠に迫りつゝあるならば、是非々々わが願ひを叶へ給ひてよ。あゝ又胸が、紫褐色の毒汁にでも刺れた樣に痛む、苦しい、苦しいけれど、誰も起すまい、自分の苦しみだもの、自分一人の體に秘樣、心に秘樣、あゝ苦しい。

病遠のくと共に、父母を思ふ心も自然うすらいで行く、何時とは知ず。痛み日に日にかるく、生を愛し自己を愛し又自由を叫ぶ身となつた。

父母のお顔の憂ひも晴れた、無形に迫る憂愁は氣付ないでか。もしも〱今度の病に、たふれた方が父母のためにも、自己のためにも、祈らざる幸福だつたのじやあるまいか。あゝ此悶へ、あゝ此痛み、何時まで自分一人の胸に秘めて居られ様。

（十日記）

細い雨が無果花の葉に優しくそゝぐ音をぢつと聞てると、何だか、遠い遠い夢の國からでもつたへて來る音樂でもあるかの様に思はれて、うつとり夢を辿つて居た。眼を開けば、何時かふくやかな、花模様のかい巻にくるりと包まれて居た。溫たかい夢、溫たかい心、溫たかい胸、「おゝ起たか」愛しさてもる父の聲、優しい母の顔も其所に微笑む。あゝ懐しいお父様、母様と、心に叫ぶ時は、もう總てを忘れて、年にも恥ず父の脊に、母のひざにものりかねないほど、たゞ〱親のみを慕ふ優い子になるのだけれど、幼い胸に女の總てを秘た、此頃のなげき。自分に對する父母の笑顔は長へに變るまいけれど、自分の心は絶ず〱動いて行く、とりとめもなく。

庭に立つて、星を仰ぎながら○○神社の遠く賑かにきこえるお神樂の太鼓の音に、ふと過去の記憶を醒されて懐しいと思つた。てないだまで一度あの音を聞いては、もう耐へられなくつて、無理にも父か母のお袖をひいちや、嬉々と



てまり　　青森　松尾ちよ子

して行つたのは、自分かと思ふと可笑もなつた、悲くもなつた、又行つて見たいといふ樣な氣もするので、智惠坊の手をひいて出かけた。其自分は去年の樣な自分ぢやあなかつた、變つて行く心、變つて行く姿、ああと思ふと、何とも言へぬ憂愁に迫られて、もつと見て居るんだと、むづかる智惠坊をすかして、どよめける人波を後に暗い道へ出た。きらめける金絲銀絲の衣裳、太鼓の音、人波の笑聲に限りなきまで心そゝられて、暗い道を進むに忍ないでか、泣樣に強請智惠坊をつく〴〵見て、又新しく胸は閉る。十歳の少女、智惠坊はまだ罪の無い、たゞ可愛い少女だけれど、六年の月日は有か無かあゝ無殘なる女の變化。智惠坊も又悶への子となるのぢやあるまいか、此可愛い智惠坊がと思ふと、もう〳〵たまらなくなつて、闇から闇を狂ひまはりたい樣に亂る情緒を、ひかれて居る智惠坊の可愛い手から、わづかに通へてくれる溫氣にほだされて、足はやつぱり家の方に〳〵と向て居た。

門をくゞると、もう灯たづさへて、面白かつたかとたゞ純なる慈愛にみてる父母の笑顏に、しいての笑を向た、自分の胸はなやまされて居た。(十四日記)

理想も希望もなにかあらん、處女の熱血、熱誠、何所にかある。一度は放ち得ぬ憧れを懷て、強烈に反抗の刃を磨とも、いづれは眼を閉ぢ唇をかみ、胸をさすつて、ふくして終ふ若い女、埋れて行く弱い女。あゝ總てに勝つて雄々しく淸く美しく成功の桂冠を高く輝す強者はない者だらうか。半身不隨族にも等い今の女、若い女の懷て居る思想を標的として、女性と云ふ者を明かにすべき強者はないものだらうか、なぜ女は弱いんだらう、弱い女の中へなぜ自分は生れたんだらう、あくまでも花やかに生べき處女はないものだらうか。

みひろにあまるお手紙も、たゞいたづらに涙をしぼらすのみで御座ます。信じに信じて居た貴女の意思も遂に〳〵夢だつたのね、神樣は處女の誇をことごとく夢に化さねば、ならぬのでせうか。其夜の美しい星の光りは長へに美しいでせうけれど、貴女の淸い淸い御決心は破れて終つたのねー。今宵も星は美しう輝て居りますのに、あゝ。かへらぬ過去に二人が書きつゞけて來た色々の事が、一時に胸によせて來て苦しう御座います。

ゆるせと、たゞ一言をたまへと、仰しやつても、私は私の良心にそむいた、いつはり事を書く筆は持て居りませんの。しかし、貴女は、いつはり事にも

せよ、私がゆるすとさへ書けば、それで滿足なさるのでせうか。又私が今ゆるさぬと書て、貴女の御決心がひるがへるものなのでせうか。深く／＼姉として親んだ貴女の心を私はあやしみます。

元より貴女と私の體は一つの物ぢあない、神様がべつ／＼に作つて下すつたものを、一つにしようとしたのが惡かつたのぢあないでせうか。もう何も申しますまい、たゞ貴女が貴女の處女時代に純なる少女子を一人、あゝ申しますまい、貴女は貴女の體ですもの、貴女の御自由になさる事を誰が何て申しませう。私は私のかへらぬ過去に執着する私の心をいたむのみで御座います。

書をへて讀返しもせず封じたまゝ、ひた泣きに泣た。（十五日記）

有形無形の繩は假令百筋千筋、身に迫るとも切る。神に祈らず人に語らず胸深く秘る意思よたゞくちけざれ。（十六日記）

月の光りのくまなく滿た庭に立つて居た、たゞ茫然と立つて居た。

夢の樣に浮ぶ花やかなる、淸らかなる、處女時代のプライドに燃る樣な誰彼の詩を、歌を、文を思つて、懷しいと思つた。中にも憧憬限りなかりし元の○○さんを思つた時、そゞろ、いつはり多き罪多き、涙多き處女の終の敢果なさに泣た。我情よ、罪作らざれ、長へに冷ざれ。書をへて、空を仰いだ時、月は雲になやんで居た。（十八日記）

よりとげし心のつなをたよりつゝつたひ來るなり一人の人は

つかれはてし如く一日をもの言はず聞かず眺めずまろび居しかな

まひおちて冷やかに逝わくら葉のかげにひそめる小さき蟲よ

毒草の名に葬むらる花としては美し色をいたみなげきぬ

病床に秋の香ひのしみ／＼と迫り來るなり木犀の花

都大路に降りそゝぐ雨のごと
我が胸の中に啼く音あり
我が胸の中なる
此の冷き憂愁は抑も如何にかはならんとする

甍と巷とに落つる
雨の音の凉しさよ
倦き且つ疲れたる靈魂には
そはいと好き歌なり

ヱルレーヌ

←せんだい

奥の都會

ふゞき野

◉涙ながらに東京を去る

塵埃の都、誘惑の巷とのゝしる人もありますけれど、私は都會に生れて、都會に人となつた。寒き朝、熱海の空氣を吸ひ、暑き夕べ、逗子の月を眺める事は好きだけれど、生涯地方に送くらうとは、かつて望まなかつたのです。あゝ沈滞せる地方の空氣はあきやすい、埃は深くとも、動搖は烈しくとも、活氣ある都會に日を送くる人は幸福である。と常に都會の空氣に生きつゝある自分に、我から滿足して居たのでしたけれど、周圍の事情はそれを許しませんでした。

何故自分は都會を好むのか、地方を嫌ふのか、それは自分にもわからないのです。たとひ都會の街、都會の人は華やかであつても、私は一度世にすねた女ですもの、群集の中に交つて、共に笑みを交はすわけでもありません。只都會の片ほとりに、淋しき家、淋しき家族に加はつて、終日沈默して居る私ですけれど、それでも都會は去りたくない、地方には暮したくないと心に決して居たのでした。

ルリ色の空にはまだぬぐひ切れぬ眞夏の暑さを思はしめる九月の初め、東京を百里も北へへだゝつた地へゆくべく定められた時、如何に私はなげいたでしやう、悲しんだでしやう。幾度か父にそむき、母にすがつてのがれやうとしたのですけれど、終に許されませんでした。晴渡つた空にぬか星の無數に燦然と輝やいて居る夜、午後十一時發の急行列車にのるべく、私等の車は上野へと急ぎました。眞晝は暑くともさすがは初秋の風、涙にしめつた頰には冷々と樂みました。あゝ上野の森よ、都會の町よ、只私は名殘り惜しく〳〵汽車にのり込んだのです。

バラ色の朝の雲がゆるやかに浮び、あざやかな日の光にすべての物がよみがへる頃、一夜まどろみもせず汽車にゆられて、青ざめた力ない私は、仙臺のステーションに下車しました。あゝ斯くして私は終に地方の人となつてしまつたのです。

◎おすゝにまんづう

宮城縣下はひろいかも知れませんが、仙臺市と云へばごく狹いもので、東京の一區程もなからうと思ひます。其中でも、目拔な所と云へば芭蕉の辻を中心にした二三の町にしか過ぎませんけれど、さすがに東北では一二に數へられる都會だけに、他所から入込んでる人がかなり多い樣です。其せいと云ふわけでもありますまいが、一たいに土地の人はすれて居て、他國の人と見れば、どうも馬鹿にするやうな氣味があります。第一正札附にまでかけねをして、おくのですから、驚かずにはゐられません。



乘合馬車とよ子

東京で正札のものをまけろなんて申したら宜い恥をかきますけれど、當地ではねぎらずに買ふ方が馬鹿なのです。土地の人はなれてますから差つかへはありますまいが、他國のものは知りつゝ、どうも高い物を買せられる樣なかたむきになります。其上商人は至つて不親切で、客の便宜等と云ふことは少しも考へず、妙に見識ぶつて居るのですから、なれぬうちはとかく腹が立ちました。

　私が仙臺へきて、一番困つたのは、言葉です「す」と「し」とまちがつて居るにはほとん

ど弱りました。何しろ仙臺のステーションにつくと賣子が「ビールに正宗おすゝにまんづう仙臺名物正岡餅報知新聞宜がすか……」と云ふ樣なわけで、土地の人は皆すとしを云ひ違へて居るのです。酒屋に酢を一合持つてくる樣にと申してやれば、しほを一合持つて來ますし、女中に蓮を一本買せにやれば「あの八百屋で一本賣えんから一せん持つてつてくないとつしや」と妙なアクセントで、眞面目に柳ばし二本持つてくる樣な始末で、萬事がかうですから、なれぬうちのやりにくさと申したらありません。物賣のよび聲等もなかなかきゝとれません、一寸方言を上げて見ませう。

ヨカンベッチャ(イヽデショウ) ガエン(ありません) クナイ(下さい)
お晩テガス(今晩は) ガエ(御出で) 只今、或は、明日、(別れる時左樣ならの意) きまりした(濟み) 何ツシヤ(何んですか) ワカンネエ(いけない)

◎クリスチャンの多き土地

敎育ある人は別ですから、一がいにかうとは申されませんけれど、どうも仙臺の女は一寸人好きがしません。何故と申すに、如才ないと云ふ點は少しもありませんし、兎角偏りが多くて、めつたに信じられたものではありません、さうかと申して、惡意のあるわけでもないらしいのです。それも針程の事を棒程に云ふ位ならいゝのですけれど、根も葉もない事をまことらしく話すのですから驚きます。そのかはり、又うその皮が片ぱしからはげて來ても、一向平氣なものです。それに謙遜と云ふ事を少しも思はず、自分さへよければと云ふやうな性質があるのが、第一に人好きがしない原因だらうと思ひます。

かう申ては餘りに露骨ですけれど、禮儀を重んじない事はひどいものです。例をあげて見ませば、見なれない人でも通れば、指ざしゝて其評をしますし、浴湯に參つて見れば、人の前でかまはず衣類をバサ〱ふるつて着ますし、流しには痰を吐きますし、お話になりません。是は先づ敎育なき女として、女學生等はどうかと思ひますと、是も餘り感心致されたものではありません。尤も仙臺はキリスト敎が盛んなので、狹い割りに敎會の數もあり、宗敎學校等もありますので、この種の處へ出入して居られる人は、どうしても人格も高く、いさゝか生意氣と云つたやうな風も見えますけれど、華美に流れた都會の女學生にくらべたら、一段上の樣に思ひます。其他二三の女學校に通學して居

る生徒は、すべて筒袖で至極質素なところはまことに宜いと思ひましたけれど、東京とは違ひ、何分狹い土地ではありますし、いづれも袴とか、着物とかに印があつて、一目でどこの生徒とわかるのですから、餘程品行も正しくすべきですけれど、夜、活動寫眞や、芝居なんかにいつて見ますと、通學姿の女學生を、幾らも見ますし、天ぷら屋や、そばやに三々伍々連立つてはいるなんかは、たうてい東京の女學生の出來ない事です。地方の人は女を東京へ出すと生意氣になると申してますが、まつたくさうかも知れませんけれど、是は決して東京のものが、生意氣なのではなく、地方の女がすれやすいからだらうと思ひます。東京の女學生と、地方の女學生とを比較して見ますに、東京の女學生は、華美にこそ流れて居ますけれど、無邪氣です。地方の女學生は、どうしてもいやにえらぶる樣な風が見えます。而し割合に都會の女學生のやうに、男女學生間の風評等は少ない樣です。學術等も或はまさつて居りはしないかと思ひます。

前にも申しました通り、宗敎が盛んで、女のクリスチヤンはなか〳〵多い樣ですけれど、遊藝等は餘りひろまつてをりませんし、文學等も至つて振はぬ樣です。早く申せば仙臺の女は活氣がないと思ひます。而し才氣に許りはしつた東京の女にくらべたら、意志の强固な事は受合ですが、只すべての事が露骨で、女らしくない事が缺點の樣に思はれます。

詠進歌數 二萬五千首

本年の歌御會に全國より詠進したる和歌の數は二萬五千餘首に上り、其の府縣別左の如し。

皇族御詠進六▲御前披講二一▲選歌次點一三七▲華族九九▲高等官有位者一、〇〇八▲東京府二、〇二四▲京都府一、一一五▲大阪府八一五▲神奈川縣三一五▲兵庫縣五〇八▲長崎縣二六八▲新潟縣六二四▲埼玉縣三六〇▲群馬縣二八三▲千葉縣五一一▲茨城縣五二九▲栃木縣一九二▲奈良縣一八四▲三重縣六五六▲愛知縣一、五三〇▲靜岡縣六二七▲山梨縣五二四▲滋賀縣四一六▲岐阜縣五六二▲長野縣一、二三〇▲宮城縣三三七▲福島縣四五三▲岩手縣二五二▲青森縣三一九▲山形縣五〇三▲秋田縣五六八▲福井縣一七八▲石川縣五九一▲富山縣二〇五▲鳥取縣一四七▲島根縣四三八▲岡山縣四九四▲廣島縣五六五▲山口縣一、二五〇▲和歌山縣一八五▲德島縣一六〇▲香川縣一三四▲愛媛縣二五一▲高知縣九六▲福岡縣四五一▲大分縣二五六▲佐賀縣一六八▲熊本縣四九〇▲宮崎縣一三一▲鹿兒島縣四六八▲沖繩縣四九▲北海道二八二▲朝鮮九八▲臺灣八九▲滿洲五四▲樺太三▲在英國二▲在米國一二▲在獨國一▲在露國一▲在淸國七▲在加奈陀一▲計二四、一四五▲遠式一、一三三▲期限後着二八四▲計一、四一七▲總計二五、五六八

越路の空より

初雪日記

玉あられ

ドードーッと海なりのするやうに、すごい音が寢覺の枕に響く。鑿井場の音響は馴れて居るけれど、海なりの音のやうと思ふと、何となく舟江の里（新潟）の常磐が岡の松林を思ひ出した。寢亂髮を梳くにも、手はてゞえる朝だ、從妹の靜ちやん敏ちやんが「はつてい」「はつてい」と震へて、外からバタバタかけて來た「風邪をひいたらどうするつて」と叔母にえらく〳〵しくしかられて二人とも炬燵へもぐり込む。

戸をくると外は一面まつしろ、三寸餘も積つた上を、二の字のあとうね〳〵と續いてるのは、初雪といふ光景の目新らしさに、いま二人が踏み廻つて來たのらしい。小鳥が一羽赤い南天にとまつた、チともいはない、不安らしくうろ〳〵と雪をけちらして何處へか飛び去つた。鳥には輕き翼は有るものと、つまらぬこんな事を思ひ〳〵冷い椽にぢつと立て格子戸のうちからみて居た。東の空はばら色に美しう木立をもれて輝く。雲の切れ目に淡い星が一ツあやうい。あ、いまにも消えさう。

遠き誌友より來信、いろ〳〵のお世辭のあとに妹として下さいともある、自己の悶も漏らして有る。私は本をおかし申上なすとはいつた。けれど姉の妹のとお世辭の交際は眞に嫌だ。血を分たれた兄妹の間でさへ潮路幾千里の別天地にさすらへの疲れたる胸を慰むすべも無きを知つても、我が眞に同情を寄せて居る人をも、それ等をみんな打捨てゝ敢てすくはふともせぬ、いゝえ無言のうちに愛を寄せても相互の間は高い厚い隔壁にとざゝれて固く涙を呑んで居なければならぬ。もう〳〵假りにもそんな言葉はいやなことだと身がふるへた。

書齋へ入つて師よりたのまれし北國の方言をかく。問はれし友―○さん―の消息も只一言餘白の處へかき入れる、何も多くは書きたうなかつた。

あゝ○さん、「○さん御病氣は如何」ときくと「からだはよくなりました、華やかな若い人の中へ立ちまじつて天使のやうな生徒をあつかうて居ますと家にくすぶつてるよりか氣分はようでざいます」といふた

目には早や露がきらめいたのを強ひてかくさうとした。友も薄幸なる一人であつた。にぎつて居た手には力が入る許りだまつて二人は身をすりよせて夕闇せまる庭をぐるぐるあるいた過日の蒼白い顏がうかぶ。

重ねてある封筒を取つたら、紫インキで書いたものが落ちた、昨日來た手紙である。受取つた時、側に居た主人が「何誰から來たのだい」とのぞいて、益々御繁榮の由蔭ながら祝福いたし候と、小聲でよみはじめた。私は苦笑してだまつて居た。

あゝ私がもらした苦笑のすべての意味は主人には通じなかつたらう、どうしたつてわからないのだ。わけもなく涙がホロ〳〵とこぼれる、氣が茫ッとする。



下女　陸奥　村田ひさ子

「あゝ×樣無言の感謝は受て呉れますか」聲に出ようとしてハッと氣が付いた、あたりに人の居ないのに胸なでおろした。あゝ私はあらゆるとりとめのない暗いおもひのせまつた時、痛切に優さしい聖い遠くの人をおもふ。そして無言の感謝を捧げて居るので有る。

午後みぞれまじりの雨にぬれてK樣入來る。K樣は繪のやうな美しい人だ。炬燵に甘酒すゝり乍ら寫眞帖を出してみる、さまぐの人の顏

が出る。大くま伯のも有る、みぞ口公御夫婦のもある。いつみても、懷しいのは青山から頂いた四月十六日の紀念の御寫眞だ、これは我が生の終り迄なつかしいおもひを起さしむる一ツなのであらう。（初雪の日）

起こる時、「年內は二十日程しかないんだね」と思ひ出したやうに、主人がいふ。雪は消えてよかつたとおもふものに、今朝は又も大が、、すりのべたやうに大地へ粉のやうな、大きいのが散つて來る。がらす戸のさんにたまる雪をみると餘計に寒い、さびしげなものだねえと叔母がいふ。

文壇を出して靜ちやんが「暗き日」をみたり「面がはり」をみたりして居る。大體の意味は了解しうるだらうか、「靜ちやん讀めますか？」といはうとして口をつぐむ。妙にはしやいだり沈默したりする少女、あゝやがてがうちには女にならうとする靜ちやんだもの。

魚屋が來る、鮭、ぶり、えび、の三品のうちえびとぶりだけ求める。

收納受取をする。下女の仕事もみてやる。晝の間は代るぐ＼人が來る。斯うした日をまめやかに仕事のはか取つた時は心地が好い。家妻だもの。平凡だの單調なる生活だの思ひ度くない、決しておもふまいと思ひ思ひ十路盤の玉をはぢいて居た。

お晝飯の時、昨日門に立つて居たら輕くおじぎをしてニヤ＼／＼と私の顏をみて笑つてる人がある、みると祖父樣の達者でゐらした折よく遊びに來た人相見の爺さんだつた。「奥樣は大賀の相が表はれて居ますよ」いきなりから云うて猶もヂロ＼／＼私の顏を見てるので、私はものも云ひ得ずにげて來たことを話したら皆がお腹を抱へて笑つて居らつしやる。午過ぎ姉の乳母が來た。娘の事をいろ＼／＼話す。娘は家の中をもあるき得ぬ薄幸なる女だ。華かな町のまん中に無限の寂寞をいだいて、子供だましの土人形や駄菓子の店番をして居る。あゝ天地に相容れられざる其さびしさを思うといくら心のはしやいでる時でも同情の淚は流れる。

お夕飯に新屋へ招かれていつた。あがりくちの戸をあけるや否や、從兄、田川醫學士「ヤ奥さんお目出度う」だつてにくらしい。御自分こそ男子をまうけた癖に、照れかくしを仰有つてるんだもの。

星影まばらの空八日ばかりの寒月朦と照らす雪路を迎への俥に乘つたのは十時過ぎだつた。

硝子戸越しに各事務所の電燈は青かつた。霧の海の

やうに煙る鑛井場の湯氣にけむりに高い櫓が山の麓にうき出たやうにポーッとした灯が目に入つた。「めつぽう寒いなあ」「時に君こんな夜更けてどこへ行くんだい」「どこへつてきまつてらあ橋向へ行くんだ君も行かうぢやないか」、こんないやしい話をし乍ら俥を通りすぎた黒い人影は町の方をさしてゆく。鑛夫らしい。ああ一日の勞苦の疲れをかれ等はつかの間肉慾に癒やさんがために花柳のちまたへ通ふ連中で有らう。

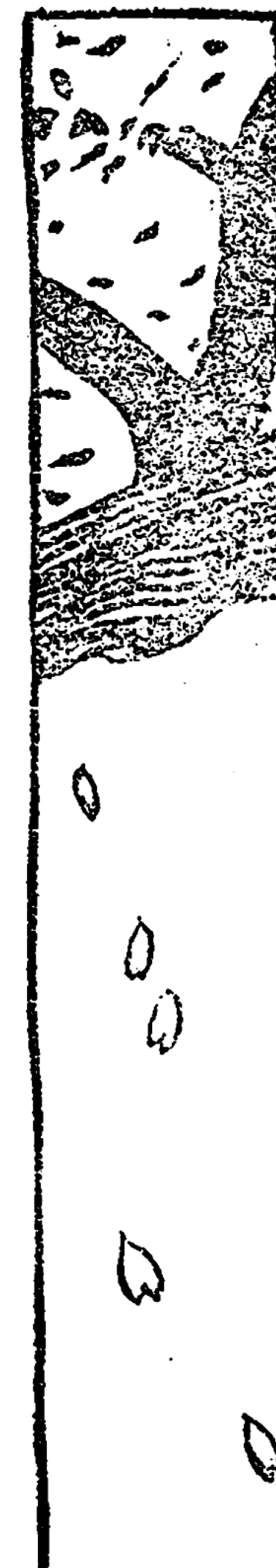
かみそりのやうにするどい風がホロの中を襲うと石油の香が胸わるくついて來る。

家へつくと目をさまして居たのは夜番許りだつた。

地方女教師の受くる誘惑

名もなき女

都會の皆樣方にはよくある事で厶いませうが、田舍では誘惑される事は割合に少う厶います。夫も極下等な無教育な娘等ならいざ知らず、女學校でも卒業しますと、餘程他の娘等と軒輊を生じて來ますから、一寸したヒヨロ〳〵男は恐がつてうかとは相手にしません。ですから此等男子から誘惑される事はなし、又都會の樣に不良學生なんか、ないといつてもいゝ位ですから、極まあ安心といふ工合です。然し、一度女教師として世に立ちますと、周圍は其一擧手一投足にも、注意するといふ有樣で、わけて女教師の少ない學校へもつてきて、美人であり、且才子であるとなりますと、忽にして其評判が高くなり、人からは恰神樣か何ぞの樣に仰がるゝ者であります。かく申す私は、決して美人ぢやありません、才子でもありません、極土臭い愚鈍な者ですが、どうしたものか奉職るや否や人からは尊敬され、柔しいとか、腰が低いとか、教へ方が上手だとか、いゝ噂をされましたので、忽にして郡内に響き渡り、其名を知られる樣になりました。で拔目のない男子は我も〳〵と望んだ樣子、けれど、何れも名譽を重んじて居ますから、手紙なんかを寄越す者は少う厶いましたが、夫でも五通や六通はありました。初はどれも皆眞面目腐つて、月並な事許、裏書には號を書いて一見婦人らしくしてあります。私はまあ男て馬鹿な者だ、態々お金を費つて、此麼事をいつて寄越すとは…、何必要があるのだらう……、ちと臭いと思つて居ましたが返信しないでおきますと、一日千秋の思で嬉しい便を鶴首て居るとか言つてよこす。（つゞく）



読友くらぶ

年賀状の御禮

新年早々誌友諸孃から叮重なる御年賀状をお送り下さいましてありがたう存じます、吉例に依り御芳名を左に掲げて謝意を表します、中には美しい繪はがきを送り下さつた方も澤山ございました、併せて御禮申上ます。（記者）

福岡、健部頁久子。加賀、北利子。中野、木村綾野。岩代、栗村勝子。京都、町田てる子。大阪、花園女。京都、松木絹子。常陸、田村初子。粂子。宮城、小林のぶ子。佐渡、美穂子。大津、光枝。金澤、山梔。山城、八田文子。越後、藤原泣槑子。札幌、神田すゑ子。京都、要司村福子。羽前、野口菊子。札幌、幸阪隆子。長崎、草葉露子。岡山、洋月子。大阪、田野しか子、青山、町田露江。山口、椰頁美那子。廣島、後藤すみえ。京都、松村翠香。長野、黒澤春子。越後、佐藤浪子。伊豫、渡邊文子。小石川、三宅頼子。三重、佃野の百合。羽前、橋本いち子。山梨、吉田邦枝。札幌、伊藤雪子。廣島、露松。四谷、荒木京子。大阪、吉田うすい。筑前、中野花公子。大阪、ちりゆく花。秋田、那珂はつ子。大阪、高山米子。田舍、代富子。京都、竹村まき子。神戸、みなとの女。栃木、N女。（以上繪葉書の分）信濃、山村あい子。伯耆、新田文子、淡路、加藤菊子。富山、雄上千仭。大阪、本田千代子。西多摩、三ケ島よし子。美作、水田邦子。福井、岸本てつ子。京都、三宅壽賀子。佐賀、山口しと子。備中、野ぎく。遂陽、浦之百合香。近江、佐和田よし子。宮城、沼倉たか子。沼倉蘋子。廣島、宮垣はつ代。伊豆、加藤ため子。長野、下枝よし枝。徳島、吉田紫花。長野、龍江。常陸、木村那賀子。臺北、榊賀みつ子。仙臺、堺澤邦子。滋賀、磨志緒。淡路、濱田とめ子。日本橋、松岡千代子。本郷、望月麗子。靜岡、宮本孝子。大阪、松山花枝。横濱、鈴木まつ子。備前、板崎舒枝。備前、佐久間縫子。紀伊、粂田久子。備中、小見山春子。和泉、金田よし子。近江、細野その子。秋田、小川篤子。石狩、館美保子。千葉、石井咲子。伯耆、竹本春江。伊賀、山村龍子。金澤、むらさき。飯田町、さつき。尾張、佐分富美子。本郷、松本かね子。岐阜、篠田とみ子。兵庫、春子。淡路、鎌田麻之。滋賀、植村はる子。福島、齋藤邦子。新潟、井上貞子。麻布、土屋精子。向島、鈴木春子。神田、松村樂子。土佐、梶原重子。函館、柏倉藤子。土佐、末弘その子。横濱、冷花。岩手、濱尾梅代。山口、重原美女子。赤穂町、紅雀。越後、木村歌子。茨城、赤澤千代子。中尾豐子。兵庫、足立春子。草野しげ子。中隈紫白子。大阪、田野しか子。

記者より

○新年御めでたうございますっていふのもおそくてをかしいし、床のうちで年をかさねてはあまり御めでたい事もなからうと家のものにわらはれました。その上一色醒川様御逝去の由、記者樣側でも少しもめでたい事はございませんでせう。遙かに追悼の意を表します。あとの記者様もあまり御强からぬ御樣子何卒此寒さに御用心遊ばして病魔にみいられぬやう御健やかにますます本誌をよくして下さるのを祈つて居ます。なほ相變らずの下手な原稿一つ大きくなつても何も進まず、おはづかしうございますけれどもよろしく御願申します。（伊志子）

○記者樣又一ッ年を重ねまして御目出度う今本誌一月號を買求め嬉しく愛讀する中に一の悲き

訃報を見つけまして思はずそでになみだを浸しました本誌記者樣の御一人一色醒川先生は平生より滿腳の御賀とやらにて今度はからずあの世の人となられましたさうでございますつて恠陸誠に驚き入りました、さぞかし皆樣方にも御力おとしの程御察し申し上げます何とて御悔みのすべも候はず取りあへず御悔みまで一筆示し上より一句御佛前へそなへ申たく

曉の夢とや消えぬ雪消えぬ

(大阪東區絲屋町松屋町拗入、田野靜子)(右の外、枯尾花さん、孝さん、木村あやのさん、荒木凉子さん其他數名の方より叮重なる御悔み狀をたまひ、地下の醒川君も感涙して居ることと存じます、一寸御禮まで。記者)

○澤山な原稿を御覽遊ばす記者樣は嘸私の樣な者の原稿の文字はみにくゝおらつしやいませうさう思つてる私は矢張りソ、クサと書いて了ひます、お願ひですから皆樣の原稿の一二枚を選んで毎號口繪にうつして戴き度う御座います、おきゝすみ下されば誠に嬉しう御座います。此頃横須賀には投書家がおふえになりましてネ近邊ですからお懷しう御座いますわ、鎌倉から横須賀へかけての誌友で誌友會が開けたら何樣に面白いでせっネ、如何?(神奈川縣久良岐郡六浦萩村三郎方木村淚花子)(如何にも湘南誌友會なども宜しいでせう、お開きになつては如何です。記者)○一少女さんに、投稿は締切になつた翌々月に發表されるのです。(記者)○大和愛讀者さんに渡邊の裁縫女學校は本郷區です。(記者)○初めての投書、其他に就いて種々の御あいさつをたまはつた下記の諸孃に、御手紙は拜見いたしました、且御申越のことも了承いたしました。紀伊、久世。大阪、田野しか子。小島かず子。田舍の娘。更正。美保子。長野縣、千代子。大阪、吉田うずい。靜岡縣、長崎せつ子。たそがれ。佐賀縣、大石桃枝。尾張、佐分富美子。中野、木村綾野。翠浪生。和泉、金田よし子。越後、藤原法子。麴町、藤村眞。横濱、臼井道子。牛込、田澤美代子。長崎、深見露子。長野、前島優梨子。平壤。総口さく子。富山、雄上千仞。兵庫、田中凌葉子。以上の諸孃から特に賞品到着の御禮書を送り下さいまして、御叮重の段、此處に一言挨拶まで。(記者)

交際

○お料理

群馬縣佐波郡剛志村　椎名八重子

誌友の皆樣私ね非常に割烹に趣味をもつてますの皆樣のうちで同趣味の御方は永久に御交り下さいましな。

御玉章下さつた御方には私の考へた田舍の手輕料理二三を御知らせ申ます、但し一時的の御方はお斷り申します。

○一時なりとも

大分　しぐれ

皆樣始めて御伺ひ致します。私も前々からの愛讀者で御座いますけれども此處に御伺ひ致すのは始めて御座います。小さき胸にたたんで居た理想も抱負も零落した家のためすべてを犠牲にして今はつまらぬ寒村の女教師ですけれども私とて若い女で御座います幼い時から不幸にもまれた私は順境の方との御交際は望みません薄幸に泣く君の熱烈な御レターが戴き度く存じます。明日をも知れぬ人の世に永久は誓はれますまいよしや一時にもせよ情ある御交ならよろこんで戴きますから御交り下さい。

○姉さまたちに

知田郡成岩町榊原爲次郎方　榊原けい子

姉さま方私も御仲間入さして下さいな、私ね本當の田舍者よ又田舍で一生果てる不幸娘よ私と同じ樣な御方はあはれと思ふて御交際下さいな私きつと御返事するは又繪はがきも御交換下さいなそして俳句や色々自作品の御交換もして下さいな姉樣たちに幾重にも御願ひするのよさよなら。

○英文か和歌

茨城縣西茨城郡北山内村　田村初子

誌友の姉さま方の内英文か又は和歌のお好きな方とお交りお願ひ致し度御座います但し永久的にですよ。

○寮歌

東京深川區東元町　鈴木美喜子

先日は失禮を申上げたにもかゝはらず誌友の皆樣方は種々のおもしろき唱歌多數送り下さいまして誠に有がたう存じますなほ相かはらず敎へ下さいまし、もし皆樣方の中で一高の寮歌御存じの方は敎へて頂戴樂しみに致してまち居ます。

○轉　居

近江滋賀郡眞野村字普門
中川志奈子

皆さま御變りなくつて——私ねこん度こんな田舍へ來てしまつたの、こゝは近江八景の一なる堅田の北幕雪の名ある比良山に近いので寒い事といつたら——でもねこれも運命とあきらめて居ますの、今は歸京したつて母もありませんしねどうぞ姉さま達あはれと思召して今までに倍して交際下さいましね。

○語　學

愛知縣知多郡成岩町南家下大橋方
加藤八重子

私も今度始めて誌上で御仲間入をするように成りましたから諸姉上も姉妹の如くに末永く御親愛なる御交を偏に御願ひ致します私は只今勉强のひまに語學を學びて居りますから誌友諸姉上樣にて語學御學びの方は英語雜誌外國寫眞外國繪はがきなど持合せが有りますから他に御持合せの御方は御交換を御願ひ申上ます御交換の御方は女子の御方にて眞なる御方と願ひ上ます。

○眞の友を求む

鳥取市上町長田神社前
岸本八重子

親愛なる誌友の皆樣一旦誌友として御交りする以上は眞面目に眞の友として互にうちとけて永久に御交りしようでは御座いませんか私は自分のような不幸な悲しい運命に居る者はどうかして終生姉妹と思て下さるような眞の友を得たいと望んで居りますですから私は一旦御交りするからには終生眞面目に交際して戴く決心で御座います殊に岡山美作國の方に深いく御交り願ひます美作國は私の一時も忘る事のできぬ懷かしい地で御座いますのよどうぞ皆樣の內で不幸な運命に泣いて居らつしやる方で終生眞の友として御交り下さいませ但し男子の方にはくれぐれもお御ことわり致します先月も男子で女名して御玉章下さつた方が四五人ありました實ににがにがしい次第ではありませんか私は女子で未だ男子と交際するの必用を見とめませんから以後くれぐれも御ことわり致します。

○仙　臺　よ　り

仙臺市松山通四六
增澤邦子

部から御なつかしい皆樣へ始めて投書を致します者よ何とぞ諸姉君御導を祈ります、不束者でも御玉章は度々戴きますよ仙臺の楮狩ゆき子樣ほんとに御したはしいよ仙臺には愛讀者が少ないから今後ふるつて愛讀者を多く致しませうやいつかは目ざす大會をひらきませうねホホヽヽ望のみ大きくて敗𨻶たけ子樣川崎道江樣御變りない事私いつも誌上で御美はしい御名を拜すのが無二の樂しみよドシく御投書遊ばせ　なかげながら御祈り致します。

○お　賴　み

山口縣　か　よ　子

お情深い本誌の愛讀者樣にお賴み致します、何卒哀れなこの私をお助け下さいまし。私は生れながらにして二親はありながら或る事情により遇ふ事が出來ません、只今は叔父の內に氣を兼ねつゝ只本誌を無二の友として淋しく月日を送つて居りますが悲しい事には最早遠からずして其の無二の友を得る事が出來なくなります。それは昨年の十月に檢定試驗を受けました時試驗料や其他諸雜費を皆自分で出しましたので……（もとより本誌を買ふのも皆自分で人樣の衣類を縫つたり經木眞田を編んだりして貯へた金で買ふのです）それでどうかして得たいくと考へて居りますがこれと云つてよい分別もなく只私が今持て居ります內本誌昨年の七月號八月號十月號と地方の婦人及一昨年の八月九月十月昨年の三月の婦人世界以上八冊が只今不用になつて居りますからそれを賣つてそのお代で後々の本誌を得ようかと思つて居ります、何卒何卒皆樣の內御入用の方は其內一冊でもよろしう御座いますから半價位で取つて下さいませんか。それはくく丁寧に取り扱かつて居りますからいつれも九で買つたまゝの樣ですが……これは私の一生の御願ひですからどうぞくよろしく皆樣お賴み致します。そしてこれを機會に以後親しく御交際を願ひます。おひくにして繪葉書や醜い私の寫眞をもお送り致します。（私の住所は記者樣にお尋ねして下さいまし）

○筑波の麓より

常陸筑波郡葛城村羽間
篠崎三次方　星野親子

誌友の諸姉樣方私は一月號から本誌の愛讀者となりましたから此の後はどうぞよろしく、私は筑波嶺の紫山のふもとに一人の御友だちとても無く誠に淋しく月日を迎へて居るのですでも景色は中々好いのです、そして山の上には高山植物も生えてゐる中には隨分珍らしい植物もありますわそろく登山の期節になりますから皆樣

御暇があつたら御遊びにいらつしやい、私ほんとに淋しくつて〳〵仕方がないのよ誠に不束者ですが末長く御見捨てなく御交際して下さいね、……玉章、繪はがき何んでもよ。

○圖畫

大阪市天王寺伶人町清水上南
古川邸内　薗光將子

去年中は有難く誌上で御禮申上ます將來も不相變御交際祈る。
又圖畫のお好の方は交換して頂戴右の所に移轉しました。
辻井信子さん別れて懷しい後宜敷く。

○一軒家にて

長野縣東筑摩郡廣丘村
百瀬わか子

信濃の春は寂しいものです、其の寂しい中の最も寂しい一軒家に私は生れました。私の友は『文章』『和歌』『俳句』『寫眞』『編物』『繪葉書』等です以上の交換を願ますな博愛なる誌友の姉樣方レターを頂戴よ屹度御返事致します。

○淋しき山里より

山口縣河武郡山田村木間
原田閑子

御なつかしい諸姉樣私ね淋しい〳〵田舍でわびしく我身の不幸に泣てゐるものでございますお友達といつても一人もありませんしほんとうに淋しうございます。
花の美しく咲いたのを見ればその華な中にいはれぬ淋しみがある樣で一そう哀愁を覺えてつい泣きます皆さまどうぞ御ひまがありましたらこの淋しい思に泣く少女に御やさしい御玉章お惠み下さいまし。
夢の女さま私はなぜかあなたが御なつかしくてなりませんどうぞ御交り下さいましな。

○大阪にて

大阪市西區江戸堀上通り二丁目三十二
洋畫家馬淵美鄕方　本間琴鶴

浪花の諸孃樣よ妾は昨冬御當地に參りました不束者ですが何卒御交際を御願します肉筆の繪葉書の交換を致しませう妾知る限りの東京の御噺しを致しませうから何卒土地馴れぬ妾を哀れと思召して御交りの程御願ひ致します。

○困りました

廣島花子

誌友の皆樣より色々御手紙を頂戴致しまして誠に難有う而して中には中々巧妙に文字を女の書いた樣に下された男子の方も澤山ありました、其一例には茨城の御方の柳子樣、東京の鈴木樣の外十二名もありました、中にも寫眞を送つて下さつたのでも自分のでは無くて他の寫眞を下さつた方も金澤の琴子樣外三名もありました。妾も大に困りましたよ。

○お禮

柳田君子

年賀狀の御交換をお願ひ致しましたに依つて元旦早速御送り下すつた、香川の礪家樣東京鈴木樣、上毛芳え樣、藤ヶ崎戸田樣、岡山入江樣、秋田小川鳥子樣、千葉の工藤樣、小石川明樣外五十八名の御方樣に厚く御禮申上ます。

○

茨城縣新治郡栗原村大沼方
精子

方々の諸姉上樣妾はとつて十七の春を迎へましたそして同時に此文壇の愛讀者となりましたよろしく御交際を願ます男子の御方のはゝつきり御斷り申します。

○

石川縣鳳至郡七浦村
谷内つね子

おやさしい本誌愛讀の諸孃おきげんでいらつしやいますかどうぞ美しい繪葉書やお玉章の御交際を願ますまたお寫眞にても編物にても御送りくださいませばきつと私のさもしい寫眞をお返いたしますからネ。

○

信州松本市新伊勢町五十嵐方
濱野きみ子

積雪の里より御なつかしい姉君方へ御交際を願ひます、それから御寫眞を御惠み下さい、妾もお耻しい寫し畫ですが御送り致しますわ。

○

周防都濃郡戸田村
河津さい子

誌友の諸姉樣よ、私は本年から女子文壇の愛讀者になりましたから、ゑはがきや文通の御交換を願います。田舍に誰と文通もしませぬが、あはれと思召されて、ふつゝかな私でも。

○

下谷區御徒士町
谷口桂子

記者樣妾事此懷かしい文壇と暫く別れなければ成らない節が來ました御蔭樣で友達は出來るし雜誌へも出る樣に成つたのも皆記者樣の骨折り此恩は決して忘れません隨分御身を大切に成さいまし左樣なら。

○

名古屋市東區長塀町二丁目
瀧本鎗次郎樣内　逸子

諸先輩の姉君樣へ妾は俳句を三度のおあたへより好きと云ふ身、諸姉君樣のうちで俳句を御や

りになる御方は一時的でなくして永遠に御交して戴きたい。

○　大阪東區上本町八丁目一八七
坂田稔方　浪子

誌友の諸姉樣や記者樣お障りもありませんですか御尋ね申します、嘸ぞ本年は宜い御歲をお取りなすつたでせうね、妾も本年は十九年の宜い年を迎へましたの、四月には女學校も卒業致しますわさうしたらお嫁に行かねばなりませんのよさうですけれど本誌は何日迄でも愛讀致しますから諸姉樣どうぞ永久にお交はりなすつて頂戴ね。

○　福岡縣粕屋郡香椎田原方
井上しづ子

おなつかしい諸姉樣私は去年一月より本誌を愛讀致して居るもので御座います、去年までは福岡の女學館に通學致して居りましたがある事情の爲めに只今はこの淋しい田舍で語ふ友とてなく、ある思に泣きなやむ少女で御座います、情ある諸姉樣よあはれと思召し永久に御交り下さいませ。

一、慈愛深きおやさしい同情ある心より親しく眞の妹としてお交り下さる方。

二、相談相手ともなり、なぐさめて下さり萬事姉樣として御敎導且御交り下さる方をきばう致します。

○　伊勢國關町一四八
田庄内てつを

皆さん、明まして御目出度私は三人兄妹にて兄さんは神戸の高商在學中で姉さんは先月津の方に嫁かれましたので只今では私一人内に殘って居りますの姉さんの御内にゐる時はそれはく面白をかしく暮して居りましたが姉さんが嫁かれてから私一人淋しく鬱つく致して居ます何卒カイドネスの諸姉上に今後は繪はがき御寫眞其他何品にても御交換を御願申上て此の淋しい私を慰めて戴きたいのですから御同情ある皆々樣末永く御交際の程を御願申上ます。

○　滋賀縣伊賀郡水口町惠美須町
植村春子

私は明けて十七の年をとる淋しき田舍に暮す少女ですが昨年の十二月よりお懷かしいみな樣の仲間へ入れて戴きました記者樣始め諸姉樣がた不束なものですがよろしくお願ひ申します尚玉章繪はがきの交かんを幾重にもお願ひ致します。

○　出雲
石崎芳子

毎號の誌友くらぶにて皆樣の美はしいお交りを拜ずる度に私は言ひしれぬ熱い涙に咽びます三年の今も未だ乾きませぬ、而し定められた交りの範圍も今一とせと思へば月日をもつと短かくしたうございます。

長崎百合子樣振はぬ縣下に一人香ばしき貴女のお作を拜見いたしまして私は何時の間にかこれを書いておきました、何だか自分の事のやうに嬉しくて。　百合樣私は同じ雲出づる國の簸川の畔に貴女を欽慕する子の一人でございます。

○　福岡縣糸島郡怡土村末永笠醫院内
青木きみえ

記者樣初め誌友の諸姉上樣お變りは有りませんか私山家育の不束者でありますが不相變御交際お願ひます誌友倶樂部へ御投稿なさる諸姉上樣は屹度永久に御交際をしてくださるお方と確信して居ましたわ處がね一月號の誌上を見ますと隨分一時的のお方が多い樣ですね私一時的の交際は大の嫌いなんです眞心ある諸姉上樣よ一時的でなくつて永久に御交際を願ひます。

○　千葉縣山武郡大總村木戸臺字宿の下
伊東清子

誌友の皆々樣よ、私は此頃（十一月）からの愛讀者であります、昨年小學校を卒へたばかりの至つて淺學文盲ものでありますどうぞ御示導を願ひます、そして玉章の交換もね。

○　備前國八濱町大字吉澤町
佐久間綠子

博愛賢明の誌友の諸姉樣よ！　私は『下手の横好き』とか申まして雜誌に大層趣味を持て居る田舍乙女です、乍失禮如何程古びて居ても宜しく御座いますから（但し女子文壇六年五月號より及び少女世界四卷十二號より本月に至るお除く他）何卒御惠み下さいませ御返禮は相當の物致します、誓つて不正行は致しません。皆樣レター頂戴な、而し私は度々他行致しますから少々延引になるか知れませんから豫め……………又不肖ながら和歌俳句の交換御願ひ申します。趣味に富んだお方なら男の方でも喜こんで御交致します。

○　東京市神田區錦町一丁目十二番地
刈谷方　草野美知子

〆飾りに笹風鳴る新春も早や過ぎて愈々寒いウインターが參りました、何卒一寸で無く末永く御交際を願ひますお待ち申ます又英語同學の諸姉なら猶更嬉しう存じます。

○上毛草津局區內花園地富澤榮吉
眞芳樣方　百　子

草津町より、私は當年十八にて兄は野砲兵十四聯隊へ入營し父母と三人にて淋い生活をしてゐる少女です、皆樣の手紙と兄上の手紙を待ちます、返事は拜讀日より三日內に御返書の發信を致す事にきめてあります、皆樣の內文房具りははんかちふひぢつき縷々のあみもの等を草津ロクロー細工の筆立茶托草津名勝の繪葉書一組の返禮は屹度致します尙玉章の御交換と風景名勝繪はがきめづらしき御話の交換を願ます。右の外左の諸國よりも、文際希望の旨申込まれましたから左樣御承知下さい。

△埼玉縣兒玉郡丹庄村肥土　中江たか子
△青森縣鰺澤町　鈴木郁子
△岡山縣笠岡局區下第四區在　坂本綠子
△大阪北區西梅枝町坂野方　佐川榮子
△靜岡市西草深町一一　鈴木つる子
△府下王子町　大浪せい子
△新舞鶴敷島通二條西入　田中乃惠子

書物の交換

○淺草區向柳原町一ノ二九　金田靜香

▲持つてゐる書物、わかば會發行『筆の花』增刊『綠』第三より第十まで。
△讀みたい書物、『女子文壇』十月號『地方の婦人』『今の婦人』

○兵庫縣川邊郡長尾村口谷坂方　翠　子

▲持つてゐる書物、『女子文壇』三年五號より五年十號まで。
△讀みたい書物、大日本書籍文字速成學會の『速成帖』女子部男子部いづれにてもよろし

○鳥取市上町長田神社前　岸本八重子

▲持つてゐる書物、『婦人の情力』『美的小社會』『深窓の佳人』『人生の氣力』『人情後見』『女流の偉人』『婦人立志傳』『小野小町』『靜御前』『墳墓の地』『失策の半生涯』『偉人の成長時代』
△讀みたい書物、『夢二畫集』春、夏、旅の巻『今の婦人』昨年九月の『婦人畫報』婦女界增刊『名流婦人の處女時代』交換希望の方は二月十日までに一報下さい、女子に限る。

○能登鹿島郡能登部　近江加能惠

▲持つてゐる書物、『野百合』『獨木舟』『風雅の栞』『模範新體詩集』
右ゝ川ですから何なりと御交換いたします。

○岐阜縣加茂郡黑川村鷲見方　春野秋子

△讀みたい書物、『己が罪』『魔風戀風』『濱子』『追恨』『強き戀』『緣の絲』『戀無情』『噫無情』『少女意』『生』『貞か不貞か』『不言不語』『夏子』『コブシ』『思ひ出の記』『沖の小島』『罪の行衛』『多情多恨』
右お貸し下された方には繪葉書を添へて十日の內に誓つて御返しいたします。

○京都府乙訓郡久世村　大橋鶴子

▲持つてゐる書物、『想夫憐』『男女相互の警戒』『女子文壇』『中學世界』『家庭小說』
△讀みたい書物、『女學講義錄』『中學講義錄』『婦人畫報』『秀才文壇』

○廣島縣比婆郡敷倍是松　高田梨代子

△讀みたい書物、『乙女の秘密日記』『若き婦人』『今の婦人』
右お貸し下されし方々には栞を添へてお返しいたします。

○淡路三原郡灘村　藤岡忍子

▲持つてゐる書物、『女子文壇』昨年より今年迄『新文林』十冊、『女學世界』『新不如歸』『婦系圖』『不運娘』『女の操』『戀と人生』『星と菫』『不如歸の歌』其他
△讀みたい書物、『夢二畫集』『嫁ケ淵』『魔風戀風』『思出の記』
右換讀を望む。絹製寫眞掛栞等お惠み下されし方には相當の雜誌又は書籍にて御禮いたします

○信濃北佐久郡小諸町　若杉盡花

▲持つてゐる書物、『良人の自白』四冊、『ゴーリキー集』『玉蟲』『孔雀船』『やどり木』『青春』『女學世界』九巻全部、十巻九號迄。『言海』『理科辭典』
△讀みたい書物、『スバル』『創作』『白樺』(以上何月號にてもよし)『夢二畫集』(春夏以外)『花守』『春』『廣日本文典』
▲ハガキにて一應お紹介下さい。但女子文壇にて一度にても賞を得たる人に限り信用して、此方より先に送る。以外のものは前の失敗(先年私は讃岐の方に舞姫をたゞとられました)にこ

りて彼方より先に御送附を乞ふ。

○　下毛足利町　柳田君子

▲持つてゐる書物、『新約全書』『少女家庭訓お伽噺』

△讀みたい書物、『夢二畫集』

○　東京神田區錦町一ノ十二利谷方　草野美知子

▲持つてゐる書物、『トルストイ』前編後編『浮草』『一葉全集』『夢二畫集』春冬の巻『中央公論』『女流作家集』十二月分『英譯不如歸』『テニソン詩集』『英文自働車冒險旅行』『英文レークオブレディ』『放浪』『憂』『空中の人』以上外に『初歩英書』『澤山』。

△讀みたい書物、『夢二畫集』秋夏旅の巻『自然と人生』『落日』『愛の書簡』『夢』

右お互に貸借致し度う御座います御同意の御方は手數乍ら御一報煩たう御ざいます、必ず同性の方々に願くはお近い御方に御願致ます

○　大阪西區靭中一ノ七五　吉田うすい

▲持つて居る書物、『女學世界』『少女世界』『婦人世界』『女子文壇』『歌集玉川』『白氏の詩』『編物新書』

△讀みたい書物、『藤村詩集』『乙女の秘密日記』『夢二畫集』花の巻、晶子先生の和歌集何れにてもよろし。

あらかじめおはがきにてお通知を願ふ。

○　青森縣鯵澤町　鈴木郁子

△讀みたい書物　『婦人畫報』『皇族畫報』

私は地方の名所や風景が集めたいのです、どうかお情ある方はおかし下さいませんか。

○　茨城縣眞壁郡中上野　松岡星

△求むる物、皆様の『文章』か『圖畫の本』か『細工物』

▲持つてゐる書物、『女學世界』『婦人界』『文藝倶樂部』

○　磐城三春荒町二六　横山紫陽子

▲持つて居る書物、『小猫』『黄金林』『紅葉全集』『血笑記』『花袋集』『美人のあたひ』『新不如歸』『亞米利加物語』『金色夜叉』

△讀みたい書物、『欺かざる記』『眉山全集』『青春』『ヴェニスの商人』『破戒』『賣國奴』

短冊交換

皆さんは遠慮をなさいましたと見えて、短冊交換を正當に申込まれたのは左の四名に過ぎません、餘り少ないから別に記者が御紹介するまでもなく、御交換なさいましたら宜しいでせう。

○岐阜市縣町　篠田とみ子

○備中小田郡城見村　小見山春子

○岐阜縣菅田町　中島幸枝

○茨城縣新治郡新治村　岩田よし枝子

繪葉書

○御姉上様方よ私は父母に早く別れて兄と共に海山遠き此の朝鮮に淋しき月日を送る者でありますが本月より女子文壇の愛讀者に成りましたが何卒行末永く御交際被下ませ又寫眞及繪葉書等の御交換を願ひます、朝鮮婦人の繪葉書もたく山持て居りますから御入用の方には御送り致します。(朝鮮釜山草梁、藤井方、和平富美子)

○梅田金蘭會高等女學校に御通學遊ばす諸姉様よ妾は昨年迄は日ごと學校の前を二人づれで通學して居りました者で御座いますが今は此淋しい田舎に居るのですどうか永久に繪端書なんかの御交はりを御願ひ致します。(奈良縣御所町春英堂工場田中たけ子)

○記者様始め誌上の皆様御氣げんよう私は投書は始めてですが文壇は始終見て居りますのよ日本一とも云ふ名高い日光のそばなのよ何卒皆様玉章下さいな日光のお話しいたしますわそれから名所繪葉書交換もね私のは日光名所よ。(栃木縣上都賀郡今市町小倉の里、高村瀧子)

○兄さんが生意氣だなんて云ひますが妾は大變遠い／＼國のお方と文通交際するのが好きで、そして繪ハガキなどの交換も好きですから皆様どうぞ親しい御交りを願ひます、(青森縣三戸郡湊村新丁下野とき子)

○誌友の皆様繪葉書の交換を願ひます御返禮は八百萬の神に誓ふ。(備前兒島郡與除村高田竹松方繁子)

○當地筑波山名所繪はがきと皆様の肉筆の繪はがきか諸所の名所繪はがき細工品と御交換を願ます。(常陸眞壁郡中上野、松岡星)

○嗚呼誌友の皆様よ私は今月始めて誌友くらぶの舞臺にお顏を差し出したので御座います、私大變繪葉書に趣味を持て居りますので誌友の諸姉妹様と廣く繪端書の交換が致し度う存じますから何卒御心ある方は御交換なし下さい必ず御

このみの物を差し上ます尙又書籍レターの御交換もして頂戴どうか末永く誌友のおよしみを以て御交際なし下さいませ。(滋賀縣大津市寺町、小島一子)
○私は東美の片田舍に淋しき月日を送る不束者にて唯た山水を友とし且つは御友逹の繪葉書や玉章の來るのを待つのみ!交際を成し下されし御方には繪葉書を一葉づゝ必ず送ります。(岐阜東美加茂郡和知村牧野、日置桃花)
○絹ハンカチーフなど送つて下されば當地雪景名所繪ハガキで御禮いたします。(米澤市絹町三五六、相田とみ子)
○繪葉書交換希望、繪葉書は成可く上等品に限る、切手端面貼付する事、端面に詩、和歌、俳句を限り記入する事、一時的でなく月二回交換位にして永久の事、男子にても宜しきこと。(栃木縣足利町、柳田君子)

個人消息

○京都の三宅壽々子樣御同地でお懷かしう御ざいます、今度は淋しい所へ轉宅致されたのね妾一度お訪したいのですが突然參りかねますから手紙を差上げ樣と思ふのですが少し都合がありまして妾の所が明せないのですから勝手ですが來月號でお返事を聞かして下さいませそして十一月の京都實趣新報に御許樣の事を書いたのが載つて居ましたが貴女は御存知ですか、然かも小說に!て九月にあつた誌友會の幹事だとまで書いてあるじやありませんか妾腹が立ちまして新聞社へ投書したのよ、それから其新聞は止したのか姿を見ません。(京都の露)○杉山町に居ますから御遊びにと、旭座のMパテー活動寫眞がはねた時、金澤に六年居ましたが、むらさきさんは男子よと仰有つた方どなたでしたか、お顏は覺えてましたがお名前は私知らないのですが、私の住ひも申上て置きました事でもあり、直ぐにも來て下さるかと待つて居ましたが、年の暮でしたものねえ、これでは夢の樣ですもの近い中に來て下さるかお手紙下さいましな屹度ね。(岐阜、葛の葉)○安木春子樣に、春子樣、誰ともわからない私によくもお返事下さいました。お宅は吉城でございますつて、私度々お近所を通りますのですが、今迄この邊とは知りませんでした。此度の冬休みに歸る時にはよく氣をつけて見ようと思ひます……私は御地から五六里奧の某小學校へ奉職して居ますので……本名なんて私おはづかしうございますどうか暫くの間お許し下さいませ、其のうちには名乘る時も參ませう。遊びにつて有り難うございます……今の婦人におなつかしい面影が載つて居ましたので、もう嬉しくて嬉しくて度度出して眺めては一人お忍び申して居ますのよ向寒の折から幸にお自愛なさいませ。さよなら(鳥取　櫻草)○四十三年八月號に出て居ました誌友中の伊藤清子樣はもしや金澤にいらした方では御座いませんか、間違ひましたら御許し下さい、又若しさうでしたら只今は何處にいらつしやいますか私昨年の春本鄕弓町として出しましたら返つてまゐりましたから、それなりに御無沙汰いたして居ります、本年も新年の御挨拶いたし度う御座いますけれども御住所が分りませんから誌上を以て申上げます。(金澤、島ますえ)○近江彦根の芳子樣、本誌五年十二號、お送り下さいましてありがたう存じます、直ぐお禮申上げる筈ですが、お名前を書いて下さいませんので、失禮乍ら誌上にて、厚くお禮申上げます、お名前がないので一時はうろたへましたよ。おかまひなくば、御住所姓名委しくお洩し下さいませ。(土佐、雪子)○大阪の川崎道江子樣、京都の會のお寫眞を拜見して若しや京都にいらつしやつた道江さんではないかと思ひましたの、それなら尋常小學を私と一しよに卒業したお方です、お差支なくば住所を此欄に御しらせ下さい、お手紙送ります。(京都立誠生徒、照子)○足利町の柳田秋日子樣番地明瞭に再報あれ返事が出せません。(日本橋堀江町相澤榮子)○新年號の俳句欄に御投稿遊ばしたちわ子樣三浦文江樣同縣で御なつかしう御座います。以後何卒御交り下さいませ至つて不束者ですが。(秋田縣南秋田郡船越町、那珂はつ子)○御慕はしの佐藤萬壽子樣、不束な私に御交際御許し下さいますとか、夢ならではとてもかなはぬ事とあきらめて居りましたのに思ひがけないこの御文天が私の意中をあはれみ給ひての御引合せかしら……其うく何と申上げたら宜しいのかうれしくてうれしくて泣いてしまひましたの、一日も早く御住所御知らせ給はるやう御待ち申上げて居ります。(京橋北紺屋町十六番地、伊藤千代)
○米國においての辻棚子樣、先月は美しい繪はがき有りがたう存じます、此方からも粗品は返禮に差上たいのですが、消印の爲めに住所がわからず困つて居ります、手數ですが再報を煩します(越後清香)

雜錄

歌御會始

每年の嘉例に依り、一月十八日午前十時、宮中に於て歌御會始の御式は行はれた、當日の御製御歌、以下詠進の和歌は左の通りである。

寒月照梅花

御製

照月の光は今に寒けれど
　春にかはらぬ梅の香ぞする

皇后宮御製

御垣守る人をぞ思ふ風冴ゆる
　霜夜の月に梅の花見て

東宮御歌

影冴ゆる月に競ひて咲く梅の
　花の心ぞをかしかりける

東宮妃御歌

香をとめて訪ふ人もなき梅園を
　夜毎に照す月の影かな

冴ゆる夜の月の影にも梅の花
　咲きて匂へり年のたち枝に
　　海軍大將大勳位功三級　威仁親王

寒しとて見る人もなき月影に
　ひとりほゝゑむ梅の初花
　　勳一等　慰子

侍從長
　從一位大勳位侯爵　臣藤原朝臣實則上

霜白き梢の月の影の中に
　春思ほゆる梅の香ぞする

宮內大臣
　從二位勳一等子爵　臣源朝臣千秋上

梅の花香にこそ匂へ照月の
　寒き光に色はまがへど

題者點者　樞密顧問官兼御歌所長
　從二位勳一等男爵　臣藤原朝臣正風上

霜柱踏めば聲ある月夜にも
　誇らぬ梅の香こそ清けれ

讀師　樞密顧問官正二位勳一等侯爵
　臣源朝臣茂昭上

雪の中に咲出づる梅の花の色と
　ともに冴えたる月の影かな

發聲　從二位勳四等伯爵　臣源朝臣重朝上

冴えわたる月の光は冬ながら
　年のたち枝の梅咲きにけり

講師　正五位伯爵　臣藤原朝臣實鐵上

寒けれど暫し出で　も見つるかな
　月冴ゆる夜の梅の花陰

奉行　御歌所參候正三位勳六等子爵
　臣平朝臣信成上

咲匂ふ梅の初花夜もなほ
　見よとや月の冴えわたるらむ

講頌　從三位勳四等子爵
　臣卜部朝臣行德上

音立てし霰は晴れて梅の花
　照すも寒し冬の夜の月

講頌　從三位勳四等子爵
　臣藤原朝臣以季上

雪晴れて身にしむ夜半の月影に
　かをるも寒し梅の初花

講頌　從三位子爵　臣藤原朝臣基哲上

咲く梅の匂も氷る心地して
　更行く庭に冴ゆる月かな

奉行　御歌所參候正四位勳四等子爵
　臣藤原朝臣爲守上

咲初めし御垣の梅に月冴えて
　名にも背かぬ玉敷の庭

講頌　從三位勳四等男爵
　臣藤原朝臣文仲上

冴え暮れし庭の垣根の梅の花
　霜こほる夜の月に匂へり

講頌　從三位勳四等男爵　臣物部連有鄰上

照月の影寒けれど窓の戶を
　あけてぞ見つる梅の初花

講頌　正五位　臣平朝臣信道上

霜白き垣根の梅を照しつゝ
　山の端出づる月の寒けさ

選歌

大空は霜曇りして咲く梅の
　花のみ白し有明の月
　　典侍　従三位　藤原愛子上

霜白き夜戸出の庭に月照りて
　梅が香寒し風は無けれど
　　愛知縣士族　大島爲足上

冬籠る人の心を動かして
　霜夜の月に匂ふ梅かな
　　京都府平民　大尾久子上

千鳥啼く野川の堤霜見えて
　寒き月夜に梅かをるなり
　　京都府平民　奥村儀道上

雪深き百濟の野邊に咲く梅も
　隔てず照らす冬の月
　　朝鮮全羅南道　許　焱上

千里眼の眞僞

千里眼の發見は今や五里霧中の間に包まれて了つた、千里百里は偖て置いて、眼前咫尺の間に於て行はれた實驗が、眞僞如何を疑はれるやうになつた、今更ならねど、人間の力の賴み甲斐なきことを思はずには居られぬ。

元來此事件の發生以來、御船ちづ子と云ひ、長尾いく子と云ひ、當事者が婦人であるだけ、吾人は少からぬ興味と、大いなる期待とを以て千里眼の眞相の發展を祈つてゐた、ちづ子は暫く云はず、いく子の方は事ますく重大となるほど、吾人の注意も探かつたのであるが、今や事件はあらぬ方にのみ開展して行き、學者の行動、長尾家の疑ひ、何れを正しとし、何れを正しからずとせんか、殆んど判斷に迷ふまで複雜になり、遂には警察の干渉とまでなるに至つては、聊か事の心外なるを嘆かずに居られない。

此處數日の間には、思ひの外の新事實が發見されて、事の眞相は消明かになるかも知れぬ、今遽に此事件を判斷し批評することは出來ない、併し今日までの經歴を見ても、吾人第三者の眼より見て、甚だじれつたい感じがある、表面は單に千里眼能力の有無問題に過ぎないが、裏面には此研究に與かつてゐる學者の間に一の暗流はなからうか、其暗流の爲に、事實の正と不正とを問はないまでも、世に傳へらるゝ意見に何等かの反感的態度が含んで居はしないか、吾人は若し然う云ふことがあつたら、我邦學術界の爲に痛惜するものである。

若しいく子の方が不正と決定しても、又正當と決定しても、孰れにしても、斯る大問題を輕卒に取扱つた學者の責任は免れないであらう、孰れか一方の學者は甚しく信用を墜す譯になるのだが、斯る際情實と學派に拘泥せず、あくまでも公明正大の解決を見たいものである。

其の解決もあくまで學者らしき態度を以て解決して貰ひたい、心理學對物理學の爭ひならそれでよい、學問上の爭ひであつて、人と人との爭ひではない、吾人は吾邦學者諸氏の人格に信賴して、充分なづき得るだけの解答を世の中に與へてもらひたいと思ふ。

かゝる純學理上のことが、世の大問題となつたことは、近來珍しい事實でもあるし、之を機會として世人が學術上の知識に就いて注意する處が多からうと思ふから、なほ更、事件を曖昧の裡に葬りたくない。

猶、此の事件の終結を待つて、一言する處もあらう、今は未解決だから眼前に感じたことだけに止めて置く。　（一月十八日、一記者）

消えぬ雪

△一月十五日東京に雪降る、これ本年の初雪。

△同十二日大雨雷鳴あり、これ本年の初雷。

△同中旬信濃淺間山震鳴動す。

△十二日夜、大和長谷寺炎上。

△新年の年賀狀は年々增加の傾向がある。

△新聞の初刷は、年々頁數を少くするやうだが之に反して雜誌の初刷は、年々紙數を多くするやうになつて來た。

△來る二月二十八日は、吾國唯一の古典『古事記』編纂より千二百年に相當するので、同書編纂にたづさはつた奈良朝の歷史家太安麿朝臣を祭れる大和の多安麿神社に紀念大祭を行ふ筈。

△『何て間が好いのでせう』と云ふ流行語を使ふことを、各小學校で禁じてゐる。

△日本橋は今春落成する。

●●●●●●

○茶道講義錄の發行　淺草區吉野町の大日本茶道學會本部では、千家の茶道を自宅で獨習し得るやうに、講義錄を發行した、前期後期各六ケ月で卒業する、茶道は女のたしなみ、心得て置

かねばならぬものだが、今斯道の講義錄が發行されて通信教授を受けることの出來るのは、少からず便宜であらうと思はれる。

新刊

○赤い船　小川未明著

小川未明氏のお伽噺十六篇を集めてある、氏のお伽ばなしは、所謂お伽噺とは構想からして異つてゐる、もつと新しいもので、且藝術的のものである、從來のお伽噺は餘りに架空的であり、名の如く子供だましであつたが、氏の作には、作者自身がロマンチツクであるだけに何等かの意義を持つてゐる、單に子供の讀物と云ふのでなく、一般の文學書として家庭の婦人達にも推奬するのである。（定價金五拾錢、本郷二丁目京文堂發行）

○ヨヘイ畫集　渡邊與平著

ヨヘイ君の繪は斯道の者に言はせても好いと云ふ、われわれ素人には深いことは分らないが、見たところ矢張好いやうに思ふ、眞面目に描いてあるのと、感情の表はし方が極く自然に表はれてゐるのとはヨヘイ君の特色であらう、弄ばれた興味でなく、自然に持つてゐる感興で描いてゐるから、思ひの外見るものを飽かせない、またスケツチを好む者には恰當の手本にもなるであらう。（定價金七拾五錢、神田錦町二ノ五春秋社發行）

○子供の國　竹久夢二著

竹久君は子供が好きだから、子供を描くことも好きだ、子供の心持と、子供の表情を巧みに捉へて書きあらはしてあるから、子供が見ても大人が見ても、微笑を禁じ得ない、古來我邦には子供を上手に描いた繪が少い、夢二君に依つて現代の子供の描かれたことは、誠に珍重すべきことだと思ふが、世間ではそれほど此書に重きを置いて居ないやうである、少くも自分一個の考では、珍重すべき畫帖として保存するつもりである。（定價金參拾錢、麴町區麴町二丁目洛陽堂發行）

○詩集北の空　秋元蘆風著

獨逸の譯詩に有名なる秋元蘆風君が、去る明治四十年の夏より昨年の夏に到るまで、北海道札幌の大學に在學中、折にふれて歌ひ出でた創作の詩五十篇を收めたものが此の『北の空』である、氏の詩風は温雅にして純潔、何處となく氣品高し、また詩壇の一異彩である。（定價五拾錢、小石川雜司谷町獨逸詩文學會發行）

○おとぎ七草　巖谷小波著

みどり草紙、八重一重、山百合草紙、火借の森鏡岩、天の橋姫　六の花片の七篇のお伽ばなしを集めたものだから七草と云ふ、繪の多いのと體裁の美しいのは、さすがに少年少女の讀物として注意したものである。（定價金七拾五錢、博文館發行）

○井上通女　岡田辰治郎　永井虎夫著

井上通女は讃岐の烈女である、文章を能く書き東海道の紀行や、江戸の日記や、或は有名なる處女賦や、深閨記や、著書も少くはない、しかも彼女は處女として珍しきまで堅固の志を抱いてゐた、母としても、妻としても、亦摸範とすべき言行が多い、此處に菊版三百五十頁の大冊となつて、其一生の傳記の出來上つたのも偶然でない、此書は能くしらべてあるから井上通女の傳としては完全なものであらう、筆蹟、肖像等の寫眞版も數葉挿入してある。（定價金九拾錢、神田表神保町同文館發行）

○一辭千金　古志學人編

これは世にありふれた格言集とは違ふ、大部分を漢籍から拔いて來て、且日本の漢學者の辭句をも加へ、西洋の格言も少しはある、而かも一一註釋がある、作文の材料には誠に好い書物である、平素座右に置いて精神修養の資料にするにも猶ほ更よい、體裁は頗る淸新。（定價金五拾錢、神田裏神保町上田屋書店發行）

○發明畫談　蘆谷蘆村著

飛行機は云ふに及ばず、最近の文明に伴つて發明された新事實は皆集めてある、發明された由來、發明した人の傳記など手短かに少年少女にも分るやうに書いてある、插畫は片山春帆氏。（定價金參拾五錢、神田鎌倉町勸業書院發行）

○月見草　植松美佐男著

詩的趣味の多い少年少女小說である、筆もやはらかい、女性向の小說とでも云ふべきものであらう。（定價金參拾五錢、本郷區東片町本郷書院發行）

女子文壇定期號 投稿規定

▲投稿は凡て女子に限る
▲原稿には必ず『女子文壇投稿』の文字を書き添へること
▲原稿は凡て女子文壇社宛（未納税は斷じて受付ず）に送ること
▲小說と、詩と、雜錄とは振假名をつけること
▲小說は二十四字詰八十行以內、散文は三十行乃至五十行、初めての投書は三十行以內、詩と雜錄は行數制限なし
▲各種類毎に一人一篇限りとす、和歌、俳句も一人一章限りとす
▲誌友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、半紙、原稿紙、罫紙に限る
▲圖畫は毛筆畫にて薄き日本紙に認め、大さは二寸に三寸、一人一枚限
◉投稿は毎月十五日到着を以て嚴に締切る

女子文壇投稿各種 懸賞定額

▲小說と散文は、天賞金參圓、地賞金壹圓五拾錢、人賞金七拾錢を呈す
▲『詩』は天賞金貳圓、地賞金七拾錢、人賞金四拾錢
▲『和歌』『俳句』『圖畫』『初作』は、天賞金壹圓、地賞金五拾錢、人賞金參拾錢を呈す
▲『雜錄』は金五圓以下壹圓以上、正金にて呈す（但し二頁以內の短きものは此限りにあらず）
▲賞品發送は作物發表の翌月以後とす
定額金壹圓以上の創作當選者には價格相當の物品を贈呈し、金壹圓以下は圖書切符にて贈呈す

女子文壇定價明細表

振替貯金口座 東京第壹七○九番

○定期發行分 ▲毎月一回（一日）
一冊（一回分）定價金拾五錢…郵税一錢五厘 計金拾六錢五厘
三冊（三月分）前金四拾三錢五厘…同四錢五厘 計金四拾八錢
六冊（半年分）前金八拾四錢…同九錢 計金九拾三錢
十二冊（壹年分）前金壹圓五拾六錢…同拾八錢 計金壹圓七拾四錢

○臨時增刊分 ▲年四回（二月、八月、五月、十一月）
一冊（一回分）定價金貳拾錢…郵税一錢五厘 計金貳拾一錢五厘
二冊（半年分）前金三拾八錢…同三錢 計金四拾壹錢
四冊（壹年分）前金七拾二錢…同六錢 計金七拾八錢

○定期發行及び臨時增刊とも全部 ▲十六冊
四冊（三月分）定價金六拾三錢五厘…郵税六錢 計金六拾九錢五厘
八冊（半年分）前金壹圓三拾二錢…同拾貳錢 計金壹圓三拾四錢
十六冊（壹年分）前金貳圓二拾八錢…同二拾四錢 計金貳圓五拾二錢

▲申込注意（振替にて拂込む時は誌代の外に壹錢登記料增すと、郵便爲替は中橋和泉町局、郵便切手代用は必ず壹割增（收入印紙謝絕）、凡て前金拂込に限る

明治四十四年一月廿五日印刷
明治四十四年二月一日發行
定價金拾五錢

不許轉載

編輯兼發行者 東京市京橋區大鋸町十一番地 野口竹次郎
印刷者 東京市京橋區宗十郎町十五番地 松本路
印刷所 東京市京橋區宗十郎町十五番地 國文社

發行所 東京市京橋區大鋸町十、十一番地 電話（京橋六〇七番） 女子文壇社

特約賣捌元 ○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

(明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可)

泣いて暮らしませうか
笑つて暮らしませうか

過去幾億、未來永劫の天地間に、僅か五十年、而かも再び得られない貴重な人生は、何方も幸福に愉快に送りたいと云ふのが御希望でせう、然るに世間には、人生の最大幸福たる健康を害した爲めに、遣る瀬なく煩悶し、夜半の涙を小さき袂に包む御婦人は、決して少なくありませぬが、誠に御同情に堪へない次第であります、さて心配は身を削る鑢である、と皆さんが能く仰つしやいますが、心配ほど身體に毒なものはありませぬ、弱き御婦人が、一方病魔の責苦に會ひ、一方心の煩悶に惱まさるゝならば、どうして身體が持ちませうか、愉快なれ弱き婦人、樂しく此日を送られよ、併し身體が弱くて煩悶の止まない方にたゞ笑つて暮らせと言つても、煩悶の動機たる病氣の全快を計らねば所詮駄目であります、凡そ生物として、生命を愛せぬものはありませぬ、虫螻でさへ打てば逃げます、萬物の長たる人間が、生命を愛する事は云はずもあれ、自分の身體を最も愛するものは、自己である事も知れ切つて居ります、然るに御婦人中には、いたく健康を害し憂愁に沈み、悲嘆に暮れ、果ては世を儚み、人を怨み、徒らに暗黒の中に彷徨する人がありますが、是等の婦人は、健康回復に對し、盡くすべき手段方法を盡くさずに居るのではありますまいか、前に述べた通り處世の第一義は、笑つて暮らすにありますが、弱き御婦人が笑つて暮らすには、健康回復に向つて、全力を注がねばなりませぬ、然らば御婦人の健康を計る方法は何であるか、我田引水の誹りがあるかも知れませんが、自宅療法として中將湯の服用が第一であります、弱き御婦人は力めて中將湯を服用せらるゝならば、健康は忽ち回復し　五十年の生涯も笑つて過でせますさて中將湯の効能は

●子宮病子宮内膜炎にて白帶多く前たゞれ又下腹腰足の引つり痛む人●婦人神經(ヒステリー)血の道にて氣塞ぎ癇高ぶり物を苦にし夜眠ず●月經不順月經滯り等にて吹出物多く又何となく身體惡き人●逆上頭痛眩暈し肩こり腰足冷え●息切れ動氣強く手足痺れ水腫十七八歳になりて月經なく血ぶとり又月經の前後に下腹の痛む人●白血赤血滯下多く顏色蒼白き人●冷症にて難産流産の癖ある人●産前何となく常ならざる人●嘔吐、産後古血の滯り或は日立惡く●此外子宮血の道月經不順に起因する諸病にてぶら〳〵と惡き人

定價は五週間分二圓五十錢、三週間分一圓六十錢、二週間分一圓十錢、一週間分六十錢、四日分三十五錢、本舗は東京市日本橋區通四丁目津村順天堂、取次は全國到る處の藥店、本店に御注文の方は容態詳しく御申越あれ加減藥あり

女子文壇 定價金拾五錢 郵稅壹錢五厘